
レムナント

ユンケル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レムナント

【Nコード】

N0953X

【作者名】

ユンケル

【あらすじ】

世界の権力を手に入れるために何度も行われる世界大戦。それを防ぐために造られた裏組織。裏組織の者たちが世界の安全と平和を護るために仇名す者を処断する。しかし、その裏組織たちによって戦争が行われてしまう始末。その裏組織の中に見を置く少年がいた。少年は過去の経験からある理想を持っていた。その理想を果たすために力を付けていく。その中で発覚されていく世界の真実。裏切りと絶望。それでも最後まで揺るぎない信念に生きた少年の物語。

少年（前書き）

人殺しシーンあります。嫌いな人は閲覧注意！ 初めての投稿です。
おかしい部分もあると思いますので教えてくだされば幸いです。

少年

「頼む！ 助けてくれ」

深夜二時。人の姿の無い公園に二人の人影がある。

一人は中年の男性であり、大きく出た腹と高価な服を着ている所を見ると彼が裕福な育ちであることがわかる。実際に彼はある大手の企業の嫡子であった。父の後を継ぎ、その会社を経営し、父以上の才能を見せ、会社を大きくしていった。

もう一人はまだ、幼さの残る十代折り返し時期くらいの少年だ。男とは違い、体格はやや痩せ気味で、服装もどこにでも売っている物で済まされている。

生まれてきた時も違い、彼らが会う接点はここまでではわからない。

だが、男は少年に対して、見ても分かる程の恐れを抱いた表情をしている。額には大きな粒となった汗が出ており、高価な服も汗と泥にまみれている。近づいてくる少年の一步一步に合わせ、男も一步一步後ろに下がる。

「わ、私はただ、我が社の経営のためにしただけだ！ こ、これほど深く関わるつもりはな、なかったんだ！？」

後退しながらも男は弁解をし、許しを乞おうとする。

「……」

少年は何も言わず、ただ前進する。その顔には何の感情も備わっていない。両手に持っている二本の刀が街灯の光で鋭く光る。

「ひ、ひい！？」

刀の姿を確認した男は尻もちをつき、腰が抜けて動くことができなくなる。

「お願いだ！ 助けてくれ！？」 わ、私が死ねば会社は、家族が路頭に迷ってしまう」

それでもなお懇願し、少年の前で土下座までもする。男の目には

薄らと涙が零れ堕ちる。それは死にたくないという思いと土下座までもしなくてはならないという屈辱だった。彼にとって人生初めての行いであった。

その姿を見た少年は口に笑みを付け、男を見下ろす。少年と男の身長は十ほど違う。自身より大きい男がぺこぺこ頭を下げていることに對して少年は優越感に浸っている――訳ではない。

少年は腰を下げ、土下座をする男の顔を掴み、自分に向けさせる。汗と涙でグシャグシャになっているその顔を見て、その笑みを深める。

「あんたにとって大切な物って何だ？」

少年は男に向け、初めて声を発する。その声色は少年とは思えない鋭く相手を恐怖を貶めるほどだ。

「も、もちろん家族だ。私には妻がいる。子供も二人いる」

「そうか。じゃあ何でもっと早く関わりを断つことを考えなかったんだ？」

「こ、こうなるとは思わなかったんだ。まさか、奴らが人身売買までに手を付けてるなんて」

男は質問に答えていく。生きれるかどうかの瀬戸際。彼に嘘をつく理由はない。

「人身売買に気付いたのは二ヶ月前だ。ならその期間。脱退することは可能だったはずだ」

「クッ!？」

「しかもその間に売買は計八回行われている。その中に――」

少年はポケットにから、ある一枚の写真を男に見せる。

「あんたもいるじゃないか」

写真の中には無理矢理、連れていかれる少女を愉快げに笑っている男たちが映っている。そこに彼の姿もあった。

「こ、これは」

「あんたがこの事を知ったのは確かに二ヶ月前だ。だが、この事に一緒に事を起こしてしまえば当然同罪だ」

納めていた刀を抜き、男の首筋をなぞる。なぞられた首筋から血が滴り落ちる。

「ここでどうこう言ったとしても、俺にあんたを救うという気持ちは元よりない」

全身を震えさせ、死への恐怖に怯える男に、少年はさらに言葉を叩きつける。

「ここで死ぬのが世のためだ。じゃあな」

少年はそう言い終わると同時に、銀色の軌跡が二人の間に走る。

そして、数秒後に地面に落ちた男の首。軌跡は少年が刀を振るい、首を切断したものだっただけだ。

絶望に歪め、最後の最後で後悔し、涙を流した男の顔がそこに落ちていた。

「家族を護るために汚いこと何でもする。その姿はすぐくよかったよ。もう少し早く気付いて自分を止められたら、もっとよかったんだけどな。こうなるんだったら普通に経営だけをしていればよかったものを、自分の限界に気付かず、欲を出しすぎるからだ」

落ちていた首に向け、罵倒をする少年。先ほどの笑みとは違い、汚い物を見る顔をしている。

「凡愚が」

彼は、それだけ吐き捨てる暗闇のカへと消えていった。

春。今年もこの季節となり、様々なことが始まる。

そして、彼。きりしまいちか霧島一夏も今年から住んでいた故郷を離れ、一人、東京へと上京して高校生活をスタートする。

自身の志望校も受かったことで、夢であったアルケミス選手へとなれるのだから。

現在、ある有名なスポーツ競技がある。それがIA《インフィニット・アルケミス》と言う戦略型スポーツ。

特殊な工具を使うことによって自分好みの武器を連想させる。そして、連想された武器を工具が認識し、その武器が具現化される。

その武器を使い、相手の陣地のポイントを奪っていくというスポーツと言うよりはゲームのようなものである。

最初は武器を連想させることしかできなかったのだが、最近では陣営に設置出来る障害物などやその地形を変えることが出来る特殊なアイテムなどにも変形できるように開発が進んでいる。

一夏もIAに憧れ、猛勉強の末に合格したIA専用のスポーツ高校である上都学院に入ったのだ。

上都学院の始業式の始まりは午前ではなく、午後。これは在学生たちのオリエンテーションを先に済ませ、入学生たちのための歓迎の準備をするための処置なのである。

一夏は高鳴る鼓動で歩く速度が自然と速くなって来ている。時刻は十時。始業式にはまだ早い。しかし、待ちに待った日。彼には居てもたってもいられなかったのだ。

「やっぱり早いよな」

自分の行いに苦笑いする一夏。携帯の時間から始まるのが三時間後。今から向かって也十分ほどで辿り着いてしまう。

「早く行きたいけど。やっぱり少し寄り道するか」

一夏はちょうど近くに建てられているモール店の中に入る。

田舎育ちであった彼にとって都市にある建物はどれほど驚くものばかりであった。三階以上の建物などない。歩く人の数も比べられるものではない。外を歩くだけで必ず人がいる。そして、夜中に外に出ていても明るく道を歩くことができる。

「何度か来てるけど、やっぱり迷いそうになるな」

大きな場所にいくつもある店の数々。その数といくつもある道。階の多さ。

一夏は東京に来て二週間。東京観光を楽しんでいたが、その中でもこのモール店は他の所に比べても大きすぎる。

「まあ、来たとしても四、五回なんだけど」

誰に言ってるでも無く独り言を言っている一夏。周りには家族や友達、カップルで来ている者たちが多い。自分の言葉を聞いている

者など誰もいない。これは彼が東京に来て分かったことである。

「い、一夏」

広場の当たりを歩いていた彼を見て驚いたような声が聞こえた。彼がそちらに向くと、そこには長い髪の毛を後ろで一つに束ねている自分と同じ年くらいの少女が固まっているように立っていた。

「千那」

彼も同様に偶然出くわした懐かしい人物に対して呆然としていた。彼女の名は九霞院千那。くげいんせんな一夏と同年代の幼馴染である。

「なんだよ。そーいや、お前も東京に来てるって聞いたな」

「な、何で知ってる？」

「おじさんとおばさんに聞いたんだよ。こっちに来たらお前によりしくって」

久しぶりの再会に喜ぶ一夏。対する千那は未だ動揺が消えないようであたふたしている。

「そう言えば、確か同じ高校なんだってな」

「あ、ああ」

彼女が着ている服は一夏と同じ上都学院の制服。一夏の男性用ズボンとは違い、千那のように女性の場合はスカートなのだ。

千那はコホンと咳払いをして心を落ち着かせる。

「ところで、お前はこんな所で何をしているんだ？」

「何って、今から行っても早すぎるから店の中をぶらぶらしてただけけど」

一夏は素直に答えた。

「フン！ そんな余裕にして大丈夫なのか？」

「どういふことだよ？」

「上都学院は日本だけではなく、世界的にも有名なIA専用のスポーツ学校だぞ。なのに私に武道で勝てなかったお前がここでやっていけるのか？」

千那は前で腕組をしながら歩き始める。一夏もそれに続き隣に並ぶ。

「それは昔の話だろ。もう五年前の話を持ってくるなよ」

「ほう。なら今なら勝てるのか？　ちなみに今でも私は訓練を怠ってはいないぞ」

「ごめんなさい。調子に乘りました」

千那の出す気迫に気圧されて負けを認めた。五年たったとしてもこの上下関係は生きているようだ。

「そう言えば去年の大会の結果が新聞に出てたぞ。優勝したんだって！　やったな！」

思い出したように千那へと振り向き、手を取って優勝を祝う一夏。自分のことのように喜ぶ彼を見て、自然と顔に笑顔がでて、同時にそんな自分に顔を赤らめて恥ずかしがる。

「お前はどんどん強くなるな。俺もお前に追いつけるように頑張るぜ」

「……そうか」

やる気を出した一夏とは違い、千那はまだ顔の赤みがとれず、一夏と握手している手を見続ける。

一夏は時計を見ると、始業式まであと一時間半。今出ても学園までは十分ほどで着く。

「ちようどいい時間だし、千那。一緒に昼食べようぜ」

「へ！？　あ、ああそうだな」

ニヘツと笑っている千那。一夏に呼ばれて正気を取り戻す。

「どうした？」

「いや、なんでもない。ほら行くぞ」

一夏の疑問を払い、その手を掴んだまま千那は偶然近くにあった喫茶店へと入ろうとする。

その時――

ドゴン！！　と大きく何かが破壊されたような音が響く。

「何だ！？　うわ！？」

「一夏！？」

音の後に伝わってきた大きな揺れに足を取られる。

周りの者たちも同じように足を取られ、地面に伏している。長く続く揺れに起き上がれない二人。

「クソ！ 何なんだよ、これは！」

「分からないが、ただの地震じゃないようだな」

そう言うのと千那がある方向を指さす。その指された方向をみるとこの揺れに対して全く動じずに立っている者たちがいる。

彼らは一丸に同じ装備をしており、真っ直ぐにこちらへと向かってくる。

「何だ？ あいつら」

彼らは所持していた銃を使い、無作法に撃ち続ける。その銃弾に当たり、痛みに床でのたうち回る人々が出始めた。

「テロ！？ どうしてこんな時に」

「千那！ 危ない！？」

無理矢理に立とうとする千那に向かって銃を向ける者がいた。

一夏はそれに気付き、千那を床に伏せさせる。

銃弾は彼女の頭すれすれを通り過ぎ、間一髪で彼女は無傷で済んだ。

「馬鹿やろ！ 無理に立とうとするな」

「す、すまん。助かった」

千那は自分の失態を謝る。だが――

「クッ。とは言ったもののここに居ても狙われるのは時間の問題だな」

「見ろ。一夏」

千那が一夏に密かに声をかける。彼がそちらに顔を向けると彼女は顎で向ける場所を指す。

「こちらの方に居る二人があっちに顔を向けたら、喫茶店の方へ逃げ込むぞ」

現在こちらにいる者は二人。彼らは銃をこちらへと向けている。だが、発砲している訳ではない。標的を探して動きまわっている。一夏たちは息をのみ、背く時を待っていた。

「今だ！」

彼らが後ろを向いた瞬間、彼らは喫茶店の中へと逃げ込む。

「どうやら、バレズに逃げ込めたようだな」

「ああ。まだここでの被害は少ないな」

喫茶店の中はガラスが割れただけであり、それ以外の被害は特に
は出ていない。中にいた者たちも怪我はしておらず、全員が共に床
に伏せて怯えている。

「でも、これも時間の問題だな。とにかくこのモール店から出る方
法を探そう」

「どうやって？」

一夏は辺りを見渡すが、

「クソ、地面に這いつくばってちゃ見えない」

「おい、無理に立とうとするな」

立ち上がろうとする一夏。それを止めようとする千那。

「あれ？ 身体がそれほど重くない。立てるぞ。千那」

「何？」

一夏に言われ、彼女も立ち上がってみる。すると彼女もまるで先
ほどまでのことが嘘のように自然と立ち上がってみせた。

「本当だ。一体なぜ？」

顔を見合わせて、疑問が沸き起こる。

「ともかく。動けるなら上等だ。行くぞ」

「ああ」

「皆さんも、立ち上がれるので急いで逃げてください」

そう言う二人は喫茶店の裏から出て、モール店の裏道から外へ
と抜け出る道を探し始める。

モール店の中は先ほどの賑やかさとは違い、銃弾と人の悲鳴で埋
め尽くされてしまった。

少年はその中を悠然と歩きまわっていた。地面に突っ伏している
者たちの姿はどこか小さく、愚かに見えた。

「た、助けてくれ」

自分に助けを求める男がいた。彼は肩に銃弾を撃ち込まれ、手でそれを抑え込んでいるが血は止まらずに流れ出ている。

だが、少年にとって彼を助ける義理はなく、そのまま歩みを止めずに進み始める。

「た、た……の……」

少年が歩くにつれ、彼の声は遠ざかっていった。

少年が向かった先はこのモール店を占拠したある組織の一派が集まっている場所だ。そして、彼自身もある組織の一人であり、組織からの命令で彼らを鎮圧するために差し向けられた。

「何だ。あいつは」

声がした。こちらの存在に気付いた者たちが一斉に少年へと向かって発砲する。

「何も考えず、ただ発砲するか。くだらないし愚かだ」

言葉を言い放つと少年の両手から、あの時の二本の刀が姿を現す。そして、一本を横撫でに流す。すると彼らが撃った銃弾が真つ二つに切り落とされる。

それを見た彼らは驚愕するが、すぐに次を発砲する。

少年は次々と撃たれる銃弾を切り落とし前進する。刀が届く間合いまで追いつめられると、銃を捨ててナイフを取り出すが、容赦ない頭上からの縦切りが叩きこまれる。

彼らが着けている防具は技術こそ今より劣ってはいるが、刀はおろか銃弾すら通さないように造られている。

その防具を簡単に通してしまうほどに、少年の持っている刀は鋭利であることがハッキリされた。

残った者たちはこの現状に気圧され、動くことができない。自信のあった防具をあつさり破られたことに驚きと同時に恐怖が彼らを陥れる。

そして一人が少年へと向かって突進してくる。残りの者たちもそれに鼓舞されて続いてやってくる。

少年はため息をつくと向かってきた一人に力任せの横薙ぎを放つ。横薙ぎに気付き防御態勢を取るが、あまりにも強い攻撃に耐えきれずに吹き飛ばされてしまう。その光景を見た彼らは、またも前進が止まる。

その瞬間をとらえた少年は一気に攻撃を叩きこむ。残った敵は前に二人、真ん中に一人、後ろに二人の隊列を組んでいた。

前の二人の両手の刀で突き刺す。またしても自慢の防具を簡単に破れ、刀が彼らの背中から顔を出す。それを見た真ん中の者が恐怖と死への予感への焦りでナイフを振り回す。

刀を抜き取った少年は、絶命した二人の死体を後ろで気圧された二人に向かって押しつける。押され自分たちの所へとやってくる死体によって押し倒されてしまう。

この間に少年はナイフを振り回す者の下半身に蹴りをおみまいする。そこから伝わってくるのは悲鳴に似た身体の軋みと何かが折れる音。

蹴りの感触からその者が女であることがわかった。

女は白目を向け、床に崩れ落ちる。

残った二人は死体をどかし、体勢を整えようとするも、すでに彼らは勝つことは出来ないと実感する。目の前にいる少年が自分たちの心臓に向け、刀を向けていた。

次の彼の動作によって確実に自分たちの運命が決まる。それを分かっているからだ。

彼らはおとなしく降参し、ナイフを床に捨てる。

「よし、良い判断だ。あんたらの命はとらないでおくよ」

少年は刀を降ろし、彼らに向かって不敵に笑う。

「あんたらの大将はここにいるのか？」

「ああ」

「じゃあ、そこまで案内してくれよ」

彼らは顔を見合せてから頷き、誘導を開始した。

向かった先はエスカレーターの上った三階。その先のフード店の

一角だった。下の階よりも明らかに人数が多く彼らの動きも慎重になっている。

少年の登場により周りの者たちは驚いたように目を見開く。その彼らの中心で椅子に座っている髭を生やした中年の男だけが毅然とした態度で少年を見据える。

その男が立ちあがる。

男は二百はあるであろう大男で鍛え上げられた肉体はプロレスラー顔負けである。少年自身も百七十ほどあるが向かい合って立つと自然に見上げるようになってしまう。

「お前か。俺たちの邪魔をしてるって奴は」

男から低い声が発せられる。ただ声を発しただけなのだが、そこから伝わってくる威圧感常人ならば腰を抜かしてしまうだろう。現に彼の仲間の者たちの一部が、声を聞くやビクツと身体が震えた。

しかし、少年は身動きせず堂々と男の前で腕組をする。

「邪魔とは言いがかりだな。俺はただショッピングを楽しんでいたのにこんなことになっちゃって迷惑掛ったのはこっちの方だぞ」

もちろん嘘だ。少年は任務で彼らと対峙している。彼は少しでも嘘をつくことで彼らの警戒心を緩和させようとしている。

「そんな嘘が通用するわけねえだろ。すでにこっちは何人も仲間遣られてんだぞ。それをそんな理由だけで殺されちゃたまらないな。答える。何しに来た？ 仲間は何人だ？」

「嘘なんかついてないよ。ホントにショッピングだよ。大体、なんであんたらこの店を襲撃してんだよ。困っちゃうよ。まったく」

男の問いを無視し、深くため息をつきながら質問を質問で受け返した。

この態度に頭に來た男が少年に向け、拳を突き出す。周りの者たちはその光景を見て恐怖で目を逸らそうとした。

しかし、拳は少年の顔面に届くことはなく、その寸前で何かによって押しとどめられていた。

「短気だね」

それは少年が彼の拳を自身の左手で受け止めていた。男の太く大きな拳を、少年の鍛えられたとは思えない手によって防がれていた。その光景に周りの者たちだけではなく、男自身も驚愕な表情をしていた。

「この程度で反乱を起こすなんてな。身の程を知らないわけだ」

「お……お前は……！」

少年の分かり切ったような言葉にハツとした男は、次に恐怖で顔が青ざめ始めた。

「やっと気付いたか。 balan 殿？」

「!？」

男――balanの腕を自分に引き寄せ、体勢が崩れた彼に向かって拳を顔面に御見舞いする。そして、仰け反った状態になった彼のがら空きになった脇腹に大きく振りかぶった蹴りを入れ込む。

苦悶の声を出す彼に構わず逆の脇腹にも足蹴りを食らわす。そして最後にしっかりと踏み込みを入れた拳を腹部を叩きつく。すると巨体は店の中へと吸い込まれるように吹き飛ばされる。

その一瞬で起こった出来事に周りの者たちは呆氣にとられ、事態を呑みこめずにいた。

当然だろう。少年は決して良い体つきをしているようには見えな。難しいもそれほどまでにガッチリとしはおらず、常人よりもやや痩せ気味な方だ。

その彼が自分たちの主をこうもあつさりと仕留めてしまうは誰であっても思わない。

「き……さま……」

店の中から声が聞こえた。少年はそちらに顔を向けると、balanが腹を抑えながら、よろよろとこちらへと歩いてやってくる。

「おや、まだ立てるのか？」

少年は少し感心したような見せているが、その表情から、もはやあまり、興味を抱いてはいない。

その時、フツとガラス窓の外を見ると、下に警察や野次馬たちが集まっていた。

「潮時か……」

少年は呟くと、踵を返して非常口へと向かう。

「待て！ 貴様！」

balan ができる限り声を発し、彼を引き留める。

「何故だ！？ 俺はお前たちに反乱を起こすつもりなどなかった！

これは国を思つての行動で――」

「俺たちはそんなことを命じた覚えはない」

balan の言葉を遮る、今の少年の口調は先ほどとは違い、重く鋭いものだった。

「この行動がどれほどの利益になる？ これほどの甚大な被害をお前はどうか対処するつもりなんだ？」

「この行動で日本の者たちは俺たちに注目する。そこでお前たちが演説すればきっと」

「悪いが、俺たちはお前たちに悪乗りするつもりはない」

「悪乗り……だと……！」

少年の言い方に balan は怒りで言葉が上手く表せられない。

「すでに警察や自衛隊がこのモール店を包囲している。この状態で俺たちの支援なしでどうやって切り抜けるつもりだよ」

balan は窓の外を見るや、苦々しい顔になり、額に汗さえも浮かべている。周りの彼の手下達も現在の状況に焦りを見せ始め、それぞれが勝手な行動をし始める。

「見ろよ。こいつらも事の重大さに気付き始めたぞ。こういう事態になれてないらしいな。団結力はないな」

少年は冷えた目で彼らを見据え、その愚かさに罵倒する。

「こんな使えない奴らを手下において、いたずらに反乱を起こした。そして、あんたも勝手な行動でたくさん無関係者が、たくさん仲間が死んでいくんだ」

「……！？」

balanは何も言えず、握りしめた拳がフルフルと震えている。目にはうっすらと涙を浮かべている。

少年は彼へと近づく。

「己の器を測れず、それ以上の欲に動いた。これが――」
涙を浮かべ、膝を折っている彼の顎を自分へと向けさせ、

「――あんたの限界だ」

少年の右手から突如、あの刀が姿を現し、彼の心臓を突き刺す。
 balanは悲しみと怒り、そして後悔の表情を垣間見せながら床へと沈む。

ドーン！！ と何かが破壊された音が鳴る。おそらく外にいた自衛隊たちによって固く閉じられた扉が破壊されたのだろう。

下の方で大きく騒ぎが起こっている。反乱たちの最後の足掻きが起きているのだろう。ここにいる者たちも覚悟を決めたように、ぞろぞろと下へと降りていく。

「馬鹿か。大將が撃たれた時点で烏合の衆のお前たちに何ができるんだよ」

降りていく彼らに向かって少年は言葉を紡ぐ。しかし、すでに彼らにその声は届かず、全員が三階から姿を消す。そして、下の方で激しい自衛隊と反乱者たちによる攻防戦が始まった。

彼は深いため息をつくと歩き始めた。

その途中で balanの方へと振り返る。

「後悔するくらいなら、最初からするんじゃないやねえよ」

すでに死体となった彼に向けて静かに言い捨てると、再び歩き始める。

彼の心中はとても複雑であった。

少年（後書き）

これが多いのどうかがよくわかりませんが、とりあえず第一章は完結です。どうでしたか？

出来事（前書き）

二話目です。前よりも多くなってしまいましたが、まだまだこれでは足りません！もっと書いていきますのでよろしくお願いします

出来事

「まあ、無事で何よりだった」

一人の女性がそれほどまでに気にしたような感じも無3を起こした者たちには誰にも遭遇することなく、外に出られ、そこを自衛隊の人たちに保護された。二人はまだ中に生きている者がいること。そして、モール店で起こった謎の現象を説明し、後のことを彼らに託した。

彼らは正面ドアからの小爆発を囫にして、一夏たちが出てきたドアから中へと侵入し、残りの者たちを速やかに保護していった。

テロはわずか二時間ほどで治まったが彼らの猛襲は異常だった。

まるで、自分たちの人生が終わっているかのようであった。

それもそのはず、なぜなら彼らの大将はすでに無くなっていたのだ。死因は心臓を一突きで、その傷跡から刃物の中でも身体を貫通させる物と言え、剣か槍のどちらかであろう。

すでに自衛隊に囲まれていたから、自身で自殺。と言うことは考えられない。使われたであろう剣が見つかるも、それを心臓に突き刺すにはあまりにも刀身が長すぎる。何者かによる他殺であることであることは間違いないだろう。

自衛隊の者が彼らが上都学院の制服を着ていることから、学院に連絡をして、彼らの向かえとして用意した。すぐに教師の者たちがやってきて彼らはそのまま学院へと向かった。

そして今、学院の玄関ホールである。

「こんなことになったから、今日行っ筈だった始業式はお休みです。次にいつ行っかは、折り行って連絡しますので自宅待機と言うことをお願いします」

隣にいたもう一人の女性が二人に丁寧な事を伝える。ちなみに二人とも学院の教師であり、素っ気ない態度を取る、二十代後半ぐらいの教師の方は清水杏子^{しみずき しょうこ}。Yシャツの第二ボタンボタンまではずし、

やる気がないような感じだ。

しかし、彼女は三年前に行われたIA世界大会で優勝したプロのアルケミスだ。実力は本物なのだ。

そして、もう一人の杏子よりも若く、礼儀正しい女性たかなしきようは高梨紀陽。彼女はこの学院の卒業生であり、学年首席で卒業した天才女子高生だったそうだ。それを歯牙にもかけず、誰とでも分け隔てなく接することから、誰からにも慕われていた。身なりも正しく生徒の手本となるには十分であった。

そんな大きく性格が異なる二人だが、紀陽は杏子を尊敬しているそうで、何かと彼女の世話を焼いているそうだ。

「そういうことだな。紀陽。あとは頼んだぞ」

「あ、はい！」

紀陽は喜びの笑顔を杏子に見せる。杏子はそのまま、とろとろと行ってしまった。

「では、二人は私が家までお送りします」

ニコツと笑顔を見せる紀陽。

（この人、本当に俺よりも年上なのか？）

一夏は苦笑いをした。

その表情を見ると自分たちとより年上であることを忘れさせるほどであった。

「何してる一夏。行くぞ」

千那は歩こうとしない一夏の腕を引っ張り、三人は玄関ホールを出て、教師の駐車場まで歩きます。

「それにしても、やっぱり立派だよな」

一夏は学院の姿をまじまじと見つめ、その大きさに圧倒した。

「玄関ホールだけで、あんなにでかいんだ。こりゃ、中はもっとすごいんだろうな」

「まあ、ここは東京にある学校の中でも特別だからな」

そんな一夏に対して応答したのは千那。

「数々のIA関係者からの援助もあるし、毎年優秀な生徒を卒業さ

せているし、その生徒たちの社会進出での貢献が多く目立つ。だからこそ、より一層の努力をするようにしているらしいからな」

「よく知ってるな」

「これぐらい当たり前だろ。なんで知らないんだ？」

淡々と話す千那だが、やはり彼女も圧倒されているようで、興味津々な眼で辺りを見渡している。

「お二人は仲が良さそうですが、こういった関係なんですか？」

二人の様子を見て話しかける紀陽。生徒に対しても敬語を使うようであり、それがまた人気がある理由なのかもしれない。

「幼馴染なんですよ。俺たち」

「へえ。二人とも出身は東京ではないのですか？」

「はい。山口です」

「ずいぶん遠くから来たんですね。あれ？ でもそれなら関西にある海道学院でもよかったんじゃない」

「そうなんですけど、実は姉がこっち来てまして」

日本にあるIA関係の学園は全部で三つあり、岩手、東京、大阪にありどれもが世界的に有名である。

本来なら、一夏は大阪にある柴天学院の筈だったが少し事情が変わった。

「お姉さん？」

「はい。姉がこちらに居るので東京に来ました」

「湊さんか」

千那が姉の名を言うと、コクリと頷く一夏。

一瞬ポカンとした後、紀陽は悟ったようで口を震えさせ、

「え？ もしかして霧島湊きりしまみなとさんのこと？」

「はい」

「えー！？」

驚いきで大きな声を出す紀陽。

「あの、戦争を未然に防ぎきったことで有名な、あの……」
「はあ」

「すごいです！ 偉人じゃないですか！？ そんな人の弟さんに会えるなんて！」

一夏の手を取り、ピョンピョン跳ねる紀陽。

跳ねるたびに揺れる大きな胸のせいで、顔を赤らめ、目のやり場に一夏は困っていた。

「もしかして、もう一緒に住んでるんですか？」

「はい。でも今は仕事でアメリカに行ってるんで使ってるのは俺だけですけど」

姉の仕事もやはりIA関係の訓練教授。良き選手を育成するために世界のあちこちを駆けまわっているのだ。そして、同時に新しいIAの開発にも協力しており、試作のIAを使用し、不具合を確かめる仕事も行っている。

「そうなんですか。仕方ないですね。では行きましょう！」

シユンと悲しそうにする紀陽だったが、すぐに立て直し再び歩き始める。

駐車場に着くとそこには人が二人いた。

「あれ？ 高津先生。どうしたんですか？」

「おお。高梨先生！ ちょうど良い所に」

高津先生と呼ばれた長身の男は、紀陽が来るやホッとした表情をする。

状況がわからず、高津と共にいたもう一人の方に目をやる。

「高梨先生。確か新入生の担当はあなたでしたよね？」

「はい」

「この生徒が自分は新入生だというのはのですが、入ってきた所が学園の裏側だったので怪しいと思ひまして捕まえたんですが……」

「怪しいって何すか！？ 入口から入ろうとしたら犬に追われてここまで逃げてきたって何度も言ってるじゃないすか！？」

ワーと叫ぶ彼は、確かに幾つか噛まれたような跡があり、ボロボロになった制服で立っていた。身体も泥だらけで髪には葉っぱが付きっぱなしである悲惨な格好だ。

「えっと、とりあえず名前を聞いてもいいかな？」

「苑宮です。苑宮一刀」

自分を苑宮^{そのみやかずと}一刀と名乗った彼はクシュンとくしゃみを出して若干鼻水が出ている。何とも情けない姿だ。

「とりあえず、このままだと風邪をひいてしまうので、一旦中に入りましょう」

「いいんですか？」

「こんな姿の子供をこんな状態には出来ません。シャワーを浴びてもらってる間に名簿を見て確認しましょう」

正論を放つ紀陽に、わかりました、と頷き彼を中へと案内に高津は向かう。

「すいません。事情が出来てしまったので、少しだけ待ってください」

「はい。大丈夫です」

「私も問題はありません」

「ありがとうございます！」

安心したような笑顔を作る紀陽。

（（やっぱり先生なんだな））

先ほどの対応からやはり先生だと改めて感じた二人。

「その間は休憩室があるので、そちらで待っててください」

そう言う彼女二人は二人に休憩室の場所を教え、先に行った二人を追いかけて行った。

モール店を出た少年は自衛隊の者に見つからずに一般人の中へと姿を隠す。中では最後の足掻きを見せ、暴れる反乱者たち。しかし、数で勝る自衛隊の者たちに彼らはいずれ捕まるだろう。

少年はその場を離れて行く最中。野次馬たちの中から抜けだす二人組を見つける。彼はその者たちを追跡を始める。

「クソ！」

「やはり、彼らでは手に余りましたな」

老人と中年の男性が話しだす。老人は怒り、中年男性は平然とした顔つきだ。

「毒島^{ぶすじま}。次の準備は出来ているのであろうな」

「ええ。すでに岡山の方でも事を起こすように進めております。ですが、今回の件がすでに報道されているでしょう。そうなっては――」

「そんなことで動揺するなと告げろ！ まったくどいつもこいつも怒りで顔が真っ赤になっている老人には、それ以外にも焦りが垣間見える。」

しかし、毒島は焦りなど見えず、その整った顔を崩すことはない。
「ずいぶんと余裕だな。毒島」

「ご安心ください。ヘミン卿。私に考えがあります。どんなに崩されようと結果は変わりません」

「何故だ？」

ヘミンの問いに、毒島は口元をつり上げる。

「たとえ、今回起こすテロが全て失敗に終わったとしても、各地で次々と起こる事件に混乱した日本は、その後処理に追われる。現在の日本を収める議員たちは愚者ばかり。後処理で弱気になった彼らを、あなたが懐に入れれば――この国はあなたの物になる」

「つまり、今回招集した奴らは全て……」

「ええ。あなたの国のための人柱になってもらいます」

毒島の言葉に、怒りが収まってきたヘミンは、今度は上機嫌になり始める。

彼らは裏道を抜け表道に出る。

一つの、とある店の中に置いていた車に乗る。待っていたガードの三人も共に乗車し車は走り出す。

その一部始終を見ていた少年は携帯を取り出し、電話をかける。

『どうだ？』

「標的は車に乗った。西に向かっている。おそらく東京から出るつもりなんだろうな」

『ダメだ。何としても東京から出さずに殺せ』

「無茶言うなよ。さすがに俺も自動車より早く走ることなんて出来ないぞ」

『……東京から出ると言ったな。どこから 抜けると思う？』

電話の相手からの質問に少年は車の向かう先を見た。

近くに立っている案内標識に目をやる。

「八王子……。とすると檜原かな？ 向かう先は山梨でしょ」

『ということは関東山地を通るか……』

思案する電話の先からキーボードを打つ音が聞こえる。彼らの撃つ手だてを探しているのだろう。

その間に少年は停まっていたタクシーを捕まえ、檜原へと指示を出す。

『よし、お前は檜原へ向かえ。他の奴らを先回りさせて檜原で殺れ』
「了解」

通話を切り、タクシーの中で少しばかりの休息を取る少年。

コンビニの前で談話し屯っている高校生たち。飼い犬を散歩させながら機体を弄っている少女。仕事で忙しくしているサラリーマン。それを見て、少年の表情が一瞬、険しくなる。

だが、タクシーの中からたくさんの人や景色を見ていた少年は、うとうとと睡魔が誘ってきた。外を見ているうちに疲れがドッと現れてきたのだろう。

檜原までどのくらいで着くかと聞けば、一時間ほどだとタクシーの運転手は答えた。

彼はそれまで睡眠をとることした。変わり映えない外を見ながら、少年は今、何を思っていたのだろう……。

「やっと、着いた」

一夏は休憩室を見つけるや、ソファの上にグダアと横になった。

「まさか、休憩室に行くまでにここまで時間が掛るとは、思わなかったぞ」

言う千那の表情にも疲労が見え、彼女も向かいにおかれたソファへと座り込む。

二人は紀陽に言われた通りの道を歩いていた。しかし、辿り着いた先は休憩室ではなく、実験室だった。彼らは辺りを見渡して、休憩室らしい場所を探すも見つからず、仕方がないので職員室へと向かうとするも場所を知らず、さっきの場所に戻ろうにもすでに自分たちの居場所も分からず、近くに清掃者のおばさんに聞くと、結局、同じ実験室に着いてしまった。

やけになった二人は片っ端から部屋を搜索し始めた。一階から四階まである学院の中を探し続けるも見つけることができなかった。

千那がふと外を見ると、もう一つ色違いの建物を見つけ、そちらの方を探すと実験室と同じ場所に休憩室を発見した。

「一時間近くに探しまわって、あるのは違う建物とか勘弁してくれよ」

時刻は四時を回っている。紀陽たちを離れたのが二時ぐらいとすると、すでに二時間かかっている。

「もう四時だぞ。先生たちもすでに私たちが帰ってしまったと思っていたのだろうか？」

「かもな。それか俺たちを今探してるかもしれない」

一夏は疲れから欠伸をすると眼を閉じ、眠りの体勢に入る。

「おい、一夏寝るな。そして、横になるな。みっともないぞ」

そんな様子を見て、千那が一夏を咎める。彼女は疲れているとはいえ、自分の家ではない場所であるから、しっかりとした気を抜かない姿勢を取っている。

「頼むよ。もう今日だけで色々あって、疲労困憊なんだよー」

対する一夏は今日起きた出来事から、緊張の糸が解けてしまい、襲ってきた疲労から立ち上がる気力が無くなってしまっていた。

「そいえば、俺たち以外の生徒を見なかったな」

「聞いてなかったのか。新入生たちは今回の事件から始業式延期。在学生たちも披露宴を取りやめて全員を早々に返したと言っていた

ではないか」

「ああ。そうだそうだ。思い出した」

「全く。お前は、何と言うか。変わらん」

千那は昔と変わらない一夏に対して、呆れる一方で、どこか懐かしそうな表情をしていた。

「五年か……」

千那から零れるように出された言葉。

「私は十歳の時に関西の方に行ってしまったが、お前はずっと山口にいたんだな」

「まあな。あの時、お前がIAのことを言ってくれなかったら、俺はここまで来ることはなかったんじゃないかな」

「……そうか」

普段の千那なら一夏のこの言葉に赤面していたかもしれないが、それ以上に久しぶりの再会と引越しの理由から、その表情には曇りが見えた。

「お互い、姉のことで苦労してるもんな。聞いたよ。色々と場所を転々としてたこと」

「……」

千那の表情がさらに曇る。

「元気か？」

「紫苑姉さんはたまに連絡が来るけど、顔は見えない。蘇芳姉さんは全く連絡がない」

「親父さんはまだ怒ってるのか？」

「いや。むしろ今は心配してるよ。警察に搜索願を出してるんだが、消息不明で困ってるらしいんだ。今どこで何をしているのか。生きているのかさえ定かじゃない」

千那には姉が二人いる。

次女、紫苑はIA開発部門に参加しており、数々のIAを作製している。その非凡な才能から日本だけでなく世界でも有名であり、名を轟かせている。

長女、蘇芳は同じくIA開発を行っていたが、彼女が他に出入りしている仕事から父親と口論になり、彼女は六年前、十六の時に家を出ていった。あれからすぐに心配になった父親により搜索を始めるも彼女の消息は分からず、警察、そしてテレビの力を使うも彼女を見つけることは出来なかった。

「姉さん……」

千那の顔に不安と悲しみが映り、首を垂らす。

彼女は蘇芳に懐いていた。蘇芳自身も千那を可愛がっており、仲の良い姉妹をとして有名だった。

紫苑からはライバル視され、いつも姉と数々のIA開発で争っていたが、紫苑も姉を慕っており、開発以外では彼女に甘えることが多かった。

一夏も千那と同じように世話になっており、頼れるお姉さんだった。

その姉が居なくなると千那は悲しくて泣いていた。一夏もそれにつられよく泣いていた。紫苑は裏切られたと思い、ひたすらに開発に没頭していた。今では、それも多少は丸くなり、今まで外に出ることがなかったが、最近是世界中をあちこちしているためによく出ているらしい。

千那は悲しみが癒えぬまま、一年後に関西へと引っ越して行った。「生きてるさ。信じようぜ」

いつのまにか横になった身体を起こし、千那へと優しく微笑む一夏。

千那も、そうだな、と言って悲しみを含むが笑顔を作りだした。するとガチャと扉が開き、紀陽が姿を現す。

「よかった。まだいたんですね」

ホッと息を吐く紀陽。どうやら今の今まで、時間が掛ったらしい。「車はもう、用意してありますから行きましょう」

二人は立ち上がり、彼女のあとについて職員室まで向かう。

職員室の前には駐車場で揉めていたあの時の生徒である苑宮一刀

が立っていた。

「お」

彼はこちらに気付き、手を振ってきた。

「よ。お前らまだ、帰ってなかったんだな」

「そういうお前も帰ってなかったのか」

「まあ……色々ありまして」

頭を掻きながら、へへと苦笑い。

認めて貰うまでに時間が掛ったようだ。

「ごめんなさい。私が名簿の場所を忘れたばかりに」

紀陽が申し訳なさそうに頭を下げる。

「忘れた？」

「はい。机の上に置いていたと思ったのですが――」

「だから、職員室にいる者、総出で探したんだ。そしたら清水先生とやらが名簿を持ってやがったんだ」

紀陽はももごと言い難そうにしていたのを見計らい、一刀は代わりに事情を話す。

「何でも、俺たち以外にも学院に来たやつらが居たらしくてな。そいつらの対応のために使ったんだとよ」

始業式延期の話が届いていない生徒がいたらしく、彼らが学院に登校してきたらしい。その人数が多く、教師たちも対応に追われていたらしい。

「そう言われれば……」

職員室の中には人の数が少なく、いるのは書類をまとめているらしき教師だけである。

おそらく、まだ生徒たちの対応に苦戦しているのだろう。

「皆さんは、これから私が自宅までお送りするので行きましょう」

三人は頷き、紀陽の後に着いて行くと、前からこちらへと走って来る高津を見つける。

高津は慌てた様子で、走りながら何度か躓きそうになる。

「どうしたんですか？」

「高梨先生！ 体育館で始業式準備を行っていた生徒会の者たちから怪我人が出ました」

「え！？」

「今、救急車を呼びましたが、今日のあの事件で到着が遅くなりそうみたいなんです」

モール店で起きた騒動での被害は大きく、駆けまわされている救急隊員が多い。そのためにこちらへと来るための人出が不足しているのだ。

「高梨先生。確か医学の心得を知っていましたよね？ 先生の力で、せめて救急車が来るまで何とかありませんか？」

「分かりました。私もすぐに向かいます」

高津は、他の職員たちも呼ぶ、と言ってまたすぐに行ってしまった。

「と言うことで、皆さん。申し訳ありませんが――」

「分かってますよ。それより、早く行ってあげてください」

一夏が早く向かうように催促する。

紀陽は申し訳なさそうに頭を下げ、体育館へと走り出した。

「私たちにも何かできないだろうか？」

思案顔で考え始める千那。

「出来ないかって、俺たちが行ったところで邪魔になるだけじゃないか？」と、一刀。

「だが、話を聞いてしまった以上。見過ごすことなんて出来ない」

彼女はそれを一刀ではなく、自分に言い聞かせるように、紀陽の後を追って走り出した。

（相変わらず、正義感強いんだな）

五年前と変わらない彼女を見て、懐かしさと嬉しさを感じる一夏。彼も彼女の後を追って、体育館へと走り出す。

「お、おい！」

取り残された一刀は彼らの行動に半ば呆れ顔になるが、
「ここで、行かなかったら俺だけ非情に見えるじゃないか」

溜め息を吐きながら、彼もまた二人の後を追う。

檜原に着いた。

少年はタクシーから降り、村の中を散策する。

檜原村は関東山地に囲まれており、秋川上流に集落がある。ハイキングコースやキャンプ場、民宿などの観光地も豊富である。

人口は二千人と年々減っている。そして、密集していることにより、彼らを探すことはそれほど困難ではないだろう。

しかし、ここは東京と山梨を結ぶ場所。ドライブコースとして使うことから車の数が多い。

「ここに、あいつらがまだいるのか」

辺りを見回すも、あの時見た車はなく、すでにここを通過している恐れがある。やや早く、先に走っていた彼らとも信号に捕まっていたことで、どんどん離されてしまった。

完全に見失ってしまったことでここに彼らが通ったことも分からない。

「とりあえず、探してみるか」

少年は当ても無いのに彼らを探し始める。

その時、携帯が鳴る。彼は携帯を取り出して耳に当てる。

『着いたんだな』

「ああ」

『奴らは、そこにいることがわかっている。速やかに行動に移れ』

「？　なんであいつらはまだ檜原で停まってるんだ？」

『停まってるんじゃない。そこが元々、彼らの拠点なんだ』

「拠点？　こんな所に？」

少年は辺りを見渡すが、あるのは住宅や商店だけ。

『正確には檜原の外れにある屋敷だ。別荘として使っていた所らしい』

「それを拠点として使ってるのか。なるほどね。そりゃわかりにくいわけだ」

『位置は送られてきてる筈だ。それを見て奴らを狙え』

それだけ告げると通話は切れる。

少年は携帯に送られてきていたデータを確認する。確かに屋敷の位置は村から離れた場所にあった。

村は山と山の間に点在しているが、屋敷は山の中に建てられていた。

少年は迷うことなく、その屋敷へと辿り着いた。別荘だからか、それほどまでに大きくない。しかし、それゆえに山の中に隠すことができ、気付かれることなく、拠点としては有効なのだろう。

「正面に二人か……」

正面玄関。姿は見えないが、二人分の気配を少年は感じ取っていた。敵も彼の存在に気付いたのか、警戒心が強まる。モール店のもたちとは違い、即席で集められたような者たちではなく、鍛えられたプロであることがわかる。

それでも――

「ま、いいか」

少年は堂々と玄関までを歩き始めた。彼らの警戒心が敵意へと変わり、殺気も滲み出はじめる。

少年の両手に突如、二本の刀を具現化させる。その光景を確認した彼らは敵意が一瞬で殺気へと変化し、一斉に襲い掛かる。

「悪くないんじゃないの」

少年は彼らの機敏な動きに不敵に笑みを作りあげる。

左右からの攻撃を後退することで避ける。使用していたのは銃などの現代武器などではなく、くないや手裏剣と言っ物。よく聞かれる忍者たちが使っているようなものである。それを手なれた手つきで扱い、彼らは再び攻撃に移る。

まず、少年は右にいる者を標的に決め接近する。近づく彼に対して帯刀していた刀を抜きだし対峙する。無駄な動作を一つせず、彼の一閃を防ごうと構えるも――

「!?!」

防ぐことは叶わなかった。刀は無惨にも折れ、少年の刀が吸いこまれるように敵の身体を縦に切り裂く。切り裂かれたことで、シャワーのように噴き散る血。それを浴びる前に少年は後ろから斬りかかってきたもう一人の敵へと意識を向けていた。

左の刀を逆手に持ち、後方へと突き刺す。敵はそれを察知し、斬り込んでいた勢いを制止し後方へと飛ぶ。それを隙と見た彼は、踏み込みを入れ一氣に敵へと飛び込む。手裏剣を投げている動作に動こうとしていた敵はすでに間合いに入り込まれてしまい、動きが鈍いてしまう。

少年の横切りを辛うじて避け切るが、彼はもう一本の刀で敵の右腕を切断する。

切断面から血を噴き出すも、声一つ上げず、ましてや苦痛で倒れ込むことなく、残った腕で隠し持っていた鎖分銅を使って対抗する。「無駄だ。その腕じゃもう戦えない。出血多量で死ぬぞ」

少年の忠告を無視し、敵は鎖分銅を彼に投げつけてきた。刀で防ぐも鎖が絡みつく。力で引き寄せようとするも片腕ではどうすることもできず、逆に彼によって寄せられる。

体勢が崩れ、地面に顔から倒れ込む。

「終わりだな」

起き上がろうとするも、刀で手を地面に突き刺されてしまう。

今度こそ、苦痛で顔を歪ませる。敵は少年の顔を睨みつけるが、すぐにその表情が絶望に変わる。

そこには、少年のあまりにも冷酷な目と感情なき表情があった。「瞬時の攻撃。悪くなかったよ。相手を即効に黙らすには悪くない。でも、仲間を一人殺された時点ですぐに救援を求めなかったのは愚かだったな」

少年の言葉にハッとした敵は声を出そうとするも、残ったもう一本の刀で喉を串刺しにされる。敵はそのまま命を落とす。

二つの屍を処理し、玄関から静かに入り込んだ。

「誰もいない」

屋敷の中に入るも人の気配はなく、静寂を保っていた。

中には部屋が一階に四部屋。二階に六部屋ある。一階は主に大部屋であり、二階は個室が置かれている。

一つずつ見て回り、二階の部屋の一つで話声が聞こえる。

少年は中には入らず、部屋の中の会話に耳を傾ける。

「どういうことだ!? 岡山でのテロ作戦が行われていないではないか!？」

「どうやら、こちらの行動を事前に知られていた節がありますね」
会話をしているのは、ヘミンと毒島。ヘミンは怒りと焦りから部屋の中をぐるぐると動きまわっている。毒島は椅子にもたれ、冷静に事の状態を把握している。

「おそらく、内の中に敵のスパイが居ると考えるのが無難でしょうな」

「敵? ワシらと敵対する関係の者などおらんだろ」

「いえ、おそらく彼らなら……」

その時、ジリジリと音が鳴った。備え付けられていた電話機が鳴ったようだ。

「なんだ?」受話器を取ったのはヘミン。

『どうも。ヘミン卿』

ヘミン卿は訝しげな顔する。電話の相手はヘミン自身には知らない相手のようだ。ヘミンは毒島とアイコンタクトし、ハンズフリー機能に変える。

「誰だ?」

『あんたらの野心はすでにバレてるぞ。岡山のテロは起きない。彼らはすでに俺たちの手中に置いた』

電話の相手は若く青年らしき声。青年の言葉に驚愕するヘミン。毒島は相手の声に目を細める。

『悪いが、これ以上あんたらの行動を許すわけにはいかない。処分させてもらおう』

「な!？」

「あなた方にそれほどの権力があるのですか？」

青ざめるヘミンを隣に、毒島は涼しい顔を崩さずに相手に質問をする。

「あなた方の勝手な判断で民を処断する権限があるとは思えません
が……」

『……』

「それにテロ？ 何のことやらわかりませんな。我々がしたという証拠がないのに、罪を擦り付けるような真似は止めてもらいたいですな」

毒島は淡々と述べ、テロ行為を否定する。確かに彼らは黒幕なのだが、決定的にな証拠も無く、彼らが処分される理由が浮き上がって来ない。これでは、彼らをここで殺すのは自分たちを罪人するだけである。

電話の相手は沈黙するも、そこに焦りや動揺は感じられない。

『ハハハハ！ 相変わらずだな。毒島劉貴さん？』

毒島の名を呼ぶ。

呼ばれたとしても彼は動じず、それも確信めいた表情をする。

「やはり、裏組織の人間か……」

毒島は表情を変えないが、苦々しく声を出す。おそらく彼が最も相手にしたくなかったであろう敵である。

裏組織——世界中を支えている組織。表と影で動く者たちを指揮し、この世の均衡を保っている。現世界、各地の国々で乱が起きている。彼らは自分の領地である国を守るために彼らには、その国の中での最高権力を持っている。

『そういう事だ。こちらには権力がある』

権力の力で彼らを処分する。これが今の現状で出来るのは、裏組織だけである。

『すでに俺たちの使者が向かっている筈だ。それじゃあ』

告げると通話は切れ、部屋の中に沈黙が起こる。

「ど、どうするんだ!? このままワシらは殺されてしまうぞ! それに裏組織とはなんだ!? そんな組織があることをなぜ言わなかった! お前は奴らとどういった関係なんだ!」

その沈黙を破り、ヘミンは怒濤のごとく毒島に詰め寄る。

対する毒島は顎に手を置き、思案顔を作る。

「落ち着いてください」

「落ち着けとはなんだ! クソ! ワシは死なんぞ。必ずこの国を

――」

バンツという音が部屋中に鳴り響く。

床に倒れるヘミン。そして、手に銃を持ち構えている毒島。その銃口から煙が出ている。先ほどの音は、銃弾が撃たれた音だったようだ。

「……!? き、貴様!?!」

撃たれた肩を抑え、苦悶な表情をしながらヘミンは毒島を睨みつける。

「こうなってしまったからには、あなたにもう用はありませんな」

毒島は椅子から立ち上がり、倒れるヘミンは見下ろす。

「彼らはいずれ、動くとは思ってはいましたが、行動が早いですな」

「やはり繋がりがあったか!?!」

「少し違いますな。元々敵対関係にあっただけです。察知されないうよう動いていたつもりでしたが、裏には気付かれてしまいましたか」

「ワシをどうするつもりだ?」

ヘミンは自分の身を案じ、出来るだけ毒島から距離を置こうとする。

「決まっていますよ」

毒島は口元をつり上げて銃口を彼に向ける。

「投降して私のことを話されるのは厄介です。死んでもらいます」
「ま――」

何かを言おうとしたヘミンに対し、塞ぐように銃音が鳴り響く。

銃弾は彼の眉間に命中し、一瞬で絶命する。

毒島はその死体を蹴り上げ、持っていた銃を彼に持たせ、その部屋から出ようとする。

しかし、彼が出るその前に部屋をドアが開く。彼は緊張に身を引き締める。

「どうも」

少年は中に入り、毒島と対峙する。彼は緊張感なく手をフリフリと振る。毒島は彼を見るや、先ほどの無表情とは違い、驚きと恐怖で表情が凍ってしまった。

「君は……」

「電話の相手から聞いてるだろ。俺があんたらを処断する相手だよ」
少年の右手から刀が出現する。

その様子を見た彼は相手が正真正銘の裏組織の人間だと認識する。

「レムナント……。と言う事は間違いなく裏の人間か」

毒島は少年の左手首に装着されているブレスレットを見つめ、そう呟く。

レムナント。それは鉱石の名前。裏組織の人間ならば名は知っていても使っている人間は一部である。その鉱石の特別な力により武器が錬成され、扱う事が出来る。達人によって造られた武具よりも遥かに強靱な物が作られるほどの武器が出来る。玄関前で敵の刀が折れ落ちたのは、レムナントの力も関与している。

「君は、どこの組織の所属かな？」

「それは言えないな。企業機密みたいな？」

少年は毒島との距離をジワジワと詰め、自身の間合いへと入れ込もうとする。

「そうかい。ならば言わなくてもいいさ。だが私は死ぬつもりはない」

パチンと指を鳴らすと、ドアの外から五人の黒装束を着た者たちが中に入り込んできた。

毒島は彼らに後を頼み、自身は窓から飛び降りる。飛び降りた時の着地音が聞こえない。とすると下にも彼の手下たる者たちが居ることも考えられる。少年は後を追おうとするも、三人の黒装束たちが窓側へと先回りする。

「やろうってのか？ 俺と」

ブレスレットが光り、左手にもう一本の刀が持たれる。

「相手してやる暇はないんだけど……」

少年が面倒くさそうにしていると、ポケットに入れていた携帯が振動する。その振動を感じるや、彼の態度が変わり始めた。

「やっぱ、相手してやるよ。ほら、かかって来いよ！」

言葉と同時に後ろにいた一人へと斬りかかる。疾風の如き速さに対処できずに、諸に斬撃を食らい、床へと崩れ堕ちる。周りにいた者たちに、さらなる緊張感と殺気が入り込まれる。

四人が同時に責め寄ってくる。少年は焦ることも無く冷静に対処する。

まず、隣から槍で突きかかる相手に向き、その攻撃を左に交わして自身の刀を相手の喉元に突く。喉をやられたことで声が出せずに悶絶する相手を尻目に、後方へと飛ぶ。先ほどまでの場所に鉄球が撃ち込まれて、壁が陥没してしまった。

刀を持った二人組との交戦に入り、彼は部屋から追いやられる。玄関ホールまで追い込まれるが、決して苦戦している訳ではなく、彼は狭い部屋での戦いから広い場所へと彼らを誘導させた。

それを知ってか知らずか彼らは少年との交戦を続けていた。そして、罅迫り合いの体勢から一回距離を離す。鉄球を持った相手からの攻撃から避けるためだ。

「まだ、やるか？」

二人組は激しい斬り合いに息を切らす。対する少年は汗一つ掻くこともなく息を切らすこともなく平然としている。挑発に似た彼の言葉に二人は乗ってしまい勢いよく斬りかかる。

大胆不敵に笑った彼は、掛った獲物を狩るかのように向かい撃つ。

挑発に乗ったことで彼らの動きに大きな隙が生まれる。それを見逃さずに隙から生まれた部分を狙い切る。

左の敵は下斬りの体勢にとっていることで、頭上ががら空きとなっており、右の敵は逆に上斬りの体勢であったために下半身が空いている。少年は二人のその部分に狙いを定め、刀を振るう。

二人と少年の速さは歴然であり、少年の斬撃の前に二人の身体から血が吹き荒れる。そのまま二人は倒れ、彼は残った敵へと移動する。

二階から鉄球を投げつけるも少年はそれを軽やかに避け続け、一気に間合いを詰められる。すると敵はボールの様な物を取り出し、少年へと投げ込む。彼は刀で切るのではなく避ける。すると、地面に落ちたそこから油が飛び散る。これを彼に浴びせることで火に引火させようと目論んだのだろう。その異変気付いた彼により、失敗に終わってしまう。

打つ手を失くした彼は、再び鉄球を投げつけるが、投げつられたそれは、刀の一閃で碎かれる。

「終わりだ」

少年の一言に身震いする敵は二階から飛び降り、玄関へと逃げ込む。ドアノブに手を掛け、脱出するも同時にどす黒い血も混じったの事だった。そして、そこから二度と立ち上がることはなかった。

彼の背中には刀が突き刺さっていた。少年は二階から彼に向けて、刀を槍のように投げつけたのだ。

彼は刺さった刀を取り、一段落に息を吐く。そして、おもむろに携帯を取り出し、ある相手へと電話をかける。数秒後に相手が通話に出る。

「こっちは終わったよ。そっちは？」

『こっちもだ。これで今回の任務は完了だ』

電話の相手の声は低く、男であることがわかる。さっきの振動は彼によって起こった事のようなのだ。

「わかった。じゃあ、これから合流して帰還しよう」

『ああ。じゃあ、檜原村の宿で会おう』

それだけ伝えると通話は切れる。少年は後処理のために死体となった五人の片付けに入る。

「か……かは……」

すると、下半身を斬った相手から声が聞こえる。大量の血で床の絨毯が真っ赤に染め上げられながら、這いつくばって前に動いている。その様を見ながら少年は処理を続ける。

「み……き……」

彼の口から消え入りそうな声で、誰かの名前を呼んでいた。気にせず続ける少年は彼を最後に決め、二階の死体たちを片づける。

「い……ま……か……」

最後の力を振り絞り、動き続ける。その姿は無様にも見えるが、何故か切なさが大きく感じさせる。

残りの処理を終えた少年が彼の所に着いた時、彼は手に一つの口ケットを持ちながら息絶えていた……。

出来事（後書き）

以上。二話はこんな感じで終わらせました。続きが気になる感じで終わらすことができました。まだまだ未熟な所がありますがこれからも読んでくれると嬉しいです。

信念（前書き）

三話目です。なかなかうまく言葉出てこないものです。表現が下手で、何言ってるんだと思うかもしれませんが、なにとぞご了承ください（汗）

信念

すでに空は真っ暗で星が姿を見せていた。

「いやゝ。疲れたゝ」

一刀はダランと両手を前に出しながらだらしない感じで歩いている。

「まさか、お前も手伝ってくれるなんてな」

隣を歩く一夏は嬉しそうに笑みを作りながら、彼と話をする。

あの後。千那と一夏は体育館へと着き、教師たちに手伝う事を進言した。すると、彼らは最初こそ反対するも、二人の熱意を感じ取り、手伝いを許可した。その後に追いついた一刀もまた二人と共に救助活動に入った。傷ある者の手当てをもちろん。散らかった物品の数々を整理した。

そして遅れて救急車がやって来て、負傷者たちが連れていかれた後に行われた大掃除を手伝い終わったときには、時刻は八時を回っていた。

紀陽は自宅まで送ることを推薦するが、後処理が大変なのだからという理由で断りを入れた。

「あそこで俺だけ帰ったら後味悪いだろ」

今、三人は共に学校から出る。三人とも、帰路は同じようであり、こうして話をしながら歩いている。

「お前の指示がなかったら、私たちだけではどうする事も出来なかった。感謝してるぞ。一刀」

千那は一刀に優しく微笑みながら礼を言う。

「よ、よせよゝ。なんか恥ずかしいだろうが」

顔を赤らめ、恥ずかしそうに頬を掻いている一刀。

現に彼の適切な指示で事は、すんなりと収束に向かい始めていた。それまで教師たちが慣れたように動いていたのだが、

〈効率が悪すぎる〉

と、言った一刀によってそれまでのやり方と違った対応をさせた。二人は一刀に言われた通りに動いた。その動きが教師たちのやり方よりも遥かに有効的で、負傷者たちの安全を確保するのに適していた。

教師たちは彼のやり方に従わなかったが、次第にそのやり方に頼っていくこととなり、いつの間にか一刀のその場で指揮者となっていた。

そして、丸一日かかると思われていた今回の騒ぎも、一刀の活躍で僅か半日で済んだという訳だ。

「いや、お前本当にすごいって。あんな事、そうそう出来ないさ」「うん。畏まることなんてない。先生方もお前をあんなに誉めていたではないか」

一刀の功績を教師一同で誉め称えていた。中には泣きながら手を取り感謝していた者までいる始末だ。

「そんなに誉めんなよ。もうむず痒いっての」
「誉められることんに対し、まんざらでもない彼は上機嫌になっていた。

十字路に差し掛かったところで、千那と二人は別れることになる。
「それじゃ、また」

千那は二人に片手を上げ、自分の帰路を歩く。

一夏と一刀はほとんどが同じ道のりで、二人の住む場所は以外にも眼と鼻の先であることがわかった。

「それにしてもよかったよ」

「ん？」

「こっちに来てすぐに知り合いにも会えたし、同じ新入生のお前がうまが合いそうな奴だよ」

「ま、今日だけで色々ありすぎだけだな」

お互いの家が近くなる。二人ともマンションに住んでいて、お

互いの家は向きあっていた。駅とスーパーも近く家賃も姉が支払っているため、文句なしの一夏。友人に慣れた一刀も近くであり、今日だけで色々得した所もある。

だが、同時にテロに巻き込まれるという災難にも会い、目の前で撃たれた者も出る始末。

（今日。夢で見ちまうかな）

嫌な感じを表には出さずに、笑顔を作る。

「あんま、無理しなくていいんじゃないか？」

「え？」

突然、一刀が真剣な顔つきになり、一夏へと見据える。

「一夏。お前、テロに巻き込まれたんだって？ それなのに、他人のために嫌な思い見せずに頑張ろうなんて、お前적の精神的に毒なんじゃないの？」

「……」

「もちろん、誰でも良いわけじゃないけど、その気持ちをぶつけてスッキリすることも大切なんじゃないの」

一刀の言葉に、ポカンと顔をあげて聞いている一夏。

「どうしたんだ一刀？ なんかお前のキャラじゃない発言ぽいぞ」

「お前はいつから俺のキャラ性を判断したんだ」

ハハハ、と笑いあう二人。この短期間で確かな気持ちを互いに噛み締める。

マンションが見えた所で二人は遂に別れることになる。

「そんじゃな」

一刀は一夏に手を振り、自身のマンションへと向かう。

「一刀」

その背中に一夏が言葉を紡ぐ。

振り向いた一刀に、

「ありがとな。今度愚痴聞いてくれよ」

そう言って信頼の笑顔を向ける。

「ああ」

ただ、その一言を一刀が紡ぐと、二人は自宅へと帰って行った。

「ハアハア」

逃げる。ただひたすら逃げ続けた。

思えば、彼らと関わってからはロクなことがなかったかもしれない。いくら策を練っても見破られ、その度に彼らから逃げ続けた。所属していた組織からも追われ、彼らからも逃げ続けた。

毒島は肉体的にも精神的にも疲れ果てていた。

自ら命を断つことも考えた。しかしその都度、家族の事を思い出す。

自分のわがままを信じてくれ、どこまでのお人好しの家族。騙されても恨むことなく前だけを見つめていた家族。彼はそんな彼らを嫌いにはなれなかった。

不幸が続こうとも、今を一生懸命に生きる家族を彼は愛おしいと思っていた。

そして――守りたいと思ったのだ。

だから、彼は懸命に働いた。少しでも家族に余裕をもたらすために。老体になった今でも働かなくてはならない父と母に楽をさせてやりたい。生まれながら病を持っていた妹を助けてやりたい。

そのためならば、彼はどんな悪事も働いて見せた。どんなに自信を汚そうとも、どんなに裏切り者扱いされようとも。

たった一つ。家族の幸せのために。

「あ!？」

地に足を取られ、転んでしまう。

これが一度ではない。すでに何度か転倒し、身体中が泥だらけになってしまっている。膝や腕に擦り傷があり、鼻からも血が出ており、整っていた顔は今や醜くなってしまっている。

「もう、諦めろよ」

すると、背後から声がした。振り向いたその先に、切り株に座り、

こちらを見ている黒人の男がいた。

「今までは勘弁してやったが、今回の件は許されない出来事だ。死者も多数出ている」

黒人は持っている銃を手の平で持て余し、淡々と話し始める。

「中国のマフィアに追われ、タイ政府に媚びへつらい、インドの影の組織で働き信頼を経て重鎮される。そして、その組織のリーダー。ヘミンを手駒にして、その裏組織への謀反。これは大罪だ」

彼は毒島の経歴を話しだし、彼の心を揺さぶる。

「結果。裏組織に大敗し、南アジアを追われる身となった。そして、次の標的が日本か……」

クククッと含みながらの笑いをし始めた黒人。その笑い方が恐れを生ませ、毒島の身体を硬直させた。

「な、何が可笑しい！？ 私の望みはまだ生きている！？ お前たちには決して――」

彼の声を遮るように、顔の横を何かが飛んでいった。飛んでいった先を見つめるとそこには大きく穴をあけた大木があった。しかも、周りには焦げ付いた跡も無く、そこだけが綺麗に貫通していた。

「あんたが幾ら、藻掻こうともな」

振り返った毒島の目の前に、黒人は既に立っていた。大きな肉体と低い声。そして、彼を呑まんとするその目つきにより、腰を抜かしてしまう。

「所詮。無駄な足掻きなんだよ」

木を貫通させた銃の照準を彼に合わせる。ガタガタ震え、命の危機に失禁してしまう毒島。心臓が勢いよく働く。それがどんとどんと速くなっていく鼓動だけが、今の彼に伝わっている唯一の音。

そして、彼は走馬灯を見た。浮かんでくるのは笑顔を絶やさず自分に関わりかける家族の面々。汚く汚れきった自分を暖かく見守ってくれるその姿だった。

「うわああああああー！！！」

彼は急に立ち上がり、黒人に襲い掛かる。

（死ねない！ 死ねない！ 死ねない！ 私は！？）

彼は震える体に鞭打ち、抵抗して来たのだ。

しかし、力の差は歴然であり、黒人はビクとしなかった。抑えようとする彼の静止を振り切るために、黒人は膝蹴りを溝に入れる。毒島の身体はくの字に曲がる。そして襟元を持ち上げ、彼を投げ飛ばした。投げ飛ばされ、木へと背中からぶつかる。肺を圧迫されて大きく咳き込んでしまった。

死の焦りと恐怖で我を見失っている彼と、冷静さを欠かず、事を慎重に進める彼。

すでに両者の雌雄は決していた。

「わ……私は……」

それでも、立ち上がり、彼に対峙し続ける毒島。

「死ぬ……訳には……いけないんだー！？」

彼は黒人へと突進していった。死ねないと言う思いで。

だが、彼の思いは無惨に砕かれた。

黒人は持っていた銃で彼の心臓を撃ち抜いたのだ。大木さえも撃ち抜いた銃だ。人間のひ弱な肉体などあっさりと貫いてしまう。

毒島の身体から大量の血が流れ出ていく。もう、手で抑える力も残っておらず、そのまま地面へと倒れ込む。

「あ……あ」

しかし、絶命することができず、無念な表情で、ただ小さく掠れた声を発していた。

「――安心しろ。お前の家族の安全だけは保障してやるよ」

黒人が彼を見下ろしながら、そう伝えるも聞こえたのかどうかは定かではない。

「……」

彼は息を引き取った彼の身体を丁寧に地面へと埋め、その場を後にしようとした。

その時、携帯が携帯が鳴り、受信者を確認。

『こっちは終わったよ。そっちは？』

「こっちもだ。これで今回の任務は完了だ」

電話の相手の声は、まだ若く少年らしき声だ。先ほど屋敷にいた彼に対して連絡を入れたのは、この黒人によるものだ。彼も少年と同じようにこの屋敷へと来ており、窓から飛び降り、下にいた部下たちによって支えられて、逃げ出した毒島を彼が追う事を携帯で合図したのだ。

車に乗り込んで逃げようとする彼らに対して回り込み、彼の持つレムナントである銃で破壊した。

破壊された中から飛び出したのは毒島だけであり、残りの者は負傷して動けなかった。毒島は黒人の姿を確認すると、彼らを置いて即座に山の中へと逃げ出した。それを追い、今に至る。

『わかった。じゃあ、これから合流して帰還しよう』

「ああ。じゃあ、檜原村の宿で会おう」

それだけを伝え、彼は通話を切った。毒島を埋めた地を見つめ、彼は悲しさに表情を暗くする。

「お前の家族はもう全員亡くなってる。なんて言えないよな」

彼が呟いた言葉は誰に聞かれることなく、風に持っていかれる。

「お前の生涯、きつとあの世で家族が誉めてくれるよ」

テロ事件があった次の日。朝に連絡があり、始業式は三日後だと決まった。それまでは休日とし、くれぐれも怪我と事件に巻き込まれないようにと言われた。

「事件に巻き込まれるなって、どうすりゃいいんだよ」

一夏は洗面台で顔を洗い、寝ぼけた状態から覚める。時刻は九時を回った所。

朝食のパンを食べた後、リビングでゴロゴロしていた。

「せっかくIAが使えると思ったのに……。なんかテンション下がっちゃったな」

彼は昨日と言う日を楽しみにしていたのだ。だが、あの一連で事が延びてしまいIAを使う時期が遠くなってしまった。

しかし、あの事件があったから幼馴染と会え、友人が出来た。何もかも悪い方向にある訳ではなかった。

「どっか出かけよっかな」

退屈な時間を過ごすよりも外で何かをすることを選んだ一夏はヒョイツと立ち上がり、出かける準備を始めた。

その時、玄関の呼び鈴が鳴った。

「誰だ？」

今日は特に誰とも会う約束をしていない一夏は、疑問に思いながらも玄関を開ける。

「お、おはよう」

玄関の前に立っていたのは、幼馴染の千那だった。

彼女は緊張した表情をしながら、一夏へと挨拶をする。

「千那？ 何しに来たんだ？」

「うむ。暇なものでな。何かすることはないかと思っていたら、ここに來てたのだ」

彼女の服装は制服ではなく私服。その私服の着こなし方が、また上手く彼女に似合っていた。

「お前も？ 実は俺もやること無くって外に出かけようとしてたんだ」

「そ、そうか！」

彼女はパアッと笑みを作って喜んだ。

「だったら、一緒に買い物に行こうではないか」

「あ、ああ」

千那の誘いへの勢いに吞まれながら、一夏はそれに頷いた。

一夏が出掛ける準備をしている間、千那を家のリビングで待たせていた。

千那は人の家と言う理由で畏まってしまうが、
「別に知らない仲じゃないんだから、適当に見てもいいぞ」

と、一夏は言った。

（そんなこと言われてもだ。もう、昔とは違うのだぞ！）

心の中でそう叫びながら、昔と変わり映えのしなさすぎる彼に対して歯がゆい感じになる千那であった。

（た、確かに幼馴染が変わっていないというのは嬉しいが、変わらなさ過ぎても、困るぞ）

一夏は昔からそうだった。他の友人たちに対しても良く接し、彼を嫌う者はいなかった。だが、特段よく一緒にいた自分と彼らとの対応が変わらないという事に対し、千那は何故か納得いかなかった。「千那。準備できたぞ」

後ろから声がかけられる。振り向いたそこに、さっきのジャージ姿ではなく、スウェットにジーンズといった物。これが一夏の外出時の服装である。

（こ、これが今の一夏か）

千那はボーと彼を見つめてしまう。

（昔のヒョロヒョロした感じとはずいぶん変わったものだな……）

「どうした？」

訝しげに話しかける一夏によって、千那はハッと我を取り戻す。

「な、なんでもない。ほら行くぞ」

二人は部屋を出て、玄関から外へと出る。

「買い物ってどこでするんだ？」

「この辺にそれほど大きな店はないからな。駅から電車に乗って池袋にでも行こう」

「了解」

千那が歩く横を一夏は歩きながら、二人は駅へと向かった。

黒人の男は宿の屋上にあるテラスで座っていた。注文したブラックコーヒーを飲みながら彼は少年を待っていた。

「来たか」

屋上の扉が開き、こちらへと向かって来た少年。

「早かったな」

「そうか？ 意外と遅いかと思ったけどな」

少年は黒人の向かいに座り、注文を頼んだ。

「パフェお願いします」

彼は二カツと店員さんへと笑いかける。店員のおばさんも笑顔を返し、厨房に向かう。

「相変わらず、甘いものが好きだな」

「これが無いとやっていけないよ」

溜め息をつく黒人と、ニコニコな笑顔の少年。

この姿を見ると、先ほどまで殺戮を繰り返した者とは到底思えない。

あの姿を見た後に彼のこの表情を見れば、ゾッとしてしまうのは言うまでも無いだろう。

同じ組織に所属している黒人である彼だからこそ、この状況に何の問題も無いのだ。しかし、彼自身も最初こそ、彼のこの変化を見た時は背筋が凍るような体験はしているのだ。

「仕事を終わらした後は、糖分を取らないと」

「行く前にも食べてたじゃないか。あまり食べすぎるなよ」

へーい、と返事をした後、注文したバナナパフェが届く。彼は一口食べるや、満面の笑みを作りながらどんどん食べていった。

「そういや、どうしたんだよ？」

「何がだよ」

少年が黒人へと言葉を放つ。

彼はコーヒーを飲むと、カップを口を持っていく。

「――あいつを殺る時に、何かあったのか？」

彼の動きが、その言葉を聞くと動きを止めた。

平然としているが、心中穏やかではない彼を、少年は見抜いたのだ。

しかも、それが毒島を仕留める時だという事も当ててしまったのだ。

(本当にこいつには驚かされる)

苦笑交じりに鼻で笑った彼は、観念したかのように静かに話を切り出した。

「あんな奴だったが、あいつにも守りたい者たちがいたんだ」

彼は毒島竜輝の切なる思いを、あの時に感じていた。

「そいつらがすでに、死んでいる事も知らずにただ、戦い続けていた」

彼の家族たちは、一年前に亡くなっており、両親は相次いで交通事故で亡くなり、その後妹は癌でこに世を去っている。

インドにいた彼には、その事は伝えられていなかったのだ。彼は日本を出た後、ロクに連絡もせずに、仕事に没頭していたからだ。

日本に帰って来ても、実家に帰らず、日本強奪のための準備をしており、そんな余裕はなかった。

「組織に入って覚悟はしてたが、やっぱこういった仕事はなれない」

黒人は胸部分を抑え、苦しそうな表情をする。

「みんなそれぞれに、戦う理由がある。それがどんな悪党であつてもな」

抑えをしていた手の平を見つめながら、彼は感じいるものがあつたのか、その手を強く握りしめた。

この世に、理由なく戦う者などいない。モール店でテロを起こした balan も、だらけてしまったこの国を憂い、自ら立ち上がり日本復興のために戦った。それが毒島の策略であつたとしてもだ。

そして、その毒島も愛する大切な家族たちのために命を賭して、今日も戦い続けた。どんなに汚くても反社会的な活動であつたとしても。

それが、大罪であつても……。

彼も数々の戦いをしてきた。皆、一様に果たしたい何かがあつた。だからこそ、彼は今の自分たちの行動が本当に世界のためなのかわからなくなっていた。

しかし少年は、

「それがどうした？」

黒人の思いを消し飛ばすかのような言動だった。
パフェを食べながら、少年は言葉が続ける。

「相手が何を思ってるかなんて関係ないさ。こっちだって、こっちの思いがあるから戦ってんだぞ。一人一人に感情移入してたら、自分の目的を見失っちまう。そんな真似、絶対にさせない！」

少年の気迫は激しい思いで染まっていた。それは怒りでもなく、悲しみでも無く、喜びでも無い。

「俺には理想がある。その理想を果たすまで諦めたりはしない！」
そう。そこにあるのは――

「俺はその理想が――自分の歩む道だと信じている」

迷う事なき、揺るぎない信念だった。

「……」

黒人はそんな彼の言葉をただ、聞き続けた。

傍から見れば、彼の言葉は、子供の戯言だと思うだろう。だが、黒人はそうは思わなかった。

なぜならば、彼の信じる思い。それがどんな時でも、決して惑う時も、折れる瞬間さえも見たことがなかったからだ。

（こいつなら、きっと……）

黒人は、彼のニコニコしていた時とは違った、真剣なその表情から今度は目を離せなかった。

その時、ボトツと何かが落ちる音がした。

「あー！ー！ー！？」

少年はスプーンから落ちたアイスを見て叫んでいた。

「しまったー！？」　アイスが……
ガクリと丸々落ちたアイスから、ショックで悲しそうな表情になる。

その姿はこの場所で、最初に合った時の年相応の少年の表情だ。

「店員のおばちゃんに言ったら、新しいの作ってくれるかもな」と、黒人は少年に告げた。

「ホントか！？ おばちゃん！」

彼の言葉を信じて、少年は店の店員を呼んだ。

もちろん、そんなことはしてくれないだろう。むしろ、ここは食べ物で粗末にしたという事で叱られる事で有名だったはず。

それが見事に当たり、少年はこの後、店の店員に二時間叱られ続けた。

電車に流され、二人が池袋についたのは十時過ぎ。ちょうど色々なお店が開く時間帯である。

「お前は池袋に来たことがあるのか？」と、千那。

「いや、ここに来たのは初めてだよ」

一夏は始めてくる池袋の大きさに驚いていた。

「凄いな。都市って」

「止める。田舎人っぽい発言は」

「いやでも田舎人だし」

「その発言を止めればいいのだ。いいか？　ここは人がたくさんいる。今日が休日ではないからこれだけで済んでいるが、土日はこの何倍もの人がやってくる」

千那は説明を施す。それに「え？」とポカンと一夏は口を開けていた。

「こ、これ以上の人が集まってくるのか！？　そんなにいたら、前が見えなくなるぞ！」

アワアワと慌てながら、彼は叫ぶ。それを見ていた周りの人たちはクスクスと笑いながら二人の近くを歩いて行く。

「だ、だから！　そのような発言は止めると言ってるだろ」

彼女は恥ずかしさで顔を赤らめ、一夏の口を手で抑えていた。その光景が、さらに周りの人たちの笑いを誘ってしまう。彼女は逆効果だった自身の動きに、もっと顔を赤くしていた。

「い、行くぞ！」

「あ、ちょ、待ってくれよ」

速足で歩く千那に遅れないように、一夏も速足で追いかける。

何が何だかわかってない一夏と違い、千那は早くこの場所を抜けだしたいと考えていた。

「千那！ どうしたんだよ？」

「うるさい。全部お前が悪いんだ」

「なんで、俺が悪いんだよ」

「田舎人みたいな発言は止めろといったろ。まったく」

そのような会話を続けながら、池袋の中を歩き回っている二人。そして、二人はある店の前に訪れた。

「ここは？」

一夏は頭の上に「？」を浮かばせ、千那を見る。

「ここは、昔、お世話になった師範の弟さんのジムだ」

「師範って、西郷師範の？」

彼女は頷き、自動ドアが開いて中に入る。

西郷師範と言うのは二人が幼いころに、よく通っていた武術道場の師範だ。大きな体と鍛え上げられた肉体。そして、なにより――（あの髭は、嫌いだったな）

剛毛な髭だった。何でも髭剃りは月に二、三回するかしないかであるらしく、ほぼ手つかずな状態で髭はこれでもかと言うほどに伸びきっていた。

一夏はあの髭に恐怖を感じており、いつも練習に身が入ってなかった。

「あー」

彼は西郷を、むしろ髭を思い出してしまい行くのを戸惑っていた。「何してる。早く来い」

先に行っていた千那が、なかなか来ない一夏の手を引っ張り、中に入り込ませる。

「なあ、千那……」

「君が、霧島君か！」

彼の前に巨漢が立っていた。ホール前で仁王立ちしていた。しかも柔道着。

（うわぁ〜）

一夏は見るからに熱血そうな彼を見るや、あからさまに嫌そうな表情を作った。

「痛っ！」

その時、彼は脛に痛みが走った。

千那が失礼な顔を作っていた彼の脛を蹴り上げたのだ。

（あんまり、失礼な態度を取るな）

（わ、悪い）

二人は互いに聞こえる程度の声で話す。

「何だ？ どうしたのだ？」

「いえ、何でもないです。源氏師範」

西郷源氏。それが巨漢の名前。彼は訝しげな顔でこちらを見ている。

千那はキリツとした態度で彼へと向かう。

「そうか。千那君とは幾度かあった事があるが、君は初めてだな」

「は、はい！？」

「うむ。そんな堅くなる必要はないぞ。兄者の場所と同じようにしてくれればいい」

（それじゃ、落ち着いていられないよ！？ しかも、この時代に兄者って……）

源氏は一夏が物怖じしていると感じたようで、彼から少し距離を置いて話しかけている。

（でも、以外にも師範よりは気を使ってくれる人なのかな）

「師範。今日ここに来たのは例の」

「おお。わかっているぞ。こっちだこっち」

源氏の後をついて、二人は歩きはじめる。

（なあ、千那。例のって何？）

（ついて来ればわかる）

彼の問いに彼女は素っ気なく返す。

「千那。全国大会優勝。おめでとう」

「ありがとうございます」

「これで、また一步。目標に近づいたな。兄者もきつと喜んでいるだろう」

「はい。これもお二人の指導のおかげです」

カカカ、と源氏は高笑いを上げた。

「謙遜するな。お前が日々努力していた事は誰もが知っている。当然の結果だ」

全国大会。千那は武術大会において、見事、その頂点に立ったのだ。新聞でもテレビでも彼女の名は一躍有名になった。

しかし、一夏には一つの疑問があった。

（なんで、IA学校に入学したんだ？）

全国大会なのだ。ならば数々の有名な武道に長ける学校はあったはずだ。しかし、IAはスポーツであって武術ではない。

彼女は、他の学校からのオフアーはあったはずだ。それをすべて蹴ってまで、この学院に入る理由は何なのだろうか？

「それにしても感心したぞ。霧島君」

源氏が話し相手を変え、一夏へと声をかける。

「千那の活躍に鼓舞されて、再び武術をやり直したいなんて」

「……はい？」

身に覚えのない事に対して、一夏の脳の処理が遅れる。

「しかも、いきなり我がジムのトップと手合わせなど、恐れを知らんな」

カカカ、と源氏。

「は……え……？」

何が何なのか分からず、一夏の脳はフリーズ寸前。自分に突然降りかかった火の粉に、どうすればいいかわからなくなる。

彼は千那へと振り向き、事情を聞こうとする。

（どう言う事だ。千那！？）

（こう言う事になってしまったのだ）

千那はうっすらと汗を滲ませ、一夏から視線を逸らす。

（最初は、ただお前の事を話しただけなのだ。だが、何故かその話が大きく変わって、お前が私に憧れているという事になってしまった）

「はあ！？」

一夏は思わず、声を上げてしまい、源氏がこちらを向く。

慌てて手を振り、何でもない事をアピールする。

（な、何だよ！？ それ）

（こっちが聞きたいさ！？ どこからそんなことになってしまったのか。源氏師範は、そう思ってしまうとそのまま流れを作ってしまう人なんだ）

（ふ、ふざけてる……）

首を垂れて、呆れる一夏。

「着いたぞ」

二人が話しあっている隙に、目的の場所へと着いてしまった。

練習場とは違い、周りに観客席が用意され、中央に大きな舞台があった。これはまるで――

「もしかして、試合会場ですか？」

「何を言う？ 当たり前ではないか？」

首をひね、不思議そうな顔をしている源氏。

「ま、マジ？」

対する一夏は顔を青くしていた。

「今日はここで、我がトップと対戦する予定になっている。開始時間は三十分後だ」

自身の腕時計を見て、時間を確認した彼は指を指して、

「あそこに、君のための服が用意されているから着替えて、三十分後にまた、ここに来てくれ」

用があるから、と源氏はこの場を後にしようとした。

「あ、そうだ」

思い出しかなのように彼らの方へ振り向いた。

「ちゃんと観客も来るから安心してくれ」

と、一夏をさらに緊張させることを言って会場の外へ出る。

「ど、どうすんの!？」 無理。無理だって! 俺あれから全く武術やってないもん!？」

「落ち着け一夏。何とかなるようにするしかないだろ」

「なんとかって何だよ？」

「とりあえず、覚えてるだけでいい。あの頃の時の感覚でやるしかないだろ」

「無理だよ! 師範の髭しか覚えてないよ!？」

「な!？」 お前、一体何のために行ってたんだ!？」

ワー、ワー言い合いを始める二人。辺りには誰もいないから良かったものの。これでは先ほどの二の舞である。

「あれ? 君たち見慣れない人たちだね」

だが、源氏が出ていった扉が開き、中から少年が姿を現した。

彼らは話を止め、彼に顔を向けた。

「もしかして、師範の言ってた霧島って君の事かい？」

「あ、はい。俺ですが」

年は自分たちと同じ年くらいの子だろう。しかし一夏は初対面と言う事もあって敬語で言葉を返した。

「そうか。初めまして、今日はお願ひします」

「今日は?」

一夏は彼の言葉を聞き返すと、「あれ?」と首をひねる。

「聞いてないのかい? 今日の対戦相手は僕なんだよ」

「「へ?」」

と、一夏だけでなく千那も驚いたような声をする。どうやら、彼女も対戦相手を知らなかったようだ。

「え、じゃあ、ここのトップって……」

千那がキョトンとしたように彼に声をかけると。

優しく微笑みながら、一夏に握手を求めた。
「よろしく。桔ヶ也きつがやしん新です」

信念（後書き）

今回は、ここまでです。また、新しいキャラが出てきて、もうよくわからなくなってくるかもしれませんが、これからもドンドン出すつもりなので次回をお待ちください。

自信喪失（前書き）

四話目です！ 実は、大学行きながら書いているので、勉強の方が疎かになっている今日この頃です！

自信喪失

「クッ!? 待たしても」

男は人が通らなくなつた、深夜の大通りをひたすら走っていた。自身のプロジェクト。それがミスを起こした。彼はその責任から逃げずに戦った。だが、彼は追われる身となった。

「あいつが……! あのガキさえいなければ……!」

男は下唇を噛み締め、怒りと悔しさを言葉に滲ませる。

「ガキがいなければ、全てが上手く行っていたはずなのに!」

「――それは、残念でした」

男の言葉に対して、返事が返ってきた。

それまでしていた表情が消え、恐怖一色に変わる。

「ですが、あなたが進めていたプロジェクト……。いずれにせよ、失敗は目に見えていましたよ。飯・異^{い・そんじゅん}絢さん?」

その声は異絢の前方から発せられていた。

「あなたの罪はそのプロジェクト遂行ではなく、あなたのこれまでの経歴にあります。ご存知ですよ? 自分の経歴」

備え付けられていた街灯の光によって、声の姿が露わになる。

「クソ、ガキめ!」

異絢が言っているガキ。それは、少年の事であった。

少年は恐怖で歪む彼の顔に対し、涼しげな表情で彼を見ていた。

手にはいつもの刀ではなく、書類らしき紙を持っていた。

「えーと。殺人罪に墮胎罪。強姦罪に詐欺罪に恐喝罪。おお! す

ごいな! 外患罪もしたんですか!? 波乱万丈な人生だな」

どうやら、その書類には彼の犯した今までの罪が載っているようだ。罪の多さに少年は感嘆した声を上げる。

なぜこれほどの罪を犯しておきながら、全てが不問にされてきたか。それは彼がある組織と精通していた事にあった。

しかし、その組織の起こした策が全て失敗に終わり、同時に組織

が壊滅された事を聞かされた。

これが、巽絢にとっては大きな問題だった。彼が今まで、これほどの罪が不問になっていたのは、その組織が彼の才能を買い、内で働く代わりとして契約を施していたからだ。

組織が壊滅した今、契約も無かった事になり、彼は再び追われる事となったわけだ。

しかもその原因を作ったのが、まだ少年だったとすれば憤りも出来てしまう訳である。

「これだけ罪を作っちゃうと、死刑は免れないな。それとも終身刑になって、これからの人生を刑務所で過ごす？」

少年の言葉には、脅している風ではなく、純粹にどうするかといった質問をしているようだった。

「それとも――俺に殺される？」

「!？」

だが、この言葉を言った瞬間。彼の纏っていた雰囲気が変わった。殺気とは違う。彼が放っている気配は何かをも凍らせる冷気のようだった。

冷気に触れた巽絢は全身に鳥肌が立っている事に気付いてはいなかった。いや、気付いてはいけなかった。気付いてしまえば、そちらに意識が持っていかれてしまい、その刹那に殺されてしまいそうだからだ。

彼は少年を目から離す事は出来なかった。故に逃げ出す事も出来ず、声を上げることも出来ず、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

「どうすんの？」

少年の氷のような視線が、巽絢を貫いてくる。

声が出ない。まるで出す言葉を忘れたかのように。出てくるのは言葉にならない音だけ。

「どっちつかずか……」

言々と少年は、彼に向かって歩き始めた。

「クソーーーーーー！」

少年が動いたことで、命の危機を察知した巽絢は、懐に入れていた拳銃を取り出す。

だが、その拳銃には先が無かった。

「何？」

先ほどまでは何でもなかった拳銃を見つめて動揺する。彼は足元に視線をやると、拳銃の先が落ちていた。

よく見れば、何かに斬られた跡がある事に気が付く巽絢。それが少年の手に寄る事だと気付かされた時には、彼はすでに目の前に立っていた。

彼が今、手に持っているのは書類ではなく、レムナントで具現化した刀。その刀を彼の顔へと近付ける。

「おのれ……」

憎々しげに少年を見る巽絢。その口からは怒気が混じっている。

「おのれ……！ 桔ヶ也ーーーーー！？」

そして、少年は彼の首を刀で切断する。切断された胴体は力なく倒れ、そして同時に首を地面へと落ちる。

少年は堕ちた彼を見据えて小さく出す。

「なんで……俺の名前を知ってた……？」

その疑問を感じたまま、少年——桔ヶ也はその場を後にする。

一夏は最近、良い事が無い。

始業式も問題なく終わり、学校が始まりすでに五日目。

授業の答えを間違えたり、ゴミ捨ての日を間違えたり、知り合いを間違えたりと散々であった。

おそらく発端はあの試合からだ。

「あ、どうも霧島一夏です」

一夏は差し伸べられた手を取る。

「二人とも見れば、歳は僕とあまり変わらない感じだけど」

「俺たちは今年、高校に入学するんだ」

「やっぱり、なら同年だね」

気品のある笑みを二人へと向けるその姿に、ポカンとしてしまう。彼が、これから自分と試合をする相手だとは思えないと感じる一夏。しかも、彼はこのジムのトップを担う人物らしい。

（武術なんて似合いそうにないよな）

一夏がそう思うのは当然であり、全体的に見ても優男にしか見えない。握手を交わしたその手の厚さも薄く、腕も細い。まるで少女のようだ。

「二人はどここの高校？」

「上都だよ」

「ホント！？ 僕もだよ」

新は嬉しそうに一夏の手を上下に大きく振っている。

「え？ 僕もって……。お前も上都学院？」

「そうだよ。そういう事しかないじゃないか」

新は手を離し、またも啞然としている彼らに気付かず歩きだした。

「それじゃ、後で会おう」

そのまま、どこかへと行ってしまふ。おそらく自身の準備に向かったのだろう。

「なんか……。人ってわかんないもんだな……」

「ああ……」

二人は彼が歩いて行った先を見続けた。

「ホントにわかんないもんだな」

一夏は現在、上都学院の一年C組の教室、自身の机で突っ伏している。前のやる気が嘘のように、ダルさ全開といった感じだった。

結局、新との試合は惨敗。彼の武術前に一夏はなすすべも無くやられてしまった。

試合後に新が彼の前にやって来ると、「大丈夫！ 君には才能あるよ！」と励ましの言葉を送ってきた。あれが、一夏の心に傷を付けてしまった。

（悪気はないんだろうけど、あれは正直堪えるよな……）

その後にも源氏からも同じことを言われ、彼はさらに傷を負う。千那は彼に対して、「たるんでる！！」と言って彼を非難した。そして、始業式まで彼女にみっちりと扱かれていた。

しかし、あの時の彼にはその対応が正解であり、救いでもあった。彼女が二人と同じような事を言っていたら、完全にやる気を失くしてしまっていただろう。

（やっぱり、あいつは俺の事、ちゃんとわかってるんだな）

久しぶりの再会だというのに、あの時と変わらず、自分との接し方を理解してくれている彼女に、

一夏は自分が助けられている事を、しっかりと感じていた。

「どうした？ 一夏。そんなにニヤニヤして。気持ち悪いぞ」

そこに彼に話しかける者が現れる。

一刀だった。彼は一夏を見て、気味が悪そうな顔をしていた。

一夏は自分でも気付かないうちに、笑顔を作っていたようだ。

「気持ち悪いって、酷いな一刀。もっと労わってくれよ。傷ついた俺をさ」

「まだ、引きずってんのかよ。いい加減立ち直れよ。そんなんだから、授業中にあんな失敗をするんだぞ」

「うっ!？」

現在の時刻は午後二時二十分。午後一発目の授業はIA授業だった。一年と言う事もあって、最初は特殊な工具を作りだす指輪、ソーマを使った簡単な動作からだった。

ソーマは、念じれば彼らの前に武器が具現化される。具現化された武器を上手く使う事。これが最初の課題だった。

一夏はその授業で、具現化された武器である剣を振り下ろすと、手から剣が抜けだして、教師の横の壁に突き刺さるといった事を犯

してしまった。

その場は現状注意で治まったが、心に傷を負っている今の一夏には、許されない問題だった。

「先生はああ言うけど、当たってたらとんでもない事になってたぞ」

「わ、わかってる……」

一刀の言葉に、その一言しか返せない一夏。

「やっぱり、千那が言ってたとおり、たるんでんじゃないのか？」

もう一度あいつに扱かれて来いよ」

一刀が指を指した方向には、クラスメイト達と談話している千那がいた。三人は同じクラスに所属する事になっていた。

この偶然のおかげで、三人は始めの変な緊張も無くクラスに溶け込む事が出来た。

「あははは……。そのうちな」

一夏は苦笑すると、一刀の持っている物に視線をやる。

「一刀。それなんだよ？」

「ん？ ああ、これか？」

彼の手にあったのは鉛筆程の指示棒だった。

「一ヶ月後の学年別の対抗戦があるだろ？ 俺はこのクラスの指揮権者にされたんだ」

「された？」

「ああ。俺こういう事するの面倒臭いんだよ。誰かに変わって欲しいよ」

一刀はあからさまに面倒だというオーラを発しながら、指示棒を振り回していた。

実は、この指示棒はIA専用のアイテムである。実際の試合中にも使われるほど、由緒正しい物である。それを知ってか知らずか一刀は振り回しているのだ。

「あー。そう言えば、お前を完膚なきまでに負かしたあいつ……。えーと、名前なんだっけ？」

「クッ！？ 桔ヶ也だよ……」

「あーあー。そうだった。そうだった」

一刀は白々しく名前を思い出せない素振りを見せる。

「あいつ、すごいんだな。今度の対抗戦。B組の指揮権者はあいつらしいぞ」

「へえー」

成績優秀。眉目端正。運動神経抜群。IA授業でも非凡な才能を発揮していた。まだ、入学して間もないと言うのに彼のファンが増え、後を絶たない。

「やりにくいなく。やっぱ変わって欲しい」

「お前……」

一刀と新とのやる気の違いから、クラスの温度は大きく違った。

一夏はハツと何かを思い出し、一刀へと告げる。

「そう言えば、今日の放課後ってB組との模擬戦だったわけ」

彼は首を縦に振った。今日の放課後に一連の行動の確認。と言う名の模擬戦が行われる。これを発案したのはB組担任の高梨であり、C組担任の杏子はダルそうに彼の提案を呑んだ。

今まで、この学年別対抗戦で、一度も彼女に勝てた事が無い。だからか、高梨は杏子の事をライバル視しており、打倒清水を宣言している。

「あの熱血馬鹿のせいで、こちとら迷惑だよ」

「ハハハ！ そうだな」

「ほーい。お前ら席につけ」

すると、部屋に杏子が中に入ってきた。授業開始の合図だ。

「……」

季節は冬。空からは雪が降り続けており、辺りは真っ白な雪で積っていた。

少年の座る椅子の前には一つの棒が置かれていた。その棒をバツクの中に入れ、彼は外に出る。するとそこには、一人の少女が立っ

ていた。

白い上着を羽織っていた彼女は、彼に気付くと笑顔を向けて走ってきた。

「ほら、××。すっごいね！　こんなに雪が積もってる時ってあんまり見たことないよね」

「ああ。そうだな」

少年は、これまでに見せた事が無い笑顔をしていた。それは、彼が心から信頼した者にしか見せない顔。

「これだけの量がここだけじゃ勿体ないよね」

「場所が場所だからな」

「みんなにも見せてあげたいな。ね！　今度みんなでまた来ようよ」
少女は、名案！、という表情をしながら、降ってくる雪を見続ける。

「風邪ひくぞ。もうちょつとこっちに来いよ」

「うん！」

少女は少年が立っている屋根ある場所まで歩いてくる。そして、彼の隣に立ち、嬉しそうに表情を作る。

「どうした？」

「ん？　えっとね。今ここで、この雪を見ているのは、あたしたちだけなのかな。なんて」

「どうだろうな」

今二人がいる場所は、中国北部のとある村はずれ。彼らは任務でこの場所までやって来た。そして、任務を終え、迎えが来る間の時間が今にあたる。

「俺はそういうのって寂しいな。それって世界には今、俺たち二人しかないみたいじゃないか」

少年は寂しそうに夜空を見上げた。

「うーん。あたしは素敵だと思うけどな」

しかし、少女の思いは彼とは違った。彼は、視線を彼女に向ける。「たとえば、世界に誰もいなくても。二人には確かな絆がある。その

絆がある限り、きっと頑張れる。そう思わない？」

彼女も視線を彼に向ける。それは先ほどの子供のような表情とは違い、暖かく彼を包み込むように見つめている。

彼は少女から目が離せない。

互いに惹かれ合う二人の間を、雪がただ降り続ける。

放課後になり、予定されている模擬戦のために両クラスは集められていた。その温度差は明らかに違った。

桔ヶ也新率いるBクラス。彼らの士気は高く、勝利するためにそれぞれ話しあい、準備を始めていた。

対する苑宮一刀率いるCクラスは、一刀のやる気の無さからか、士気は低い。絶対な信頼がある新とは違い、一刀にはそれほどのめぼしい成果は見受けられない。彼らは、テロがあつた時の一刀を知らないからだ。それ以来、一刀は大きなことをしておらず、その場その場を超えていただけだからだ。

「今日はよろしく。苑宮君」

「ん？ ああ。よろしく」

新がCクラスへと赴いて、一刀と握手を交わす。

「聞いたよ。君の活躍。指示能力はすごいんでしょ」

「そんなことないよ。たまたまだよ」

「いいや、君はすごいよ！ 今日の模擬戦で君の指揮を勉強させてもらうよ」

新はそれを伝ええると、Bクラスへと帰って行った。

「あいつ。いい奴だな！」

「何丸め込まれてるんだ！」

千那の容赦ない拳骨が、彼の頭へと直撃する。

「とりあえず、このままじゃ勝てない。何とかしないと」

ため息交じりに言葉を吐いたのは諸越壇^{もろこしだん}。熱血タイプである彼は、一刀のあの態度にイライラしていた。

「そうだね。まずは彼らの弱点を見つけることから始めないと」

彼に呼応したのは一条早百合^{いちじょうさぐり}。彼女も熱血タイプであり、Bクラスの者たちのプロフィールを確認する。

「なんで先生は苑宮に指揮権を……。考えてもしょうがない。みんな。俺に力を貸してくれ」

壇の言葉に頷く者たち。彼を信じ、作戦を考え始める。

「いいのか？ 一刀」

頭を抑えて痛がっている一刀の後ろに、一夏が立っていた。

「あのままじゃ、みんなお前の言うことを聞かないぞ」

「痛えー。まあ、やりたきゃ、やらせてやろうや」

別段気にすることなく、一刀は彼らを見ている。

「それにしても意外だな」

「？」

「夢のIA競技の初戦だぞ。一夏はやる気満々だと思ったけどな」

そう。一夏はIA選手になるために上京してきたのだ。模擬戦とはいえ、初めて競技に熱くならず、彼らと共に並んで作戦会議もせず、蚊帳の外にいる。

「見た所。あんまり乗り気じゃないみたいだけど」

「うん。今の俺じゃ、役に立たないと思って」

「あ？ 何で？」

「何でって。今の俺は調子良くないし、みんなの足引っ張ることしかできないと思う。だったら、今回は負けてもいいから、みんなの邪魔ではないようにしたいんだ。それに……」

「桔ヶ也か」

一刀の言葉に黙って頷いた一夏。彼は今の自分の状態を考慮して、戦いの前線に立つ事を拒んでいた。今の自分が出れば、クラスの邪魔になる。そのせいで、彼らの敗因になる事を恐れているのだ。

そして、あちらには新がいる。前回の事で完全に彼の事を苦手対象になってしまっているのだ。

「あいつには今の俺じゃ絶対に勝てない」

弱腰になってしまった彼を見て、一刀は彼の肩を掴む。

「一夏。最初から勝てないってことはないんだ。それがどんな戦いであったもだ」

「でもっ!？」

「勝ちたいか？」

一刀の言葉に反論しようとした一夏は、その口を閉ざす。

彼の問いに「え？」と返してしまう。

「一夏。今回の模擬戦。ホントは勝ちたいんだろ？」

「何……言って……」

「お前を完膚なきまでに痛めつけたあいつを、今度は負かしてやりたいだろ」

「!？」

それは願っても無い事だ。あれ以来、自分に自信が出ない。このまま、この学院でやっていけるかと不安にもなった。もしかしたら、始めから自分には無理なんじゃないかと最近思ってしまう時があった。

「勝ちたい……」

もう一度彼と戦って勝てたなら、今の自分から抜け出す事が出来るのではないのだろうか。一夏はそう思っていた。

「俺だって……ホントは勝ちたいさ!」

一夏は自然と叫んでいた。初めてのIA。出来れば勝利で華を掲げたい。それは誰もが思う事である筈だ。

彼は、一夏の言葉を聞くとニヤツと口元をつり上げる。

「やっつと、いつものお前に戻ったな」

彼は一夏の表情を見て、満足したように肩を叩く。

「一夏。お前がその気持ち。最後まで持ち続けるなら——」

一刀は一夏に向けて、不敵な笑みを作りながら自信ある言葉を紡ぐ。

「俺が——勝利を描いてやるよ」

自信喪失（後書き）

今回はここまでです。次は模擬戦です。一刀と新の戦略戦です。次も見てください。幸いです。

模擬戦 前篇（前書き）

遂に模擬戦が始まりました！ 本当は一本でめたいと思ってましたけど、無理でした！ すいません（泣）

模擬戦 前篇

「それで一刀。一体どうするんだ？」

一夏は一刀に問いかける。場所はC組の本陣。

IAのルールでは、それぞれに三つの拠点がある。武器庫、兵糧庫、そして本陣。

武器庫は、現在持っている武器が無くなる、または破壊されるなどが起こったとしても、この場所まで戻る事によって武器を修復、調達ができる。

兵糧庫では体力の回復が行われる。選手たちにはそれぞれ、目に見えないアーマーが備え付けられる。体力とは、そのアーマーの耐久力の事である。耐久力が低下すれば、この場所に戻り、耐久力の回復を行う。しかし、この二つはの拠点は有限であり、そこが尽きればそれまでである。

本陣とは、クラスの本拠地になる。そこは武器庫と兵糧庫のどちらの条件が付いている場所である。だが、二つと比べれば、その機能は落ちる。その分、無限に武器と兵糧が備わっている。尚且つそれらを各地の拠点に輸送させることも可能だ。

勝敗を決めるの三つのパターンがある。

一つは拠点すべての陥落。

二つはクラスのリーダーの敗退。

三つはそれら二つの条件を満たした場合である。

今回の勝敗条件はリーダーの敗退である。B組のリーダーは新。C組は壇である。彼らが敵にやられるか敗北を認めた場合、決着である。

一刀は手に顎を乗せ思案する。

「まず、俺たちがやらなきゃいけないのは、仲間たちの信用だ」
すでに戦いの開始の合図が入っている。C組の本陣には二人以外に外に二、三人いるだけであった。

これは、二つの拠点を重視し、陥落させないための処置。今回は拠点陥落は勝敗条件ではないため、本陣を守る必要はなく、輸送者たちだけを残して、残りは全てそちらに出払っている状態だ。

「あいつら、ほとんどが前に向かってどうするんだ？ 諸越まで前線で指揮しやがって」

「でも、諸越を中心にC組は、上手く団結してるぞ」

一夏の言う通り、C組は上手く纏まり、陣営を崩さず前進している。今は彼らが優勢に事を運んでいる。

「このまま、行けばB組に勝てるんじゃないのか？」

「無理だ」

しかし、一夏の考えを、彼は即座に否定した。

「確かにあいつらは敵の嫌な箇所を責めて、前に進んでいる。このまま行けば敵の本陣に付くのは、すぐだろうな。けど――」

一刀はディスプレイに表示されているマップを指差す。マップには味方のアイコンを視る事が出来る。敵が拠点の近くにいる場合は、敵のアイコンも表示されるようになっている。味方は青で、敵は赤のアイコンである。

「あいつらは、今回のステージを把握していない」

ステージはバーチャル世界を利用されている。天井に設置されている機械から、その空間を作りあげている。しかも実態を有しているため触ることもできる。IAで使う特殊な工具――ソーマをこれを利用されてくられている。それらが無ければ、ソーマは発動しないのだ。

これがIAの実態である。

ちなみに今回のステージは沼地である。

「沼地は歩ける場所が極端に変わる。今はあいつらが通っている場所は歩ける場所だからいいが、そこを敵に取られたら挟撃される事を考えていない」

「だったら、取られなきゃいいんじゃないのか？」

「じゃあ、何で敵はこちらに攻めて来ない？」

一夏はその言葉にハツとする。

確かにB組はさつきから防衛に徹していて、こちらへと攻め込む様子が見られない。一方こちらは良いように前進している。敵であったとしても彼らは徐々に後退しながら、姿を下げていく。

まるで、誘っているかのように。

「まさかっ!？」

「そうだ。B組の奴ら、出来るだけ拠点からあいつらを離して挟み込みを狙ってやがるんだ。あいつら結構な人数で押し込んでやがる。何も考えてねえな」

一刀は舌打ちし、彼らの無能さに呆れていた。

「じゃあ、もし挟撃を受けた場合は」

「こっちの大半は失われる事になるんだから、もはや勝ち目なんかないさ。しかもリーダーの諸越が前線立ちだ。アホかってんだ」

壇は挟撃を受けるであろう前線に居る。敵の策が行われれば、そこで試合に決着が着いてしまう。

「今すぐ、前線にその事を伝えないと」

「無理だよ。俺が何か言ったって、あいつらがそれを聞く筈がない」

そう。今のC組は一刀を当てにしていない。彼が何を言おうが、ただ喚いているにしか捉えないだろう。

「それじゃあ、このまま黙って見ることしかできないのかよ!」

「だから――」

一刀は一夏の肩を掴んだ。

「お前が必要なんだよ。一夏」

「俺?」

彼の言葉に首をひねる一夏。

「俺が信用を得るには、それを証明するための行動を起こさないとならない。一夏。お前の存在が不可欠だ」

ドクンと胸が鳴る一夏。

決して嘘ではないその言葉。彼は喜びを感じる。だが、不可欠。その言葉に重大な責任も感じ取っていた。

「俺が、不可欠……」

「ああ。頼む一夏。今、俺の仲間といえるのは、今はお前ぐらいだから」

「……」

一刀の一言一言に、自分への信頼が入れ込まれている。

新に惨敗した事を知った時、他の生徒たちは自分を励ましてくれた。今の自分の心境状況を察してくれたのだろう。今回の試合に一夏を外してくれたのだ。

しかし、一刀はそんな一夏を頼った。よくクラスで一緒にいる彼は、新との試合を励ます事はしなかった。それよりも千那と同じように自分の尻を蹴り上げるような発言が多い。

そして、二人には一夏への共通の思いがある。

それは彼への信頼だ。どんなに今、自信を失くしていたとしても、一夏ならきつと立ち上がれる、その信頼を彼らは持っていたのだ。

一夏はその信頼を深く噛み締めると、

「わかったよ一刀。俺が――やってやる！」

笑みを作り、友の復活を喜ぶ一刀。

「なら、私も協力しよう」

その時、本陣の中に入って来る者がいた。

千那だ。

「千那！？ お前、確か前線に居る筈なんじゃ！？」

「あのままじゃ、うちがやられるのは目に見えてる。私はこれ以上前進するのを止めたのだが、聞いてはくれなかった」

千那は勢いに乗る彼らについて行けず、前線を降りたのだ。

「でも、前線を降りたって言っても、そのまま武器庫の守備に当たらなきゃ、いけないんじゃないのか？」

前線から抜けた者たちは、そのまま防備の方へ向かう手筈になっている。千那が居た所からならば武器庫を守っては行けない筈だ。

「そうなのだが……。一刀が兵糧庫ではなく、本陣に居る事が気になってな。無理を言ってこちらに来たのだ」

本来ならば一夏は本陣に。一刀は兵糧を守らなければいけない。なのに一刀は兵糧庫行きを拒否。本陣に残り、一夏と話し合っていたのだ。

「すまないな。盗み聞きしてしまつて。けど、このままではCクラスの惨敗は目に見えてる。後の学年別対抗戦に大きな支障が出るぞ」
千那が心配しているのそれだ。新は徹底的に敵を打ち倒すタイプだ。Cクラスのやる気を完全に削ぎ落とす事など、躊躇いも無く行うだろう。

「だから、一刀。お前の力が必要になる。私も一夏と共にお前の策に協力する。だから――」

千那は一刀へと振り向き、頭を下げてきた。

「頼む。みんなを、助けてくれ」

彼女のこの行動に、一夏は驚きを隠せなかった。

（こいつが同年代に頼み込む所、初めて見た）

千那はプライドが高く、何でも自分でやりこなす方であった。蘇芳が居なくなつてからは特に人に頼る事はしなくなったのだ。

その彼女が同じクラスの友人に頭を下げている。それほどまでにこの試合に大きな意味を感じ取っていた。

「おいおい。頭を上げてくれよ。千那」

言われ、恐る恐る頭を上げる彼女に、一刀は安心させる軟らかい表情で迎え入れる。

「友達にそこまでされたら、やるしかないじゃないか」

その言葉を聞いて、不安そうだった千那の顔から笑みが作られる。

「それに、もう俺は一夏に勝たせてやる宣言をしてるんだ。それなのにお前が、頭を下げてまで頼み込まんじまうとはな」

すると、一刀は前に見せた不敵な笑みで、大胆な宣言をした。

「この模擬試合。Bクラスにコテンパンに叩きのめした勝利で終わらせてやるよ」

Cクラスは今、勢いに乗っていた。最初はBクラスの者たちとの接戦を繰り広げていたが、こちらの闘志を感じたのか、徐々に相手は後退を始めた。

このステージでは通れる道が少ない。故に先に進める道を手に入れた方が、試合を優勢に進められるという事だ。

「みんな！。これから行けばBクラスの本陣はすぐ近くだぞ」

壇は、共に前線で戦ってくれるクラスメイト十二人にそう告げた。彼らも意気揚々としていて、壇を信じて付いて来ていた。

そこに、一人のクラスメイトの男子が少しの不安を抱きながら、彼に話しかけた。

「諸越。さっき九霞院はこれ以上進むなって言っていたけれど、あれは一体、どういう意味だったんだろうか？ それに、指揮権者の苑宮もこの作戦に反対していたし」

「うん？ ああ。おそらく深追いするなって意味なんだろうけど。問題はないだろう。第一。今うちのクラスの士気は大いに高まっているんだ。ここでその勢いを下げるような真似なんか出来る訳ないだろう」

今、Cクラスの士気は絶頂。このまま行けば、完全勝利も夢じゃない所まで来ていると、彼らは感じていた。だから、少しの不安要素くらいでは、彼らは止まる事はしないのだ。

なによりも、壇はクラスを引っ張るリーダー。彼には仲間たちを勝利へと導く責任がある。僅か数日しか経っていないというのに、自分をここまで慕ってくれている彼らに良い所を見せたい。

最初こそ、皆の士気は、Bクラスという事もあって低かった。でもそれが今、自分の指示でここまでやって来られたのだ。壇は自分の出した決断が間違っていないと信じていた。

「そうだな。このまま行けば」

「ああ。だから俺を信じて付いて来てくれ」

すると彼から不安が消え、壇を信じ、そのまま前進を続行した。彼らが進むようとしている道は、熱帯、亜熱帯地域の河口汽水域の

塩性湿地に成立する森林。マングローブである。マングローブは海水に浸る土地に成立する。樹木が密生し、特徴的な呼吸根が発達することでその表面の構造が複雑になり、様々な動物の隠れ家を与え、その幹の表面はコケ類や地衣類の繁殖を許している。今回のステージの樹木は特に密生している場所が多く、呼吸根が発達しているためにさらに構造が複雑になっている。

「それにしても、苑宮君は何で、あそこまでやる気がないんだろう？」

隣を歩く女子が、本陣に残った一刀に対して、若干の怒りを感じていた。その言葉に他のクラスメイト達も一樣に感じていた。試合前に陣営を決めたり、策を考えたりなどを決めていた間も、一人でマップを見たり、仲の良い一夏と談話したりなどこちらの会話に全く介入する気はなかった。それが、試合開始時も変わらなかった。

壇が、前線での戦いに身を投じる旨を話すと、一刀はそれを反対。一刀は壇に本陣に残る事を勧めたが、今の一刀を彼は信用できなかった。彼はそのまま制止を振り切って、ここまでやって来た。

「この試合の勝敗なんて、彼には関係ないのかな？」

「それに先生も先生だよ。何で、諸越に指揮権を渡さないで、苑宮なんかに渡したんだ。先生は俺たちに勝たせる気なんて元々ないのかよ！？」

「清水先生って昔から、あんな感じだったみたい。Bクラスの担当の高津みたいに熱心じゃないから、私たち自身が頑張らないと。学年別対抗戦。勝てて行ける訳ないよ」

「そうだな。諸越！俺たちで頑張って、対抗戦。優勝しようぜ！」

「おいおい。その前にこの試合に勝たないとな」

ハハハ！と彼らの前で笑いが飛び交った。壇も彼らに連れて笑う。

（そうだ。彼らとなら、きっと勝っていける）

壇はクラスの者たちとの絆を感じ、このクラスでよかったと感じていた。

その時――

「!?!」

前方から何かが飛んできた。それが一人のクラスメイトの女子に突き刺さった。IAでは見えぬアーマーがあると言ったが、アーマーを付けている証拠がわかるように手に収まる程の宝石が備え付けられている。

生徒たちはそれぞれ、自信の身体に付けなければならない。アーマーの耐久力が底を付くか、それともその宝石を砕かれた場合、選手の生徒たちはそこで負けとなる。

彼女は腕に設置していた宝石を砕かれてしまった。すると数秒後に彼女の姿は消えた。

負けとなった選手は用意されている控室に送還される事になっている。送還された選手はそこから、試合の状況を見守ることしかできない。

それから次々と撃ち続けられる矢。彼らは避けようとするも、その襲い掛かる矢の数によって、避けられずに次々と当たっていく生徒たち。

「クッ!?! みんな!?! とりあえず隠れるんだ!」

壇は持っている盾で矢を防ぎながら、皆に指示を出す。

「隠れるて言ったって、どこにだよ!?!」

そうなのだ。樹木はこちら側に密集してしまっているために、Cクラスの者たちからは入り込む事が出来ないのだ。だから、今の彼らは両端を壁に挟まれた道を通っており、逃げ場はない。

耐久力が無くなった者。宝石を砕かれた者が出始める。

「このままじゃ――!?!」

盾で防いでいるも、その盾も損傷が激しくなっていき、破壊されるのも時間の問題だ。この場所を進んで結構になる。今から退いたとしても、全員が生き残れる保証はない。それに段々と彼らが近づいてきている事も気付いていた。

(まさか、こんなことになるなんて――!?!?)

壇は自分の自信のせいで、このような失態を犯してしまった事に、今更ながら気付いていた。

遂に彼を守っていた盾が破壊された。

(やられる!?)

彼は飛んでくる矢に、目をつぶる。

目をあけると、そこはまだ沼地であり身体に損傷は出ていなかった。

自分の前に立っている者に目を向ける。

「大丈夫か？」

「九霞院!?! お前、どうしてここに？」

壇はここに居る筈のない、千那に対し、驚愕していた。

「説明は後だ！」

千那の姿は壇の視界から消えた。壇が辺りを見ても、周りに居ない。すると前方で鉄と鉄とのぶつかる音がした。彼女は前方にいたBクラスの者たちと対峙していたのだ。

彼女が持っている武器は刃が青く光る長剣だ。その長さで重さをものともせず、上手い手捌きで生徒たちを切り倒していった。弓を使う彼らにとって白兵戦に持っていかれるのはきつい。彼らは千那にあっさりと破れてしまう。

(どうやら、これだけでは無いようだな)

彼女の予測通り、弓使いの背後から槍、斧をそれぞれ持った二人組が現れた。

槍を彼女に向かって突いてくる。上手くかわすが、右からもう一人が斧を振り下ろしてきた。剣で防いで相手の腹部を蹴りつける。腹部を蹴られ、後ろやや飛ばされる。

すると、相手の横に数字が記載される。数字は?250"と?50"と出されていた。?250"はアーマーの残りの耐久力であり、?50"は削られた、いわゆるダメージである。つまり、相手のアーマーの耐久力は最初、?300"だった訳だ。

(?50"か……。この程度しか落ちないか……)

アーマーはそれぞれに攻撃された部位でダメージが変わる。本来ならば自分用のアーマーを手に入れ、防御を強化させていくのだが、まだ、支給されていないので露骨にそのアーマーの弱点が現れる。つまり、生徒たちはその部分をいかに、ばれずにするかも、今回の試合では重要になって来る。

前方からやってくる槍を横に逸らして、彼女はアイアンクローを決め、槍使いの生徒を地面に叩きつけた。決められた相手は低く悶絶するも、彼女の腹部を蹴りつける。

「クッ！」

蹴られ、空中へと舞ってしまった彼女に斧使いの相手が大きく振りかぶった斧を振り下ろす。彼女は身体を回転させ、斧の斬撃から上手く避けて見せる。そして、その回転を活かした空中回し蹴りを相手の首元へと決め込む。

ゆらっと体勢を崩した相手の耐久力が大幅に下がる。残り？30"にまで下がり、数字が赤く点滅し始める。

アーマーの力によって選手に来る痛みは和らげられるのだが、完全になるわけではない。大きな攻撃を食らえばそれなりに痛みは大きいのだ。意識が飛んでしまうことだってある。

相手は脳が回転してしまい、上手く立ち上がる事が出来ない。

その間に槍使いの相手がこちらへと近寄る。千那は手首の力だけで長剣を上手く動かし、突かれてきた槍の勢いを殺して見せる。勢いが無くなってしまう事を予測していなかった相手は次の行動に出られなかった。

隙を見過ごさず、千那は槍を一刀両断。槍は見事に切り落とされる。そして、彼女は長剣を相手の宝石ある首筋近くに突き付ける。

「これ以上は無理だろう？ おとなしく負けを認めるんだ」

「クソ！」

相手は素直に負けを認め、宝石に触って、「ドロップアウト」と言った。すると相手の姿は彼女の前から消える。負けを認めた相手は脱落、抜けだす事の旨を伝えるために、宝石に手についてその言

葉を言わなければならない。

「お前もだ。その体力では私には勝てない」

ようやく、立ち上がられるようになった斧使いの相手も戦力差を感じ、すぐに脱落した。

千那は周辺を調べるもこれ以上の敵の気配はなかった。

「フゥ」

一息つき、彼女は負傷している仲間たちの所に戻る。

「九霞院！？ 大丈夫か？」

「ああ。この通りな」

持っていた長剣の姿が消える。持つソーマの中へと仕舞い込まれたのだ。千那は身体を見せ、自身が平気である事をアピールしていた。

壇はホツとするも自分の失態に苦々しい表情は隠せない。

「ありがとう。そして、すまない。俺が君の忠告を聞かなかったせいで、こんなことに」

現在、十二人いた仲間たちは半分の六人まで減っていた。その残りの者たちも万全ではなく満身創痍の状態だ。それぞれの耐久力が百未満。

「前線である俺たちがこの状態だ。今回の試合、もう勝つ事は――」

「大丈夫だ」

弱気の壇に対し、千那は強気に発言する。

壇は「え？」とした表情で彼女を見上げる。

「この戦い、Bクラスに目に物見せて勝利するぞ」

「え？ でも、どうやって」

「とりあえず、今は私に言われた通りの配置に列を組んでくれ」

千那は残った者たちに指示を出し始める。彼らは言われたとおりの配列を組んで、後退を始める。列の組み方は左右に三人ずつ並ぶ。両端に銃と弓矢を持った遠距離者を置き、間に刀を持った近距離者を置いた。千那は一番後ろに付いた。

「九霞院。この配置は一体」

「シッ！ 来るぞ！ 構えろ」

壇が疑問をしようとしたが、彼女はその言葉を防いで攻撃態勢に入る。仲間たちも身構え、緊張感が走る。

「今だ！ 撃てー！」

千那のその叫びで左右の遠距離者たちが一斉に撃ち始めた。仲間たちは訳が分らずも撃ち続けた。撃っている先には樹木しかない。

だが、その樹木の先から声や数値が現れた。Bクラスの者たちが樹木の中で待ち伏せていたのだ。宝石を砕かれて倒れる者達が出る。「数値が出て来た者たちはまだ動けるぞ！ そいつらを狙え！」

千那は真ん中の近距離者たちに命じる。千那が長剣で切り落とした樹木の先に居る敵めがけて彼らは突っ込んだ。そして、相手の宝石を次々と砕いていく。

彼らは挟撃がバレタ事に気付き、撤退を始めた。

「逃がすかよ！」

「待て！」

挟撃を見破ったことで調子に乗った生徒が後を追おうとしたが、千那はそれを許さなかった。

「深追いするな！」

「でも、今なら敵を全員、倒せるのに！」

「止めろ！」

生徒は千那を振り切っていこうとするも、前に立っていた壇に止められる。

「今は彼女の言う通りにしよう」

「諸越！ でも、仲間がやられたんだぞ！？ これだけじゃやり切れねえよ！？」

壇が止めても、諦めきれない生徒。彼の気持ちも最もだ。仲間が奇襲にあってやられてしまった。これに対して何も思わない事の方がおかしい。

「お前の気持ちも分かる。俺のせいでこんなことになって済まなかった」

「あ……！」

壇が頭を下げて誤って来た。生徒は熱くなってしまった気持ちが少し落ち着く。そして、自分が今、何も考えない発言をしていた事に恥ずかしさと申し訳なさに彼も頭を下げてしまった。

「も、諸越……」

「だから、今は彼女の指示に従おう」

「……わかった」

生徒は持っている刀をしまう。そして、後ろへと下がった。

「……九霞院。撤退か？」

「ああ。とりあえず、諸越は本陣に。他は兵糧庫に向かって回復だ」
皆は頷き、兵糧庫へと向かう。

「それにしても、君は敵が奇襲する事も挟撃する事もよくわかったな」

「……実は、それに気付いていたのは私ではないんだ」

千那は横に首を振る。壇はポカンとした表情をしてしまう。

「え？　じゃあ、一体誰が？」

「一刀だよ」

名前を聞いた途端に彼の歩行が止まった。

「苑宮が？」

「ああ。あいつはお前たちがここを通る事を知ってたんだ。そして、敵がここに布陣して奇襲をすることも最初から気付いていた。だから、私はここに迅速に戻るように言われると同時に、その撃退を。そして、挟撃を狙う彼らをこちらか襲い掛かるように指示されたんだ」

一刀はこちらから、本陣を狙うのならばこの細い道を仲間が通る事に気付いており、相手がその瞬間を狙う示唆にも気付いていた。奇襲か、急襲か、強襲か、ありとあらゆる行動パターンを予測して、そのどのパターンでも対応できるように千那に教えていたのだ。

挟撃にも気付き、相手の裏をかくために隊列を組ませた。

「物音が少しでもしたら、撃て」

彼はそのように告げた。そうすれば、撃ってきた事に敵は動揺し、動きが鈍ると判断したのだ。それは見事に的中。布陣していた生徒の三分の二を撃破した。

「まさか、あいつは全部気付いていた上で……」

「そうだ」

「でも、だったら何でその事を伝えなかったんだ!？」

「それを聞いて、お前たちは一刀の言葉を信用したのか？」

「そ、それは……!」

千那の問いに口ごもってしまう壇。素直に頭を縦に振る事が出来なかった自分への驚き。一刀を信用しきれなかった事への憤りがある。

「……あいつは、今本陣に居る。あったら、ちゃんと話しあうんだぞ」

千那は溜め息をつくと、先に向かった仲間たちの後を追った。

「俺は……!」

壇は苦しそうに胸を抑えながら、彼らの後を追う。

「桔ヶ也!？ 挟撃の策が失敗したって報告が入ったぞ!？」

Bクラスの本陣では驚愕の報告がながれた。

新のとった策のうち、二つが破られた。

「どうするの新？ これ以上の策の失敗は、クラスの士気に支障が出る」

本陣には長テーブルが置かれている。新の横に座っている少女。

如月真里名きさらぎまrinaは無表情を崩さずに告げる。

「だな。何とかして、敵の大將を打ち倒さないと、あちらさんが勢いづくぞ」

彼の向かいに座るのはヒューイ・ミリアルド。彼は英国人であり、IAの盛んな日本へと渡って来たのだ。

「まだこれぐらいで済んでいるんだ。彼にしては温いな」

新はいつもの涼しげな表情をしながら、ディスプレイに映し出されるマップを見つめている。Cクラスがあのだを渡って来たのは、彼にとっては予想通りだった。彼が危険視している一刀が、他のクラスとの意思疎通が出来ていない事を知っていたのだ。

新はそれを利用した。彼らをあのマングローブへとCクラスの者たちを誘導したのだ。それを知ってか知らずかそれにつられて、乗って来た彼らを弓矢で撃たせることで敵を全滅。それが無理でも後退した者たちを待機していた仲間たちが挟撃。その手筈になっていた。

しかし、弓矢による奇襲は半分だが、成功したが千那の手によって奇襲者たちは全滅。挟撃者も見抜かれ、半分を失う損害が出た。

「新。お前ってあっちの指揮権者と何か因縁でもあんのか？」

ヒューイがニカつといたずらな笑顔で彼を見る。

「別にそんなものないよ。ただ、少し興味があるんだよ。彼の力に」
その一瞬。彼がいつもとは違う笑みを見せた。

「新」

「ああ。わかってるよ。真里名」

真里名がジッと見てきている事に気付き、笑みを止め、いつもと同じ涼しげな表情に戻る。

「ヒューイ。君は武器庫に行つて、装備を万全にしてくれ。準備ができたなら僕に連絡を」

「おう。任せろ」

ヒューイは言われると、武器庫へと向かい、本陣を後にする。

「真里名。君はここで本陣を守ってくれ」

「わかった。新はどうするの？」

「僕は、もう二つの策の指揮を取るために、そちらへと向かうよ」
すでに次の策の準備は出来ているようだ。新は立ち上がり、本陣を出ようとした。

「ほ、報告だ！？」

マップを表示していたディスプレイが切り替わり、仲間の一人が

映し出される。

「どうしたの？ 落ち着いて報告して」

慌てた彼に対して、真里名はそう告げた。

すると、その生徒から思いもしなかった言葉が発せられた。

「ひょ、兵糧庫が落とされた！？ しかも、たった一人に！？」

「……え！？」

本陣にいる誰もが、その報告に表情が凍った。

「……」

新、一人を除いて……。

模擬戦 前篇（後書き）

前篇終了です。来週に試験があるので、続きはその後になってしま
うと思いますが、ご了承ください

模擬戦 後篇（前書き）

前作を出してから、ずいぶん時間が掛ってしまい、申し訳ありません。今回は模擬戦の後篇です。長くなってしまいました。最後まで楽しんでくれたら、恐縮です。

模擬戦 後篇

一時間前。

「俺が？」

「そうだ。今回の試合。勝つための鍵はお前になる」

Cクラス本陣。一夏、千那、そして一刀の三人はマップを真ん中に置き、話し合っていた。

「お前には特別な作戦を一人で行って欲しい」

「ひ、一人で!？」

一夏は驚き、席を立ちあがる。

一刀はそれに驚く事も無く、淡々と話す。

「そうだ。敵にばれてはいけない作戦だ。隠密に動くには少数での行動になる。しかも、信が無い今の俺には、頼れるのは二人だけなんだ」

一刀はマップに目を向け、一夏の駒を動かし始める。

「いいか？ お前には敵の拠点をひとつ、陥落させてもらう。狙うのは敵の兵糧庫。ここを落とせば、確実に敵の動揺をひける」

駒を向かい側にある兵糧庫へと動かす。その位置から味方が居る場所までは、かなりの距離があり、仲間からの救援は望めないだろう。

「救援なし。敵が大勢いる場所に、お前を放り込む事になる。失敗すれば敵の餌食。相手は警戒を強めるから、新の防備が強くなる。だから、一発勝負になる」

「い、一発か……」

「ああ。そして、この作戦の成功を確実にするためには、もう一つ、策を成功させなきゃならない」

「もう一つ？」

一夏が首をひねる。一刀は頷き、前線部隊の駒を指差す。そして、千那に顔を向ける。

「千那。そのためにはお前の力が必要だ」

千那の駒を前線まで持っていく。そして、赤色の駒を出すと、それを前線部隊の前と左右に置く。

「おそらく、敵はマングローブからあいつらに攻撃を仕掛けてくるだろう。奇襲、急襲、強襲。あらゆるパターンが考えられる」

赤い駒を四、五騎取って、説明を始めた。

「まずは奇襲。この作戦で来る場合。敵は後方からの攻撃をするだろう。弓矢か銃。それらを使って、あいつらをジワジワと追い込んでいく」

駒を後方へと置き、自分の指でディスプレイをなぞる。すると矢印が表示され、味方の駒に当たると、彼らの駒にバツ印が書かれる。それは失格の意味である。

「次に急襲。これで来るならば、前方から後方からの攻撃を始めるけど、それは罠で、一度退こうとする彼らを後方から一気に襲い掛かる」

前方、後方に駒を置き、矢印からの攻撃を避け、後ろに逃げる味方の駒を、後方に待機していた左右の駒が顔を出し、逃げ場をなくして撃沈。

「最後に強襲。これは小細工なしだ。あいつらを前方と後方から強引に襲い、打ち倒す」

前方、左右の駒に挟まれ、打ち倒される。それが強襲。

以上の三つが一刀の予想した敵の策。

「奇襲と急襲ならば、前方の敵をどうにかすれば何とかなる。千那が彼らを襲い込めば弓矢か銃しか使わない彼らは対処法が無い。そこを一気に落とせばいい。ま、それ以外にいたとしても二、三人ぐらいの近距離者がいるだけだ。お前なら何とかなる」

千那の駒を、敵がいる場所に置き、彼らを打ち破る。それが二つの策の打開策。

「問題は強襲だ。これは即効戦になるから、急がなきゃ全滅は免れないだろうし、敵の数によっては、千那自身もやられちゃう」

一刀は難しい顔つきになり、手に顎を載せる。

「強襲の事も考えて、お前には間の道ではなく、近くにある、この場所から攻めてほしい」

そう言って、彼が一部の場所を指で押す。すると、その場所に凹凸ができ、立体感が現れる。

「丘か？」

千那の問いに一刀は頷く。

そこは小さな丘になっていた。だが、そこからなら前線部隊やBクラスがいるであろう場所が丸見えになっていた。

「ここからなら、あいつらのいる所に一気に向かえる。相手がどんな策で向かって来たとしても、動揺せざる負えない」

確かに丘の上から飛び降りれば、対局する両者たちの間に入れる。そうすれば、仲間たちも動揺するが、確実に敵にも影響は及ぶ。

「敵の策を破ったとしても、こちらは負傷するものが必ず現れる。

それに、相手もこれで終わりじゃないだろうな」

そして、左右に置いていた赤い駒を指差す。

「傷を負ったこちらを左右に挟んだこいつらが、叩いてくるだろうな」

「それじゃあ、こちらに逃げ場はないじゃないか」

「問題ない。それを踏まえて、お前を丘の上に行かせるんだからな」

「え？ あ、そうか！」

一夏はハッと気付く。

「気付いたか？ 一夏。そうだ。この丘なら全ての配置を確認できる。だから、挟撃を狙う奴らがいるのなら、ここから見えるって訳だ」

丘から見えるのは、通る事が出来る通路だけではなく、森林の中も一望できるようになっている。これならば、相手の策を誰でも見破れるだろう。

「千那には丘から、挟撃者を見つけ、それを迎撃するための行動にも出てもらう。その時には、あいつらにも頑張ってもらおう」

一刀が千那に言ったのはこうだ。

残った者たちに隊列を組ませる。左右に組ませ、そのまた左右に銃や弓を持った者。真ん中に剣や槍を持った者たちを配置させる。千那の合図で一斉に攻撃。と言った作戦。

「この作戦で、大切なのは敵を――全滅させない事だ」

「何？」

一刀の発言に二人は同時に驚いた表情になる。

「それだと、相手に策の失敗が気付かれてしまうではないか!？」

「それでいい」

千那はバンと机を叩きながら、一刀へと抗議した。

だが、彼の返した言葉にまた、二人の表情が驚愕する。

「それで、いいって……」

「それが、一夏の作戦の成功につながるんだからな」

赤い駒を兵糧庫へと移動させる。そして、そこにあるのは一夏の青い駒だ。

「傷を負った彼らが向かう先は兵糧庫だ。回復を行っている間、彼らは油断している筈だ。しかも、相手はこちらが、自分たちの拠点にまで押し寄せているなんて思いもしない筈だ。そこを一気に一夏が叩く」

「でも、拠点には防備をしている者たちがいるんじゃないのか？」

彼らはどうするんだ？」

一夏の言う通り、兵糧庫を守っている者たちがいる筈だ。そこに一夏、一人が飛び込んだとしても格好の餌食になる。しかも、負傷していたとしても、防備をしている者たちと一緒に相手をするのなら、彼らもまた脅威になる。

「問題ない」

だが、一刀は一夏の不安をスパッと切る。

「奴らは、策が失敗したとなると相手がこちらに接近してきていると思うだろう。今回は拠点攻めではないにしろ、兵糧庫は回復するにあたっての要。狙われる事を恐れる筈だ」

「でも、だったら兵糧庫の守備は硬くなるんじゃないのか？」

「だろうな。でも、彼らが守りを強化するのは拠点の外側だ」

中に入っていた赤い駒を外へと出す。そして、拠点周りをゆらゆらと動かす。

「拠点を守るのであれば中には意味がない。それでは結局、襲われてしまったのと同じだ」

青い駒である一夏を、一旦外に出し、先ほどの千那の駒が置かれていた丘に戻す。

「この丘からの道のりなら兵糧庫の真上にたどり着ける。一夏はここから飛び降りて、兵糧庫へと奇襲をかけてもらう」

今現在、拠点の中に置かれているのは負傷をした者たちだけ、そこに一夏が奇襲をし、彼らを打ちのめせば、見事に彼らの兵糧庫を陥落させられると言った寸法だ。

「しかし、落としたと言ってもそれに気付いた彼らが、一夏を狙うのではないのか？」

千那が半ば納得しつつも、不安があるようで表情はよくない。

だが、一刀はニツと笑うと一夏に視線を送る。

「大丈夫だ。それはここを陥落させれば、一夏が自然と理解してくれるだろう」

一夏は彼が自分へと向ける視線の意味がよくわからなかった。

わかってるのは、彼が自分を確かに信頼してくれている、という事だけだった。

「……よし。わかった。俺、やるよ」

しかし、一夏はそれだけでよかった。一刀のその信頼だけで、失くしかけていた自身が、再び戻ってくるような感じがしたからだ。

「そうか……。なら、私も自分の任務を遂行しよう」

千那も彼の思いを察知したようで、一刀の作戦に協力する意思を見せる。

「二人とも。頼んだぜ」

一刀は二人の顔を交互に見る。彼らに対する、絶対的な信頼が、

彼の表情に含まれている。

二十分前。

「何とかばれずにここまで来れたな」

一夏は目的地である兵糧庫の真上の丘へとたどり着く。

ここまで何度か敵を見つけたが、見つるわけにはいかず、何度か遠回りのしながらやって来た。

「それにしても、まさか一刀の言っていた通りに事が運んできてるな」

途中まで、千那と共に行動してきたが、一刀の予測通り、奇襲者と挟撃者が待ち伏せていた。奇襲者が前線の壇たちを狙い始めると、千那は彼らのもとへと向かった。

一夏はそれを見送ると、自身の任務へと向かった。

向かう時に聞かされた千那の報告から、作戦は成功。挟撃者たちの何人かが領地の方へ退いたとの報告も届く。

「あ、来た」

負傷者たちが兵糧庫へとたどり着くと、中に入り、防備の者たち少しの会話をする、彼らは外に出て、拠点周りの守備に入る。内部にいる負傷者たちは順番に回復を始める。

全てが、一刀の思惑通りに動いていた。

（これならいける！）

緊張で心臓が激しく鼓動する。手には汗が流れ、肌寒い風が今の彼の緊張を高める。

（大丈夫だ！ 俺ならやれる！！）

自分を信用してくれた一刀と千那。自身の夢のために。

彼は弱気な心を振り切り、丘の上から飛び降りる。

「！？」

ドンと地面に足を踏みしめる。一夏は辺りを見回す。確実に兵糧庫の中へと入り込んだ事を確認する。

「なんだ!？」

一夏の姿を見て、驚くBクラスの生徒。

「奇襲だよ!」

一夏はこの瞬間を逃さぬために、一気に攻める。

手の甲にあるソーマが光り、西洋風の剣が姿を見せる。奇襲という言葉に彼らは即座に対応する事が出来ず、彼の手前にいた二人組は、何もすることができずに敗退。

「このやろっ!？」

構えに入った一人が、一夏に向かって剣を振り下ろす。だが、疲労のためか、その動きに切れがない。一夏は剣でそれを防ぎ、無理矢理押し返す。

態勢を崩した相手のソーマである宝石、つけられている腰部分に剣を入れる。すると、ソーマが砕かれ、相手の姿が消える。

残っているのは一人。

(早くしないと、外の敵が来る!)

一夏は焦りつつあるが、それを表情には出さず、敵へと向かう。

「負けるもんか!」

敵である少女が、短剣を両手に持ち、迎え撃つ。一夏の剣を上手く横に外して、彼の身体に打撃を入れる。

「クッ!」

以外にもやる相手に、一夏は苦い顔をするも、相手を倒すために剣をふるう。そして、少女のがら空きとなった脇に向けて剣を突く。そして、少女の姿も彼らの後を追った。

「やった!」

内部の敵を倒した一夏は喜びに表情が綻ぶ。

「うわっ!？」

「敵だ! Cクラスの奴がいるぞ!？」

だが、後ろから拠点周辺を守っていた彼らが、内部の異変に気が付き戻って来た。

「この野郎!」

生徒の一人が、持っている槍を使い、一夏を襲う。

上手く躲しながら、反撃しようとするも、後方の狙撃手たちによって阻まれる。

銃を連発してくる彼らから逃れるために、一夏は拠点に置かれている小屋を盾にする。

「クソ！ 気付かれるの早！」

一夏は決して、遅くはなかった。ただ、彼らの感の良さのために窮地へ立たされてしまったのだ。

槍使いが、小屋の裏にいる彼に再び対峙する。

（どうする！？ 何か方法はないか！？）

武器と武器との交戦を続ける。

彼は頭の中で必死に考えた。その間にも他のBクラスの者たちがこちらへと近寄って来る。

一刀ならば、この状況を一気に打破する事が出来るだろうが、一夏には彼ほどの知恵を絞る事が出来ない。千那ならば、得意とする武術で速攻で敵を風払えるだろうが、一夏には彼女のように武術には長けていない。

それでも自分の出来る範囲での事はないか、一生懸命に彼は考え続けた。

「ん？」

その時、一夏の目に何かが映る。いくつもある、それらを見て、一夏はある考えが浮かび上がる。

「いけるか！」

敵の槍をギリギリで避けると、昔、武術で習った中で、覚えていた数少ない技を敵の顎へと繰り出す。
掌底だ。

「カハッ！？」

まともに食らった生徒は、打ち上げられて、そのまま地面へと落下。
下。

その間に、一夏は発見した物体に近づき、剣で切り落とす。

「どうした？ もう降参か？」

敵は一夏が弱腰になったと思い、余裕の笑みを作っていた。瞬間、一夏が姿を現し、一斉に銃を構える。

「お前らも、逃げた方が良いぞ！」

そう言い残して、一夏は兵糧庫を後にする。

「あ！？ ちょっと待てよ！」

逃げる一夏を見て、彼らは後を追おうとする。

「お、おい。あれ、見ろよ……」

その時、一人の生徒が彼らにある場所を指差す。

彼らは指された方へと視線を向ける。そこにあったのは、回復器具がある。そして、それを繋ぎ止めている筈のコードが切られていた。

しかも、そのコードには水が掛っている。

「まさか——！？」

彼らが気付くも、すでに遅かった。放電がいくつものコードから置き始め、たちまちに火が出始める。その勢いは強く、兵糧庫は一気に炎で埋め尽くされた。

「やった——！」

上手く兵糧庫から距離を取った彼に今映るのは、紅蓮の炎によって、陥落していく敵の拠点。

一夏は喜びをかみしめながら、すぐさま本陣に居る一刀へと連絡を入れる。

『やったか。一夏』

「ああ！ 兵糧は落としたよ！ 一刀の言った通りに事が進んだおかげだ」

『そうか。一夏。お前はそのまま、敵の本陣に向かえ！』

ディスプレイ越しから一夏へと次の任務を伝える。

一夏は一瞬驚くも彼の指示を聞く。

『もちろんお前だけに危険な事はさせない。仲間たちが今、敵の領地に入った。彼らと共に本陣を責めるんだ』

「了解！」

『頼むぞ』

一刀は口元をつり上げながら、ディスプレイを切る。

「本陣攻めか……。という事は」

本陣を攻めると言う事は、あの場に新がいる。そう彼は思っていた。ジムで彼を完膚なきまでに打ちのめした彼と再び対峙する事になる。

一夏は口にたまった唾を飲み込む。奇襲の時以上の緊張が、彼に降りかかる。

しかし、今の彼は前以上の恐れはなかった。決して勝てる自信がある訳ではない。互角に相手と戦えるとも思っていない。

ただ、今の一夏を動かすのは、信頼してくれる仲間への思いのためだ。

それだけで、今の彼は前へと進む事が出来た。

現在。

「兵糧が……。落とされた……。！？」

Bクラス本陣は驚愕の報告に空気が凍りつく。

「そんな……。！？」

誰もが戦う前から勝利する事を確信していたのだ。それなのに、策の失敗が続き、クラスの士気が下がっている中で、この凶報。彼らのやる気と勝利への確信は、大きく削ぎ落される。

「どういう事！？ たった一人に落とされるなんてありえない！？」

一人の女子生徒が信じられない報告に声を荒げる。

そう。Bクラスの士気を大きく削ぎ落す最大の理由が、たった一人の生徒によって陥落させられた事なのだ。拠点には、それなりの人数を駐屯させていた筈なのだ。多くの数で攻められるのならともかく、一人に全てがやられる事などは考えられない。

しかも、彼らがIAをやり始めたのはつい最近。Cクラスにはソ

ーマを使ってよい成績を見せた者はいなかった。

「あいつら！　今までワザと出来ないフリしていやがったのか」

「どうしよう。このままじゃ負けちゃうよ」

「ここも危ないんじゃないか？　武器庫にも警戒するように伝えな
いと」

「Cクラスが、今一隊でこちらに向かってるって情報が入って来た
よ！」

「何だって！？　どうすればいいんだ！　こんな状態で今、狙われ
たら――！？」

本陣内がざわざわと焦りと戸惑いの二色に染まる。あらゆる情報
がたちまちに入ってくるために、彼らでは処理しきれなくなっ
てきているのだ。

「落ち着くんだ。みんな！」

そんな彼らの不安を、新は一喝する。

あまり大きな声を出す事がない新。そんな彼の今の声には、無表
情である真里名さえも、驚愕の表情をしていた。

彼の声にどよめきは静まり、次の彼の発言を待っていた。

「相手は、こちらがこうなる事を狙っているんだ。思うつぽになっ
てはならない。兵糧を落とされたのは確かに痛い、まだ負けた訳
じゃない。今回の試合に拠点制圧は組み込まれていないのだから」

淡々と、そして冷静に事を話し始める新。

「武器庫周辺を固めるんだ。敵に入られないように、崖や丘がある
場所は特にだ。本陣の守りは薄くていい。前線に陣を引き、彼らの
前進を食い止めるんだ」

新が指示を出す。その姿を見た一同はポカンとする顔になるも、
すぐさま行動に入る。

武器庫の方へと指示を出す者。ソーマを手に取り、前線へと向か
う者たち。マップを見て、地形の状況を確認する者たち。先ほども
での状態が嘘のような切り替えの速さだ。

さすがは一年のエリートクラスという事だ。

「新」

真里名が、彼の傍まで寄って来る。その表情はいつもの無表情とは違い、少しだけ朗らかに見える。

「さすがだね。あれだけ困惑してた、あの雰囲気を変えてしまうなんて」

「別に大した事ないよ。ただ、みんなが優秀なだけだよ」

「でも、このままだと長期戦に持っていけるだけで、敵の猛襲を防ぐ事は出来ないよ?」

彼女の言う通り、新が指示を出したのは、あくまでも守備の徹底だ。いずれは攻勢に出なければ、やられてしまうのだ。

「大丈夫。すでに手は打ってあるよ」

不安な彼女とは異なり、新には余裕の笑みが映る。

Cクラス本陣。

一刀には二つの策の成功を喜ぶ暇はなかった。ここまでの全てが、上手く行っている事に対しては大いに喜ばしい事だ。これならば、クラスの仲間たちの信用は得ることが出来るだろう。

(一夏と千那はよくやってくれた。でも、Bクラスの奴ら、これで終わりじゃない筈だ)

彼はマップの地形を確認し、次の策を考え始める。

と、その時、本陣へと負傷した身体を引きずりながら壇が帰還した。彼は損傷したソーマを回復カプセルへと入れ、自身も大きく削られたアーマーの耐久力を回復陣に入り、ライフを戻していく。

それが終わると、暗い顔のまま彼は一刀に近づく。

「苑宮……。あの……。その……」

口ごもる壇。感謝するべきなのか、謝罪するべきなのか、自分の頭の中で整理が出来ないのだ。

彼を見る一刀は、フツと口元をつり上げる。

「何だよ。いつものお前らしくないじゃないか?」

「え？」

下げていた彼の顔が上がる。その表情はポカンとしていて、いきなりのそのセリフに戸惑っていた。

「お前はうちの大將だろ？ 大將がそんな暗い表情だと、うちのクラス全体の士気が下がっちゃうだろ。ほら、いつもみたいに堂々と胸張れよ」

一刀は彼に向かって、笑って見せた。

「で、でも俺は、お前の言葉を信じなかった。だから、あんな目にあったんだぞ。お前に、何と罵倒されようとも、文句は言えない」

壇は、自分のせいで仲間たちを危険な目に合わせてしまった。そして、それを予測していた一刀を信じなかった。大きな失態を犯した自分が、責められるのは当然。そう彼は考えている。

「九霞院の言葉も聞かなかった。俺に……クラスのリーダーを……務める資格は、ない!？」

壇は苦しそうに自分の胸を抑える。どうしようもない自分が、これ以上、この座に就く事は出来ない。彼は、リーダーの座を降りようとしていた。

一刀は、笑顔を止め、自分を責める壇を見つめる。彼は何かを言うおうと口をあけるが、

「諸越！ 大変だ!？」

生徒の一人が本陣へと入って来た。

「どうした？」

「Bクラスの奴らが、武器庫と兵糧庫の二つに陣を引いてやがった」
Cクラス本陣に衝撃が走る。

「そう来たか……」

一刀はディスプレイの前に立ち、彼らの陣営を確認する。Bクラスはすでに、武器庫を囲みきっており、いつでも襲撃が可能であった。その数は奇襲や挟撃を行った数を勝っており、こちらの守備では心許ない。一方、兵糧庫側は、完全に囲みきっている訳ではないにしろ、すでに七割ほどは埋められている。この状態でも、襲撃す

るには十分である。

「諸越。どうすればいい？」

連絡した生徒は、壇の指示を問う。

「お、俺は……」

過去の失敗を引きずる今の壇に、決断への自信が完全に失われていた。

「……クソ！」

考えたとしても、必ず相手に裏をかかれる。そのせいで、また仲間たちを危険にさらしてしまう。壇は決断を練り出す事が出来ない。「――兵糧庫の布陣はまだ完全ではない。布陣の弱い所から相手を狙って、崩していくんだ。それと前線部隊を追っていった者たちがいたな。一度、あいつらを引き返させ、武器庫の救援に向かわせるんだ」

そこに一刀が割って入り、生徒に指示を出す。生徒は呆気にとられたような表情をして、壇へと視線を移す。

「言われた通りにしてくれ」

「わ、わかった！」

彼は、拠点に居るとの連絡のために本陣を出る。

「お前らも、ここを守る必要はない。すぐに武器庫へと向かってくれ」

壇と共に帰還していた生徒たちは、一刀に言われ、すぐに武器庫へと向かう。

そして、今本陣に居るのは彼ら二人だけになった。壇は再び、自分の力の無さを実感し、力無く椅子へと座る。

「しっかりしろ」

「え？」

一刀は、壇の前に立つ。

「さっきも言ったが、そんなんじゃない、いつものお前らしくない。あいつらは今でも、お前の事を信用してるんだぞ」

「……」

「現に、俺が指示を出してもあいつらは、お前の方へと視線を向けた。あいつらは俺を頼りにしたのではなく、お前を頼ってここまで来たんだ」

「でも……俺じゃあ……!?!」

突然、胸倉をつかみ上げられる壇。

「いい加減にしろ! 何時までもウジウジしてんじゃねえよ。お前がその調子だと、うちは勝てねえんだよ!」

声を荒げ、怒りをあらわにする一刀。

「何で、清水の野郎が、指揮権者とリーダーを俺たち二人に分けたか、わからねえのか!?!」

彼も、一刀のいつもとは違う雰囲気に見せる。そこには、彼の言い放った言葉への驚愕も混じっている。

「あいつはな、俺たち二人なら出来ると信じて任せたんだよ」

「何……?」

「俺が出来るのは、仲間を動かして策を成功させる事だ」

一刀は壇を突きとばし、背を向ける。

「だが、今の俺にはそれしかない。いや、それしか出来ないんだ! リーダーであるお前がいない限り、あいつらを動かす事は出来ないんだ」

「俺が……いないと」

一刀のセリフに、壇の戸惑う心が再び揺れる。一刀はディスプレイの前に立ち、現状の確認に入る。

「俺は、俺の出来る事をする。だから――」

彼の次の言葉に聞くために、壇は顔を上げる。すると、この危機的状況にあるというのに余裕な笑みを作り上げる一刀を見た。

「お前は、お前の出来る事をすればいい。補えない部分は、俺が補う」

彼は、この危機を楽しんでいた。こちらの一方的な試合をしたとしても、面白くはない。

(あいつにとっては、これはただの遊びに過ぎないんだろうがな)

彼はその言葉を心の中で語ると、壇の方へともう一度向く。
そこには、一つの決心をした選手の顔があった。

一夏は敵の本陣へと向かう途中、Cクラスの拠点が攻められているという報告を聞く。一度は戻る事を進言したが、一刀はそのまま作戦の続行を指示した。

彼は懸念しながらも、本陣へと向かう。周りが樹と沼で囲まれたマングローブ。そのせいで、行く手を遮られてしまっているために、彼の進みは低調であった。

「ああクソ！ 何だこれ。樹が邪魔だし、沼で動きにくいし、しかもジメジメしてるし」

生い茂る樹。下は沼の水を吸って歩く速度を落としてしまっている。極めつけは、湿度の高さのせいで起こったジメジメとした空気。それだけでも一夏のやる気を落とすには十分だった。

「お、いたいた！」

一夏が沼に悪戦苦闘しているその先に、金色の髪をした男子生徒がいた。

ヒューイだ。彼は陽気に樹の枝にぶら下がりながら、一夏を上から見下ろしていた。

「あんた、確かBクラスの……！？」

「待てよ。こっちは別にお前とやり合う気はないからよ」

枝に乗り、両手を左右に振りながら、交戦の意思がない事を伝える。

「じゃあ、何しに来たんだよ。偶然って訳じゃないんだろ」

キツと睨みつける一夏に対して、ヘラヘラとした態度で彼を見上げている。一夏は何時でも、敵に対抗できるようにソーマの準備がすでにできている。

「冬槻一夏だよな。お前だろ？ 新にボコボコにやられたのって」
「まあな」

「運が無かったねえ。あいつって、意外とSだからな。敵を叩きのめさないと気が済まないからな」

ヒューイは枝を薦渡しし、一夏へと近づいていく。緊張が高まる。彼の意思を感じ、肩に装着したソーマが眼前の敵に対して、強く、静かに光りはじめる。

「敵意むき出し、やる気満々だね。勘弁してくれよ。今回の試合は、もう、俺らに勝ち目はないよ」

二人の距離は四メートル弱。この間合いではまだ、一夏の攻撃は届かない。相手のソーマが何なのかを知らない故に、対処するための動きがわからない。しかも、ここまでの距離になったとしても、彼はソーマを出さず、挙げ句に敵意までも見せてはいない。

そして、一夏はヒューイの言葉に気を取られてしまった。

「どう言う意味だ？」

意識を再び戻し、先ほどよりもヒューイへの警戒心を強める。

「言葉通りだよ。お前一人に兵糧庫を陥落させたんだぞ。それなのに、こちらは結構な人数で攻めてもまだ、陥落しきれていない。そちら側の指揮権者とリーダーが優秀な事がわかるよ」

「だけど、まだ試合は終わってないぞ？ それなのに、ここで諦めるのか。あんたを頼りにしてる仲間たちを見捨ててか」

「ハハハハハ！ 諦めるのか、か。それこそ、馬鹿だろ」

ヒューイは、笑いながら一夏の言葉を一蹴する。

「何!？」

「確かに、何事においても簡単に諦めるのはよくないさ。だけどなあ、自分の限界に気付かず、我武者羅に最後まで戦い続けるって言うのは、決して勇氣ではないんだよ」

ヒューイは少しずつ、一夏へと距離を縮め始める。

一夏は沼の水を吸って重くなってしまったズボンのせいで、動きずらくなってしまっている。

「己の器を知り、その中で戦える者が――!」

ヒューイの手が光り、その両手に持たれた一つの武器が姿を見せ

る。

「最後の勝者になれる」

アサルトライフルだ。

二人の距離は、いつの間にかメートル程しかなかった。ライフルを一夏のソーマがある右肩へと照準をつける。

なによりも驚くべきことは、彼の表情が、ヘラヘラしたものではなく、不気味なまでの嘲笑に変わっている事だ。

一夏は、彼の変わりように、背筋に悪寒が走った。自分が、対峙している相手の危険性を、今更ながらに感じてわかったのだ。

（どうする？ このままじゃー！？）

緊張と恐れを、目の前の敵に感じながらも、彼は対抗するための策を考える。

「本当に、やる気はなかったんだが、そっちが、その気だとやらざる負えないからな」

嘲笑した顔を崩さず、ライフルの引き金の少しずつ引いていく。

「！？」

ドーンと何かが大きく弾き飛ばされた音と衝撃が走った。

二人の身体は衝撃で揺れ動く。その瞬間に、一夏はヒューイの身体を押し、距離を取る。ソーマを使い、剣を具現化させる。彼に向かって縦斬りに振り下ろす。

態勢を整え、その剣をライフルで防ぐヒューイ。彼はチツと不愉快そうに舌打ちを放つ。

「どうやら、どちらかの拠点が陥落したみたいだな」

鏑迫り合い状態のまま、ヒューイは一夏に言葉をかける。

「どっちの拠点はわからんが、これで、戦いの決着はほぼ着いたものと見ていいんじゃないか。俺たちがここで戦う理由も無いぜ」

「こっちの拠点がやられたのなら、まだ決着はわからない。なら、俺はまだ戦うだけだ」

「……へ！ お前を見てるとイライラするな——！？」

ヒューイは一夏を押し退け、至近距離から射撃してきた。避ける事が出来ず、剣で受け止めることしかできなかった。銃弾の勢いに負け、後方へと吹き飛ばされる。

剣で防いでみせるも、ダメージは受けてしまう。

「クッ！」

苦痛に顔を歪める。？250”と表示され、耐久力を？—50”削られる。

「おらあ！ どんどん行くぞ！」

ヒューイは立て続けにライフルを撃ち続けていく。一夏は、それを見える範囲で避け、防ぎ何とか大幅なダメージ減少を防ぐも、徐々に減らされ始めていく。

近くにある大木に身を隠し、猛攻から逃れるも、ヒューイはその大木さえも構わずに撃ちこんでくる。

「形振りかまわねえのかよ！？」

「ハッ！ 逃げてばかりの奴に、言われたくねえよ！？」

ライフルを連射し、少しずつ大木を削り始められる。一夏は反撃に出ようにも相手の猛攻撃に対応できず、苦悶に歪める。

「何だよこいつ。この程度かよ……！！ あの人、どうしてこいつの事を気にかけてるんだ……」

ヒューイは、一夏のいる方向へと視線を向ける。

「まあいい。ここで、俺が排除すれば問題ない」

煩悶とした表情の先には、憎悪を入り混ぜた激しき剣幕を発しながら、大木へと一歩ずつ近づいていく。

しかし、何故か彼はライフルをソーマの中へと仕舞い込んでしまった。そして、ポケットの中にある石を取り出した。

「おい。お前には家族は入るのか？」

「何？」

「俺には居ないんだよ。ガキの頃に事故で、俺以外全員、死んじゃったんだよ」

剣幕を維持しながら、石を手で弄び前進してくる。

一夏は近寄ってくる気配を感じつつ、剣を持つ手に力が入る。

「その後、ある所に連れていかれてなあ。そこで色々な実験に使われたよ。肉体的にも精神的にも疲労していた俺に、ある人が手を差し伸べてくれたんだ」

彼の歩みが止まる。手の中の石を握りしめ、彼が隠れる大木を見る。

現在、二人の間には大木を残すだけ。ヒシヒシと伝わってくる剣幕を、一夏自身も感じていた。今、ここで不用意に口を開くのは危険だと、今の彼にもわかっていた。

「下らない余生を作られるよりも、自分の手で決めた道を歩めと。」

……だから、俺はあの人のために戦う事を決めた。そう。俺が——自分で選んだ選択肢だ」

ヒューイは自分の過去を語る。その話の中に現れる人物。その者を思っている時の彼の表情は、何故か恍惚とした表情をしていた。

「そして、これも俺の選択肢」

彼がそのセリフを言うと、手の中の石が輝きだす。光り出したその後に、彼の身体の一回り大きい武器が形成された。中断と上段に設けられたハンドル。下段には大きく反り曲がった刃が構成されている。

大鎌だ。

「お前を殺して、あの人の憂いを断つ！」

大きな横殴りの一閃を繰り出してきた。

憎悪であった剣幕が、突如、大きな殺気へと変わった。一夏はいち早く気付き、前方へと飛んだ。大木は、まるで豆腐でも斬るかのようにあっさりと切り倒される。

「な……!？　なんだよ……それ……」

一夏は驚愕する。ヒューイが手にしているのはイフルではなく大鎌。大鎌に斬られたのか大木はあっさりと斬られてしまっている。なにより、驚愕するべきなのは、彼の表情だった。

常軌を逸脱した状態。理性が欠如し、狂った笑みで彼に向いている。

狂気。その言葉が一番しっくり表情だった。

「あんまり長い時間かけられないからな。ちよろちよろするのは勘弁してくれよ」

上段のハンドルを大きく右に回す。すると、鎌の刃が勢いよく回転し始める。鎌を横に左右へと振り回す。彼の勢いと回転する鎌の力で、周りの木々たちが斬り倒されていく。

上段からの横一闪。一夏は下に屈んでやり過ごす。大鎌ゆえに、振りかざした後の動作に手間が掛り、隙が出来る。

一夏は、その瞬間に彼との距離を作ろうとする。

「甘いんだよ!!」

次にヒューイは中段のハンドルを手前に引く。手前に引かれたハンドルから、風が放出される。放出された勢いで、振り下ろした方向と逆向きに鎌が動きを見せる。

「なっ!?!」

一夏は大鎌の奇妙な動きに、咄嗟に持っている剣を前に出す。それだけでは防ぎきれず、肩に傷を負ってしまう。ヒューイは尽かさずに、右足を前に出し、一夏の腹部を蹴りつける。そのまま一夏は、後ろにある大木に衝突する。

一夏は肩を抑えて、出てくる血を止めようとした。

だが――その時に彼は不自然な事に気付く。

(何で、血が出てるんだ?)

そう。IA試合では、選手たちの命の安全のために、エリア空間とアーマーには色々な施しがされている。多少の傷を負う事はあっても、出血するような大事は起こさせないようになっている。

なのに、現実に一夏は出血してしまっている。アーマーの能力が反映されていない事になっている。エリア空間の能力もされていない。

つまり、彼が今、所有している武器は――

ソーマではない、試合外の逸脱した武器と言う事になる。

「気がついたか……。これは、ソーマじゃない。武器。なんだよ」
ヒューイは、混乱している一夏を見て、不敵に、痛快に笑う。

「これに斬られれば、傷も付くし、血も出る。そして、命も……な」
「く、お前……！」

一夏はヒューイの反則行動に憤慨した。右手の剣を構え、彼と戦う姿勢を取る。

相手の敵対姿勢を確認したヒューイは、より一層、殺気を増して対峙する。

「冬槻。ソーマじゃ、俺に勝つことなんて出来ないぞ」

「わかってるさ。さっき、剣が鎌とぶつかり合った時に気付いてたさ」

一夏のソーマである剣は、すでにボロボロであった。一発のぶつかり合いで、これほどまでの損傷。次の攻撃を食らえば、確実にソーマは破壊されるだろう。

対するヒューイの鎌はビクともしていない。まるで新品その物だった。鎌の刃は今にもでも敵の四肢を切り裂きたく、ギリギリと回転していた。

「なら、何で逃げない？ このままやり合っても結果は見えてるぞ」

「ああ。でも、逃げても仕方のない時もあるだろ」

自信を失っていたあの時の自分ではない。そう心に言い聞かせた一夏には、逃げると言う言葉はなかった。

そんな彼の見つめるヒューイの目には、瞋恚に燃える心によって、彼は吸いついてくる沼をもろともせず、一夏へと鎌を振り下ろす。

それを避けず、あえて剣で防ぎに入った。

「何!？」

剣はあっさり鎌の力により、破壊された。

だが、ヒューイが驚いたのは、剣で防ごうとした事ではなく、その後の一夏の行動だった。

なんと、彼はそのまま突進しかけてきたのだ。

（元々、防げないのなら、距離を縮めて鎌での攻撃をさせなければいいだけだ！）

予期せぬ行動を取られたヒューイは、咄嗟に鎌を繰り出そうとするも、一夏が素早く対応し、顎への掌底を繰り出す。

顎への衝撃に痛んだ表情になるも、左手の中段ハンドルを引き、空気を放出。空気の勢いは奥の方へと噴出されたため、鎌はヒューイ自身の方向へと動く。

その間に今いる一夏を襲う。

だが、空振り。先読みした一夏が下に屈みこみ、足払いを決める。足払いを受けた事によって、手から鎌が抜け奥の大木と衝突する。

身体を上げ、体勢を崩した彼目掛けて、踵落としを繰り出す。ヒューイは低空で身体をねじってやり過ぎず。

身体を回して、一夏との距離を置くヒューイ。良い様にやられたことにより憤慨していた彼は、口から滴り落ちる血を脱ぎ払う。

「デメエ……！！ 実践は初めてじゃねえな……」

「初めてさ。ただ、ガキの頃にこんな風な試合を何度もやらされてたから、身体が勝手に反応しちまったんだろうな」

新との試合で、戻らなかった感覚が、自身の命の危険によって取り戻されたのだろう。今の一夏には少しばかりの余裕がある。

一夏は構えをとり、ヒューイに対する。

「クソが！ 調子に乗るなよ！？」

口の中に残った血を吐きだし、声を荒げながら地面を蹴る。

「……………そこまでだ」

「「！？」」

二人の身体が再び、お互いの身体を捕らえる前に、第三者が姿を現す。

彼らは声のした方へと視線を動かす。

「今、君たちのしている事は、試合とは全く無関係なことではない

のかい？」

第三者は、ゆっくりとヒューイの鎌が刺さっている大木から姿を見せる。

新だ。

「ヒューイ。僕は君に武器庫の守備を任せていた筈だ。なぜここに居るんだい？」

「……」

ヒューイは黙止し、ただ彼の見つめる。その瞳には、戦いを邪魔されたことによる憤怒と同時に、なぜ彼がここに居るのか、どうして自分がここに居るのかを知っているのかという驚きも中に秘めていた。

「だんまりか……。僕は、君の目的には口を挟まない事を約束したが。その代わりに試合中の僕の指示には従うと、君は約束したじゃないか」

黙する彼に構わず、新は言葉を連ねていく。そして、大木に刺さる鎌を抜き取り、一步一步。ヒューイの方へと歩み寄る。

一夏は新のいつもとは違う様子を認識し、ヒューイとの距離を取り、自身の身を守る方へと移行した。

「さっきの爆発を聞いたかい？ あれは、うちのクラスの武器庫の陥落の音だ。苑宮君は武器庫の方にも奇襲隊を配置していたのさ。やっぱり、彼はすごいよ」

「……悪かった」

「でも、君が守備をしてくれていたら、武器庫の陥落はなかったんだけどな」

「……悪かった」

ヒューイは新の連ねる言葉に、謝罪を続けた。その瞳にはまだ、一夏へと対する意思が残っている。全身の筋肉を緊張させ、すぐにも動ける準備は出来ていた。

新はその様子を見て、溜息を吐いて頭を下げてしまった。

「ヒューイ」

新が彼の名前を呼んだ。新は自分の一回り大きい鎌を片手で振り、彼の首筋ギリギリへと吸いつけたのだ。

それでも表情一つ変えず、新を見るヒューイ。

事の状態に息を呑む一夏。

頭を下げて、視線を見せない新が、その視線を上げる。

そして――

「あんまり――俺を怒らせるなよ」

二人の身体にゾッと、冷たい何かが触って来たのを感じた。それは二人だけでなく、あたり周辺がそれを察知したのか、一気に周辺の気温が下がっていったようだ。

次に二人は、発汗していた。どこに逃げても、その視線からは逃れられない。命の危険を感じていても、身動きが取れなくなってしまうっている。

「わ……わかった……。もう、これ以上は勝つてな真似はしないよ」
その中で、何とか声を出し、ヒューイは新へと誓った。

「そうか。それでいい――大丈夫。彼との戦いの場合は、僕が設けてあげるから」

誓いを聞いた途端。突き付けた鎌を降ろし、新はいつもと同じような涼しげな表情へと戻る。

鎌をヒューイへと返す。ヒューイはそれを石の姿へと戻し、ポケットの中に仕舞い込む。

次に、新は一夏の方へと近寄る。先ほどまでに発していた雰囲気は完全に消えていて、申し訳なさそうな表情をしながら。

「霧島君。済まなかった。うちの者が勝手な行動をしたせいで」

「いや、別に」

「肩から血が出てるじゃないか!? 他に怪我してる所はないかい?」

「擦り傷が幾つかあるけど、これぐらいなら大したことないから」

本当は、大木に叩きつけられた事。ヒューイに蹴り込まれた腹部の痛み。それらの事は、何故か彼に話す事は出来なかった。彼の持つ隠された気迫に気圧されたからだ。

彼はそれ以上に追求することはせず、「よかった」と言って、一夏から離れた。

「それよりも、試合は？ お前がまだ、ここに居るってことは、まだ勝敗は着いてないんだろ？」

今回の試合はリーダーが負けを認めるか、敗退するまで続かれる。壇の敗退通告は届いてはいない。新がエリア上に存在している事は、試合の決着は着いていないと言う事になる。

新は、少し困った表情になった後、首を横に振った。

「今回の模擬試合は、Bクラスの負けだよ。苑宮君にここまで追い詰められてしまったし、奇襲を仕掛けた仲間たちも、なかなか陥落させる事は出来ていないみたいだし。それに、違反行為をしてしまった生徒も、うちから出てしまったしね」

違反行為。それはソーマ以外の物を持ち込み、他の生徒に被害を与えてしまった行為のような事を言う。今回の場合は、ヒューイがソーマ以外の武器を扱い、一夏に暴力行為を行った行為の事だ。

当人のヒューイは、自信の行いについて、何の反省もしていないようで、大木に背を置いて、腕組みしながら空を眺めていた。

「冬槻君」

名を呼ばれ、一夏は新の方へと顔を向ける。

「Cクラスは、良いチームになるよ。今回はこちらの負けだけど、学年別対抗戦では絶対に負けないよ」

いつもの涼しげな微笑みとは違い、闘志を燃やし、再戦を楽しみにした笑み。一人の選手として、一夏を認めた証でもあった。

「ああ。こっちも負けないさ」

一夏は、握手を求めてきたその手を、強く握り返し、今回の模擬戦は幕を下ろした。

模擬戦は三時間にも及び、一般のⅠA試合と変わらない激戦を繰り出していった。

現在、B、C両クラスは、前までの緊張感はなく、友好を深めるべく、打ち上げをしていた。どうやら、両クラスの先生同士で賭けをしており、負けた方は焼き肉を奢る事になっていたらしい。

Bクラス担当の高梨は、負けたことで、焼き肉奢り。しかも、そこに何故か生徒たちも介入して来て、彼は二クラス分の代金を支払うはめになった。

「終わった……。今月は水と塩しか食えない……」

「なーに、言ってるんのさ。いつもキャバクラ行ってんだから、こんなもん、安いもんっしょ」

机に伏せている高梨を、杏子は酒を呑み、上機嫌になりながら彼の肩を叩いていた。

生徒たちは各々に、他クラスとの交流を深めており、いつの間にか互いにあった蟠りは無くなっていった。

一夏も千那も他クラスの者たちと談話をしており、その顔には笑顔が絶えない。

テラス付きのちょっと良い所の焼き肉屋だ。それ相応の金額が取られるだろう。

そんな楽しそうな彼らを、遠くから微笑ましそうに眺めている一刀。彼は、あえてその輪には入らず、テラスから見える夜空を見ていた。

「楽しそうだね」

すると、一刀の隣に新が立っていた。彼は手に持った飲み物を口に運び、一刀と共に空を見上げる。

「どうやら、今まであったクラス同士の隔たりもとれたみたいだね。これで、Cクラスとは友好的な関係を気付けていけそうだよ」

「ああ。うちとしても、他クラスとは仲良くやって行きたいからな。と言うより、うちはその前に中の関係をどうにかしなくちゃいけな

かったしな……」

結局。その後、一刀と壇は協力し、武器庫、兵糧庫の守備を全力で指揮をした。他のCクラスメンバーも次第に一刀を信頼していき、彼の指揮のもとで行動をするようになっていった。

強固な壁となった拠点でBクラスたちは落とすことができず、試合は長期戦になろうとしていた。その時、両クラスのモニターに新からの敗北宣言が通告されたのだ。

その事について、誰も咎める事はせず、生徒たちは共に、その場で腰を降ろしてしまった。どちらとも疲労が溜まっていたのだろう。壇は、一刀へ謝罪と同時に、彼を指揮権者として認め、Cクラスの誰もが、それに対し反対をする者はいなかった。

「なあ、何で敗北を認めたんだ？」

「言ったろう？ 君の戦略には勝てないと判断したんだよ。それ以外に何がある？」

「それにしても、あっさり過ぎるんだよ。お前には他に、策が一つや二つ、あった筈だ」

「……」

一刀の指摘に、彼は答えない。確かに彼の言う通り、本陣を攻めるための道を把握しており、そこにはすでに本陣攻めのための隊を置いていた。

ヒューイの一連を、教師にも他生徒には言わず、一夏にも誰にも言わないように頼んでいた。

「……言いたくないなら、別にいいさ。一夏が肩に包帯をして帰って来たから、心配になっただけ」

「すまない。これに関しては、どうしても言えなくてね」

試合後。一番最後に帰って来た一夏は、肩からの出血を止めるために包帯を巻いてもらっていた。誰もが、その事を質問するも、一夏は、はぐらかして真実を言わなかった。

「まあ。お互い言いたくないものってあるだろ」

「苑宮君にも、人には言えない隠し事ってあるのかい？」

「……あるさ。色々あつてな」

新の質問に、一刀は夜空を見上げ、傷心な表情を見せる。かつて起きた過去の出来事を思い出しているのだろう。

「そうかい……。なんか悪いこと聞いちゃったね」

新は少し、意心地が悪そうにするが、一刀は首を横に振った。

二人には、互いに言えぬ事がある。それに気付いているからこそ、互いの気持ちを考え、これ以上の追及はしないのだ。

「そう言えば」

「？」

この空気を、先に抜けだしたのは新だった。新は話題を変え、一刀の方を向き直る。

「どうして霧島君を一人で、兵糧攻めをさせたんだい？ 返り討ちにあつてもおかしくない事をワザとさせるなんて」

新は、一刀の一夏による単独戦に対しての疑問をぶつける。確かに、誰が考えてもあまりにもおかしい策ではある。

だが、一刀はそうではなかった。新の疑問を鼻で笑い、可笑しそうに笑う。

「何だよ。そんなことか」

「え？」

「簡単だよ。別にその事に対して、根拠なんて無いさ。——ただ、あいつを信じたただけだよ」

一刀は、何でもないかのようにそう言う。

新は、ポカンと彼らしからぬ表情をしていた。その後に、急に可笑しくなり、彼も一刀と同様に笑いだした。

「そうかそうか。信じた……。か。確かに、そんな事は、思いもしなかったよ」

「本当にそうなのか？」

空になったコップを手すりに置き、空を見ていた視線を新へと変える。逆に新は視線を外し、空を見上げる。

「一夏との試合。それ、ワザとだろ？」

「どうして？」

「ワザと一夏を叩きのめし、自信をなくさせ、そこから這い上がらせようとしたんだろ？ 一夏の性格なら、一度、鼓舞させてやれば、きつと立ち上がれる。お前は、それを信じていたんだ。だから、あえて、一夏の心を傷つける言葉を吐いてた。だろ？」

一刀の推測に、彼は言葉を出すことはせず、ただ聞いていた。彼も空になったコップを手すりに置いて、拍手を始めた。

「ご名答。流石。としか言えないね」

拍手を止め、自信のコップ、一刀のコップを取り、御変りを取りに行くと言った。

「そうだ。最後にもう一つ」

「あ？」

「君は霧島君の失敗は、頭には入っていたのかな？」

「いいや。あいつなら、絶対やってくれる。そう信じてた。だって――」

新の質問、即答だった。一刀は何の躊躇なく、言葉続ける。

その表情には、疑い一つない表情だ。

「友達、だからな」

最後に、その言葉を聞いた新は、背を向けたまま、ドリンクを取りにみんなのいる方へと向かう。その顔は、満足そうであった。

模擬戦 後篇（後書き）

以上。模擬戦終了です。この後も、このように試合戦が繰り広げられていきます。今回はお付き合い頂いてありがとうございます！

二つの組織（前書き）

次話が出来上がりました。今回は前回よりも話しが少なくなっていました。まいりましたが、物語的には少しずつですが、動き始めてきたと思います。

二つの組織

「それで、どこの回し者だったんだ？」

「わからん。おそらく影の人間だろう。物から見て、西アジアか……」

「おいおい。西アジアと言えば、アサシンたちの管轄下だろ？ 目を逸らしてる間に、こんなことになって、どうやって、落とし前つけるつもりだよ」

声主たちは、椅子にすわり、机を向かいあった状態で話し合いをしていた。周りには誰もいない。都市部だというのに人っ子一人いないのだ。

それに、荒れている。食べ物は無造作に地面へと落ちており、叩きつかれ、原型を留めていないものまである。

壁側には、血痕が付着している所もあった。

「それを我々が考えても仕方のない事。二極のお二人は、この事をどう思っているのが重要だ」

「お偉いさんの二人かい？ 老人のくせに現役で良くやってるこつた」

右の椅子に座る、饒舌なしやべりをする男の名は、ゾア。

左の椅子に座る、堅物のような男の名は、ヨルバ。

二人は任務を終え、ある人物との面会のために、ここで待機しているのだ。場所はエジプト、アスユート。エジプトで中部最大の都市であった。

そう。あったのだ……。

ついこの間まで、活気あふれていたこの場所も、指揮をとっていた表組織、影組織の専横によって、人々は、この都市から去って行った。残った者もいたが、彼らは次々と組織たちによって、虐殺されていった。

事態を重く見た裏組織が、二人を派遣し、彼らを一人残らず、殺

すように任務を受けたのだ。

面会の相手は、二人がその場での任務をする事を知り、自ら赴きに来た。という事になるのだ。

「来たか……」

ヨルバは落としていた視線を前方へと向け、来訪者を見つめる。

ゾアは向かず、不気味な笑みを作っていた。

来訪者は二人の存在を確認し、そちらへと向かって歩き出す。二人の座る机の前まで来て、被っていたフードを取る。

「お久しぶりです。お二人とも」

フードの下に、隠されていたのは、まだ若き青年だった。二十代前半くらいの年齢で、整った顔つきをしていた。コートを着ているために外見をあまり判断する事は出来ないが、鍛えられた肉体のようではない。

「三年ぶりか。お前と会ったのは、会談の時が最後だったな」

「はい。あの後。我らの組織内でも色々な問題がおきまして、その片づけに時間が掛りました」

「……片づけ。ね」

青年は二人の間にある、椅子に腰をかける。二人は特に気にする事はなく、会話を続けた。

「つーかよ。お前ら。日本に派遣したガキがやらかしたみたいじゃねえか。アンヴァースとレネゲートは、この事について黙ってはいないんじゃないか？」

「心配に及びはしませんよ。あれは、我々の派遣した者ではありませんので」

「あ？　だが、関係者の狙ってんだろ？　裏の人間を狙っての行動だったら、同じ裏の人間じゃなければ、狙う理由がないじゃないか」
「アサシンは、アサシンから派遣者を送りました。狙う相手を間違えるようなヘマはしませんよ」

「？　では、失敗した少年は、君たちが派遣したものではないと？」
青年はヨルバの問いに、首を縦に振る。コートから手を出し、握

っていた石を、机の上に出した。

「我らに従う影の組織ではなく、独立した組織の犯行ですよ。彼らの本拠地はスリランカの首都。スリランカという国を自分たちの領地として、裏組織に対抗の意思を示しました。これが、彼らが使っている武器です。仕様はレムナントに似ていますが、劣化版です。一度限りですので、使ってしまったのはただの石ころです」

ゾアは、石を手に取り、物珍しそうに観察していた。

「ふーん。これは使用済みか？」

「いえ、まだ。レムナントは使用者を選びませんが、この石、名をシザースと言うそうですが、使用者の選択があるそうです」

「使用者の選択？　つまり、石が使う者を選ぶ、ということか？」

「ええ。ですが、決して一人一つと言う訳ではありません。一つの戦闘で二、三個。最高で十個使用したという話があります」

「十個か……。それで、スリランカの大統領府を襲ったのか」

スリランカは、大統領制と議院内閣制の混合体制となっている。近年では二つの体制の関係が険悪であり、スリランカという国の未来の政治への意見が完全に割れた時、国が二つに割れた。

それを好機と見た影組織が、現首相に近づき、打倒大統領を宣言させた。そして、同日に大統領府を組織に襲わせ、彼らを殺害。スリランカは議院内閣制の時代となる。

しかし、アサシンがそれを許す筈はなく、裏組織として影組織の崩壊に乗り出そうとした。

「何で良い様に影にやられてんだよ。アサシンなら、こんな組織。軽く消せるだろうに」

「我らのリーダーが、それを許さなかったのです」

「リーダーというと、エツイオの後継者か？　凡庸の男と聞いているが、やはりそうなのか？」

「まだ、何とも言えません。フェデリゴやマリアンは、彼に臣従しています。まだ認めきれない者も多数おります」

アサシンの前リーダー、エツイオは最強の戦士として誉れていた。

その兄にして前々リーダーでもあるジョバンニも閃光の戦士として、組織内では畏敬の念を持たれていた。

二人は、かつて起きた第七次世界大戦で、裏にて名を馳せる。弱組織であり、影組織であったアサシンを、他組織を滅ぼし、領地を手に入れ、当時の裏組織に対して下剋上をして、アジア最強の裏組織までに築きあげた。

エツィオは晩年に、次リーダーを功績の少ない現リーダーに託して逝った。アサシン内では困惑と疑惑に駆られ、内乱を企てる者が出る始末になった。

「今回、私がここに来て、アフリカの裏組織。ソドムのあなた達との面会をするように、計らったのは彼です」

「何？　つまり彼は我々と共に影組織を攻めろと言うのか？」

ヨルバは不愉快な表情になる。たかだか、影組織。序列の念を持っている彼からしては、自身より下の相手との戦いに駆り出される事は、プライドを傷つけられることになるのだ。

「無論。タダでという図々しいマネは致しません。我らに協力をしてくださるのなら、アサシンの組織にあるレムナント半分を献上します」

「ヒュー！　マジかよ！？　そんだけの事で、レムナント半分もくれるのかよ。お前らのリーダーは奮発するな」

ゾアは持っているシザースを手で持て余し、歓喜の声を上げる。

「ヨルバ！　受けようぜ。この交渉！」

「落ち着け。まずは、ハヤテとスバルと共に検討しなくてはならない」

やる気のゾアを諫め、ヨルバは冷静な判断を下す。

「良いな。パッツィ？」

青年——パッツィは頷き、今回の会談を終える。

模擬試合を二週間前に終え、次にある学年別対抗戦は二週間後。

Cクラスの面々は、放課後に集まり、日々練習や連携に励んでいた。壇を中心にして、プログラムが組まれ行われる試合形式や、どんな状況にも対応できるように、臨機応変な判断の訓練もしていた。「一夏」

壇が、一人練習をしていた一夏に声をかける。あの模擬試合以来、クラスの仲は良くなり、下の名前で呼び合うまでになっていた。

「何だ？」

「一刀の奴はどこに行ったんだ？ 話したい事があるって、伝えた筈なのにいないんだ」

「ああ。多分、今日もサボりかな」

クラスでの練習があっても、一刀はあまり顔を出す事は、滅多になかった。曰く、面倒くさいらしい。

模擬試合での成果を見せた事により、一刀の事を皆が、信頼を置くようになった。やる気のない一面を見せたとしても、本番ではやる所を見せるために、壇以外の者が咎める事はしないのだ。

壇は、「またか」と呆れて溜め息をついた。

「そう言えば、もう肩は平気なのか？」

彼は、一夏の肩を見つめる。そこは、模擬試合でヒューイにやられた箇所。クラスの誰にも、あの時の一連を話してはいないが、皆が彼の怪我を心配してくれた。一夏は、それが嬉しく思い、隠し事を作ってしまった事に、心を痛めた。

「ああ。傷もそれほど深くはなかったし、最新の医療技術のおかげで、次の試合には支障はないってよ」

「そうか……。でも、無理はするなよ。医者は大丈夫と言っても、何時、傷が開くかわからないんだからな」

壇は一夏の傷を心配し、無理しないように伝えた。一夏がそれに頷くと、彼は担任の清水杏子に会いに、その場を後にする。

「無理するな……か……」

一夏は、壇の言葉を口に出し、自分に言い聞かせた。

「ヒューイみたいな奴が、他のクラスにいたとしたら、無理してで

もやらなきやダメじゃないか」

彼は、ヒューイとの戦いを思い出し、憂悶していた。新が戦いを中断させたからとしても、あのまま続けていたら、おそらく負けていたのは一夏の方であった。

あの時は、一夏が優勢であったが、それは彼の行動に、ヒューイが動揺したからだ。肩からの出血。実戦経験の差。そして戦いにおいての技術力の違い。その他にも埋められぬ要素が幾つもあっただろう。

彼が異例であったかもしれないが、それを除いても、一夏は己の力不足を感じた。

しかし、今の彼は何もせずにした、あの頃とは違った。自分が何をしなくてはいけないのかという事を、一刀から教わった。

「迷ってる暇があったら、力をつけろってな」

彼は、ソーマの具現化体の剣を握り、練習を再開した。

「ふくん」

Cクラスの練習場を二階の窓から眺める女子生徒がいた。彼女は彼らの練習を見ると、すぐ近くに置かれた自動販売機に飲み物を買っていく。

左右に束ねた長い髪を揺らしながら、余裕の笑みを作る。

Cクラスは今日の練習を終えたのは、午後八時。外は暗く、肌寒い風が吹いていた。

一夏は友人たちと共に会話をしながら、帰り道を歩いていた。その友人たちとも、駅で別れ、自分の自宅を目指す。

「お、あれは……」

ふと前を見ると、先を歩いてる千那を発見した。一夏は千那に近寄り、驚かそうとするが、

「ベホッ!？」

肩を触ろうとした彼の手を取り、大きく前へと投げ飛ばしてしまっ

た。地面に叩き付かれ、一夏は阿呆な声を出す。

「一夏。バレバレだ。私を襲いたければ、もう少し気配を消す事だな」

「ええ……」

千那は彼の気配を感じ取っていたようで、動きを見せた所を、一気に背負い投げで対処したのだ。

彼女は、手を差し延べて、一夏は苦笑しながらその手を取る。

「調子はどうだ？」

「大分、感覚が戻りつつあるよ。この調子なら、次の試合に足を引きづる様な事はないかな」

「そうか。それは何よりだ」

隣同士に歩きだし、千那は一夏の体長が良好である事に、ホッと一息ついた。

「心配してくれたのか？」

「な、馬鹿もの！？ 私はただ、次に来る対抗戦で使えない者が出る事を恐れただけだ。それ以上も以下もない！ 感違いするな！」

耳まで赤くし、彼女は彼に対して、慌てて弁明した。

一夏は、違うと言いつつも、自分の事のように、気にかけてくれているが千那である事を理解していた。昔からの知り合いであるからこそ、分かりあえるのだろう。

「――ちよつと、そこにあんた！」

と、後ろから呼びとめる声が聞こえた。二人が振り返ってみると、そこには息を切らしながら、汗だくになった少女がいた。

「呼んだら、返事しなさいよ！？ 何回、声かけたと思ってんの！？」

少女は怒りをあらわにしながら、一夏へと詰め寄る。括ってある左右の髪が、彼女の怒りに合わせて、パタパタと揺れた。

「え？ ごめん」

「駅から、ずっと声張って呼んでも、見向きもしないなんて、耳遠いの！？ この難聴！」

治まりきらない感情を、一夏へ罵倒し続ける。

「大体、あんたは――」

「そんなことより、お前は誰だ？ 見た所、上都の生徒らしいが……」

千那は、当たり散らす彼女の存在を不愉快そうに見つめる。少女の格好は千那と同じ、上都の女子制服。身長は彼女よりも低いが、態度は一人前に大きい。

身長で上回る千那に対して、臆することなく彼女に対した。

「あんたたち、Bクラスと模擬試合したCクラスの奴でしょ？」

「そうだが……」

「勝ったんだって？」

「まあ……一応」

一夏は、歯切れの悪い返答をした。彼からすれば、ヒューイと決着を着けたわけでもないし、新には負けたままであるからして、勝ったのかと言われても、一応にそうとは言えないのだ。

「？ それで、あんたが冬楓一夏ね」

「ああ。そうだけど」

一夏の対応に、不自然なものを感じた見たいだが、あえて追求はしないようだ。

そして、一夏である事を確認すると、彼に向かって指を突き付ける。

「あんた。私と一騎打ちの勝負をしなさい」

そう言ったのだ。

「「……は？」」

訳がわからず、ポカンと口を開けたまま硬直する二人。

少女は、フフンと口元をつり上げながら、彼らに向きあう。

「いやいやいや、何言ってるの？」

「言葉どおりじゃない。あたしと一対一の試合をするって意味」

「だから何故、一夏とお前が試合をしなければならぬのだ!？」

一夏ではなく、千那が突然の少女の言葉に動揺していた。

「あんた、確かヒューイと戦ったんだってね」

「！？ ああ」

「今年の一年の期待のナンバー2を倒したって噂が流れてんのよ」

「俺が、あいつを倒した？」

彼は、自分の知らない所で、そんな噂が流れていることなんて思いもしなかった。

しかも、それは真実ではない。

「そ。どんな奴なのかなって思って、今日の練習を見させてもらったわ」

上都学院では、四月と九月に適性検査を行う。検査と言っても形だけであり、それで、その生徒の将来が決まるわけではなく、あくまでも順応しているかどうかを確認するだけ。そこから伸し上がって来る者は多い。

今回の検査では、新が一番。ヒューイが二番の順応性を見せた。ソーマの使い方を、まるで最初から知っていたかのように扱い、前の模擬戦でも、卓越した試合を披露した二人は、教師たちから期待の目を持たれている。

その学年二位のヒューイが、試合で順位もつけられなかった生徒にやられたと報があったのだ。気になる者は気になるのである。

「今日を見る分に、なんか期待外れだったのよね。噂が本当なのか、分からなくなってきたね」

「……」

少女は、訝しげに一夏を見つめる。

一夏は決して、彼に勝ったわけではない。だが、新に口止めをされている。それにあんな事が、皆に知られれば、今年のIAスポーツ事態の問題とされて、夢どころではなくなる恐れがある。

それだけは、何とかしても阻止したい一夏は、偽りの噂を甘んじて受けることに決めた。

だから、一夏は少女の視線を黙って受けているのだ。

「という事で、あいつを倒すぐらいの存在が、どうかを試合で確か

めたいの。そのための一騎打ち!」

「そんな無茶苦茶な――」

「わかった」

千那は、一夏の思いがけない一言にギョツとする。

「その試合。受けてやるよ」

「い、一夏!?!」

彼の言葉に、驚く千那。そして、少女の方は、ニツと口元に笑みを作る。

「試合は、三日後の放課後。いい?」

「ああ」

事を伝えると、少女は二人に背を向け、来た道を歩き出す。

「あ、そうだ。忘れてた」

思い出した彼女は、もう一度、二人の所まで戻って来た。

「名前、名乗ってなかったわ。あたしは、風見音凜^{かざみねりん}。よろしく」

一夏は、出された手を掴み返す。

こうして、今日という日は終わる。

砂漠。インドに存在するタール砂漠に、男は立っていた。

砂が一面に広がり、辺りには誰もいない。彼は、その場所から、ある方向を見つめる。

スリランカのある方向を。

「フェデリゴ」

突然、男に声が掛る。

何時から、そこにいたのか、若い女が彼の後ろに立っていた。

「マリアンか……。それで、あいつは何と?」

「スリランカの件は、パッツィに任せると。お前はレギオンの警戒に回る」

「そうか」

フェデリゴはマリアンの言葉に対し、特に反論する事も無く、そ

のまま彼女の隣を通過して、歩き出す。

「パッツィは、今どこに？」

「ソドムのリーダーとの交渉のために、彼らの本部へと向かうと言う報告があった。おそらく交渉は上手く行くだろう」

「当然だ。成立して貰わなくては困る。我らの損害を最小限にするためにはな」

威風堂々とした、彼の姿を、一般人が見れば腰を抜かしてしまうだろう。彼の放つ剣幕が、周りに威圧を与えるのだろう。

「しかし、意外だったな。お前が今回の反逆者の事に対して動かず、別件を素直に聞くとはな」

フェデリゴは反逆者を許さない。彼らは、アサシン組織の管轄外ではあったが、領地内で事を起こした。スリランカは元々、彼らの影組織が駐屯している筈だった。彼らとの通信が途絶えたのが、つい五日前。奮戦していた彼らも、遂に滅ぼされてしまったのだ。

フェデリゴとマリアンは、別の任務でアジアを離れていたために、この件を知っても動く事が出来なかった。帰還したところにはすでに遅かった。

フェデリゴは、反逆者たちの掃討を望んだ。しかし、リーダーはこの件をパッツィに一任したのだ。まだ、この決断が納得していない者が多いが、フェデリゴとマリアンが諫め、事は落ち着き始めている。

「あいつが決めた事だ。我はそれに従うだけだ」

彼は、表情一つ変えず言った。

彼らの歩く先に、車が止まっている。運転手が二人の帰りを確認すると、エンジンを入れる。

「それで、あいつは今どこに居るんだ？」

「他の者たちに指示を出して、目的地へと向かった」

タール砂漠は、かつて石油採掘によって活発していたが、底をついてただの砂漠地帯と化していた。ジャイサルメールへと向かう道のりを進んで車は走り出す。

「リーダーが自ら動くなとあれほど言ったのだがな」

「仕方ないさ。なぜなら、あそこには――彼がいる」

「そうか……そうだったな」

マリアンの言葉にフェデリゴは、あっさりと納得した。

フェデリゴは、携帯を取り出し、リストにある、一人の人物を示す。

名に”桔ヶ也”と書かれていた。

二つの組織（後書き）

以上です！　今回は裏組織の面々が登場してきました。他にもたくさん的人物が登場してきますので、楽しみしてください！

次任務と昼休み（前書き）

どうもです。今回はいつもよりも、かなり少なくしてみました！
ただ、書く事が思いつかなかっただけなんですけどね（汗） ほん
の少しですが、是非！ お読みください！

次任務と昼休み

あるホテルの一室。

桔ヶ也と黒人の男は滞在していた。前回の任務が終わってから、再会したのは今日が初。二人は、新たな任務のために集合したのだ。誰かが、部屋に入って来た。眼鏡をかけた知的な女性だ。彼女は、何事も無く部屋の中へと入ると、手に持っていたパソコンを開く。二人は特に気にした風も無く、彼女に視線は向けず、各々の動作を続ける。

「二人とも。今回の件に関しては、すでに話は聞いてると思うけど、大丈夫？」

女性がパソコンからは目を背けず、二人に話しかける。彼らは、「ああ」と一言告げる。それを聞いた彼女は、パソコンのディスプレイを彼らの方へと向ける。

「事件があったのは、六日前の午後七時。場所は島根県の仁多町。殺害されたのは全て若い女性。死体の姿は、四肢を全てもぎ取られたかのように、顔部分は、鼻、目、耳を切り取られた姿に変わり果てた状態だった」

彼女は話すに連れて、画面を変更させていく。そこには、変わり果て、誰かも分からない状態となった死体の数々。酷く切断された所から骨が見える。特に酷いのは、四肢だ。何かに斬られた感じはなく、本当に無理矢理引っ張られ、千切り取られたかのように、四肢には千切り取られた跡がある。

「犯人の姿を見たものはいない。痕跡も残っていないことから、女性たちは一瞬でここまでの姿になったと言っている」

「ただの殺人者じゃないな。しかも、表の奴らに、ここまで器用な真似は出来る筈がない」

「影の者だとしても。痕跡を残さない事までは出来ない筈だ。まず、ニュースでは報道されてはいないんだ。こんな事が出来るのは、裏

の人間だけだ」

そう。今回の事件は、世間では報道はおろか、地元住民でも異変に気付いてはいなのだ。彼女がパソコンで見せているのは、彼女たちの組織の者たちが搜索し、発見した物。発見された時には、死体は冷たく、発見されてから三日は過ぎていた。

「二人には、今回の事件の解決を行ってもらうわ」

彼女は再び、パソコンを自分に向けて作業を開始する。

「カリファ。情報が少くないか？　これだけでは、相手を特定できない」

黒人の男は、不遇に対しての不満を漏らす。確かに、事件が起きた経過を知らされた所で、犯人が特定できてはおらず、裏の者との抗争になるとしたら、圧倒的にこちらが不利となる。

「心配ないわ、ダズ。この件に関して、レネゲードとの共同で行われるから、情報は入り次第、逐一、あなた達に送られるわ」

カリファは、一枚のカードをダズに手渡す。

「それが、彼らとの連絡手段。通信相手は、カードに書かれた通信番号との相手に連絡が出来るようになってるわ」

「ふーん。……それで、レネゲードの奴らは顔を見せる気はないのか？」

桔ヶ矢は渡されたカードを渡されながら、不満な表情を見せる。

「そうか……。相変わらず、胸くそ悪い奴らだ」

カリファの様子から、彼らが自分たちと会う気が無い事を理解する。彼が、それが気に入らないようだ。

「気にするな。いつもの事だろ。それじゃ、行くとするか」

ダズは、桔ヶ矢の肩に触る。出発の催促だ。二人は、部屋の扉に向かって歩きます。

「頼んだわよ」

背後から、カリファから言葉がかけられる。それは、大切な仲間だからこそに対する信用の証だった。

「へ。決闘……みたいなもんですかい？」

一刀は、あまり関心がない様な反応だった。手に持っていたコロツケパンをほおぼる。

「おい。なんだよその反応は。感心なさ過ぎだろ」

「いや、だって俺関係ないし。熱血そうな奴苦手だし。クラス関係ないじゃんか」

「でも、何かあるだろ。友達が違うクラスの子から、一騎打ちを申し込まれたんだぞ。身に来てくれよ」

「止めろ。食べづらい」

一夏は頼みながら、彼の身体を揺さぶった。

一騎打ちを申し込まれ、三日が経ち、試合当日。放課後まであと四時間。すでに試合の話は学院全体に広がっている。模擬試合の件で、一躍有名になっていた一夏は、今回の事でさらに注目を浴びていた。

「第一。トラブルに遭いすぎだろ。注目を浴びすぎると、上級生たちに何されるかわかったもんじゃないぞ」

一刀の言葉に、ウツと嫌な所を突かれる一夏。

二人がいる場所は、教室ではなく屋上。注目を浴びすぎている一夏は、教室では何かと質問攻めとなり、昼食がままならない。その場から脱出し、着いた先が屋上。先客に一刀がいたのだ。

「それより。一刀。最近、教室でメシ食べるの断ってると思ったら、屋上に来てたのか。放課後練習にもあまり来ないけど、何してんだよ？」

今でも、放課後のCクラスでの練習は続いている。確実に強くなっている、徐々に仲間同士の絆が深まっていつている。

その中で、一刀が練習に顔を見せたのは、二、三回程度であった。それも顔を見せるだけであり、すぐに退場してしまう。

「ん？ 聞きたい？」

一刀は、模擬試合の時と同じ、真剣な表情になる。

「あ、ああ」

一夏は溜まった唾を呑みこみ、彼も真剣に耳を向ける。

「そうか。しょうがないな。実はな……」

一つ。息を吐き、そして――

「……………溜めていたゲームをやってるんだ」

「……………は？」

言った。

キョトンと一夏は、彼が何を言ったのかを理解するのに、数秒かった。

「ゲーム？」

「そうなんだよ！ こっちに引越してから荷物整理やら宿題やらで、買うだけ買ってやってないんだよ。二十本買って、あと十二本残ってるんだ。ちなみにこれが、その一本」

一刀はポケットから携帯ゲームを取り出す。起動させ、ゲームにやり始めた。

「学校に持ってきてまで、やるなよ」

「もうすぐ学年別対抗戦だろ。また、やる暇が無くなっちゃうだろうが。だから、こうやって休む暇も惜しんでやってんだ」

「その言い方だと、無理にやってるみたいじゃないか」

一刀は、その言葉を返さず、ゲームに集中し始めた。

一夏は、その様子に溜め息付き、空を見上げる。

「ヒューイが……」

「ん？」

「いや、Bクラスのヒューイの奴、最近学校に顔を見せてないみたいだから、何かあったのかなって」

Bクラス所属のヒューイは、現在学校に来てはいない。いや、東京にさえ今は、いないのだ。二人も彼の担当教師である高梨に事情を聞いてみたところ、家庭の事情で少しの間、都内を離れると言う

報告があつたらしい。

「……」

一夏は、事情を聞いた時と同じ、難しそうな表情となり黙る。彼は、ヒューイが姿を消した理由が、自分にあると思っているのだ。一度、新と話をして、あの事についての相談をするも、秘密にしておくを続けるようにと頼まれる。

それ故に、彼は一刀に何も話す事が出来ないのだ。

ゲーム画面から、視線を一夏へと向ける一刀。その様子から、察した彼は、

「ま、いいさ。とりあえず、今日の試合。頑張れよ」

「ああ。頑張るよ」

一刀の言葉に、力無く頷く。そしてチャイムが鳴り、昼休みの終わりを告げられる。歯がゆい思いを抱きながら、次の授業に入る。

次任務と昼休み（後書き）

以上です！　今回は日本の裏組織の名前とそのメンバーの一部の者たちが、現れはじめました。そして、学院では、一夏の秘密を作ることへの歯がゆい一面を作りました。

次回では、裏組織の任務開始と一夏と凜の試合が始まります。この次も是非ともお読みください。

敵、現る

島根県の仁多町。

二人は、ここで起きている事件解決のために訪れる。顔面のパーツをめちやくちにされて死体となっている女性が多数現れている。犯人は分らないが、証拠を完全に消しているところから、裏の人間である事は確かだろうだ。

「ダズ。ここから、二手に分かれよう。裏の者なら俺たちがすでにここに来ている事はわかってる筈だ。だったら、意識を二つに分断させて、消耗するのを狙って方が良い」

「そうだな。狙われているのが、女性だとわかっていることから、俺たちに狙いを定められることはないだろうからな」

ダズは桔ヶ矢の提案に乗り、二人は別れて行動を取る。

ダズは左に、桔ヶ矢は右に。各々が進むべき道を進む。

「ん？」

左を選んだダズは、右角を進んだ先の商店街へと入る。事件のせいか、商店街にある店は全て閉じられている。誰もが、恐怖で怯えている。慣れたこの土地から逃げる事を、本能が許さずこの場に留まらせている。

「隠れたとしても、無駄だと言うのに」

商店街の光景を見て、彼は呆れてため息をついた。

敵は自身と同等の存在である組織。かつて、彼が殺した毒島たち影組織よりも遥かに強敵であり、曲者だ。

ダズは商店街の中を探索し始めた。その中で、ひと際目立つ場所を見つける。無造作に捨てられた自転車の山だ。商店街の中で、明らかに逸失な場所であった。これらは全て、互いを支えあって建てられていた。

「なんだ。これは？」

訝しげに見上げるダズ。二メートルある彼の身長を軽く超えた四

メートル半。

「こんな物を作って、どうしようって言うんだ？」

彼は、自転車の山の背後に回る。そこには小さな穴が一か所あった。どうやら、そこから山の中を見れるようになっていようだ。彼は、穴の先に目を向ける。

山の中には、また山になった物があった。

人間だ。

人間の山が建てられていた。彼らの意識はない様で、誰もピクリとも動かない。

ダズに驚いた様子はなく、周囲への警戒心を強化した。そして、ある異変に気付く。

「なるほど。こんなにも大胆に置かれていて、誰も気づかないわけだ」

誰に言う訳でもなく呟き、レムナントを解放する。両腕から二丁の銃が具現化される。彼は弾を発射する。穴の中へと弾は向かい、爆発する。

爆発で自転車の山は破壊される。同時に、中に入った人間たちも霧散する自転車の破片。そして、晴天の空に雨が降り注がれる。血の雨。爆発で器を破壊され、行く当てが無くなった血が降って来たのだ。

「容赦ないな」

背後から声がかけられる。全身をローブで隠した者。

二人は、血の雨で、全身が赤く染め上げられる。

ダズは、彼の存在を確認すると、口元に笑みを作る。

「彼らの息は、まだあったぞ。なのに助けはせず、命乞いの時間さえやらないとはな。アンヴァースの者たちは、昔に比べて非情になったのだな」

「ふざけるな。彼らの顔を見たぞ。全てをはぎ取られて、表には出

られない顔だったぞ。それに瀕死状態。あれなら、ここで楽にしてやることこそが、せめてもの慈悲だろ」

「フ。物はいい様だな」

その声音から、相手が女性であることがわかる。彼女はダズに近づいていく。ローブの下に何が隠れているのかわからず、警戒を怠らずに相手に視線を向けるダズ。

「俺の背後に、完全に気配を消して立っていた。流石——と言うべきか。アサシン」

「それほどでもないさ。こんな事、我らなら当然の事。アジアの半分を征服するには暗殺のスキルは絶対なのだよ」

自らの組織の名前をあてられ、一瞬動きを止めてしまったが、すぐに立て直し再び彼に相對する。

「それで、次は日本か……。変だな、お前たちは、まだアジア大陸全てを制覇していない筈だ。この国を攻めるには、まだ早くないか？」

アサシンが制した領地は、西、中央、南アジアである。北、東、東南アジアは、領地下に置いてはいいのだ。日本は東アジアに属している。

「悪いが、日本制圧は諦めろ。俺たちがいる限り、この国は落とせはしないぞ」

「安心しろ。今回、この国自体に用はない」

女性は地面に落ちていている人間の腕らしき物を拾い上げる。その腕には、拳銃が持たれていた。日本で拳銃を持った表の人間と言え、警察ぐらいである。どうやら、彼らも彼女の餌食にされてしまったらしい。

「何？」

「今回我々が、ここに訪れたのはリーダーの意思でな。目的はわからぬが、裏をここに誘き出すように命じられたのだよ。まんまと引っ掛かってくれて、感謝しているぞ」

「!？」 お前たちは何だったのか!？」

彼女の言葉に驚愕するも、瞬時に次の行動に入り始める。

しかし――

「無駄だ」

女性は一気に距離を詰め、ダズの動きを阻む。

ダズは、彼女に向けて銃を連射。腕、脚、肩に向かって弾が飛んでいく。流れるような動きで、弾を避けてられていく。肩への弾丸は、掠めるも彼女の動きを弱める事は出来ない。彼は接近し、避ける動作をさせない行動に出た。

あちらも、それに気付いたのか、距離を離すために彼から遠ざかる。

アサシンの身体能力からなのか、相手はダズに速さで上回る。

追いつけないと判断したダズは、自転車の破片を拾い上げ、投げつける。顔面へと飛んできたそれを右へと顔を動かしてかわす。

「ウッ!?!」

しかし、苦悶な声を吐きだす彼女。肩に食い込んだ弾丸。ダズは破片と同時に発砲していたのだ。その弾丸は、破片を彼女の視界から見えぬように使っただけなのだ。

まともに肩へと食らってしまった彼女は、別の方の腕で肩を抑える。抑えながらも彼との距離を縮めぬように気をつけてた。

「じゃあな!!」

ダズは、攻撃を止め、この場から退き始める。商店街から飛び出し、桔ヶ也の向かった方向へと走る。

「あいつの方にも、敵が向かっている筈だ。カリファにも伝えないと」

走りながら携帯を取り出し、カリファの番号に電話を始める。

しかし、彼女は電話に出ずじまい。

「クソ!?! なら――」

そして、貰ったカードの方のボタンを押す。レネゲートとの通話手段だ。少し経つと相手は通話に出た。

「おい! 聞こえるか!?!」

『ああ。自己紹介がまだだったな。俺は――』

「んな事はどうでもいいんだよ！ 今回の任務は、相手の囷作戦だ。そっち側に本隊が向かっている可能性がある」

『何！？ ………了解した！ こちらも警戒態勢に入る。そちらは速やかに帰還してくれ。アンヴァース』

リーダーには、こちらから――』

「ぐあ！？」

レネゲードとの通話はそこで途切れる。

いや、正確には途切れさせられたのだ。通話カードが、飛んできた何かによって破壊されたのだ。飛来してきた物によって、手を負傷してしまう。

ダズが、飛んできた物へと顔を向ける。ナイフだ。

「言った筈だ。無駄だとな」

彼正面から、ローブの女性が再び現れていた。フードから顔を出しており、頬には十字傷があり、赤い髪を後ろに一つに束ね、琥珀色の瞳で彼に対していた。

「アドハー」

「くたばれ。ダズ」

ローブを取り去り、下には黒を基調とした戦闘スーツを着ており、アームレットの姿をしたレムナントを装着していた。

レムナントが光り出し、一本の棍棒が具現化される。柄の先に鎖が装着された打撃武器の一種、連接棍棒――フレイルだ。

ローブが二人の間の地面に落ちた瞬間。アドハーは、ダズの間合いの中へと入り込む。

（さっきより早い！？）

商店街戦時より、さらに早い動きが、ダズの判断に遅れを作らせてしまった。飛び出すフレイルを、二丁の銃で反射的に防いだ。だが、フレイルにはもう一つの武器が備わっており、柄の先の鎖球が弧を描いてダズの頭に直撃。

よろめくダズ。体勢が崩れたその身体にフレイルの攻撃が連発。

前のめりに倒れそうな彼に向かって、アドハーの前蹴りが顎へと的確に当たる。家の外側に敷かれた煉瓦へとダズの巨体が蹴り飛ばされる。

見事に煉瓦は崩壊し、ダズの身体は煉瓦の山に埋もれてしまう。

「……」

アドハーは警戒を解かず、彼の方へと歩み始める。彼女は、ダズの防御の高さを知っているのだ。それ故にこれだけでは、彼は終わりではない事もわかっていた。

（動いた！？）

煉瓦の山の動きを確認。彼女はフレイルを縦殴りに振り下ろす。だが、フレイルは振り下ろされず、逆に上げられてしまう。

ダズが山の中から銃を連射。狙いは彼女の身体ではなく、フレイル。弾丸が、振り下ろされる勢いに勝り、逆に押し上げたのだ。

（馬鹿な！？）

驚愕を顔には出さず、心中でのみにとどめるアドハー。

「貰った」

煉瓦から身体を出し、彼女の首根っこを掴みとる。

アドハーは、浮いた身体に勢いを付け、両足でダズの顔面を捕らえる。

しかし、ビクともせず、ダズは彼女を思いっきり、向かいの煉瓦へと投げ飛ばす。ダズと同じように煉瓦は崩壊。煉瓦の下敷きになってしまう。

「ハアハア……。相変わらず、嫌な武器だぜ」

地面に片膝を突き、全身の痛みを堪える。打撲が多数あり、中でも最初に受けた頭は特に酷い。傷が出来てしまい、額へと血が流れ落ちる。

「起きろよ。まだ、終わりじゃ、ねえだろ！」

言葉の最後と同時に、弾丸が飛ぶ。狙いは煉瓦の山。山の中へと入ると、またも爆撃が発動。煉瓦は木っ端みじんに破壊される。

ダズのレムナントである銃は、ただの銃ではなく爆撃銃でもある。

彼の意味によって、弾丸に当たった獲物は全て、爆撃の餌食となる。吹き飛んだ煉瓦の山から、彼女の姿はない。ダズは背後の気配を感じ取り、後方へと銃弾を撃ち込む。

爆発。しかし、気配はある。

フレイルの鎖球が破壊されても、棍棒は生きている。棍棒での横打撃が繰り出される。眉間へと襲ってくる棍棒をすれすれで避ける。風圧によって眉間に近くに傷が付き、血が飛び出る。

敵が間合いに居る事を判断し、ダズは気配する方に向かって、銃撃。対するアドハーも躲しながら棍棒での打撃を繰り出す。

ゼロ距離姿勢からの攻防戦。

両者退かずの戦いに、先に退いたのは、ダズ。接近戦での戦いに勝ち目はないと判断し、棍棒を振る右腕を掴んで、背負い投げ。

投げられたアドハーは、空中から生き残った鎖を彼の首目掛けて飛ばす。鎖は見事に首に絡みつ き、投げ込んだ彼も、飛ばされる彼女の勢いに、身体を持っていられる。

ダズの巨体が地面に突っ伏したことで、彼女の勢いも死に、地面に叩きつけられる事を回避。

着地を果たし、フレイルの鎖を引っ張り上げる。もちろん鎖はダズに絡みついたまま。

驚くべき事に、彼女が引っ張ると、鎖もろとも彼の身体が浮かび上がる。ダズはアドハーの方へと飛んでいった。

そして、強く後ろに引いた拳を前面へと押し出す。ダズの顔面を捉える。

ミシリ、と重く鈍い音が鳴る。上顎骨にひびが入ったのだ。それも大きな。

鎖は、彼の首から外れ、巨体は後方へと大きく吹っ飛ぶ。川の上に設置されていた橋に激突し、粉碎。

「ハアハア……。クッ!？」

激しく息切れしながら、肩と腕から流れる血によって感じる痛みに耐える。ゼロ距離戦時に何発かの弾丸をまともに受けていたのだ。

先ほどの拳の繰り出しによって傷が広がってしまい、流れる血はかなりの量である。

（爆撃弾ではない……。当然か。あの距離から爆発させれば、自分もただでは済まないからな）

彼女は入り込んでいる弾を、無理矢理抜き取る。それと同時に飛び出す血。全ての弾丸を取り出した時には、黒き戦闘スーツは血で染まっていた。

橋へと視線を向けると、壊れた橋の上にダズの姿を発見する。

（息は……。あるな……。）

気を失い、倒れているだけだと判断したアドハーは、彼の息の根を止めるために、満身創痍の身体を動かす。

しかし、彼女は数歩、歩くと止まった。ダズとの戦闘で周りの注意がそれてしまい、気が付く事が出来なかった。

「まさか……。ここまで近づかれてしまっていたとは……」

彼女は自分の失態に小さく舌打ちする。左角から少年が現れる。両手にはすでに、二本の刀が持たれている。

「二本の刀。戦争時には会う事がなかったが……。そうか。お前が桔ヶ也か……」

アドハーは負傷した身体に鞭打ち、フレイルを構える。

（この状態で、勝てるとは思えない……。なら、せめてここから逃げるための……）

勝てるとは思っていない。彼女は、ここから脱出する手段を懸命に搜索した。

「!？」

アドハーは驚くべき光景を見た。

桔ヶ也は、刀の具現化を解き、背を向けて歩き出したのだ。彼女への警戒は全くなく、ただ本当に、歩いているだけのようだ。

「待て!!」

彼女は、彼に向かっての声を荒げる。桔ヶ也は止まり、彼女へと顔を半分向ける。

「貴様。何故、刀をしまったんだ？ 私では相手にならない思っているのか」

「……………今のお前の身体で、俺とともに戦えるとは思えない。ダズの銃弾を食らった身体だ。それに——その出血の量だ。何時、倒れてもおかしくないぞ」

彼は、淡々と今の彼女の身体状況を説明した。

「見逃すと——言うのか？」

「少し、違うな。お前には連絡役をしてもらいたい」

言うのと、桔ヶ也は再び背を向け、歩きはじめる。

「連絡？」

訝しげな眼で見つめるアドハー。

「ああ」と彼は頷く。

「あいつに伝えろ。必ず——————殺す」

最後の言葉。彼は、強く大きな剣幕を発していた。アドハーは背筋に悪寒が走るのを感じ取り、何も言えなくなっていた。

（これが……あいつが、重要危険人物と定めた相手……。なるほど、確かに得体の知れない、底知れぬ何かがありそうだ……）

額に溜まった汗をぬぐい、彼女はこの場を後にした。

「ダズ。大丈夫か？」

「……」

彼は、倒れているダズに声をかけるが、返事はない。身体のあちこちにある怪我から、重傷であるのは明らか。彼は携帯を取り出し、仲間へと救援要請を送る。了解した仲間たちは、すぐに救援に向かう旨を伝えると、通話を切った。

彼らが来る前に、応急処置を始める桔ヶ也。その彼に話しかける者がいた。

「仲間を助けるか？ 裏切られるかもしれないのか……？」

「……」

答えず。彼は処置を続ける。

「所詮。仲間たちとの関係など、戦場以外にはない。無駄な感情移

入は身を滅ぼすぞ」

「……」

黙々と処置を続ける彼に、しつこく言葉を囁く相手。

「裏切られる時の、ショックは大きい。それを口酸っぱく言ってるのに、なぜわからない？」

「……」

「この際、そいつを殺してしまっただろう？　そうすれば、お前の力は、また一歩強くなる」

「黙れ！」

しびれを切らした彼が、鬼の形相で言葉を吐きかける。

「俺は、お前とは違う！　お前のようにはない。これ以上、余計な事を言うな！」

拳を強く握りしめ、囁く相手に対しての何かの意思表示を現す。

「……………まあいい」

相手は、一言つぶやくと、姿を消した。

彼も怒りの形相を解き、血が滲んだ手に視線をやる。

「そうだ……。俺は……お前とは、違う……！」

桔ヶ也は、小さく呟いていた。そして、数分後に救援に来た仲間たちと合流する。

敵、現る（後書き）

以上です。今回は学園側の方面を削除し、裏側だけの投稿させていただけました！ 今回最後に現れた話し相手とは一体、誰だったのかは、その内、明かされますので楽しみにしてください。

次回は学園側を執筆したいと思っています。

一夏 VS 凜

「逃げなかったんだ。感心感心」

凜は、先に試合場で一夏を待っていた。数分後に彼が訪れた時、不敵な笑みを彼に向けていた。

「約束しちゃったからな。そりゃ、来るに決まってるだろ。それに、来なかったら、あとで何されるかわかったもんじゃないしな」

「へー。よく、わかってんじゃないん」

時刻は、午後五時を回っている。観客席には、今か今かと待ちわびているクラスの仲間たちが来ている。一夏のクラスメイト、凜のクラスメイトだけではなく、他クラスの生徒もあり、上級生までもがこの試合の見物に来ていた。

「それじゃ、始めようか」

「ああ」

一夏は頷き、仕舞っていたソーマを取り出す。凜はすでに用意が出来ているようで、ソーマを首に巻いてぶら下げていた。

試合場全体に緊張が高まる。先ほども、ざわめていた雰囲気はなくなり、観客たちは、二人へと視線を向ける。

試合場にはもう一人、紀陽の姿があった。彼女は凜が頼んだ今回の試合の審判である。

「今回は授業訓練の一環として、試合をする事を認めます。二人とも、それでいいですね？」

二人は、彼女の言葉に頷く。

「それでは――――始め！」

紀陽の合図を同時に動き出したのは、凜。正面に立っている一夏に向かって突進してきた。

対する一夏は、ソーマを展開し、飛び込んできた凜へと上段切りをかます。

しかし、凜はそれを流れるような身のこなしで、右へと躲す。そ

して、彼に向かって拳を突き出す。避ける事が出来ず、反射的に出してしまった左手で受け止める。

” 10 ” ↓ ” 290 ”

「チッ！ 上手く防いだな」

凜は一夏が、自分の攻撃を防いだ事に舌打ちする。すぐさま、右足蹴りを入れてきた。一夏は蹴りを避け、彼女の懐に入り込む。

「これなら――！」

「甘いんだよ！」

突きを繰り出そうとした彼の前から、突如、凜の姿が消える。攻撃が空振りする。

「え！？」

一夏は驚愕し、辺りを見渡しても彼女の姿はない。どこから来るかわからず、全身の筋肉に力を入れ、集中力を高める。

（後ろか！？）

「どこ見てんだよ！」

凜の声が一夏の背後から飛んでくる。背中からの衝撃に耐えきれず、彼の身体が宙を舞う。試合場の壁に激突して、やっとその勢いが止まる。

” 100 ” ↓ ” 190 ”

この事で、アーマーの耐久力は一気に削られた。

「っつ！？」

地面に落とされ、起き上がろうとしたが、一夏は左手に痛みを感じた。見ると、手のアーマーがはだけてしまい、手には血が滲みでている。どうやら、彼女の攻撃を反射的に防いだ時に、受けてしまったようだ。

「どうしたの？ この程度なの？」

凜が彼の方へと向かって歩いてきた。余裕な表情で彼へと言葉を向ける。

「あんたって、本当に、あの金髪ヒューイを倒したの？ なんか、最初に見た通りの弱さね。前に話した時の感じはどこ行ったのかしらね」

「ハアハア」

嫌味を言いながら、近寄って来る彼女。息を切らしながら、劣勢状態にある一夏には、彼女の声は届いてはいない。

「あ。もしかして、あたしのソーマが何なのか、わからないから熟思黙想に入ってる訳？」

凜は、一夏の心を揺さぶる方向に入って来た。彼が考えている事を見抜き、その考えを無にさせる気のようなのだ。

「……お前のソーマについてなら、すでに知ってるさ。強化ソーマだろ」

ソーマにも様々な種類が存在しており、武器へと変化を変える具現ソーマ。周辺を変化させ、相手を攻撃、翻弄させる錬金ソーマ。そして、プレイヤーの身体に自信を超越した力を与える強化ソーマである。

「へへ。よく知ってたね」

凜は特に驚いた様子はなく、ただ感心していた。

「じゃあ特別に、あたしの強化ソーマが、どんな力を与えてくれるか教えてあげるよ」

子供がよくする悪戯な笑顔で、彼女は一旦、歩みを止めた。

「あたしのソーマは、強化系の中でも特別だね。本来、スピードを扱うプレイヤーには、攻撃操作のテクニック面が劣ってしまっていて、思うような攻撃が出来ない。だから、あまり使いたがる選手っていないのよ。扱える選手は一握りの世界選手ぐらい」

スピードは、選手の速度上げること、敵には視認できないような戦闘を期待されて造られたのだ。

だが、スピード面を気にしすぎたせいで、コントロールが制御できない。一般の選手たちにはスピードについて行けず断念する者。プロ選手でもスピードについていくのがやっとで、攻撃を繰り出すのが困難と言った事で断念する者が絶えない。

もちろん、速度の調整は出来るのだが、それだと相手に視認できるまでの状態にまで落とさないと、攻撃が出来ないので、使う者が

現れないのだ。

こう言った難点な面があるために、世界選手のような扱いに長けた者でなければ、使う人がいないのだ。

「だから、あたしのソーマは、その点を克服した物になっていてね。身体のスピードを上げる事は変えず。身体の言う事を聞かせるために、脳から送られる信号へのテクニク強化も付け加えられてんの」

凜が使っているソーマは、スピードを生かす事を忘れず、自身への判断能力を上げるための強化が付け加えられたようだ。それならば、確かに普段の戦闘と変わらない判断が出来るために、攻撃のコントロールもでき、尚且つ速さにもついていく事が出来る。

「つまり、あたしのソーマは二重強化がされてる、新世代型のソーマなの」

「そんなのありかよ……」

凜のソーマの力に、愕然とする一夏。元々、具現ソーマは強化ソーマとの相性が悪いのだ。この二つは、単独戦闘に長けている両者のソーマ。具現ソーマは武器の力を上げる事が出来るが、強化ソーマはプレイヤー自身の力を上げる。そのために武器による攻撃が、強化されたプレイヤーに攻撃が当たらない、ビクともしないと言った事が起きるのだ。

一夏の攻撃は、ただでさえ、一発も当たらないと言うのに。この状況で発覚した相手のソーマの逸脱した力を知らされたのだ。精神的にも肉体的にもキツイものがある。

「話は終わり。それじゃあ、行くよ!!」

凜はその言葉を言うや、またも一夏の視界から消えた。

一夏は、対処法が思いつかずとも剣を構え、集中した。

（見えなくても、消えたわけじゃないんだ！ 我武者羅に振れば、当たる筈だ!）

どこにいるかもわからない凜に、一夏は何も考えずに剣を横に振った。剣は当然のように空を切り、手ごたえはない。

「どこ、狙ってんのさ!」

顔面へと吸い込んできた膝蹴り。防ぐことも躲す事も出来ず、ともに受けてしまう。またも壁に叩きつけられ、壁がその力任せの勢いに耐えきれず、陥没してしまった。

”critical —150”↓”40” ”Player1
+150”↓”450”

凜の攻撃が、クリティカルと判断された。これによって、クリティカルを決めた選手には、アーマーの耐久力が、食らわせた攻撃分の回復がされるようになっていく。それが、耐久力の上限を超える値になるとしても、それが認められるのだ。

「これで、あんたの耐久力は僅か。この状態でまだやる？」

凜はすでに、自身の勝利を確信していた。彼女の言葉には、余裕と軽蔑があった。

しかし、一夏は戦う事を諦めず、剣を構える。

彼女は彼の意味表示に、肩眉を上げて反応する。

「そう……。じゃ、これで——」

彼女の姿が消える。一瞬で一夏の前に現れ、拳を大きく前に出す。

「終わりだ!!」

「くっそ————!!」

一夏は闇雲に、剣を前に突き出す。

両者の攻撃の速さは歴然。一夏の攻撃が、凜の拳の速さに敵う筈がない。彼の顔面に、彼女の拳が入り込む。またも、陥没した壁へと激突した。

アーマーの守護があったとしても、これほど攻撃を食らえば、身体への痛みは大きい。一夏は一瞬だが、視界が暗くなりかけた。

”critical 100”↓”350” ”Player2
+100”↓”140”
” —80”↓”60”

試合は———終わらなかった。

一夏の攻撃が、凜にクリティカルを与えていたのだ。同じように一夏もダメージを負われているので、耐久力は未だに、危険値を指

している。

彼は彼女の方へと視線を向けると、彼女も何が起きたのわからず、意表をつかれたような表情をしていた。

「あれ？」

そこで、一夏はある異変に気付く。

何故、今の今まで当たらなかった攻撃が当たったのか。何故、彼女はそれを避ける事が出来なかったのか。

「はあ。完全勝利はなかったか……」

持ち直した凜が、残念そうに溜め息をついた。だが、目はそうはいっておらず、どこか動揺していた。

「まあ、いっか。次で終わらす」

凜はソーマを使い、一気に詰めよってこようとした。

（もしかして……！）

一夏は異変を確信にするために、ある一手を講じた。剣を上段に構えたまま制止した。その状態を維持し、動かずに、ある瞬間を待つ。

（ここ……！）

一気に剣を振り下ろす。

”－80”↓”270”

「なっ！？」

一夏の剣は、凜の右肩へと入り込んでいた。そこで体勢を崩してしまった彼女は、彼の下段斬りも受けてしまう。

”－60”↓”210”

凜は、一旦距離を取る。その目は、先ほども明らかに動揺が露わになっていた。肩に食らった部位を手で抑え、痛みを堪えていた。

「やっぱりな。危うく、気付かずやられる所だったぜ」

彼女の様子から、一夏の抱いた異変は確信へと変わる。

一夏の言葉に、彼女はビクッと身体が反応する。

「そのソーマは確かに、お前が言った通り、二重強化が施されてい

るんだろうな。スピード、テクニック。確かに申し分なくお前に力を与えてくれているだろうな」

構えを解き、凜の方へと視線を向け、気づついた身体に鞭打ち、彼女へと近寄る。

「でも、ソーマを完全に活かした場合だけだ。風見音——お前は、まだそのソーマを活かせてはいない」

「!? 何で、そう思う訳……?」

動揺を見せぬために、冷静な表情で繕って見せた。

「お前は、目に見えぬ速さで俺を翻弄していたけど、攻撃に入る瞬間、必ずその勢いが死ぬ。そのせいで俺には、お前の姿がハッキリと見えるようになるんだ」

確かに彼の言う通り、凜が攻撃を繰り出す時、姿は必ず現れる。それは、彼女が言ったソーマの能力を活かし切れていないからではないか。一夏はそこに着眼したのだ。

「そ、それがわかった所で何よ!? あたしたちの耐久力の差は明らか。さっきみたいになまぐれが、何時までも続く訳ないでしょ!」

見抜かれた凜は開き直る。それも確か。二人は大きく耐久力が違う。何度かダメージ負ったとしても、凜の耐久力は安全値。次の攻撃を食らえば確実に一夏は敗北。危険値の状態が続いている今の彼が、これ以上攻撃を受けずに戦う事は不可能に等しい。

一夏は、フツと口元に笑みを作る。

「大丈夫だ。もう————当たらないさ」

と、大胆に宣言した。

「大きく出たわね。この、状況で——!」

凜は、ソーマの力を使って一気に逼る。繰り出す左拳は、一夏の脇腹へと向かう。

しかし、攻撃は逸らされる。一夏が剣の腹で攻撃の軌道を変えたのだ。そのまま彼女の顎に、十八番である掌底が見事にヒット。

” —70” ↓ ” 140 ”

「ガハッ!?!」

彼女の身体は宙を舞った。一夏は飛び上がり、間髪いれず横殴りに剣を入れる。彼女の脇腹に命中。そのまま彼女の身体は壁へと向かって激突した。

”－90”↓”50”

一夏は彼女が飛んだ壁の方へと視線を向ける。壁は破壊され、煙が立ちあがって中の様子は確認できない。

これで、形成は逆転。一夏の耐久力は凜の耐久力を上回った。

「ま……まだだ……！」

掠れた声が一夏の耳に届く。視線をやると、そこには、息を切らしながら痛みに顔を歪めて立っている凜の姿があった。

彼女は、ソーマの力を展開して、再び一夏に迫る。

「何度やっても……。ハアハア……。同じ……。だ！」

痛みのせいで、凜のスピードは先ほどよりも勢いが無い。一夏の目には彼女の姿が、終始見えていた。

「いっつ！？」

その時、一夏の左手に激痛が走る。手を無視した動きを続けたせいで、遂に限界が来たのだ。辛うじて、彼女の左フックを避ける事が出来た。そのまま鳩尾を狙って突きを放つ。

しかし、左手の激痛で剣先はあらぬ方向へと突いてしまった。

（しまった！？ 痛みで突きの軌道が……！？）

その瞬間を、彼女は見逃さなかった。懷に自ら入り込んだ一夏に、腹部へと膝を打ちこむ。

”－70”↓”0”

「ガハッ！？」

まともにヒットし、一夏は地に伏せる。

「試合終了ー！ー！」

紀陽の一言で、静かに見守っていた観客からワァー！ー！ーと歓声が飛んだ。

「勝者は、風見根凜さん!!」

試合場の上に設置されている巨大ディスプレイに彼女の名が映し出される。

『凜——! やったね——!』

『お前なら、やってくれるって信じてたぜ!』

『よし、今日は風見音の勝利祝いだ——!』

凜のクラスメイト達が一斉に彼女に向かって、勝利の祝いの言葉を送っていた。

だが、今の彼女には、その言葉は届いてはいなかった。地面に伏せている一夏の姿を凝視しているのだ。

「あんた、最後……何で……」

凜は正直、自信の負けを予想していた。なのに、最後に一夏の異様な行動が明らかにおかしい事ぐらいは彼女にはわかっていた。

凜の言葉に反応せず、地面に伏せたまま一夏は起き上がろうとはしない。

「ちよっと! あんた……!」

その態度にイラっとした彼女は、一夏の身体を揺さぶった。

ガタッと一夏の身体が横に倒れ、動かなかった。

「え? ちよっと!?! どうしたの!?! ねえ!?! 先生!」

凜は慌てて、先生を呼んだ。そして、一夏はそのまま病院に搬送された。

「大丈夫か?」

目を覚ました一夏が、最初に目にしたのは千那だった。

「千那? ここは?」

「病院だ。試合場で意識を失って、そのまま、ここまで運ばれてきたんだぞ」

時刻はすでに九時を回っている。

一夏は、自身の左手に包帯がされている事に気付く。

「左手は二針縫う怪我だったらしい。学年別対抗戦のまでには治るらしいから、試合に支障はないらしいが、無理をしない事に越したことはないらしい」

「つまり、俺は大会には……」

「ああ。一様みんなと話した結果ではな」

「そうか……」

千那は言いづらそうに事を話した。

右手に握りこぶしを作った。全て、対抗戦のためにしてきた下準備が水の泡と化したからだ。

しかし、自分の判断で凜との決闘を選んだから、左手の負傷に気付いていながら試合を続行したから、言いづらいとわかっていながら、自分のために伝えてくれた千那に怒りをぶつける事が出来ないからだ。

「一夏……」

「悪い。少し、一人にさせてくれ」

全てが、自分の不甲斐なさ。一夏は憤懣していた。誰にぶつける事が出来ずに……。

千那は、何かを言いかけるも押し殺し、静かにその場を後にした。

「ごめん……。千那」

千那が居なくなった後、彼女への謝罪の言葉をもらう一夏。

「悪いのは俺自身だ。千那でも風見音でも無い。あんな状態で続けた俺が悪い。だから――」

一夏は独り言をつぶやいていた時、唐突に部屋の扉が開かれる。

「おっす」

凜だ。彼女は片手を上げて、何気ない顔で部屋に入って来た。

「風見音！？ お前、何で」

「凜でいいよ。それより、手。大丈夫なの？」

驚いている一夏を気にせずに、凜は先ほどまで千那が座っていた椅子に腰かける。

「あ、ああ。針で縫ったみたいだけど、すぐに良くなるらしい」

「そう。良かった」

凜はそう言うが、それほどまでに気にしてなさそうな様子で彼の手を見ていた。むしろ、どこか怒っているように見える。

「ところで、何しに来たんだよ？　ただ見舞いに来てくれた訳じゃないんだろ？」

「あんた、嫌な言い方するわねー。ま、そうだけど……」

凜は、ポケットから小型ディスプレイを取りだし、電源を入れる。すると、映りだされてきたのは、ある試合の様子であった。

「今、ヒューイが学校に来ていないのは、知ってるでしょ？」

「？　ああ」

「あいつ、今スリランカに居るんだって」

「スリランカ？　何で」

「スリランカは、IAでも有名な国の一つ。世界選手も輩出されている国。あいつはスリランカのIA学園から招待状を渡されたのよ。

最初は断ったみたいだけど、あんたにやられて、一ヶ月間だけ、向こうに滞在して、対抗戦に備えてるみたいよ」

凜は淡々と話す。画面内で戦っているのはヒューイだ。エリアの中を駆けまわり、向かってくる相手を次々と打倒していつている、彼の實力は、スリランカの選手相手でも引けを取らないらしい。

「ここ」

彼女は目を細め、一言つぶやいた。

ヒューイが、敵をなぎ倒していつていたその時、一人の巨体の黒人選手が仁王立ちしていた。

「こいつは、カール・ダルギシアン。世界選手たちからも一目置かれている期待の選手よ」

カールは、ソーマを展開すると、彼をも超える巨大な槌が具現化される。槌を振り回し、ヒューイへと突進して行った。アサルトライフルを連射するが、予想ももつかぬ身のこなしで躲し、一気にヒューイの懐へと入り込んだ。そして、槌を横殴りに振り回す。

だが、振るわれた先にヒューイの姿はなく、試合場から彼の姿が

消えた。驚愕するカール。次の瞬間、彼の姿が消え、代わりにヒューイが現れたのだ。

「え？ 一体何が？」

「おそらく、カメラにも見えない所へ逃げ込んで、カールの死角に立ったんでしょね。そして、アーマーの宝石を破壊して見せた。と、まあこんなもんでしょ」

一夏の混乱を、凜は推測の内を話してやった。そのまま、ヒューイは敵本陣を襲い、一人で陥落させてしまった。

「これが、今のあいつの実力。あたしたちより遙かに力をつけてるわ。正直、今からあたしの弱点を克服するには無理がある。勝てる気がしない」

ディスプレイを閉じ、自分の非力に、悔しそうに爪を噛む。

一夏も、今の彼の実力が、模擬試合の時よりも圧倒的に上がっている事に驚きを隠せない。彼も力を付けてきたが、それでもヒューイには遠く及ばないかもしれない。

「でも――」

だが、一夏は笑っていた。

「相手が強い方が、燃えるだろ」

そう、彼は心から思っていた。新に完膚なきまでにやられたあの時の自分は克服した。今彼を動かすのは、燃え上がる闘志だけだった。

「あいつも、強くなってるんだ。こんなことで、休んじゃいられない。みんなに言って、俺はあいつと戦う」

怪我した左手を見つめる。闘志によって、先ほどの怒りはすでに消えていた。クラスの皆を説得し、対抗戦に出られるようになるにはどうすればいいか。一夏はそれを考え始める。

「……そう言えば、あんた、何で左手を怪我してる事を言わなかったのよ」

凜が、彼の左手を見ながら、当然の質問をした。

「かなり血が出てたし、ホントに焦ったんだからね!？」

「ご、ごめん」

ここに来て、怒りが収まりきらなくなったのか、一夏に詰め寄り、言葉を吐く凜。彼は気圧され、ただ謝る。

「でも、止めちゃいけない気がしたんだ。俺の力を試す絶好の機会だったしな」

「だからって……。試合なら、日を改めて出来るのに」

「とりあえず、席に戻れ」

一夏は凜に席に戻るように示唆した。渋々席に着く彼女は、納得いかず悶々としていた。

彼は、小さくため息をつきながら苦笑いする。

「それに、みんなのためになりたかったからな」

「え？」

凜は一夏の言葉に、ポカンと口を開けたまま呆然としていた。

みんなのために。それが、一夏の本来の目的。ヒューイに勝ったと言うのは嘘。クラスの仲間たちはその事を知らずに自分を誉め称えてくれた。それが、さらに彼の心を深く抉った。

だから、彼はその嘘を少しでも真実に近づけようと考えたのだ。

今回の凜との戦いで勝てば、ヒューイとの戦いに信憑性が増す。

「でも、負けちまったけどな」

一夏は照れ笑いしながら、頭を掻いた。

「……はあ。あんた、馬鹿ね……」

凜はそんな彼の姿を見ながら、深いため息をつく。

「今回は、あんたの左手の負傷があったから、痛み分けよ」

「でも、負けは負けだし――」

「あたしが納得いかないのよ！ また今度、今度こそ正々堂々勝負しなさいよ！」

ビシッと彼に向かって指差し、再び勝負を申し込んだ。前とは違い、お互いの実力を確かめ合うための平等な試合を。

「ああ。わかったよ」

「よし！ 次は学年別対抗戦だよ！」

凜は、小指を出してきた。指きりだ。一夏はそれに応じ、二人は指きりをして、約束を交わした。

「絶対だよ」

凜は、今までに見た事のなかった満面の笑みを作ったのだ。

その笑顔に、一夏はドキッとした。彼が見てきたのは、ブスとした態度が多かった故に気付かなかったが、凜はなかなか綺麗な顔をしている事に気付いたのだ。

「なんて、言うかお前」

「？」

一夏の途切れ、途切れのセリフに、凜はキョトンと首をひねる。その仕草にまた胸の鼓動が鳴る一夏。

「可愛いな」

「！？　な……………！？」

ボソツと言ったのだが、彼女には届いていたようで、みるみる顔が赤くなっていった。

「フンゲバ！？」

一夏は右頬を殴られる。

「バツカじゃないの！？　あんたは、えっと、なんて言うか、バ、バ、ばー！ーか！！？」

赤面した顔で、言葉が浮かばず馬鹿を連呼する凜。そして、そのまま部屋を出ようとした。

「風見音」

右頬をさすりながら、一夏が凜を呼び止める。

「来てくれて、ありがとな」

「……………フン！」

一夏の方を見ず、赤い顔をさらに赤くし、部屋を出て行った。

「……」

枯ヶ矢が、一夏の部屋を遠くから眺めていた。

彼は、決して入ろうとはせず、ただ見ているだけだった。安心したのかホッと息を吐くとそのまま帰ろうとする。

「会いに行かなくていいのか？」

桔ヶ也に声をかける人物が。スーツを着こなした男は、彼に何の警戒心も持たずに近寄る。

「命に問題はないんだ。それに今日はもう遅い。明日にでも会いに来ればいいさ」

桔ヶ也もスーツの男の方を向き、警戒など全くない朗らかな笑顔を作っていた。相手を信頼しきった表情。この二人には警戒など無縁の話だ。

「そうか……。だったら、今日の所は帰るか。ダズも意識を取り戻したし、一週間ぐらいすれば復帰できるそうだ」

「そう。よかったよ」

桔ヶ也は心から安心し、肩の重荷が取れたみたいでダランと近くに置いてある椅子に腰を下ろす。

「両組織どちらにも被害がなくてよかった。でも、アサシンたちがすでに東京に来ているのは確かだろう。常に奴らへの警戒はしておくべきだ。ダズは俺たちが護る。お前は、自分の身の安全を確保しておけ」

「うん」

桔ヶ也が男の言葉に頷く。立ち上がり、二人は病院を後にする。

一夏 VS 凜（後書き）

以上です！

今回は、一夏と凜の戦闘。両者が引けを取らない戦いが作れたと思います。

さて、次は遂に学年別対抗戦です。Cクラスがいかに戦っていくか検討している所です。裏組織の方も動きを見せます。東京に潜んでいるアサシンたちがどう動いていくかを描いていきたいと思っています！

学年別対抗戦

トルコのとある建物。そこに裏組織――アサシンたちが集まっていた。

そこへ、静かに扉が開かれる。

マリアンが扉の方へと視線を向ける。

「お帰り。アドハー」

扉から部屋に入って来たのは、ローブに全身を覆っていたアドハーだった。彼女はフードを外して、組織のメンバーたちを見回す。

「なんだ？ 組織の者たち全員の集会ではないのか？」

「今回集まるのは、幹部クラスの者だけ。あとはの者たちは待機命令を出しておいた」

部屋にいたのは、幹部クラスである六人のみ。今来たアドハーを入れて七人だ。そこには古参者もいれば、新参者もいる。

幹部にもレベルがあり、数字の小さい方から階級が上の者になる制度。レベル1であるフェデリゴ。それに続きレベル2マリアン。無精ひげを生やした男、レベル3ロベール。空中ディスプレイを弄っている女、レベル4カテリーナ。ダンベルを持ち上げて訓練をしている男、レベル5バルバリーゴ。日本から帰還し、この部屋へと到着した、レベル6アドハー。そして、スリランカで反乱討伐任務を与えられているレベル7パッツィ。

カテリーナ以降の者たちは、三年前に新しく編成された新参者たちである。古参者たちであるフェデリゴたちは十年以上所属している者たちだ。ロベールにすれば、かれこれ二十年近くになる。

「ふーん。そう言えば、肝心のリーダーさんは、帰還していないみたいだけど……」アドハー。

「あいつは、今回の会議には参加しない」ロベール。

「何い！？ おい！ 聞いてねえぞ！？ あのガキは、俺たちを集めて自分自身は来ないとはどういう了見だ！ 俺は遙々、ネパール

からここまで来てやったんだぞ!？」

怒りを露わにしながら、ダンベルを握りつぶすバルバリーゴ。彼の使っていた物は二トンだ。それを両手に一つずつ持っていたので、計四トン。その二つを片手で握りつぶした。恐るべき握力だ。

ロベールは、耳うるさそうにしながら、彼を見る。

「俺に言うな。あいつの考えてる事は、俺にはよくわからん。エツイオの爺さんが何故、あいつを指名した事もな」

ロベールの言葉には棘があった。彼もまた、エツイオの下した判断に、不満を抱いている一人なのだろう。

「ロベール。あなたはまだ、そのような事を言っているのですか？」
そんな彼の事を、呆れながら溜め息をつく人物。

パッツィだ。

「先代が、下した決断ですよ。そろそろ認めたらどうです？ リーダー交代で自分のレベルが下げられたからと言って、ウジウジとみっともないですよ」

「パッツィ……！ レベル7の新参加者が、よく吠えたものだ……！」

「ええ。所詮レベルのただの飾り。私たち幹部に上下などないでしょう」

「年功序列って言う日本の言葉を知ってるか？ 年上の者を敬えって言葉だ。それを今から、お前に教えてやるぜ」

言うと同時にロベールは座っていた椅子から姿を消す。一気にパッツィの方へと近寄った。振り下ろされる右手。対するパッツィも、左手を彼に目掛けて突き動かす。

しかし、

「「!？」」

二人の手は、互いに届く事はなかった。その彼らの手を抑える第三者――フェデリゴの手があった。

フェデリゴは彼らの間に立ち、鋭い目で威圧する。

「これ以上、組織内で揉め事を起こすのならば、我が―――殺す

ぞ」

恐怖によって両者は鳥肌を立てる。

フェデリゴの言葉には、冗談ではなかった。彼にはこの場で二人を殺すだけの力がある。彼らもそれがわかつているからこそ、己の中に恐怖の感情を抱いているのだ。

「さがれ。ロベール」

「……チッ!!」

舌打ちながら、振り上げていた手を収めるロベール。

それを確認し、パッツィも身を引く。

「今回の会議は、あいつが我らにアジア領域の防衛の全権を与えられた」

「ハ!? それって……」

「そうだ。我らがそれぞれに管轄している領地。それを我ら独自の権利で動かしてよい、という判断だ」

フェデリゴの言葉にマリアン以外の幹部たちは、驚愕の表情を作る。

「以上だ」

彼は言う事だけ言い、そのまま部屋を出ようとする。

「ちょ、ちよっと待てよ」

彼を止めたのは、バルバリーゴだった。

「それはつまり、他組織に攻められて落とされたら、全て俺たちに責任が出るってことじゃねえか!？」

「そうだが。それが、どうした？」

「な……!？」

当たり前のように返され、愕然とするバルバリーゴ。これは、仲間同士の絆も試されている。もし、仲間が危険に陥った時、それを助ける気があるかどうか。たとえ、助けなかったとしても自分には非はない。利を作るか、非が出来るか。それを考えた上で行動しなければ、ならない。

「他には？」

フェデリゴは、他の者へと視線を向ける。誰も反応を示さなかった。そして、そのまま彼は部屋を後にする。

そんな彼の姿に、期待と歓喜の眼差しを向ける幹部が一人。

（やはり、フェデリゴこそが……）

そして、今回の集会は幕を閉じる。

凜との試合から十一日経った。今日は全校生徒が待ちに待っていた学年別対抗戦。一日目。この学院の行事の一つであり、三日間かけて行われる大行事だ。

一年のクラスは全てで六つ。総当たり戦であり、全てのクラスと戦い、勝ち数の多いクラスが優勝となる。

今回、一年の優勝候補であるのはBクラス。学年ランキングトップ1とトップ2が所属しているクラスだ。期待しない訳がないのだろう。

ちなみに、学院以外の者たちも訪れるので、観客席は年々満員になる。

「うひょー。いっぱい人が来てるな」

一刀は人の多さに圧倒していた。Cクラスの待合室は、観客席を眺める事が出来る場所にある。既に試合場観客席は満員。試合開始の一時間前で既にこれである。それほどまでにIAと言うスポーツが人気であることが証明される。

Cクラスの最初の試合相手はEクラス。彼らもこの日のために、ものすごい訓練をしていたのだ。油断出来る相手ではない。

クラスの者たちは一様に緊張感が漂っているの中で、一刀だけが、今のこの状況に楽しんでいるようだ。

「おい一刀。いい加減、おとなしくしろ」

千那が彼の頭を軽く叩き、襟元を掴んで席へと着席させる。

「まったく。試合の時間が迫っていると言うのに、緊張感がなさ過ぎだぞ。お前は」

「ダメダメ。緊張とかしてたら、本来の実力を出せる訳ないぞ。もつとこの雰囲気を楽しまないといけないぞ」

「むう。確かに一理あるな」

「納得しちゃうのかよ」

二人の話に入って来たのは一夏だ。

「お。一夏！ 見ろよ。人がいっぱいだぜ。俺たちの試合見るだけに来てくれたんだな」

「ああ。それにしてもすごい数だよな。この辺に住んでる人数は相当だな」

「ホントだな。仕事しろよ！ って感じだな」

「あそこにいる人なんて、ヨボヨボじゃねえか。年幾つだよ」

一夏と一刀は観客席にいる人たちを見て、それぞれ勝手に思った事を口に出して盛り上がっている。教室には彼らの笑い声がこだまする。

「お前たち……人の悪口を言うのはそこまでにしろ」

千那が彼らの間に入り、彼らの頭頂部に拳骨を入れる。

「~~~~ッ！？ でも千那。俺たち暇でしょうがないぞ。さっさと試合はじめて欲しいよ」

一刀は涙目になりながら言った。試合まではあと三十分ほどだが、その前に開会式が始まる。しかし、それは代表者たちだけが集まり行われるので彼らには関係がない。

しかも、決してCクラスから始まるとは限らない。試合場は全部で六つ。一学年で使われるのは二つずつだから彼らに最初の試合の権限が来るのは三分の二の確立なのだ。

これらの事を行うので、試合開始はもう少し先延ばしになる。

「壇がすでに開会式のために向かっている。試合が無くなる事はないのだから、もう少し待て」

「長いな〜。大体、生徒たちの登校時間が七時ってのが早すぎんだよ。始まるのはこんだけ遅いのによ〜」

「仕方ないだろ。学年別対抗戦は上都学院にとって重要な行事だぞ。

この行事のために、わざわざ世界中の人たちが見に来るんだぞ」

「世界中？」

千那の言葉に、首を曲げたのは一刀ではなく一夏だった。

彼女は一夏の方へと向いた。

「上都学院は世界中のIA企業との繋がりがある。自分たちの作りだしたソーマやアーマーの性能のチェックをしに来たり、他の企業たちの技術力を調べに来ていたりするんだ。彼らが、試合が始まるまでに来られるようにこれだけの時間が設けられているのだろう」

「それだけじゃなく、IAスポーツ関係者も来てるからな。生徒たちの中で優秀な成績を残した者には、直々に彼らの方から声かけられるのって話だぞ」

千那の後に続いて説明する一刀。彼は彼女に言われて、渋々ながら席に着き直していた。

一夏は「へー」と答え、あまり関心はなさそうだった。

「あれ？　なんだよ。お前の事だからもっと驚くと思ったけどな」

「うーん。確かに驚いたけど、一年の俺たちがそこまでいい成績を出せる訳ないしな。勢い込んで失敗するのは嫌だしな」

一夏は至って冷静に答える。

彼の言う通り、一年生に声をかけられる事はまずないだろう。多くは三年生で、二年生が稀に声をかけられる程度だ。中学でIAに関わる事はないだろうから、一、二カ月程度練習した者が呼ばれる事がないのだ。

「それに、今の俺の手はこんな感じだからな」

一夏は自分の左手を二人に見せる。完治はしており、動かす事も練習することにも問題はないのだが、一時間の練習で左手に痛みが走ったのだ。医者が言うには、今までの練習の反動がここにきて置き始めたのではないかと推察した。

そのせいで一夏の手には今、包帯が巻かれている。

「この手じゃ試合に出ても足を引っ張る。今回は後ろで守備に回るよ」

「いいのか？」

聞いたのは一刀だった。彼の眼は真剣であり、さっきまでのふざけた感じはどこにもなかった。

一夏は彼に向かい頷いた。

「別に諦めたわけじゃない。ただ、俺が今回出たい理由は、あいつともう一度、戦いたいんだ」

「……ヒューイだな」

そう。一夏の言ったのは、Eクラスとの試合では守備に回るという意味だ。彼は模擬試合で決着がつかなかった、ヒューイとの戦いに出させてくれればそれでいい。

最初は、彼の手を心配し反対されていたが、千那と一刀だけは違った。

>やれるのならやらして見ても構わない。こちらが無理だと判断したら、すぐに退かせるく

それが二人の論だった。一夏は二人の論に頷き、残り仲間たちも遂に首を縦に振った。

「指揮権者は俺だ。一夏。Bクラス戦以外は、俺はお前を使う気はないからな」

「ああ。それでいい」

一夏は真っ直ぐな瞳で一刀を見下ろす。そこに確かな決意を感じ取った彼は、それ以上何も言わなかった。

そこへ壇が息を切らしながら、部屋に帰って来た。どうやらいつの間にか開会式が終わっていたようだ。

「みんな！ 俺たちの試合がもうすぐ始まるから準備してくれ！」
壇のその言葉を聞くと、Cクラスの者たちはすぐに行動に移り始めた。

間もなく、彼らの試合が始まろうとしていた――。

学年別対抗戦（後書き）

以上です。テスト期間が過ぎ、やっと執筆に戻る事が出来るようになりしました。長く待たせてしまい申し訳ないです。

さて、次回はEクラス戦になります。彼らとの試合に苦戦するクラス。そこに一刀の策が発動されます。

船上の戦い Cクラス 対 Eクラス

時刻は午前十時。

開会式が終わり、一年生たちはそろそろと試合場へと入場する。

今回一年生たちのために設けられた試合場は第五、第六の二つ。

第五ではAクラス対Fクラス。第六にCクラス対Eクラスの試合となっている。待機となるB、Dクラスの者たちは試合場への立ち入りを禁止されている。これは、次対戦チームのデータを盗むといった違反行為をさせないための処置である。彼らは入出禁止の代わりに待機室の中でのみのモニター観戦だけが許される。

『間もなく。Cクラス対Eクラスの試合が始まります。各クラスの代表者は、ステージ中央にお集まりください』

試合場に設置されたスピーカーから代表者の二人が呼ばれる。

Cクラスの代表は、もちろん壇。対するEクラスの代表者は女子生徒であった。気品のある、その顔からどこかの令嬢である事を思わせる。

二人はステージ中央に立ち、互いに宣誓である握手を交わし合う。それを終えると、二人はステージを後にする。すると、試合場が、その姿を変え始める。今回の試合フィールドへと変形を始めたのである。所々に工具やら部品など様々な物が散らばっている。実際に表現されたプールのような場所も生まれる。

『今回のステージは、建築中止された人口船です』

と、実況者は伝えた。

彼の言う通り、辺りは出来かけのままの床や完成せず、水が漏れているプールのなどが存在していた。あえて出来た地形ではなく、不完全なものにすることで、生徒たちの知恵を揮わせようとしているのだ。それに、その方が観客者たちを盛り上がらせる事が出来るからだ。

「うわっ!?! ここ滑るぞ! 気を付けてな」

Cクラスのある男子生徒が皆に注意を呼び掛ける。

現在は作戦時間中。三十分設けられた時間で地形を理解し、味方と敵の拠点の場所を理解する必要と敵の行動パターンを予測し、そのために自分たちがどのように動くかを考えなくてはいけない。

「一刀。今回のステージは所々に水が進路上を浸食していて、進みを邪魔してきている。しかも水の浸水は続いたまま。短期決戦に臨まなくてはならないんじゃないか？」

言い放ったのは壇である。

彼の言う通り、敵拠点への道には水が溢れ返り、行く手を遮っている。そして今回のステージは船と言う事もあって外野は水である。その水が何時、船の中へと入り込んでくるかは時間の問題。ならば、長期戦に持ってきては両クラスともお終いである。

「そう……だな。あちらも同じことを考えてくるだろう。なら、大事なのは陣形と勢いになる」

一刀も壇の言葉に賛同し、そのための陣をひき始める。

短期決戦となれば、両クラスとも時間が惜しくなるのは言うまでもない。攻守どちらも陣を作り、戦う事になれば勢いに乗った方が優先権を得られる。だが、勢いに負けたからと言って、そこで陣形を崩してしまえば、相手は一気に拠点へと流れ込んできてしまう。それを防ぐためには、いかに相手の勢いを殺すか、いかに勢いを作り、相手の陣を崩すか。これが勝負の分け目になる。

「今回の勝敗は拠点の落としなんだろ？　だったら、拠点間に陣を作る必要があるな」

喋りながらも陣を作りあげる一刀。そんな彼の動きを黙って見つめるクラス一同。

拠点落とし。つまり、武器庫、兵糧庫、本陣の三つが陥落されたら試合終了。リーダーの有無は、今回の試合には関係ない。

Cクラス、Eクラス共に生徒の数は四十人。一刀は武器庫と兵糧庫にそれぞれ四人体制の隊を二隊ずつ作り上げ、配置して行く。本陣の方に三人体制の隊を一つ。攻撃側を四人体制で四隊作る。その

隊の中には千那がいた。残った五人は一刀、壇、早百合と女子生徒の白雪亜美^{しらゆきあみ}。そして、一夏である。

「俺と壇は本陣に残って、全体の指揮を執る。一条と白雪は二拠点の情報係として回ってくれ」

一刀の言葉に三人は頷く。

「一夏はここに残り、いざという時のために待機。以上！」

一刀の最後に、クラス全員が驚きの表情へと変わる。一夏自身も彼が何を言っているのかわからず、ポカンとしていた。

「いやいや、ちょ、ちょっと待てよ一刀！？ 一夏は風見音との試合で左手負傷してるんだぞ。まだ完治していないこいつに、出陣しろって言うのか！？」

「完治はしたんだろ。動けない訳じゃないんだ。行けるのなら行ってもらう」

「いや、でも、お前——」

壇は慌てて、一刀を説得しようとするが、彼の気持ちは揺るがなかった。壇が言っても聞く耳を持たず、一蹴する。他の者たちも介入し、壇の手助けに入る。みんな、一夏が心配だからこそ、非情な彼の考えを改めさせようとしているのだ。

しかし、当の本人である一夏は違った。

「いいよ」

一夏は自然と、そう言っていた。口論していた彼らが一斉に彼の方へと向き直る。

「もしも、何かあった時には俺が動くよ」

「でも一夏——」

「完治は確かにしているんだ。なら、行ける筈なんだ」

一夏の心は決まっていた。模擬戦の時も凜との試合の時も、クラスの皆は彼の事を自分の事のように心配してくれた。

それは、一刀も同じだ。

他の者たちは彼の身体を心配していた。

一刀は、一夏の心を心配していた。ヒューイとの戦いの時だけに一

夏を出すのは、彼の心に不安と焦りを作ってしまうのではないのか。いきなりメインの戦いに出した所で、本気で戦う事など出来るのかと彼は心配したのだ。

ならば、その前の試合で感覚を——経験を積ませるべきだと考えたのだ。

一夏はそれに気づき、彼の無謀だと思われる話に乗ったのだ。

「それに——」

一夏は一刀の方へと視線を向ける。

「短期決戦———だろ？」

不敵な笑みを作りながら、言葉を紡ぐ。

彼もまた口元に笑みを作り、一夏を見る。一夏の意図がわかり、強く頷いた。

「……はあ。わかったよ。好きにしてくれ」

根負けし、ガクンと肩を降ろす弾。だが、彼もまた笑みを作っており、二人への信頼を見せていた。

「よし、みんな！ この試合。ゼツタイ勝とうぜー！！」

壇の勝利への勢いに、Cクラス全員が「おー！！！？」と声を張り上げる。

そして、遂に試合を始めるゴングが鳴った。

試合場となるために船はとても大きく、ヘリコプターが六台は置けるであろう幅がある。それでも模擬戦の時よりも拠点は小さく、中に三人程しか入れなかった。

船の上には身を隠すための障害物が多く置かれている。船の上には、荷物が乗った大きな箱が幾つもあり、作り途中で放置され、水が漏れているプールが三つ。その他もろもろ。

二階には武器庫と兵糧庫。三回には本陣がそれぞれの部屋として設けられている。残りは客室。レストラン。フィットネスクラブ。スパ。美容室。ショップ。劇場。カジノ。医務室だ。

Cクラスは船首。Eクラスは船尾側寄りに配置されている。

「一刀。攻撃部隊は全員、配置に着いたぞ」

『よし。じゃあ、まずは手始めにA小隊は前進してみてくれ。ただし、無理はするな。相手の攻撃が始まったらすぐに退却。いいな?』
「了解」

Cクラス攻撃部隊は船上まで上り、それぞれ指令された場所に付く。その中で一番先頭にいた千那が率いるA小隊が前進を始める。Eクラスたちの攻撃を誘っているのだ。

中央部まで行くも、彼らからの攻撃は無し。さらに進み、船尾側の階段まで着いたとしても襲われる事はなかった。

「相手側の攻撃なし。俺たち、奴らの階段付近に居るんだが……」

『……誘いには乗らないか……』

「どうする? このまま攻めるか?」

『……いや、いい。お前たちは、階段周辺での敵の警戒に入ってくれ』

一刀は襲撃はさせず、彼らに周辺警戒へと当てる。

『B小隊は、中央部の警戒。Cは船首階段の守備。Dは地下から相手拠点を攻めろ』

攻撃部隊全てに指示を出し、守備の者たちにも警戒を強化するように言った。Cクラス全員が一丸となって彼の指示を聞き、その通りに動き出す。

B小隊が中央部に付く。中央部には大きなレストランが建っており、そこに設置された鏡から船全体が一望できるようになっている。彼らはレストランの中へと入る。身を隠すためと敵観察のために使おうとしたのだ。

その時――

「「「!?!?」」」

銃弾と矢が彼らに向かって襲い掛かって来た。どうやら、Eクラスの者たちが先にこの場所を占拠していたようだ。

彼らは反射的に身を隠す。応戦しようにも彼らの攻撃の嵐は止む

事はなく、隠れているテーブルに穴が出来始める。

「クソ！ 一体、何人いやがる！？」

「わからない！ でも、これだけの数を撃って来るって事は、相当の人数なんじゃないか」

「とりあえず、銃や弓にはリロードの時間がある。その瞬間を狙って反撃だ！」

四人は互いに頷き合い、攻撃が止むのひたすら耐えた。徐々にEクラスたちの攻撃の勢いが小さくなっていった。だが、彼らの隠れているテーブルの損傷は激しい。

そして、遂に銃弾と矢の嵐が治まる。

「今だ！」

B小隊を率いる男子生徒が戦闘し切って姿を出す。ソーマを展開し、彼の手に槍が形成される。

しかし——その槍が突如、破壊される。

それに気づかされることなく、顔面に襲い掛かった拳によって彼の身体は、レストランの外へと吹き飛ばされる。吹き飛ばされた先に彼の姿はない。アーマーのコアを破壊されたようだ。

彼の消えた姿を見つめ、愕然とする残りの小隊たち。一瞬の出来事に何が起こったのかわからないのだ。彼の槍を破壊したのは銃でも矢でもなく、剣などの武器ではない。ソーマの力がコーティングされた脚だ。

「強化……ソーマ……」

小隊の一人がぼそりと呟いた。

強化ソーマ。凜が使っていた物と同じ、装備した相手の身体能力を上げるソーマ。

彼を吹き飛ばしたのは、栗色の髪をした女子生徒だった。その華奢な体躯に似合わない動きで彼を戦闘不能にさせたのだ。

彼女は、残った彼らへと振り向き、ファイティングポーズで構える。

「こ、この野郎……」

男子生徒が具現化させた剣を彼女へと振り下ろす。

彼女はそれを擦れ擦れで左へと躲し、彼の懐へと入り込む。拳を二、三発を腹部に叩きこむ。後頭部を持ち、膝を撃ち込む。そして、両手を絡み合わせ、倒れ込もうとする彼の頭へと思いつき振り下ろした。流れる動きを食らい彼のアーマーの耐久力は一気に零となつてしまった。

「あなた……まさか……城島真さん……!？」

女子生徒が震えながら、相手の名を呼んだ。

それに応えることなく、真は彼女に向かって地を蹴り上げる。飛び込んでくる膝蹴りを何とか躲し、ソーマを具現化。具現した三叉戟で彼女の腕へと突く。

しかし、彼女は避ける動作に入らなかった。そのまま突きを受け入れ、アーマーの耐久力が減る。突いた三叉戟を掴み、彼女を引き寄せる。彼女の抵抗に効果はなく、真は自信の腕を彼女の腕に絡めて投げ飛ばす。壁へと激突し、苦悶の表情をする。奪った三叉戟を彼女に向かって投げ入れる。当たった先は彼女のアーマーのコア。コアを碎かれた彼女はそのまま姿を消す。

「動かないで!!」

残ったのは一人の女子生徒。彼女は真に向けて銃を向ける。正確にはアーマーのコアがある左の太股。あそこを撃たれば、真は戦闘不能になる。これでは迂闊に動く事は出来ない。

「……無駄だよ。僕には通用しないよ」

しかし、真は臆することなく彼女へと歩き出す。

「言い切れる理由は？」

「僕のソーマがそれをさせないからだよ」

真が一步一步近づいてくる度に、女子生徒はジリジリと後退する。「試して見るかい……?」

真は優しい笑みを作りながら彼女を挑発する。笑みを見るだけならば、線が細く、綺麗な顔をした美少年のようだ。

「ええ! そうするわ!」

女子生徒は銃弾を放つ。狙った先は彼女の太股。吸い込まれていく銃弾は彼女の身体に当たる。

しかし、コアは破壊されず、銃弾の方が撃ち負けてしまった。

「……………え？」

非常識な光景に女子生徒は絶句する。真は硬直してしまった彼女へと突進する。肘にセットしていたコアを破壊する。

そのまま彼女も姿を消す。CクラスのB小隊を一人で全滅させてしまったのだ。

全滅したのを確認し、身を隠していたEクラスの他の生徒たち六人が姿を見せる。

「城島……。他のCクラスたちに気付かれてしまっているだろうな」「そうだね。みんなは船尾付近に居る彼らを殲滅してくれ。僕は船首に居る者たちを倒すよ」

彼らはその指示に頷き、船尾へと向かう。

「なんだ！？ 今のは」

千那は中央部で起きた衝撃に異変を感じる。

「まさか……。！？ Eクラスの奴ら。あそこに布陣してたんじゃない？ ……！？」

「クッ！ なら、助けにいかないよ」

「待て！」

仲間たちが助けにいかうとするが、千那がそれを制止した。

「何でだよ！？ 九霞院」

「今ここを離れては陣形が崩れる。それに、一刀も言っていただろう。陣形が崩れてしまつては、こちらは勢いに乗る事が出来ない」「グッ」

千那の言葉に彼らは言葉を濁す。

陣形が崩れてしまつては、Eクラスたちに勢いを与えてしまう可能性が出てくる。そうすると、こちらに勢いを作る方法が難しくな

ってくる。それだけは絶対にさせてはならない。一刀はそう言っていた。

「今は耐えろ。耐えるんだ！」

「……でも」

男子生徒は唇を噛み締める。彼もわかっているのだ。勝つためには一刀の作戦に従う必要があるのだと。

千那は、ハアと溜め息をつく。彼女はポケットに入っていたカードを取り出す。それが無線機の役割となっている。彼女は一刀と連絡を取り、状況説明に入る。

「一刀。中央部で衝撃があった。おそらく、Eクラスとの戦闘が始まったのだろう。私たちはどうすればいい？」

『……中央の奴らが、どうなったかはそこからは見えないのか？』

「ああ。でも嫌な予感しかない。彼らが全滅している場合、陣形が崩れてしまう。そうしたらEクラスに勢いが生まれてしまうのではないか？」

『十中八九そうなるだろうな。不味いな……』

一刀は忌々しそうな声を出していた。

「どうする一刀。私たちは階段を下りて、拠点を攻めるか？」

『いや、それはするな。それでは、相手の勢いは死なない。士気が高まった彼らは一気にこちらへと流れ込んでくる。それだけは避けたい』

彼は千那の提案を否定する。カード越しの彼から何かを考えている感じが伺える。だから彼女は反論はせず、彼の次の言葉を待つ。『…………陣形は崩してはならない。だが、彼らの勢いを殺さなくてはならない。そのためには――』

そこで、一刀は一度息を吐いてから言葉を放つ。

『彼らを船内に入れるな。そこで全員倒せ』

彼はその指示を彼女たちに出す。それだけ伝えたと通信を切った。『聞いたか……？』

千那の声に、彼らはそれぞれ笑みを作りあげていた。彼女は頷く

と立ち上がる。彼らも立ち上がり、ソーマを具現化させる。

すると、中央部でまた衝撃が起こる。中から、Cクラスの仲間たちではなく、Eクラスの者たちが姿を現す。

「来たか……」

千那は中央部の方を見ずとも、彼らが仲間ではない事がわかった。Eクラスの者たちはソーマを具現化させ、銃や弓を撃つ。

彼女もまた、青き光を放つ長剣のソーマを具現化させる。そして、その剣で弾丸と矢を見ることがせずに切り落とす。

そして、小隊は一気に彼らへと攻めよせる。銃を持っているのは四人。弓を持っているのは二人。彼らは止めることなく発砲していた。

「私が先陣を切る！」

千那は先頭に立ち、彼らの弾丸と矢を切り裂いていく。鍛え上げられた彼女の動体視力を持ってすれば、それらの軌道が見えているのだろう。

「な、なんだあいつ!？」

Eクラスの彼らは、千那の俊敏な動きに動揺していた。そのせいで彼らの攻撃が緩くなった。

彼女はその瞬間を逃さなかった。一気に距離を縮めていき、長剣の間に彼らを入れ込んだ。長剣を振り下ろし、一番手前にいた男子生徒のソーマを破壊する。彼のコアも一瞬で砕いた。

「お前……!？」

右側の生徒が銃を発砲。ほぼゼロ距離から放たれた弾丸を左手で受け止めた。無理に受け止めたためにアーマーの保護が上手く効かず、手に痛みが走る。

「クッ!？」

千那は苦痛に呻くも、長剣で彼の銃を破壊。尽かさずアーマーのコアを砕いた。

立ち上がり、他の生徒たちの方に向くが、すでに勝敗は決していた。仲間たちが彼らを打ち倒していた。

彼女はホッと息をつく、再びカードを取り出した。無線を繋ぐとするが、またしても衝撃が起こった。

「なんだ!? こいつら以外にも他に誰がいるのか!?」

男子生徒の一人が叫ぶ。

するとカードが振動し、一刀からの連絡が入る。

『千那! そっちの様子はどうだ!?』

「Eクラスの者たちは倒した。だが、ついさっき衝撃が起きた。どうやらまだいるのだろう。これから私たちは船首の方へと向かう」

『いや、全員で向かう必要はない。先ほどB、C小隊との連絡が途絶えた』

「!?」

千那は一刀の報告に驚きを隠せなかった。つまり、これで船の上に残ったCクラスの生徒は彼らだけとなった。

『C小隊からの最後の連絡から、残った敵は一人の筈だ』

「一人? 一人に四人ともやられたのか!?」

またも驚愕する千那。Cクラスの者たちは決して弱くはない。ここまでよく訓練し、連携も組んできた。そんな彼らが、たった一人にやられたなど考えられなかったからだ。

『そうだ。そいつは強敵だ。全員で束になって戦って、全滅されるのは御免だ』

「なら、どうする? このままでは彼らの勢いは殺せないぞ」

『わかっている。だから、ここからは策を使う事になる』

一刀はそう言い放った。

策を使う――前回の試合で彼の策の力を知っている彼女たちは、彼の策を信じて聞いていた。

『いいか? よく聞け――』

真は、船首にいたCクラスの者たちを全滅させた。だが、船尾に向かった彼らとの連絡が途絶えてしまった。つまり、あちらは全員

やられてしまった事を意味する。

『そう……真。あなたは、この勢いを殺さないためにも、彼らを倒したCクラスの者を倒しなさい』

声の主——Eクラス代表石動レナは、自信の使いであり、親友でもある彼女に指示を出した。
いするぎれな

『けど、無理はしない事。いいわね？』

「はい。お嬢様」

見えない主である彼女に一礼をする。レナはそれを伝えると、無線を切った。

真は、船尾の方へと歩き出す。今まで数々の訓練を共にしてきた仲間たちがやられたと思うと、彼女の心中は穏やかではなかった。煮えたぎり始めた怒りを表に出さずに、彼女はある姿を見つける。

「来たか……」

船尾の階段前で、仁王立ちしていたのは千那だった。彼女は右手に長剣を握り、真を睨んでいる。

真は、辺りを見回すも彼女以外に誰もいない事を確認する。

「なんだ？ 君一人か……？」

「まあな」

お互いに相手を警戒し、一定距離からの睨み合いが続く。

「他の者たちはどうしたんだい？ 確か四人ほどいた筈だったけど」

「残念だったよ。襲い掛かって来た彼らと戦って、生き残ったのが私だけだったのだ」

「……」

千那は淡々と言葉を並べる。

真はそれに違和感を感じ、スッと目を細める。

「そうかい……。なら、今船上にいるのは僕と君だけということか……？」

「そうなるな」

千那は真の声を聞くと、長剣を握る手に力を入れ構える。

次の瞬間、前にいた真の身体が彼女の前に現れる。突きだされた

拳を長剣で受け切る。その拳の力で、千那の身体は数メートル先まで押されてしまった。

ジーンと手から伝わる痛み。

（クソ！　なんて力しているんだ！？）

千那は表情と声に出さず、目の前の敵の力に驚愕する。今の一撃だけで両手の握力が損なわれそうになった。

「ふーん。今の一撃を受け止めるなんて、君も相当、訓練を積んでいるんだな」

真は千那に感心した表情を作る。

「でも、僕も負けるわけにはいかないんだ。お嬢様のためにも。ク拉斯の仲間たちのためにも」

彼女の方へと近づいていく。一歩ずつ近づく度に彼女の剣幕が増していく。

「フン！　それはこちらと同じだ」

長剣を構え、千那も真へと接近する。

「真は口元をつり上げ、指をコキコキとならす。

「じゃあ――行くよ！」

地を蹴り、千那へと間合いを詰めていく。

千那も同様に、真へと詰め寄る。

CクラスとEクラスの戦いは続く――。

船上の戦い Cクラス 対 Eクラス（後書き）

以上です！ 今回はC対Eの試合。ステージは船の上としたので、若干書きづらいかとも思ったのですが、それでもありませんでした。次話は、試合の決着がつきます。メインは千那と真の戦いです。

防御強化のソーマ

上都学院の第三試合場裏。

そこに白いパーカーを着た男と黒コートに付いたフードを被って顔を隠している集団がいる。そして、そこに巨体の男が現れる。

「やっと来たか。バルバリーゴ」

パーカーの男は、到着したバルバリーゴへ親しそうに手を振る。バルバリーゴ自身は相手の男に不満げな表情を作る。

「なんだ？ ずいぶん機嫌が悪そうだな」

「当たり前だ！？ 勝手にアジアの防衛を放り投げて、こんな島国に何時まで滞在している気だ！？ しかも、その命を出してすぐに俺に来いとはどういう事だ！ ネパールの守備は完ぺきではないのだぞ。何時、敵組織に襲われるかわからんのだぞ！？」

バルバリーゴは激昂しながら彼の胸倉を掴む。

「落ち着け、落ち着けよ」

男は、苦笑いをしながら彼を宥めようとする。

だが、バルバリーゴの怒りは治まる事はなく、むしろさらに顔を赤くしながら憤慨する。

とりあえず、男に言われ彼は胸倉を掴むその手を下させる。

「まったく。アサシンの長たるお前が、この状態でどうするんだ！

？ 今のお前を見たら、先代のエツイオはどんなに後悔することか……」

「……案ずるなよ。あの人はこんなことで後悔する人じゃないさ」

男はバルバリーゴに背を向けて、歩きはじめる。

それに続き、彼と黒コートたちも共に歩きます。

「それで……、今回俺を呼び出した理由はなんだ？ まさか、観戦しに来た——なんて理由じゃあねえだろうな」

ギロリと彼は男を一瞥する。

男はそれを気にすることなく涼しげな顔で、一つの紙切れを手渡

す。紙には三つの絵が描かれている。一つ目は長く錆びれた槍。二つ目は所々が傷ついた杯。三つ目は大きめのボールだった。

「なんだ、これは？」

「俺の探している物だ。ボールの場所はすでに知っている。槍の在処はわからないが、杯はこの島国にある事がわかった」

「だから、お前はずっとここにいたのか？ アサシンの領地を俺たちに押しつけて！？」

バルバリーゴは、一度静まろうとしていた怒りが再び湧きだしそうになる。

「まあな。だが、この三つを手になれば、結果的にアサシンの平穩に繋がる」

「？ それは一体、どう言う事だ？」

彼の言葉にバルバリーゴは怒りではなく奇妙そうな表情をする。

男は歩みを止め、彼の方へと顔を向ける。その顔は、何かを含んだ不敵な笑みをしていた。

「ここに杯がある可能性がある。俺はそれを探す」

「俺たちはどうするんだ？」

「……ここには、俺たちアサシン以外の裏組織がいる」

「！？ ……アンヴァースとレネゲードか……」

裏組織。その言葉を聞いた途端、バルバリーゴと後ろにいる黒コートの彼らが雰囲気を変える。目を鋭く細め、手に力が籠る。

そこに男はさらに情報を与える。

「そうだ。それに、反乱者たちもな」

「何！？ あいつらが」

バルバリーゴの手に、さらに力が籠る。

反乱者。スリランカで彼らに反旗を翻した者たちの事だ。彼もまた、フェデリゴと同じように反乱を起こす物を許さない。彼らがここに来ていると知ったのならバルバリーゴのやる気は一段と上がる。

「反乱者たちは今日動きを見せるようだ。バルバリーゴ。お前が指揮を執り、奴らの殲滅と裏組織の動きを封じろ」

男は彼らに指示を出す。

バルバリーゴは片手を上げる。すると、後ろの黒コートの集団は一斉に姿を消した。彼もまた、行動に入るために男に背を向ける。だが動きを止め、彼に半分だけ顔を見せる。

「裏組織の方の奴らも、殺っちまってもいいのか？」

バルバリーゴはそう言い放つ。反乱者たちへの怒りとは違う。同等の存在との対立。互角の殺し合いが出来る相手への燃える闘争本能を隠す事が出来なかった。

男は特に何も言わず、バルバリーゴと反対方向へと歩き始めた。それが、答えだった。

「了解————アルタイル」

バルバリーゴは口元をつり上げ、自信も歩き始める。

アサシンの現リーダー

——アルタイルは手に持っている紙切れと見つめ、そしてある試合場の方へと目をやる。

第五、第六試合場の方を——。

千那へと真の右拳が突き出される。突き出される拳の軌道を読み、彼女は腰を屈めてやり過ぎそうとした。

「!？」

だが、屈めたその先に、真の膝が勢いよく彼女へと向かって来た。長剣の柄で防ぐ。

「グッ!？」

千那はその威力の強さに呻いた。耐えきれず、数メートル後方へと飛ばされてしまった。

” —10” ↓ ” 290 ”

真は地を蹴り、千那へと肉迫する。

すぐに長剣を構え直し、近づいてくる彼女に向かって、千那も攻めに入る。青き長剣を接近する彼女に横一閃に斬りつける。

なんと、真はそのまま一閃を避けて千那へと攻撃を繰り出す。拳は彼女の顔面に直撃。その威力に耐えきれずに吹き飛ばされてしまう。置かれていたコンテナらしき容器に激突してしまった。

”－60”↓”230”

千那の体力が削られる。コンテナは彼女の身体によって大きくへこんでしまった。アーマーの保護が効かず、背中の骨が軋み悲鳴を上げた。

彼女は痛みに顔を歪ませるも、すぐにその場を離れた。真の脚が、彼女目掛けて襲い掛かって来たのだ。コンテナに、さらなる大きなへこみを作りあげる。

「ハアハア」

千那は息を切らしながら、床に伏せていた身体を起き上げる。起き上げた途端に、先ほどの背中ของ痛みが沸き上がる。

対する真は汗一つ掻かず、表情一つ変えずに彼女の方に視線を向ける。ファイティングポーズの体勢をとる。

千那もまた長剣を構えようとするが――

パキンと長剣の刃にひびが生じた。

「な、何？」

千那は驚愕した。

（ソーマの状態は完璧だったはずだ。さっきまで、何の問題もなかった。なのに、こんな簡単に――）

そこで、彼女はある事に気付く。

彼女は、真の方へと視線を向けた。

何故、彼女の耐久力は削られていないのか？

何故、彼女は自分の攻撃を避けようとしなかったのか？

真が次の攻撃を開始した。

千那は二つの疑問を感じながらも、対応するために地を蹴り上げる。長剣を下段から斬り上げ、真の顎を狙う。真は長剣を気にも留

めずに、また彼女の顔面を狙いにかかる。

長剣と拳がぶつかり合う。ソーマの力によって強化された拳は、長剣の刃に引けを取らなかった。

先に動いたのは――真だった。

真は脚を振り上げ、千那の顎へと繰り出す。

それを先読みした千那は、長剣から手を離れた。長剣は大きく後方へとばされてしまう。しかし、その瞬間が千那を、真の死角へと入れる時間を与えた。

千那は瞬時に真の背後へと回り、流れるような連続攻撃を繰り出す。最後に背負い投げを放ち、真の身体は中央部のレストランへと吹き飛んでいった。

” 10 ” ↓ ” 290 ”

” 5 ” ↓ ” 285 ”

” 15 ” ↓ ” 270 ”

” 11 ” ↓ ” 259 ”

” 20 ” ↓ ” 239 ”

真の耐久力がここに来て初めて削られた。

しかし、攻撃を決めた千那の方も片膝をつき、肩を大きく動かしながら息切れする。

「く、クソ……。あれだけ力を込めても、この程度しか減らないのか」

先ほどの千那の攻撃は、道場で教わった物だ。ソーマでの攻撃では無くてもアーマーの耐久力を削る事も破壊する事も出来る。しかし、ソーマ攻撃ほどのダメージを与える事は出来ない。

それでも、今の千那の攻撃ならば、現状以上のダメージを与える事は出来た筈だ。

「すごいね君。確か、九霞院さんだったよね？」

レストランから真が姿を現す。身体中に付いた木片を払いながらも、彼女は汗一つ掻いていない。

「今年に入って、僕を傷つけたのは君が最初だよ」

「それは、ありがたいな」

千那は痛みを抑えながら立ち上がり、床に突き刺さった長剣を抜き取る。真の拳を受けて、さらに損傷が激しくなっていた。

「でも、ここまでだよ」

真が前進する。

「僕のクラスは短期決戦を狙っているんだ。あまり長居は出来ないんだよ。だから――行くよ！」

彼女の姿が、千那の視界から消えた。そして次の瞬間には、既に千那との距離は二メートルまでに縮まっていた。

接近を確認した千那は長剣による突きをを繰り出す。

（ただの突き……？　こんなワンパターンな攻撃で……！）

真は突きを右へと躲した。

「ウッ!？」

だが、彼女は苦悶な声を吐いた。脇腹から伝わる痛み。

突きを避けられた瞬間、千那は自身の右脚を彼女の脇腹に繰り出していたのだ。

蹴りを食らい、体勢が崩れた真へ、千那が自信の身体に回転を加えた横殴りの一閃を繰り出す。それは見事に、真の胸板を直撃。彼女の身体は再びレストランの中へと吹き飛ぶ。

”critical -70” ↓ ”169” ”千那 +70”

↓ ”300”

「クリティカルを与えても、ダメージはあの程度か……」

千那は表示されるダメージ数を見て苦虫を噛んだような表情をする。長剣はすでにボロボロになってしまい、次の攻撃がラストになるだろう。

真が瓦礫から身体を起こす。その顔には悔しげに見えた。一度ならず二度までも連続で攻撃を受けてしまったせいだ。

しかし、お互いの耐久力に、大きな差が出来てしまっても焦りは感じなかった。

真は千那へと近寄る。今度は警戒を強め、一気に押し寄せるよう

な真似はして来なかった。

千那はロボロボになった長剣を構え、対峙する。

「お前の強化ソーマ。攻撃力を上げるものではないな」

彼女は真に話しかける。

その言葉を聞き、真は歩みを止める。

「どうして、そう思ったんだい？」

「ストライク強化なら、私の耐久力は既に二桁代になっていてもおかしくはない筈だ。だが、私の耐久力は300だ」

「でも、あのコンテナに付いてはどう説明するんだい？ 少し小さいが、コンテナとしては十分の硬さを持っていてもおかしくはないと思うよ。僕のソーマが、ストライク強化でなくてはあれは破壊できない」

真は大きくへこんでしまったコンテナへと視線をやる。

確かに彼女の言う通りである。コンテナは鋼鉄やアルミニウムで製造された物だ。それを、あそこまでいとも簡単にへこませてしまうのだ。人間の力を超越しているようにしか思えない。それを可能にさせるのは身体を強化させるソーマだけである。

だが、千那は口元をつり上げる。

「それに付いては説明が出来る」

と、自信ありげに答えた。

「物理的法則だな。力を受けた部位には、その放たれた余力のような物が残っている。それが消える前に、再びそこへ力を加えた場合、生き残った余力も同時に力が放たれる。……お前は元々鍛えていたのだから、その威力は強大なのは間違いない。ならば、あのコンテナの現状も理解が出来る」

千那は、淡々と理由を口にした。

「……」

真は何も語らなかった。図星。おそらくそう言う事なのだろう。

「それに、コンテナの件を持ち込んだ時点で、それがストライク強化ではない事を示してしまったようなものだ。自分で墓穴掘ったな」

「ハハハ！ そうだね。それは僕の誤算だった」

観念したのか、真は清々しい顔で千那へと視線をやる。

「正解だよ。僕が強化したのは攻撃力ではない。強化したのは――
――防御だ」

「防御？」

千那は彼女の言葉に首をひねる。

「そう。防御だよ。強化ソーマは、強化を与える範囲が狭ければ狭いほど濃度が上がり、与えてくれる力が上がる。ストライクなら爆発的な攻撃を、スピードなら目にもとまらぬ速さを、テクニクなら誰にも扱えきれないほどの器用さを、そして――」

すると、真の手にソーマのオーラが展開される。

「ディフェンスなら――何をも貫かせない鋼鉄な身体に強化させる」

手に集中されたオーラが霧散する。

「僕は瞬時にそれを攻撃が当たる部分に展開したために、君の長剣の刃が僕の身体に当たる事がなかった。僕の耐久力の減りが少ないのは、その時は全身に強化を展開したからだよ」

にっこりと笑みを見せる真。隠していた物を吐きだしたことで、どこかスツキリとした顔をしていた。

「ずいぶんと、余裕なのだな」

「余裕ではないよ。ただ単に、相手に隠し事しているのはフェアじゃないと思ったからだよ。これでやっと、真剣勝負で臨めるよ」

真はファイティングポーズに構える。

地面を蹴り、千那へと肉迫して拳を出してきた。彼女は驚愕し、反射的に長剣を前に出してそれを防いだ。しかし、ボロボロの長剣に真の攻撃を耐える事など出来る筈もなく、あっさりと破壊される。拳は止まらずに彼女の腹部を打撃する。

”－80”↓”220”

続いて千那の肩を掴み、中央部レストランの隣に設置されたプールへと投げ飛ばす。

プールの中にはまだ水があり、ザバーンと音を立てて彼女の身体はその中へと沈んで行った。

”－65”↓”155”

「プハッ!？」

千那は水の中から顔を出す。岸边から身体を起こす。水へと叩きつけられ、背中への痛みがさらに増す。水を多く呑み込んだせいで、息が上手く出来ない様にも見える。

背中痛み。呼吸困難。その二つが原因で、彼女の意識が飛びかける。

(クソ! さっきよりも遥かに動きが良くなっている。今の動きに、私の目が付いていかなかった)

枷が外れた真の動きに、千那はついていく事が出来なかった。スピード強化がされている訳でもないのに、あの速さである。千那は、精神的に大きなダメージを負ってしまう。

「次、行くよ!!」

真はそう言うのと、またしても姿を消した。

「クッ!」

千那は自分の身体を護るように腕でガードを作る。

そこへ突き出される拳。ガードを作っている腕がミシリと悲鳴を上げる。耐えきれず、ガードが解れて吹き飛ばされてしまう。

”－90”↓”65”

千那は地面へ叩きつけられる。身体はすでにボロボロになってしまい、背中への痛みによって、起き上がるだけで鈍い衝撃が走る。

「決め切れなかったか……。でも、次で終わらせるよ」

真は前進する。千那へと向かって。

千那は諦めず立ち上がる。その姿に、真の顔に自然と笑みが生まれる。

そこに、大きな揺れが生じた。船全体が揺れるほどの大きさだ。

「!?　なんだ!」

驚愕に顔を歪める真。突然の事態に、頭の収集がおぼつかないようだ。

「やっとか……」

対する千那の方は、ホッと安心したような表情で肩を下す。

船上に外からの水が入り込み、二人の脚を濡らしにかかった。船全体が揺れ、左右に大きく傾き始めた。

真は少しずつ冷静さを取り戻していくが、次の千那の言葉にまた動揺した。

「これが――私たちの作戦だ」

「作……戦……?」

「ああ。私がここで、お前も足止めしている間に、仲間たちが船尾階段を下り、二、三階間の壁に大きな穴を作る。そうすれば、船の中に水が入り込み、浸水が始まる。お前は生き残ったのは私だけだと思い込んだおかげで、作戦は成功したのだ」

千那はニヤリと笑みを作りあげる。

一刀はA小隊の彼女たちに、囷を作った策を講じさせた。千那がワザと一人でいるようにした事で、残った真は生き残りを彼女一人だと思い込ませた。その間に残りの彼らが船内に潜り、Eクラスの拠点との一定の距離を保ちながら、階段に鍊金ソーマである爆弾を設置させた。あとは、その被害に遭わないように彼らを退避させ、爆発を起こさせた。こうすることで、Eクラス全体の勢いを殺し、こちらの勢いを作りあげる、これが一刀の考えた作戦だった。

「船尾側で爆発を起こした事によって、先に浸水の影響を受けるのはEクラスの方だ。これで、私たちの勝利は、ほぼ確実の物となった」

「クッ!　お嬢様!!」

真は主の危険を感じ、千那に背を向ける。

今が、彼女に攻撃を加える好機。だが、千那はそれをしなかった。卑怯だと感じ、自分の中で攻撃をセーブしたのだ。

「すまない……」

千那は小さな声で謝罪した。自分に隠し事を作るのを嫌がり、話してくれた彼女に。作戦成功まで自分たちの策を隠した自分の卑怯さに、千那は胸が締め付けられる感じを覚える。

「一刀！ A小隊の奴らが成功したそうだ」

「よし！ A小隊たちはそのまま拠点の落としに取り掛かれ。D小隊も二階から彼らの攻撃を防ぎながら前進。他は防備の徹底しろ」
Cクラス本陣。作戦の成功が報告され、一刀が全体に次の指令を下す。彼らもそれに応え、直ちに行動に移り始める。

「武器庫の守りを厚くしろ！ 一番前線にある分、水の影響を一番食らう可能性がある」

二階に設置された武器庫の部屋は、最もEクラスよりにあるために、水の浸水が一番速く迫って来る。つまり、いかにこの武器庫で浸水にかかる時間を防ぐかが勝利のカギとなるのだ。

「白雪。武器庫にいた敵は排除したか？」

『さっきまで二、三人ほどいたけど、作戦が成功した途端に後ろに退いたよ』

「そうか。今から本陣にいる一隊をそちらに回す。彼らと共に敵からの攻撃と水の浸水を防いでくれ。出来るだけ長くな」

『了解』

一刀は通信を切り、本陣を守備していた彼らに指示を出した。最初はこの守備をどうするのかと質問してきたが、一刀の説得に素直に頷き、彼らは武器庫へと向かった。

「思いの外、手痛くやられたな」

彼に話しかける壇。彼は肩で息をしながら一刀へと近寄る。

彼は本陣を狙いに掛かる相手に、一人で立ち向かったのだ。四人いた生徒たちは苦戦しながらも、何とか倒し、本陣で回復を行っていたのだ。

一刀は腕組みしながら手に顎を載せて、何か考え事をし始める。
「ああ。まさか、船上に行った奴らがここまでやられるとは思わなかったからな」

一刀本来の作戦ならば、B、C小隊たちに浸水を任せるつもりでいたのだ。だが、その彼らがたった一人の選手によって全滅させられるとは思ひもなかったのだ。

「壇。一先ず、俺たちもこの場から離脱するぞ。ここもいずれ水に吞まれちまうからな」

本陣にはすでに水の浸食が始まっていた。自信の身の安全のために、二人は本陣を後にしようとした。

だが、一刀は不可解な事に気が付く。

（おかしい……。流れてくる水の量が多すぎる。これだと、こちら側の拠点への影響が早く出ちまうぞ）

「何してるんだ？ 急ぐぞ」

壇はすでに階段を半分まで上っており、一刀もそれに続き階段を上ろうとした。

「何!？」

彼が階段を上ろうとしたその時、奥から水の大群が押し寄せてきた。

「かず……!」

声を荒げ、壇が一刀に手を伸ばすが、彼は水の中に吞まれてしまった。

「お嬢様! 何処ですか!? みんな!？」

真は二階の中を探しまわる。無線を使ってもレナは応答しなかった。三階はすでに水で埋もれてしまい、本陣の陥落は目に見えている。二階の武器庫と兵糧庫にも仲間たちの姿はなく、もぬけの殻だった。

「そんな……。みんな、どこに行ってしまったのだ」

真は途方もなく、愕然と膝を折ってしまう。二階にもすでに水の浸食が始まっており、足は全て水に吞まれてしまっている状態だ。二階も何時、完全に吞まれてしまうかは時間の問題であった。

「ま、まだだ。諦めるのはまだ早い！　ここにいないのなら、Cクラスの拠点に方にいるのかもしれない」

諦めかけた気持ちを叩き直し、真は起き上がる。そして、Cクラスたちの拠点のある船首へと歩きはじめる。

「ここにいたか」

すると、彼女に声をかけるの者が現れた。

千那だ。彼女は傷ついたアーマーを回復させる事はせず、ソーマも持たずまま、真の所まで追いかけてきたのだ。

「何の用だい？　僕は忙しいんだ。君に構っている暇はないよ」

真は素っ気なく答え、千那を無視して歩いていく。

「お前に無くとも、私にはある」

「……」

「うちの指揮権者の策によって、お前たちの拠点はすでに陥落寸前だ。これ以上戦っても勝敗は決している」

「それはないな。僕は知らされなかったが、お嬢様は何か策を施している筈だ。陥落寸前なのは、もしかしたらそっちかもしれないぞ」
二人の言っている事はどちらも正しい。

Cクラス、Eクラス共に水による策を講じたのだ。策が同時に発動された事により、水の浸食は二倍になり、船の沈没速度が速くなってしまうているのだ。どちらの拠点が先に落ちるかなどわからない。

千那は真の言葉を聞くと、口元に笑みを作りあげた。

「いいや。残念だが、うちの指揮権者は、それだけで終わる奴ではないんだよ」

「？　どう言う事だ？」

真は疑問を感じ、歩みを止めて千那へと振り返る。

「勝敗は決したと思った私が何故、ここにいる？　決まったと思う

のなら、私がここにくる必要はない筈だ」

「!?!? お前、まさか!?!?」

千那を言葉から意図に気付き、真は激昂して彼女の顔を睨みつける。

「そう言う、事だ!」

千那は一気にEクラス拠点に向かい、走り出した。

「させるかー!」

真はさせまいと、彼女を追った。

武器庫へと着いた千那は、拠点のコアを探しだす。実は、拠点にもアーマーやソーマと同じように核となる物が存在しており、それを破壊することで拠点陥落となるのだ。ただし、このコアは大自然か鍊金ソーマ以外での一撃では破壊する事が出来ず、徐々にダメージを作り、ライフを0にする方法しかない。ちなみに、この場合の大自然とはフィールド内の自然の事である。今回の場合の大自然ならば水、と言う事になる。

「あった!」

千那はコアを発見し、近くに浮かんでいたソーマを具現化。具現化されたのは先端が十字になっている十字槍だ。彼女は柄の長く持ち、渾身の一撃をコアへと放つ。

”・100”↓”core 200”

しかし、それではコアは破壊できず、彼女は再び力任せの一撃を繰り返そうとするが――

「止めるー!」

後ろから襲い掛かってくる真に危険を感じ、瞬時槍を後ろへと構えた。

予感は的中し、彼女の拳が槍とぶつかり合った。ピキピキと音を立てる槍を見て、千那は一旦槍を引いた。真は左脚を前に振りだし攻撃を仕掛ける。千那は防ぐのを止め、辛うじて躲していく。

現在、お互いの耐久力は”65”と”169”。千那の方はまともな一発の食らえば、それで終わりになってしまう。それだけは避

けたい彼女は必死に攻撃を避けていく。

水は増していき、すでに腰の部分まで押し寄せてきた。

「これでは、脚は使えないな。どうする？」

「使えないのなら、別の部分で補えばいいだろ！」

真は怒声を上げながら、連続ジャブを放つ。顔面を目掛けて襲ってくるそれを避けつつ、意識をコアへと移していく。

（さっきよりも、こいつの動きが見える。服が水を吸ってしまったせいでスピードが落ちているのか）

真の攻撃は先ほどよりも切れが無くなっていた。船内の中を探しまわったせいで服が水を吸ってしまったのだ。それが重みとなって動きが鈍くなっているのだ。

（これなら――！）

真の左ジャブをスリ抜け、横一閃をコアへと叩きこむ。

「しまっ!？」

”・100”↓”core 100”

コアのライフは残り100。あと一撃を加えれば、武器庫は陥落する事になる。

焦りを見せ始めた真。彼女は方向性のないジャブを連続で出し続けた。対する千那は冷静で、それらの攻撃をややすと避け切り、彼女へと肉迫する。懐に入った千那は、渾身の一発を彼女に御見舞いする。

苦悶に歪む顔。焦った真は強化の範囲を狭めるの忘れてしまい、まともに攻撃を受けてしまったのだ。

”・100”↓”69”

これで両者の耐久力は、ほぼ互角となった。

そして千那は槍を大きく振り上げ、一気に斬り下ろす。

”・100”↓”core 0”

コアは跡形もなく砕け散った。これで、武器庫陥落は成功した。

「ハアハア!! 後は、兵糧庫だ……」

激しく息切れしながら、千那は兵糧庫のある場所まで進もうとし

た。

だが、水は肩の部分まで押し寄せており、これ以上の進行を許さなかった。

「クソ！ これでは……！」

悔しそうに呻く千那。それをあざ笑うかのように水の浸食は進んでいく。

だが―――、

突如、その水が姿を消した。

キョトンする千那。真も同じようにキョトンとしており、二人は何が起きたのかわからないと言った顔をしていた。

「あ、千那」

そこへ、彼女の名を呼ぶ物が出してきた。

一夏である。

彼は、ソーマである剣を具現化させたまま部屋の中に入り、ご機嫌な様子で彼女へと話しかけて来た。

「い、一夏！？ 何で、お前がこんな所に……？」

千那は一夏の登場に驚くも、突然、目の前に表示された言葉にさらに驚愕する。

” You Win ”と書かれていた。

Cクラス対Eクラス――

この試合は、激しいせめぎ合いを見せながらも、最後は呆気なく、Cクラスの勝利で幕を下ろしたのであった。

防御強化のソーマ（後書き）

以上です。今回もまた長く、そして読みにくい作品となってしまいました。が、ご了承ください。

さて、次は一先ずCクラスは休息。彼らはライバルであるBクラスとの試合のために休みに入ります。

そして、上都に潜入したアサシンたちにも動きが――！？

次もぜひ、見てみてください

変わらない旧友

「見て！ この道。桜でいっぱいだよ！」

少女ははしゃぎながら、桜へと両手を伸ばした。

「ほらほら」

「ああ。綺麗だよな。この道」

少年はこの桜並木を見上げ、舞い落ちる桜に目をやる。

この辺りに、他の人間はいない。彼ら二人だけである。

少女は少年を手をとり、桜並木の中を歩いていく。

「日本にこんな綺麗な場所があるなんて、思わなかったよ。××！
連れて来てくれてありがとう！」

少女は満面の笑みで少年へと顔を向ける。

少年は彼女の笑顔に見惚れてしまい、桜に目をやる事が出来ない。
彼女は桜の方へまた視線を向ける。握る手の力が先ほどよりも強くなる。その理由に気づき、彼はふと近くに販売機があった事を思い出す。

「あっちに自動販売機があったから、俺が何か温かい飲み物を買ってくるよ」

春だとしてもまだ肌寒い事に変わりはない。少年は、少女の手が寒さで冷たくなっている事に気づいたので、彼女のための飲み物を買ってやろうと思ったのだ。

「待って！」

手を離そうとする少年の手を、ギュッと強く握りしめる。

「別にいいよ。買わなくても」

「え？ でも、寒いだろ」

「うん。寒いけど……」

彼女は一呼吸付き、今度は優しい笑顔で彼を見つめる。

「このまま、手を繋いでいる方が良いな」

少女は静かにそう告げた。

先ほどの年相応な笑顔とは違い、どこか儚げな笑顔であった。
少年の覚悟はさらに強くなる。

少女を護るために。そして————理想を果たすために

「勝ったのは、CクラスとFクラスか」
Bクラス待機室。

そこで新は設置された大型モニターから彼らの試合を観戦していた。彼の他に観戦していたのは数名のみ。最初はクラス全員で観戦していたのだが、試合終盤になり、彼らは次の試合の準備に取り掛かり始めたのだ。

「新。勝った方はわかったから、そろそろ私たちも準備に入らないと」

「うん。そうだね」

真理名に言われ、新は椅子から腰を上げる。

「私たちの試合相手はDクラス。彼らの中に猪突猛進な風見音凜がいる。彼女の实力は前回の霧島君との試合で把握しているらしい。

問題は彼らの指揮権者の秋久保桜一。あきくぼおういち父がIA会社のフィールド設計者らしく、構造と特徴についてはよく教わっていたらしいよ」

「つまり、彼にフィールドを使った策はあまり通用しないと、言うことかな」

「そうだね。でも、ソーマ関連についてはそれほどでもないらしいから、今回は武器で攻めていくのが良いと思う」

真理名の案を聞き、顎に手を載せ考える新。

「オッス！ 二人とも」

二人の後方から意気揚々な声がかけられる。

金髪に日本人離れの瞳。制服の第一ボタンを外して、だらしなく着こなしているヒューイ。

「ヒューイ。あなた、いつも言ってるでしょ。制服はちゃんと着なさいと。だらしなくて見つとも無いわ」

「おっと。悪い悪い。それよりもCクラスの奴ら勝ったんだって！
やっぱすげえな！！ あいつら」

真里名に注意され、制服のボタンを絞めながら彼らに話しかける。
「次の試合はAクラスとEクラス。俺たちのクラスの相手はDクラスだよな」

「そう。だから、さっさと試合場に向かいなさい。私たちもすぐに行くから」

真里名はため息交じりに声を発し、ヒューイに向かうように示唆する。

彼はそれに頷き、新の横を通り抜ける。

「大丈夫だよ。試合中に勝手な行動は、もうとらねえから」

「……」

通り抜ける瞬間。ヒューイは新に聞こえる程度に声を出す。

新はそれを黙って聞いていた。彼を横目に睨みつけながら。

「新？」

真里名は新の様子に首をかしげる。

彼は、何事もなかったかのようにいつもの涼しげな表情を取り戻す。

「何でもないよ。行こうか」

「あ、うん」

新は真里名に声をかけ、二人で試合場を目指した。

「ふざけるなー！！！」

「ブベバラア！？」

千那の容赦ない拳が、一刀の顔面を狙い撃つ。

「お前！ 私があそこまでやったと言うのに、秘密に一夏を動かすとはどういう事だー！！」

「いや、だって念には念を入れとくべきだと……」

「だったらその事を、私に言うべきだろうがー！！！！」

「ブベツ!?　ゴ……ブフツ……スミバ……ドハッ……セン……!」

一刀は千那に殴られながらも謝罪の言葉を言っていた。だが、彼女はそれが聞こえておらず、さらに殴り続ける。

「お、おい千那。あんまりやりすぎると……その……一刀が……」

「お前もだ、一夏!」

千那は殴るの止め、キツと一夏の方を睨みつける。

一刀の顔は大きく腫れあがり、時々ピクピクと痙攣していた。

「へ?　俺?」

「お前も、一刀からその策を聞かされていたのなら、何で私に連絡しなかった!?」

「いや……。その……。言わなくても大丈夫かな……と」

「なんだと!」

最後の部分は聞こえない程度に言っただけでもあった一夏だったが、今の千那には何もかも、お見通しだった。

「ち、違う!　今のはそういう意味じゃなくてだな」

両手を左右に振りながら、今の言葉を否定する一夏。

頭に血管が浮き上がり、怒りをあらわにする千那。

「いゝちゝかゝ」

「ヒィ!?　ご、ごめんなさい!」

一夏は彼女の怒気に気圧され、一直線に逃げて行った。

逃がさんと千那もそれを追いかけて行く。二人の姿は試合場から消えて行った。

「おーい。次の試合までには帰って来るんだぞー!　……聞こえてないっか」

壇が二人へ声をかけるが、すでに出て行った後であった。

「フフ!　Cクラスの人たちは個性豊かね」

そこへ訪れたのはEクラス代表のレナであった。長い髪はどこも傷んだ所はなく、他の者たちとは違い、裾の部分にフリルが付いた黒を基調とした制服だった。彼女は上品な笑みを作りあげて壇に話

しかける。

彼女の横には使いである真が立っていた。

「今回の試合。完敗でした。まさか、伏兵がいるとは思いませんでした」

「あははは！ 実は俺も最初に聞いた時は、えって思ったんだけどね」

壇は可憐なレナの笑顔に見惚れ、照れたように手で頭を搔く。

「それにしても、あなた達はとてもお強いですね。Bクラスの方たちに勝利したと言うのを半信半疑でしたが、今回の試合でそれが真実だと言うのがよくわかりました」

「本当？ でもあの試合も、俺たちが勝ったって言うか、今回みに策がなかったら勝てなかったって感じだったからな」

「あら？ では作戦を考えたのは一体……？」

「ああ。今のそこのびてる奴だよ」

首をひねる彼女に、壇は一刀を指差した。

すると、彼女の眼が一瞬だが鋭くなった。

「そう……ですか……」

レナは小さく、彼に聞こえない程の声を出していた。

「？ どうかした？」

「いえ、あの……申し訳ないのですが、彼を少し借りてもよろしいでしょうか？」

「え？ いや、俺は別にかまわないけど……」

レナの願いの意味がわからないまま、壇はそれを了承してしまった。

彼女は再び笑み作りあげる。

「ありがとうございます。真」

「はい。お嬢様」

真は倒れて動かない一刀を軽々と持ち上げる。

そして、三人は試合場を後にする。

取り残された壇はポカンと口をあけながら、その姿を見送った。

「うーん」

一刀が次に目を覚ました時、そこは上都学院の屋上だった。彼はそこに設置されていたベンチの上に寝かされており、顔中に出来ていた絆創膏やガーゼが貼られていた。どうやら、誰かが彼を治療してくれたようだ。

額には水で湿らせたハンカチが載せられており、腫れてしまった額の熱を冷ます役目を果たしていた。

「気が付いた？」

レナが彼の顔を真上から覗き込む。

「おう。お嬢様」

一刀は綺麗な彼女の顔に特に感じた事もなく声を発する。

「起きたのなら、退いて欲しいのだけど」

レナの口調は先ほどとは違い、どこか親しげな口調であった。

一刀は彼女に膝枕されていたのだ。普通ならばこんな時、顔を赤らめて恥ずかしがるところだろうが、彼は何事もなく彼女の膝から頭を上げる。

「久しぶりね。一刀君」

「そうだな。四年ぶりかな」

レナは優しげな表情で、持っていた飲み物を彼に手渡す。

一刀は「ありがとう」とそれを貰い受け飲み始める。

「そう言えば、お前の使いさんはどこに行っただ？ さっきから姿が見当たらないけど」

「ああ。真なら、さっき撒いてきたわ」

「は？」

「あの子。私があなたと二人で話したいと言っても聞いてくれなくて、二人では危険です！ 男はみんな野蛮なんです！ 何をされるかわかりませんよ！ って言っただけ」

「なんだその偏見は……」

ハアと溜め息をつきながら、一刀は肩を下した。

それが面白いのかレナは先ほどの壇とは違った笑い方をした。壇の時は気品があり、しかし何かを隠した笑みだったが、今の一刀に見せる笑いは何も隠さない、彼を信頼した本当の笑顔に感じた。

「前からいたって訳じゃないよな。俺たちが会った時にはいなかったもんな」

「あの子が来たのは、あなた達と別れてすぐなのよ。お父様が一人だとまた危険な事に巻き込まれてしまうと聞いたから。それで、同い年の強い子として、彼女が選ばれたの」

「へー。そうなんだ」

一刀は素っ気なく答える。それに対してレナは、嫌な気持ちになる事はなく空を仰ぎ見る。二人の間に流れる空気は陰悪な物ではなく、それが当たり前だと思わせるものだった。

雲ひとつない快晴の空を見ながら、レナが静かに言葉を発した。

「あれから四年。ずっとあんな生活をしていたの？」

「……別にいつもとは限らないけどな」

「でも、やってたんだ」

「まあね。でも、別にそれが日常になってたから、特になんとも思っていないけどな」

「そうなんだ……」

「いやー。それにしても早いもんだねー。年が過ぎて行くのは。この年でもうそんなこと考えちゃうようになるなんてな。爺さんみたいだな」

一刀はヘラヘラと笑いながら、彼女に話しかける。

暖かい風が二人の間を通って行った。六月になって気温が上がり、暑くなっていく季節。昨日までが雨だったために今日が晴れた事は幸いだった。

それが四年前のあの時と状況が同じだった。

「やっぱり、あなた変わったわ」

水を飲もうとしていた一刀の動きが唐突に止まった。彼女のその言葉のせいだ。

そこへ、彼女は彼の方を向き、さらに言葉が続ける。

「昔のあなたと今のあなたで、喋り方も雰囲気違った。最初は別人なのかと思った。でも、さっき諸越君から聞いたことから、やっぱりあなたなんだとわかったわ」

「……」

「……やっぱり、あの子が死んだ事に関係があるのよね？」

レナの最後の言葉に、一刀の身体がピクリと反応した。

「あ、ごめん……」

彼女は失言だと知り、言葉を濁す。それから苦しそうな表情になり胸が苦しうになった。

あの子——と言うのは二人にとって掛け替えのない存在であり、大切な友人だった。

レナは同い年で気が合った唯一の相手であった。短い間だったとはいえ、とても充実した生活を送らせてくれた少女だった。

そして、一刀にとっては——

「俺は何も変わってない」

一刀は答える。それは先ほどもまでのふざけた感じではなく、尚且つ試合の時とも違う雰囲気を出していた。

ハッとレナは、下げていた顔を彼の方へ再び戻す。

「俺は変わらない。たとえば、どんなに言動が変わろうとも、どんなに周りが変わっていいこうとも、俺の中の思いは決して変わらない。俺はただ——俺の理想を果たすために戦い続けるだけだ。それを邪魔する者は誰であろうと倒すだけだ」

それは、ある決意をした一人の少年の決意と——信念だった。

「あ……」

その姿に、レナは気付かされる。

かつて見た少年は、死んではいなかった事を。

少年が描いていた理想。そのために戦い続けた彼と、それを支えていた少女の姿を思い出す。

「そう……よかった」

レナはわかり、目には涙が浮かび上がっていた。彼女の好きだった彼が生きていた事を心から喜び、安心したのだ。

「それじゃ、そろそろ試合が始まるから、私は行くね」

「ああ」

レナは涙を拭き、ベンチから立ち上がる。

「レナ」

すぐにその場を離れようとした彼女に、一刀は声をかける。

彼女は彼の方へ振り向く。

「がんばれよ」

それだけでだった。

しかし、それだけでよかった。

レナはかつての笑顔を見せ、試合場へ向かった。

「そうだ。その理想を果たすためなら、俺は――」

変わらない旧友（後書き）

今回は、一刀とレナの再会の話。一刀の過去の一面を執筆しました。しかし、彼の過去には他にも大きな物があります。彼の理想とは信念とは何かをその内書いていきます。

次話はCクラス対Bクラス。楽しみにしてください

高まる士気と不安（前書き）

どうもです！

今回から今まで読みづらかった書き方を変えてみました。その分だけ、短文になってしまいましたかね……

高まる士気と不安

第二試合の結果は――

Aクラス対Eクラス。勝者はEクラス。

Bクラス対Dクラス。勝者はBクラス。

どちらも接戦を繰り広げていた。

特にBクラス対Dクラス戦。序盤はDクラスたちの優勢に動いていたが、真里名が策を使い、彼らの大半を攻め落とす。それでも諦めず攻めよせ、彼らの本陣まで押し寄せる。だが、本陣前にいたのはヒューイ。彼の手によって襲撃者たちは全滅。最後は新が用意していた伏兵によって試合は終結した。

ちなみに凜はDクラス。彼女が戦闘に立ち、士気を高めて行ったが、ヒューイとの戦いで、奮闘するも敗れ去ってしまった。桜一が地形を利用して彼らの攻撃を防いでいたが、ヒューイがそれを力でねじ伏せた。

一夏は凜に会いに行った。落ち込んでいると思っていたが、彼女はさらに闘志を燃やし、打倒ヒューイを目指していた。

次の対戦相手はBクラス。彼もまた、ヒューイと決闘を望んでいる。高ぶる気持ちを抑えつつ、仲間たちの待つ試合場へ向かった。

一刀もまた、屋上のベンチから腰を上げる。

その時、携帯の着信が鳴る。彼は携帯を取り出し、通話を始める

「はい……………はい……………わかりました」

短い通信を終え、彼もまた試合場へと歩き始めた。

『間もなく、本日最後となる第三試合を始めたいと思います。試合

を行う生徒たちは、速やかに自身の会場へと移動してください』

生徒たちの会場移動が報告される。

学年別対抗戦一日目。一年の最後試合は、Bクラス対Cクラス。
Dクラス対Fクラス。

「遂にBクラスか……」

Cクラスには、ほとんどの生徒たちが既に試合の準備が整っている。彼らにも心に余裕があり、しかも、先ほどのEクラス戦での勝利からか、少し浮かれている生徒もいた。

その中で、一夏は今の仲間たちの現状を見て、少しばかりの不安が生まれる。

「なあ。みんなちょっと調子に乗りすぎじゃないのか？」

彼は隣で新しいソーマの調整を行っている千那に話しかける。

「ああ。それは私も思っていた所だ。自身があるのは結構だが、過信されるのは困る。みんながその事を理解してくればよいのだが……」

「そうだな。うちのクラスって誉められるとつけ上がるタイプだからな。気を付けないと寝首を掻かれちゃうよな」

二人が不安を抱えたその時、部屋に一刀が入って来た。

「一刀。遅かったな。早く準備しないと間に合わないぞ」

「何言ってるんだよー。まだ、二十分あるじゃないか。俺のソーマの準備はしてくれたのかい？」

「やってねえよ。やって欲しかったら、先に言えよ」

「えー!? お前ならやってくれるって信じてたのに!? 失望したぞ。一夏!」

「何、逆切れ!？」

一夏は、一刀の理不尽な起こり方にツツコミを入れる。これは、二人の日常でよくある事。お互いにそれが冗談だと言う事はわかっている。二人のコミュニケーションだ。

千那は、このいつものコミュニケーションを無視し、一刀に話題を切り出す。

「それで、今回のBクラス戦。本当に一夏を出すのか？」

彼女の問いに一刀は頷く。

「ああ。だって、一夏が出たいって言ったんだ。出させてやろうじゃないか」

「別に出す事を反対してるんじゃない。一夏をどのタイミング出すが問題なんじゃないか？」

彼女は一夏の出場に反対している訳ではない。だからと言って、彼の身体を心配していない訳ではないのだ。彼女は、あくまでも彼の意思を尊重したまでだ。

「タイミング？」

反応したのは一夏。千那は彼へと顔を向け、

「まさか、最初から前線で戦おうなどと考えていないだろうな? 怪我持ちの奴が戦い続けたら傷が開くぞ」

「ああ……。でもそれじゃあ、俺は何時出ればいいんだ?」

二人は視線を一刀の方へやる。彼はソーマの準備をしながら、外の風景を見ていた。

「おい。聞ってるのか？ 一刀」

「うんうん。ちゃんと聞ってるよ」

「だったら――」

「一夏は、秘密裏に敵本陣へと向かってもらう」

千那の言葉を遮り、一刀は口出す。彼の視線は外に向けられたまま。

「秘密裏に？」

「ああ。俺だって、一夏の身体は心配だからな。ヒューイとの戦い以外、一夏には戦いを控えて貰う」

一刀は外から視線を変え、二人が挟む机に紙を置く。

紙には○がいくつも描かれており、それぞれ大きさが異なっていた。それに、何か法則性があるのか、決められた位置に描かれている。

「これが、さっきのDクラス戦で、あいつらが作りだした陣だ」

「陣って……、もしかして、お前はあいつらの試合を見に行ったのか！？」

「いやいや、違うよ！？ モニターを見て、大体こうかなあと思ったんだよ」

彼は慌てたように首を振った。

しかし、二人は疑心の目を彼に向け続ける。

一刀はコホンと咳払いをし、紙に絵を付け足していく。

「Dクラスたちは、前線に七人編成の部隊を三部隊、しかもその中の一隊には風見音がいた。彼女が先頭切ってBクラスの奴らを圧倒して行っただ」

一刀は真ん中に描かれている大きな○の中に、小さい×をいくつも描いていく。×は生徒たちの事であり、○は一部隊を表しているようだ。

彼らの横に描かれる×には”如月”と書いており、彼女から伸びる矢印は、そのまま二つの二部隊を貫く。それが、彼らの敗退を知らせる。

「風見音たちの部隊は生き、あいつらの部隊はそのまま本陣まで突っ切って行っただ。そして僅か十分ほどで本陣前」

「十分!？ それはいくらなんでも早すぎなんじゃないか？」

一夏は驚きながら、その疑問を一刀に問いかける。

一刀は首を振り、

「いや、如月の策の前に、Bクラスの前線部隊はほとんどやられてたし、ものすごい勢いを持っていたあいつらを止める事が出来る奴らなんていなかったんだ……。こいつ以外はな」

一刀が指を指した本陣前。そこにはヒューイを示す×印があった。

「ヒューイが押し寄せる前線部隊を瞬殺。最後まで足掻いた風見音も——結局やられちゃった」

「ヒューイ……!」

一夏はヒューイの名前を聞いた途端、拳を強く握りしめ、表情が

険しくなる。かつての模擬試合の時の彼との戦いを思い出しているのだ。一夏はあの時、彼の力に圧倒されていた。長距離のライフル使いと近距離の剣使い。相性の悪い戦いだったとしても、格の違いを思い知らされる戦いになるとは思いもしなかったのだ。新が現れなければ、やられていたのは目に見えていた。

「それで、最後に桔ヶ也が配置していた伏兵によって勝負がついた、か……これだけだとDクラスは、三人だけにやられたように見えるな」

「そう。そこだよ、千那」

一刀は千那へとグーサインを出す。
彼女は眉根を寄せて、彼に問いかける。

「どう言う事だ？」

「Bクラスは確かに強いが、単にあの三人がずば抜けて強いだけだ。それ以外は他のクラスの生徒と変わらない。……俺たちが勝つには、そこを積極的に突いていく必要がある」

「うむ。具体的にはどうするのだ？」

「それは――」

『第三試合を開始します。生徒たちは試合場に集合してください』

一刀の言葉を遮り、集合の知らせが入る。Cクラスたちは続々と部屋を抜け、試合場に向かい始める。

「おっと。時間か。続きは後の作戦会議中に話すよ。一夏の秘密裏の方もな」

「そうだな。私たちだけでなく、みんなにも説明した方が良好だろうな」

千那はそう言うのと部屋を出ていく。

一夏も険しい表情のまま、部屋を出る。

その姿を、一刀はジッと見続けていた。何か思う事があるのだろうか、彼は手に持っていた首飾りを強く握りしめる。



「それで？ Bクラスの弱点とは何なんだ？」

壇が一刀に問いかける。

Cクラスは作戦会議中。彼らは机を挟んで話し合い、机には今回の試合フィールドのマップが映像化されて出ている。今回のフィールドは都市。住宅街やオフィス街が立ち並び、二つの街を繋ぐの一本の大きなアーチ橋。アーチ橋の周りには大きな川となっており、すぐ近くには川の出口である海が広がっている。大きな川であるため、泳いで突き進むのは無理だろう。

「弱点かどうかはわからないが、あいつら三人以外の生徒たちは、他のクラスの者たちと実力はさほど変わらないんだよ。そいつらが策にはまりさえすれば、一気に大半の生徒を敗退させる事が出来る」「つまり、あの三人を孤立させるという事か？」
「そう言う事だ」

皆が一樣に納得し、彼に期待をかける。Cクラスの仲間たちの信頼を勝ち取った一刀。もはや、彼を疑う者は誰もいなかった。

彼は手に持っている指し棒を映像の中のアーチ橋に向ける。

「奴らを敗退させるには、橋の上が打ってつけだ。ここに奴らを誘

いこみ、一気に壊滅させる」

彼の作戦はこうだ。

まずはBクラス陣内に潜入し、彼方あちこち此方で暴れ回る。それは彼らを誘き寄せる挑発。

次に彼らが挑発に乗って来たのを機に、撤退を開始して、彼らをアーチ橋まで誘導する。彼らがアーチ橋からCクラス陣内に入り込んだその時、橋を上げ、彼らの退路を断つ。

最後に策にはまった彼らを殲滅し、孤立した新たちを撃退する。と言った作戦だ。

「だが、Bクラスの三人以外が策にはまるとは限らない。だから、暴れ回る時になるべく敵を敗退させることを意識し、敵の人数を減らしてくれ。そうすれば、たとえ彼らだけでなかったとしても、さほど苦戦する事はない筈だ。みんな——大丈夫か？」

一刀の言葉に、彼らは一様に声を出す。

「ああ。大丈夫だ。任せろ」

「これでBクラスをまた負かせれば、私たちの実力は学年一位になるんだよね」

「よっしゃ！ それを聞いたら俄然やる気が出て来たぜ！」

「やる気を出すのは良いけど、後先考えずに行動してやられないですよ」

ハハハハ！ とCクラスたちの笑い声が部屋中に響き渡る。彼らのやる気は絶頂状態になっていた。自分たちへの自信と一刀の策への信頼。それが、彼らの気持ちを大きく飛躍させているようだ。

「一夏。お前は前線の奴らと共にBクラスの陣内に入り、奴らの本

陣周りで待機しろ」

「わかった」

一夏は彼の指示に頷いた。真剣な眼差し、この時を待っていた彼にとっては絶対に負けられない戦いになる。

「だが、不用意に攻めるな。こちらからの指示があるまで、絶対に動くな。いいな？」

一刀は念を押して、彼に注意を呼び掛ける。

先ほど一刀が言っていたように、敵が全てCクラスに攻めよせるとは限らない。そうなれば、拠点間を護る者たちが必ずいる事になる。そこへ、単独で一夏だけを投入する事は無謀であり、返り討ちは目に見えている。それに、その襲撃が原因で敵への警戒心を強化させてしまう恐れがあるからだ。そうやってしまったら、敵を討つ事は難解になってしまう。一刀はそうなる事を避けたいのだ。

一刀は壇に顔を向け、自分の言葉が以上だと言う事を伝える。

「よし！ この試合に勝って、明日対抗戦を華やかに迎えようぜ――みんな！！！」

オオーーー！！ と血気盛んに声を上げるCクラス一同。彼らには、かつて模擬戦時での嫌な緊張はなかった。絶対の自信。絶対の信頼。今の彼らを突き動かすのはそれだけであった。

「一夏」

部屋を出ようとする一夏を、一刀が呼び止めた。

「どうした？ 一刀」

「お前に渡しておきたい物がある」

そう言って、彼は一夏に首飾りを渡した。首飾りの真ん中には石ころ？　のような物が着けられおり、綺麗なエメラルドグリーンの色をしていた。それ以外には何の飾り気も無いが、石の美しさだけで、その首飾りが高価な物である事を伝えていた。

「なんだよこれ？　こう言うのは男の俺じゃなくて、女の子にやれよ。嬉しいけど、なんか背中がゾクツとする感じが――」
「いいか、一夏？　よく聞け」

突然のプレゼントに身震いする一夏に対して、一刀は真顔で告げる。

「もし、自分に何かしらの危険が迫った時、この首飾りの石を握れ。そして、願え。お前が今、何が必要なのかを――。そうすれば、必ずこの石は、お前の願いを聞いてくれる」

「??　なんかわからないけど、わかったよ」

一夏は何かの冗談かと思っていたが、一刀の真剣な眼差しから、冗談で返す事が出来ずにその事を了承した。

「よし。じゃあ行こうか」

一夏の了承を確認した一刀は、いつもと同じ雰囲気へと戻り、部屋を出て行った。

それに続いて、一夏も頭に？マークをつけながら、部屋を後にする。

この後、彼はその答えを知る事になる

高まる士気と不安（後書き）

今回はここまでです。

次はBクラス対Cクラスです。生き舞い上がるCクラスたちに、新の策が炸裂します。

今度は、少し長くなるかもしれませんが、読んでくれたら幸いです。

Cクラス 対 Bクラス

『試合を開始します。両クラス代表者、前へ』

その呼びかけに、二人の代表者が前に出る。

Cクラス代表である壇は、フィールド中央で新を待っていた。後ろにはCクラスの仲間たちが、サクサクと自身たちの最初の配置場所に向かった。

今回の勝敗条件は、リーダーの敗退。拠点が全て陥落したとしても、リーダーが敗退するまでは終わる事はないルールだ。

舞台は都市。住宅街とオフィス街が連なる都市であり、二つを繋ぐのは大きなアーチ橋一つだけ。それ以外に二つを行き来する事は出来ない。Cクラス側は住宅街。Bクラス側はオフィス街となっている。

Cクラス側である住宅街には、立ち並ぶ一軒家たちとマンション、アパート以外にもスーパーやデパートなどの百貨店があちこちに点在していた。右側部分にスーパーがあり、兵糧庫はそちらに配置されている。住宅が立ち並ぶ左側に武器庫が配置された。本陣は、中央にある大きなデパート——三階に配置された。

「よろしく。今度はこちらが勝たせてもらうよ。諸越君」

「フン！ やってみろよ。返り討ちにしてやる」

代表者の二人は握手を交わし合う。それ以上の言葉を交わす事はせず、自身のクラスたちがいる場所へと帰って行った。

『両選手。それぞれの持ち場へと帰還してください。二人が戻り次第、試合開始。選手たちの行動を許可します』

その道中——オフィス街を歩く新の携帯の着信が鳴る。握手を交わし合った時点で試合は始まっているような物。試合で必要ない物は持って来てはいけない。彼の携帯保持は違法だ。

新は知ってるのを承知で持って来ている。彼にとって、携帯はある人物たちとの連絡を取るために必要な事であるからだ。

「もしもし。仁さん——どうしたの？ 何かあった？」

新は携帯を取り出し、通信相手の男と話し始めた。

『新。今日は学校で学年別の対抗戦があるって言ってたのよな』

「？ ああ、うん。そうだよ。それで今、一日目最後試合が始まる所だよ」

『わかってる。今、みんなで見に来ているからな』

「え？」

その言葉を聞き、新の動きが止まった。面食らったような表情が、次第に笑顔へと変わって行った。

「本当に！？ 俺の試合を見に、みんな来てくれたのか！？」

『なんだよ。見に来ちゃ行けなかったのか？ せっかく、遥々フランスから藤馬とうまが帰って来てくれたのによ』

「わざわざフランスから！？ 嬉しいよ！」

いつもの彼とは思えない、その嬉々とした表情。彼は心からその事に付いて喜んでいた。

電話越しの仁にもそれが伝わったのか、声から機嫌のよさがわかる。

『今日の試合。がんばれよ。応援してるからな』

「うん！ 見ててよ。絶対に勝ってみせるから！」

勝利を約束し、新は通話を終えた。元々彼は、学年別対抗戦にそれほどまでに執着はなかった。勝ったとしても、IA企業から一目置かれるだけだからだ。

そんな物は、彼にとって何の役にも立たない。

だが、大切な人たちが見てくれるのであれば話は別だ。彼の心は今、大きく、激しく燃え盛り始めていた。



一般の観客席、その上には特別な部屋が幾つかあり、その場所から試合を一望できるようになっている。

あまくさじん

天草仁は部屋の一室に、仲間たちと共に試合を見物していた。彼はIA天草企業の社長であり、企業を拡大させていった天才だ。今では世界でも有数のIA開発企業、選手育成企業として名を上げていた。

だが、それは表の顔。

自分の真の姿を隠すために、表に溶け込むために用意した舞台にすぎない。

通話を終えた彼は、携帯をテーブルの上に置いた。

「新は何だって!？」

試合場の景色を眺めていた少女は、仁の方へ顔を向けた。手足や顔は細く、手入れがいき届いた綺麗なロングヘアーに吸い込まれるようなサファイアのような青き瞳を持った少女。

仁は立ち上がり、彼女の隣に立った。

「俺たちが来てるって言ったら、がんばるってよ」

「ヘッ！ 当然だろ。俺たちの前で下手な所見せたら承知しないぜ。あいつ」

声がしたのは仁の後ろ。彼が座っていた席の隣の席。

声の主の彼は、席に座りながら持っている飲み物を口に含む。

「藤馬^{とうま}。飲みすぎだぞ」

「大丈夫だよ。酒じゃなくて炭酸なんだし」

彼——藤馬が飲んでいるのは2リットルの炭酸飲料。それをコップに汲んで飲むのではなく、直にペットボトルの口から飲み始める。

「それに神楽^{かぐら}が、俺が冷蔵庫にストックしていた炭酸飲料を勝手に飲んだせいで、わざわざ走って店まで買って来たんだぞ。フランスから帰って来てから何も飲んでなかったから、喉がカラカラで仕方なかったんだ」

「だ、だって最初から用意されてる物だと思ったんだもん」

神楽^{かぐら}は拗ねたように口を膨らませる。見ると、彼女の手にはコップが持たれており、中には炭酸飲料が入って泡を立てていた。

「用意されてんのはワインだけだって、言ったじゃないか！？ なのに、俺がトイレ行ってる間に、買って来た炭酸三本のうち二本の見やがって。クソーー！ 金払えー！ー！！」

「ちよっと待ってよ！ あたしが二本も飲んでる訳ないでしょ！？ あの二人も一緒に飲んでたよ。て言うか、あの二人がほとんど飲んでたよ！」

そう言って彼女が指差した方向には、向かい合ったスーツ姿の男

女がトランプをしていた。

スーツをだらしなく着こなした赤髪の男。サングラスを頭の上に載せて、隣のテーブルに置いたワイングラスに入るワインを飲む。整った顔に、はだけた部分から見える引き締まった肉体。モデルか何か思わせるような男だった。

そしてもう一人の銀髪の女もまた、だらしなくスーツを着ながらトランプをしていた。第二ボタンまで外されており、そこから豊かな胸が見えそうだった。すらりと伸びた脚。綺麗に出来たくびれ。小さく整った顔。彼女もまたモデルを思わせる体型だ。

「おいアギト！ イース！ お前ら俺の炭酸飲みやがったな！ 飲むなって言っただろうか！」

「仕方ないだろ。俺、炭酸飲みたかったんだから」

「私、聞いてないし」

「え！？ それで飲んじゃうの？ 人の物、飲んじゃうの？ そんな事しちゃいけませんって、親から教わらなかったの！？」

藤馬は激昂しながら二人の間に入り込む。

彼に対し素っ気なく返し、トランプで大富豪を続けていた。それでもギャーギャーと二人に口論し続ける。

そこに仁が入り込み、彼のなだめに入る。

「まあまあ。後で新しいの買って来てやるから、あんまり怒るなよ。血圧上がって死ぬぞ」

「だったら仁！ こいつらに払わせろよ！ じゃないと、俺の気は治まんぞ」

「わかったよ。ごめんな藤馬。後で金は返すから許してくれ」とアギト。

「ごめんね。知らなかったとは言え、あんたが、そこまで炭酸を愛してるなんて知らなかったから、罪悪感でいっぱいだよ。私」

とイースがランプのエースをテーブルに出す。

「え？ 何それ？ そんな謝り方でいいの？」

「——もういいでしょ？ それで」

ちゃんとした謝罪をしない、むしろ憐みを込めたような目で彼を見る二人。ワナワナと強く拳を握る藤馬。

そこに、二人の人物たちが部屋に入ってきた。

「相変わらず、気が短いわよ。藤馬」

長身ですらりと伸びた肉体。出る所は出た体型に、綺麗に一つにまとめられた栗色の髪。眼鏡をかけた知的そうな女性。

もう一人は女よりも大きく、この中で一番の長身とがたいの良く、鍛えられた肉体。黒く焼けたような黒人だった。

「カリファ。ダズ」

「遅くなったわ。資料をまとめるのに時間が掛っちゃって」

カリファは椅子に座り、手に持っているノートパソコンを開く。

「ほらよ。藤馬」

「お、ああ。ありがとう。ダズ」

ダズは藤馬へと包みを投げる。中には二本のペットボトルとスナック菓子が入っていた。そのスナック菓子は彼が好きだった物だった。

ダズは冷蔵庫から、彼が用意していたキンキンに冷えた酒を取り

出す。酒の口をあけ、トランプをする二人に混じる。

「はあく。ま、これでいいか」

藤馬は怒りで冷めたようで、溜め息をつきながらペットボトルの中の炭酸飲料を飲み始める。

神楽はカリファへと近づき、じゃれる猫のように満面の笑みで彼女へと抱きついて行った。

「カリファ。久しぶり！」

「神楽。久しぶり。曲はいつも聞いてるわよ。一昨日のテレビにも出てたわね。元気にやってるようでよかったわ」

カリファはまるで母親のように、抱き付く神楽の頭を優しく撫でる。

くすぐったそうな笑顔で喜ぶ神楽。傍から見れば、まるで姉妹のように見える。

「試合は始まっているようね。仁」

「ああ。新の奴、俺たちが見てるぞって言ったら、俄然やる気が出た見たいだぞ」

「そう……。よかったわ」

その事を聞いたカリファは、どこか寂しそうな表情をした。重く試合場の方を見る彼女には、何か思う事があるのだろうか？

彼女は重い口をあける。

「あの子も……。確か、この試合に出てるんだったね」
「……ああ」

あの子。その単語を聞いた途端に、仁もまた表情を暗くする。彼の表情は彼女よりもさらに深く、その人物との大きな繋がりがある事を感じさせる。

神楽は何の事かわからず、頭に「？」をつけながら二人の顔を見る。

「お前は……今、何をして生きてるんだ？」

「……………一刀」



「一刀。橋の近くまで着いたぞ」

『よし！ 敵がすぐ近くにいてもいいかもしれない。警戒しながら、橋を渡るんだ』

試合が始まり五分後。Cクラスの生徒、一隊が橋の近くに到着した。彼らは、橋から十メートル行ったにある一軒家を壁にして隠れている。彼ら以外にも二隊の部隊が橋付近に点在しており、姿を家や店の中に隠している。彼らの任務は、攻め寄って来たBクラスの者たちを一網打尽にする事だ。

突撃隊である彼らは、一刀の指示を受け、橋を渡り始める。

見通しの良い、大きなアーチ橋。辺りには誰もおらず、Bクラスたちの気配はどこにも感じない。それが逆に不気味であり、彼らの警戒をさらに強くした。

「ん？」

オフィス街と繋がる橋の最後で、一人の生徒が遠くに何かを発見

する。

誰かが、彼らの方へ近づいているのだ。

Cクラスの彼らはソーマを展開させ、敵であろうBクラスの者に武器を向ける。次第に近づいてくる者の格好から、それが男子だと判断できる。彼は手に何も持ってはおらず、ポケットに手をつこんだままだ。あれでは、彼らの攻撃を防ぐ事は出来ない。それを知ってか知らずか、男子は彼らの所へ、警戒などせずに向かい歩く。

「ナッ?!」

顔が認識できる所まで近づいてきた男子を顔を見て、Cクラスの者たちは一斉に愕然とした表情へと変わる。手が震え始め、戦意が喪失している者さえ現れている。

金髪、アクアマリンの色である青緑の瞳。そして、学年二位であり、模擬戦で一夏を圧倒させた少年。

ヒューイだ。

「よっ!!」 Cクラスのみなさん。お久しぶりです。ヒューイ・ミリアルド。スリランカでの特訓を終えて、帰還して参りました」

彼はCクラスの彼らとの距離が二メートルまで差の所で停止した。彼らに向かって丁寧なお辞儀までして、彼らの不安を煽っている。

ヒューイの実力を知っている彼らは、自分たちでは勝てない事を理解している。しかし、逃げ出す事は仲間たちに申し訳ないがために動く事が出来ないのだ。

「模擬戦の時は負けちゃったけど、今回は勝たせてもらうよ」

「な……………何で……………こいつが……………ここに……………!!」

彼らはヒューイの前線での登場に疑問せざる負えなかった。ヒューイは今まで、攻撃ではなく守備に回っていたからだ。彼のように高い実力を持っている者は、鉄壁の守りとして拠点にいた方が、仲間たちの後ろへの憂いも無く、敵への拠点攻めへの不安を駆り出す事もできるからだ。

その彼が、後方ではなく、前線に出るなど誰も予想しなかっただろう。

「それじゃあ……。行くぜ!!」

恐怖で固まってしまった彼らに向かって、ヒューイは地を蹴り、一気に襲い掛かった。



「あいつら、上手く行ってるんだろうな？」

「さあな。俺たちは、あいつらが帰って来るまで動く事が出来ないからな」

Cクラス、橋付近で待機している者たち。彼らは、Bクラスの者たちが来たら、襲撃する事を指示された者たち。

その中には一夏もいた。彼は待機している者たちとは違い、橋を渡った仲間たちが、Bクラス側で暴れ始めた時を見計らい、橋を渡るように一刀に言われているのだ。

彼は他の者たちに見えないように、ポケットに仕舞い込んでいた首飾りを手に取る。それは、試合前に一刀から渡された物。首飾りと言っても、あるのは真ん中に付けられたエメラルドグリーンの石だけ。

(何で、あいつは俺にこんな物を……? それに、危険が迫った時って、一体……)

首飾りを見ながら、一夏は首をひねらせる。危険と言うのが彼にとって、あまりピンと来ないのだ。あるとすれば……。

（ヒューイの事かな……？）

彼は一度、試合で死にそうになった事があった。それが模擬戦時。ヒューイとの試合の時だ。彼が最初、好んで使うソーマー―アサルトライフルで一夏と対峙した。ライフルだけでも彼を圧倒し、苦しめていた。

だが、突然ライフルを仕舞い込み、次に手にとりだしたのはただの石ころ。その石は、彼の思いと同時に輝きだし、大鎌へと変貌を遂げたのだ。鎌の威力は絶大であり、どんな物をも斬り捌いていた。一夏の使用していた剣も、彼の鎌の前では意味を成さなかった。一夏が一番驚いたのは、大鎌によって抉られた肩の血だ。試合中はアーマーとエリアの保護によって血を出す事はない。一夏と凛との戦いで、アーマーがはだけてしまった一夏は怪我を負ったが、それでもエリア保護によって傷による影響はあれだけで済んだのだ。

あの時の肩からの出血は、試合上、あまりにもイレギュラーな事なのだ。

【これは、ソーマじゃない。武器。なんだよ】

大鎌を揮うヒューイが言った言葉。それが、一夏の頭の中をよぎった。

ソーマではなく、武器。つまり、彼はあの時、試合をしていたのではなく、本気で殺しかかっていた――と言う事になるのではないか？

武器。それは、身を守るために使われ、狩りや猟などで使われて

いた物。現代に近づいていくうちに連れ、それは他人を殺すために使用される物へと変わっていった。

人を殺める物。それが――武器。

ヒューイは何故、一夏を殺そうとしていたのか？

そして、あの人とは一体……。

「なあ？ あいつら遅くない？」

「そうだね。向こうに行ってから、結構経つね」

彼らが向かってから、二十分が経っていた。これだけ経てば、Bクラスの者たちがこちらへ向かって来てもおかしくない筈だ。それなのに、彼らの姿も、誘き出すための仲間たちも帰って来ない。これはおかしい。

「俺が行くよ」

「霧島君。大丈夫？ 苑宮君に聞いた方が……」

「大丈夫だろ。あいつなら、きっと俺に向かうように行ってくれるさ」

一夏はそう言うと、身を隠していた一軒家を出て、橋へと向かった。橋付近には誰もおらず、敵も味方の気配も無い。

さらに奥へと進んで行った。

そこで、ある人物と出くわす。

「ヒューイ……！」

そこにいたのはナイフを弄り遊ぶヒューイがいた。

「おお。霧島か……。今度は、お前が俺にやられに来たのか？」
「何!?! ……なっ!?!」

一夏は彼の下に散らばるソーマの数を見た。その数は、先に行った仲間たちの人数と一致していた。つまり、彼らはヒューイによってやられたと言う事だ。

「先に来た奴らなら、ご退場願ったよ。あいつら、我武者羅にソーマを揮うだけで、大したことなかったけどよ」

「!?! お前……!?!」

一夏は自分でも驚くほどに、強く大きく怒声を張り上げる。作った握りこぶしをさらに強く握る。

憤怒の形相で自分を見る一夏を見て、呆れたような表情をするヒューイ。

「おいおい。これは試合なんだぜ。やられた相手の事で、一々そんな表情を作るのかよ」

下に散らばる双剣を手取る。

そして――!

「ほらよ……!」

ナイフを投げ飛ばす。

一夏がそれを避けると、一瞬だけナイフによって、ヒューイの姿が一夏から見えなくなる。その瞬間を逃さず、ヒューイは手に取った双剣で一夏に襲い掛かる。

「!？」

だが、それは見事に防ぎ止められた。

「そう簡単に……、やられるかよ！」

一夏は双剣を展開させたソーマー——剣によって防いでいた。力任せにヒューイを押し返す。

「……」

押し返されたヒューイは、無言で、何も言わずに手に取っていた双剣を捨てる。先ほどのまでの表情が一変し、威圧感を感じさせる顔つきになった。

一夏は剣先を彼に向け、キッと睨みつける。

「あの時とは違う。覚悟しろ——ヒューイ！」

「どうか……? ……かかって来いよ。返り討ちにしてやる」

ヒューイはソーマを展開させ、アサルトライフルを向ける。

一夏は臆することなく、彼へと地面を蹴った。

Cクラス 対 Bクラス（後書き）

以上です。話がいきなり過ぎたかも知れませんがね。

今回はCクラス対Bクラス。そして、新の仲間たちも現れましたね。そして、仁はボソッと一刀の名も上げていました。彼らと一刀の間には因縁がありますが、それは後ほど話したいと思います。

紫の瞳の少女

Cクラスに衝撃が走る。

橋付近で待機させていた者たちからの連絡だった。先にBクラス領地へと向かった仲間たちが全て全滅。彼らとの連絡が来ない事を心配した壇が、橋にいる者たちに調査するように指示を出したのだ。彼らをやったのは、ここまで本陣の守備しかしていなかったヒューイだったのだ。ここまで防衛を徹していた彼が、Cクラス戦では攻撃へと転じたのだ。

「チッ！ ^新あの野郎に、まんまとやられたよ。まさか、序盤からヒューイを出してくるとはな」

一刀は舌打ちし、ディスプレイ中央にいる二人の選手の姿を見つめた。

一夏とヒューイ。

二人は何か話しているようだ。ヒューイの下に散らばるのは、Cクラスの仲間たちのソーマだった。ナイフ、双剣、槍、チャクラムの四つ。彼はナイフを弄りながらも、一夏の警戒を怠ってはいなかった。対する一夏も、いつでも武器を展開できるように、腰のベルトに付けたソーマへと手を近づけていた。

二人を傍から見れば、ただ話しているだけのように見えるが、お互いの間に流れる空気は強く、激しい剣幕を放っている。

「ヒューイが橋を陣とってしまったら、こちらがBクラス領地に向かう手段がないぞ。防戦一方になっちまう」

「確かに、このままじゃ不味い。何とかしてあちらへと行く手段を

見つけないとな……」

手に顎を載せ、思案し始める一刀。

何度も言うが、お互いのクラスに行くには橋を渡る事しかできない。橋の下は大きな川。その先は海になっている。

川の流れは穏やかだが、今回のフィールド、観客を盛り上げるために特別な措置がされている。川は数分ごとに流れが急となったり、強い風が吹くなどの状況異変が起きる。

「壇。風が吹くのは何分後だ？」

「？ 確か……あと五分くらいかな」

「よし。武器庫で待機している者たちに繋げてくれ。してほしい事があるってな」



剣とライフルがぶつかり合い、鉄と鉄の跳ねかえる音が橋に鳴り響く。一夏は彼を押し返し、胴への中段斬り。それを鍛え上げられた瞬発力で見極めるヒューイ。ライフルで防ぎ取る。ライフルを重心にして身体を上げて蹴りを入れ込む。

「!？」

だが、彼の蹴りを一夏は掴みとった。手に取った脚を力任せに振り投げる。

空中で体勢を整え、ヒューイは地面へと落ちる事を回避する。

驚いた表情を隠し切れないヒューイ。力強く掴まれたせいで、足首が赤くなっていた。

ここまで事が上手くいっている一夏は、冷静を装っているが、心中ではガッツポーズの構えをとっていた。

「甘く見てたぜ。正直、ここまで出来とは思わなかったぞ。模擬戦の時よりも、事の実況判断が的確じゃないか」

「フン！ あの時は、お前の実力に圧倒されてただけだ。訓練して、射撃武器からの回避を会得したんだ。お前の銃弾には、簡単には当たらないぜ」

自信あり、と胸を張って宣言した一夏。

模擬戦時では、ヒューイの発砲する銃弾の前に、避ける事も反撃する事も出来なかった。飛び道具との戦いの経験が彼にはなかったのだ。

あれから、射撃者との対戦を重視して行った。そのために、瞬発力、敏捷性を鍛え上げた事で、ライフルから撃たれる銃弾を避ける事は雑作もないほどまでになった。

「ふーん」と彼に怯むことなく、ヒューイは五度目の銃弾を発砲した。

真っ直ぐに一夏に飛んでくる弾を、彼は素早く右へと躲す。そのまま、ヒューイ目掛けて走り出す。剣を後ろに隠し、彼から見えないように構えた。こうされたら、相手はいつ剣が襲い掛かって来るからわからず、身構えておかなくてはならない。それに下手に攻撃をすれば、相手に隙を作ってしまう。

だが、ヒューイはライフルを発砲した。

火を噴き、第二弾、三弾が一夏を狙い、飛んできた。走りながら、体勢を屈めやり過ごす。

銃弾が橋のコンクリートを凹ませた時、一夏は自身の間合いに彼を入れ込んだ。力を込めた、刹那の剣技を繰り出した。

ヒューイは避け切れず、もろに斬撃に切り裂かれる。

”critical 100” ↓ ”一夏 +100” ↓ ”4

00”

” — 100 ” ↓ ” 200 ”

攻撃を受け、後方へと下がるヒューイ。切り裂かれた部分はアーマー保護によって修復され、彼の身体には傷一つない。

「すごいな。瞬発力、敏捷性、どちらも申し分ない。これなら、いい勝負ができそうだ」

彼は、クリティカルさえも受けてしまったと言うのに、何食わぬ顔で斬られてしまった部分をさする。自分の不利を物ともしない態度。さすが、と言うべきなのだろうか。

「さあ、どうするヒューイ。お前の銃弾は俺には届かないぞ。攻撃の術は、まだ残ってるのか？」

挑発する一夏。ここまで優位に事が運んでいるせいか、彼の心にも入らぬ余裕が生まれ始める。

彼の挑発に対し、ヒューイは笑って答える。

「ハハハハハ！！！！面白いこと言うじゃないか！！ 攻撃の術？ そんな物、いくらでもあるさ！！」

ヒューイはライフルを地面に向けて撃ち続けた。

一発、二発、三発、四発、そして五発。

五発目まで撃ち終わると、一旦撃つのを止め、不敵な笑みで一夏を見るヒューイ。撃ち続けられた地面のコンクリートは陥没し、弾丸の小さな穴が作られる。

「霧島。あの時、言ったよな？」

穴から銃弾による煙がたった。

口を開くヒューイから、一夏への問いが掛けられる。彼の口調からは、一夏を試す事以外にも、鋭く相手のい抜く程の何かを感じさせた。

「己の器を知り、その中で戦う事が出来る者が——勝者へとなれる。器の意味……お前はわかるか？」

「……」

一夏は答えない。

ヒューイを警戒しての事ではない。彼の問いに対する答えを、一夏は持っていない——いや、わからないのだ。

一夏とヒューイ。

国が違う。

性格が違う。

価値観が違う。

そして————生きて来た人生が違う。

「器——それは、自分が持つ実力の限界。それを知っている、知らないとは大きく違う。実力の限界を知れば、己のなすべき事が何なのか、自分の戦いのスタイルとは何なのかを見極める事が出来るんだ。ここまで言って、わかるか？」

「……………?」

すると、ヒューイはライフルの引き金を一回引いた。そして銃口

を再び、先ほどまで撃ち続けていた地面へと向ける。

彼はフンと鼻を鳴らし、

「勝てるか、勝てないかは最初に気付いて事だよ！！！！！！」

銃弾が発射される。

だが、それはさっきまでとは違う。異常なまでの銃火音。激しく揺れる橋全体。

あまりにも揺れが強いために、一夏はその場に立ち続ける事が出来ず、転倒してしまった。

ヒューイが撃った地面から地割れが起き始め、二人の間を引き引き裂いた。真っ二つに割れた橋は崩壊を始め、下にある大きな川が顔を出す。今にも彼らを呑みこまんと、穏やかな流れから一転、急な流れへと変化して行った。

「クッソ！！」

一夏は難を逃れるために、剣をコンクリートへと突き刺す。重力と彼の体重によって、徐々に下へと落ち始める身体。次第に落下の速度が落ちていき、やがて止まった。あと少しで落ちる所で何とか止まる事ができ、間一髪であった。

「何とか助かったか？ でも、このままじゃ、ヤバいな。霧島？」

一夏の真上。ヒューイが上から彼の様子を眺めていた。彼は鉄骨の上に乗って、一夏の姿を上から見下ろしていた。橋の崩落寸前、一夏よりも速く行動して崩落の被害から、身の危険から脱していたようだ。

「そこから、俺の弾を避けれるのか？ 避けれたとしても、待つて

いるのは激しく急となった川だけだな」

「クッ!？」

今の一夏の状況は絶体絶命。ヒューイの場所からは、一夏の姿が丸見えだった。狙うにしても十分な場所に立っているし、風も吹いていない分、彼自身に狙いを定めていれば確実に当たるだろう。避けるには、一度剣を抜きとる必要がある。だが、そうすれば重力によって彼の身体は落下を余儀なくされる。落ちた先には川がある。ただの川ではなく、フィールドの特性によって数分後とに急な川へと変化する特別な措置が施されている。

「じゃあな。今回は、俺の勝ちだ」

勝ち誇ったヒューイが、一夏へとライフルを発砲しようとした。彼が引き金を引こうとした——その瞬間、

「!？」

突如、彼の眼前が覆われた。彼に直撃したそれは——家だった。



数十分前。Cクラス武器庫。

「何!？ 家を破壊しろだと!？」

その中にいる千那は無線機越しに声を荒げていた。残りの生徒たちもポカンと口をあけ、彼の言った事に言葉を失っていた。

『そうだ。でも、ただ壊してもダメだ。俺の言う通りに破壊して行け』

「いや、破壊して行けと言っても、どうやって……？」

『武器庫に鍊金ソーマが置いてある筈だ。それを使って破壊して行けばいい』

無線機の相手は一刀だ。

千那たちは、武器庫にあるソーマの中から鍊金ソーマを探しだす。鍊金ソーマとは他のソーマたちとは少し違い、選手たちがそれを保持してはいけけないと言う事がない。具現ソーマ、強化ソーマは選手たちが武器として使うために所持する物だ。

しかし、鍊金ソーマは武器として使うのではなく、フィールドにある障害物や建築物などを破壊するためにある物だ。強化ソーマにとって鍊金ソーマとの相性が悪いのは、破壊された物に対する抗体がないからだ。具現ソーマであれば、ありとあらゆる対象に万能に働く。強化ソーマの対象となるのは、選手たちとソーマだけに限る。障害物、建築物はその対象外となる。それ故にソーマによる強化が働かないのだ。

一刀は、家々を鍊金ソーマで破壊して行くと言う奇天烈な発想だ。

「使うのは、爆弾か？」

『ああ。爆発する対象の家は、こちらから指示する。とにかく武器庫から何人か、この策に動いてくれないか？』

「わかった。とりあえず、私は出るぞ。他には……」

武器庫の中から、この話を聞いていた四人の生徒たちが志願してきた。橋に向かい、ヒューイにやられた事を聞いた時、焦りからか居ても立っても居られなくなった者。名誉挽回のために志願してきた者などだ。

「……よし、じゃあ行くぞ」

千那は最初、戸惑いもみせるも彼らのやる気と勢いを感じ、付いて来る事を承諾した。

『まずは右側、縦並び建てられた家を破壊しに行ってくれ』

一刀の指示に従い、千那たちは走り出した。

武器庫はある一軒家であり、家を出た周辺もまた多くの家が建ち並んでおり、八方どこを見ても家々が並んでいる。

彼が言った右側の家とは、武器庫から西に行った商店街近くの事を指しているのだろう。彼女たちはすぐさま、そちらの方へ向かって行く。

「一刀。破壊すると言っても、どの家を破壊すればいいんだ？」

縦並びに並んだ家が多々あり、彼の言う目的の家がどれかわからないのだ。その時、彼女たちに強い風が襲い掛かる。

「な、なんだ!？」

『風が強くなり始めたか……。とりあえず、商店街から三番目にある家を破壊してくれ。そしたら、次は五番目の家だ』

強い風に視界を持っていかれ、上手く前を見る事が出来ない。それでも、何とかして目を開け、商店街から三番目の家を見つけ、彼女たちはその中へと入り込む。

たった数歩だったが、ここまで来るのに何キロも走ったかのように身体が重くなっていた。激しく息切れし、汗には雨粒ほどの水滴が垂れ落ちる。

千那は重い腰を上げ、その家のリビングに鍊金ソーマー——時限爆

弾を設置する。

「時間は!？」

『五分後だ』

一刀の言われた通り、五分後に爆発するように設置する。

仲間たちに設置出来た事を報告し、彼らと共に玄関の扉を開けた。

「!？」」

すると外から、とてつもない突風が襲い掛かる。その風の威力によって、彼らは歩く事も、目も開ける事も許さない。

水の中に落ちる時、落ちる高さによって身体に加わる損害は大きくなる。

同様に風も同じだ。襲い掛かる風の力によって、人の身体へのダメージは強力になっていくのだ。あまりにも強すぎる風ならば、人は水の中になる時と同じように、息をする事も許されない。

千那たちは、迫る風によって息がしづらい。脳に酸素がいなくなり、身体の実能力が低下して行く。他の仲間たちはすでに、動けなくなっている者たちばかりだ。

しかも、この家には爆弾を設置している。急いでここから非難しなければ、爆弾の被害に巻き込まれる事になる。

『千那!？ 大丈夫か?』

一刀が彼女たちの異変に察知し、心配して話しかける。

しかし、今の彼女に話し返す余裕はない。話すために使われる酸素を消費するのが惜しいからだ。

いや、今話せばそのまま意識が飛んでいってしまいそうだからだ。彼も気付いてのか、一方的に話しかけ始める。

『動けないなら、せめて姿勢を低くしろ。そうしないと、爆弾で破壊された家の部品が飛んでくるぞ』

一刀の言葉に従い、彼女たちは姿勢を低くした。姿勢を低くした事によって、家の中へと飛んでくる木の枝や煉瓦の被害から多少逃れられる。

リビングから、ピピピと言った音が鳴る。

その後に起るのは火力によって一気に爆薬が発火した。

爆音と爆風が飛び交い、家は破壊——されなかった。

破壊されず、一軒家の外装は宙を舞い、風の威力と爆風によって空高くどこかへと飛んで行った。

やがて風は止み、辺りは再び静かさを取り戻す。

彼女たちはポカンと家が飛んで行った方角を見つめる。

『よし。まずは一つ目。ここからでもよく視えたぞ』

「ど、どう言う事だ!? 説明しろ!?!」

風が止まったことで、やっと声を発する事が出来た千那。彼女は今の事の様子が理解できず、一刀に強く説明を求めた。

『いやな。橋にヒューイがいて先に進めないなら、無理矢理橋の代わりを作っちまおうって言う作戦だよ』

「……は?」

『いや、だから橋を作っちまおうっていう——』

一刀が何を言っているのか理解できず、呆然としてしまった。

彼はヒューイが橋を占拠してしまったのなら、Cクラスで橋の代わりになる物を作ればいいと言う案を思いついたのだ。それが家の

破壊しろと言う指示へと変わったのだ。爆風とフィールドに起る突風を利用して。

『本当は、もう一軒欲しかった所だけど、あれだけあれば充分だろ』
「ちょっと待て。あれだけあればとはどういう事だ？」

聞き捨てならない一刀の言葉に反応する千那。それを素っ気なく返す一刀。

『実は、他の奴らにも頼んで爆破して貰ってたんだよ。おかげで川の上に逆さになった家がいっぱいだぞ』

彼の言葉が本当ならば、住宅街とオフィス街の間の川には、爆風によって飛んで行った家が列を並んで埋まっているのは確かだろう。

『橋付近の奴らには、指示を出してるから、これでやっとBクラス側に攻められるよ。あ、お前らは拠点に戻って待機でいいからな』

「なっ……!!」

千那が何かを言おうと口を開くが、通話は切れていた。一刀は、言いたい事を伝えて勝手に通信を切ってしまったのだ。

その横暴さに止め処ない怒りを感じるもすぐに冷め、溜め息をつきながら、彼女たちは言われた通り、武器庫へと戻って行った。



「な、なんだったんだ？」

一夏は何が起きたのか分からず、橋の辺りを見回した。
突然、何か家が飛来してきたかと思えば、ヒューイがそれに直撃。

彼はそのまま家と共に彼方へと飛ばされしまった。

「とりあえず、これでオフィス街へは行けるようになったけど……」

一夏がいる方は、Bクラス領地のオフィス街。彼の目の前には、大きく建設されたビルが見えるだけでも十数棟はあった。奥にはまだ多くのビルがあり、日本オフィス街と言うよりは、アメリカの摩天楼が並ぶオフィス街に近い。

彼が街の中へ入ろうとした時、持っている通信機が振動した。

『一夏。聞こえるか？』

「壇か。どうした？」

通信相手は壇のようだ。

一夏は一旦、歩みを止め、彼との通話に集中する。

『これから、Cクラスたちの反撃を始める。お前もできれば、そちらに回って欲しい』

「構わないけど、みんなはどうやって、Bクラス領地に入るんだ？」

一夏は最もな質問を彼にぶつける。橋はヒューイによって真つ二つにされ、通る事はもちろん、飛び越える事も出来ない。原則、一度破壊された所は修復される事はなく、その状態で試合は最後まで続けられる。つまり橋は破壊されたまま、治る事はない。

『それに付いては、すでに解決されている』

「？ どう言う事？」

一夏は彼の言葉の意味が理解できず、眉根を寄せる。彼は「右を見る」と言う壇の声に従い、そちらへと首を回した時、呆気に取ら

れてしまった。

川の中に十は超える家が逆さになって沈んでいたのだ。それが道となり、二つの街を繋げる橋となっていた。

その橋を通るは仲間たち。彼らは歩きづらい道を懸命に渡っていた。

『みんなもその内に街に付く。それまで、お前が街で暴れて来てくれ』

「何で家が逆さで……。まあ——了解。任せとけ」

家が逆さになっている事への疑問を残しつつも、一夏はクラスの勝利に貢献するために、壇の指示を承った。

オフィス街の中を走るも一向にBクラスたちの姿は現れない。

外ではなく、屋内にいないのではないか。と思い、屋内を探索するも彼らの姿はどこにもない。当たり周辺をまんべんなく探すにも、時間が掛かり過ぎてしまう。一棟に付き、階数は十は軽く超えている。それに中の部屋の数はその二乗分あっても不思議ではない。それを全て探すのはCクラス全員でも骨が折れる。

ましてや一人なんて到底不可能だ。

「ダメだー！？ 疲れて力が入らねえ」

一夏にも遂に限界が起き、床に腰を下してしまった。

彼が今いるのは、あるオフィスの三階の一室。辺りにはデスクワークがズラッと置かれており、仕事のやり残しの状態だった。

「つーか。ここまで再現する必要あったのか？」

やり残しの他にも、飲み残されたコーヒー。閉め忘れられた引き

出し。その他もろもろが再現されている。

「別に、観客がこんな所まで見てる訳でもないのにな。I Aの製作者たちは何考えてるんだろうな？」

誰が聞いているわけでもないが、一夏は話しかけている。

オフィスには、彼の声だけが虚しく響き渡る。普段はこのようなオフィスには何百人といった人たちが出入りしているのだろう。それが一人だと、ここまで寂しい物になるとは。

一夏は身体を上げ、別のオフィスビルへと向かおうとした。部屋の外に近づいた瞬間――。

「うわっ!？」

彼の前を何かの姿が現れる。

日ごろの訓練の成果で、鍛錬された反射神経のおかげで難を逃れた。

前を横切ったのは二本の矢だった。矢は見事、壁に突き刺さっており、まともに当たっていたらアーマーの耐久力は大きく削られていただろう。

一夏は自分の狙って放った方へと視線を向ける。

「あれ？」

しかし、そこには誰もおらず、シーンと静まり返っていた。

妙な不気味さを感じた一夏は、念のためにソーマを展開。いつでも狙われても平気なように、集中力を全身に高める。

三階の中を全て見回るが、弓矢使いはどこにもいない。

（逃げたのか？）

そう頭の中をよぎるが、即座にそれを否定。

（いや、逃げる必要はないな。相手は、俺が姿を見ていない事はわかってる筈だ。だったら――）

彼は四階への階段を上って行く。

敵は逃げたのではなく、誘いを入れているのではないか？ 姿を見られていないのであれば、自分の顔は分かっている。攻撃パターンや性格によって生まれる弱点などは把握されていないのだから、すでに自分だとわれてしまっている一夏と違い、自身の方が様々な利点の上で試合を有利に持って行ける筈。故に逃げる必要はない。一夏はするように判断した。彼はあえて、その誘いに乗り、敵との対立を望んだ。

四、五と進むがやはり、姿を一向に出さない。全ての階を探しまわり、最後に残ったのは、

「屋上……」

最後に残されたのは、屋上。見過ごしたのか、それともただ単に自分の見当違いだったのか。たくさんの予想を自分の中で思案する一夏。だがそれと言って、よい答えは見つからなかった。

「あー！ ！ やめだやめ！！ こういう考える事は、いつも一刀に任せてるから、俺には分からねえよ」

首を振り、頭の中で混乱していた考えを全て取り払う。

そして彼は、残された屋上への扉を開けて行った。

「？」

屋上は高く、周りの景色が一望できるようになっていた。小さく見える他のオフィスの数々。それよりもさらに小さい物が、Cクラスたちのいる住宅街。ほんの豆粒ほどにしか見えない。彼が入ったこのオフィスもそれなりに高いビルであり、この建物以上に高い物など、たった数棟程度であった。

その屋上にいるのは一人の少女。彼女はボーっとそこから下にある建物を眺めていた。長く伸びた銀色の髪。白く繊細な肌。

まるで、雪をイメージさせる彼女は、一夏の気配に気づき、スツと静かに彼の方へと身体を動かす。随分と華奢な少女であり、背がそれほど大きくない所から、歳は一夏よりも五歳ほど下回っているだろう。

「あ、あのー」

先手を切ったのは一夏。迷子か何かと思ったのだろう。彼は少女を安全な場所まで送ろうと声をかけたのだ。

「ここは危ない所だから、安全な場所まで案内するよ」

彼は、少女へと手を差し出し、送る事をアピールしている。

しかし、少女はその手には目もくれず、ジッと彼の顔を覗き込んでいた。紫に光る瞳には、彼しか映ってはおらず、感情も何も感じさせなかった。

一夏は若干、怖気つきながらも年上としての威厳を保とうと、それ表情には出さなかった。

数秒間、見つめ続けていた少女が遂に彼の手を握った。

一夏はホッと一息つき、歩き出そうする。

「それじゃ、行こう――」

「桔ヶ也って、知ってる？」

屋上を後にしようした時、初めて少女が口を開いた。

一夏は少女の声にしては、どこか大人びた声をしていた事に驚いていた。

近づいたことで、自然と見上げるように彼を見上げる少女。

「ねえ？ 桔ヶ也って人。知ってる？」

「桔ヶ也って……、Bクラスの」

再び問いかける少女。

彼は不気味に感じるも、彼女の問いに答える。

桔ヶ也という名前は、あまり聞く苗字ではない。二、三年生の彼らの先輩にそのような名前の者はいなかった。一年生でも、桔ヶ也新と言う彼以外にその苗字を名乗る者はいなかった。

答えたと言うのに、少女は首を振った。

「違うの。あれは違う。桔ヶ也を名乗ってはいるけど、桔ヶ也じゃない」

「？ だったら、うちの学院で、他にその苗字を名乗ってる者はいないよ」

「……そう……なんだ」

少女は心底残念そうに、顔を俯かせる。

（ヤバい！？ 泣く）

子供が顔を俯かせる場合は大体、泣くと相場は決まっている。

一夏は何とかして、少女を泣かせぬようにと、あれこれ考え始め

る。

しかし、それは取り越し苦労だった。

「じゃあ、赤い瞳をした人知らない？」

少女はパツと俯いていた顔を上げ、第二質問を投げかけて来た。

「赤い瞳？」

「うん！ 赤い瞳をした人はね、すごく強くて、頭も良くて、誰にも負けない無敵の戦士だって聞いたんだ！」

首をひねる一夏を無視し、少女はその人物像を説明し始めた。

先ほどのまでの無感情の目とは違い、その人物の話が始めた少女の目は輝きに満ちていた。どうやら、赤い瞳をしたその者に、強い憧れを感じているのだろう。

「ごめんな。そっちの人も、俺はわからないよ」

「そっか……。残念だな……」

解を持ち合わせていない一夏は、少女に謝罪の言葉をかける。

そしてまたも、素直に残念そうな表情を作る少女。彼女は身体を動かすと、それに合わせて肩にかけたショルダーバックから音が鳴る。

一夏は最初、指摘しようかとも思ったが、

（まあ女の子だから、バックに何か付けてるんだろうな）

と、少女の趣味で何か付けているんだろう程度で、特に何も言わなかった。

「ここにいるって、聞いたから来たのに……」

「さ！ とりあえず、行こうか」

小声で何かを言っていたが、一夏には聞き取れず、そのまま少女と手を繋いで歩き始める。

今度は少女の方も何も言わず、連れられて歩き出した。



階段を下りている途中。

「……」

「……」

一夏と少女の間には嫌な空気が立ち込めていた。

彼は何となく話しかけるのだが、それは会話とは言えなかった。

年は幾つか？ 親はいるのか？ 友達とはどんな話をするのか？

どうして、あんな所にいたのか？ と、質問をするも、返って来るのは相づちばかり。そうしていく内に、自然と言う事が無くなり、最終的にこの状態へとなったのだ。

（え？ 何これ？ 俺が話しかけても特に言う事無いの？ 俺が悪
いのか、これ。最近の子供はよくわからないぞ）

会話をしようとしなない少女によって、一夏の心は何故か傷ついていた。彼は将来、自分に子供が生まれた時の事を考えて、子供の事を勉強しようかと思っていた。

三階まで下り終わった時、彼はある事を思い出す。

（そう言えば、さっき俺に向かって弓矢を撃って来た奴は一体、どこに行ったんだ？　今まで、何もして来ないなんてどう言うつもりだ？）

弓矢で一夏を狙った者は、今の今まで、彼に対して何も攻撃を仕掛けては来なかった。

正直、彼は少女の放つ不思議オーラによって、弓使いの事を忘れて警戒していなかった。そんな恰好の獲物を相手に何もしないと言うのは、あまりにもおかしい。

彼が少女と共にいたからなのか。それとも、何かを警戒しての事なのか。

「ねえ？」

一夏が周りを警戒し始めたころ、屋上からともに声を出していない少女から話しかけられた。

彼は警戒を解かず、しかし少女には優しく微笑みながら顔を向ける。

「どうした？」

「さっきまで怖い顔してたから、何かあったのかなって」「え？」

一夏は、少女が意外にも自分の顔を見ていた事に驚きを隠せなかった。

そう言う彼女は、特に表情を作りはしなかった。

彼はそれがまた不思議だったのか、問いかけてみた。

「なあ、君ってさ、顔に表情が出ないタイプ？」

「？　そうなの？　アイリはちゃんと表情を作ってるつもりなんだ

けどな」

「アイリ？」

一夏は見知らぬ名前が出た事に首をかしげる。

「アイリはアイリだよ？」

「あ、ああ！ 君の名前がアイリって言うんだね」

アイリとは少女の名前であつたようだ。

そうして、二人はちゃんとした会話を始めてし合い、階段を再び下り始める。

「アイリは少し、表情が硬い所があるかもね」

「そうなの？ よくわからないよ」

「もっとこう、口元を上上げるようにして笑ったりしないと――」

一夏は自身の口元を上げ、笑った顔を表現してみせるが、それは却ってただの変な顔になっていた。

「フッ！ 何その顔」

「お、今、ちょっと顔が緩んだじゃないか？」

彼のその顔が可笑しかったのか、無表情の顔が少し緩みを見せていた。

そんな、少し打ち解け合った二人は、ビルを出るまでちよつとした話をしていった。

ビルから出た二人。

一夏が試合から出る方法を検討していた。

原則、選手たちは試合が終わるまで外を出る事を許されない。そ

のため、彼らから試合場を出る方法は教えられていないのだ。出るには外から、誰かが機械を動かさなくてはならない。中から外の者に返事をするには拠点からするしかない。

「これはやっぱり、Bクラスの奴らに頼むしかないよな」

橋は破壊され、Cクラスへ安全に帰る方法が断たれてしまっている。逆さになった家があるが、少女を危ない目に合わせたくはない。ならば、自然と残るのはBクラスたちの拠点となる。

しかし、一夏は彼らの拠点がどこかわからないし、今までBクラスの誰とも会わないと言う始末だ。彼らを探すにもオフィスビルが多く立ち並ぶここを、一体どこから探せと言うのかわからない。

「そうだ！ 無線で……ダメだ。さっきの矢でおかしくなってやがる」

弓使いからの攻撃によって、無線機であるカードへの損傷が起ってしまったのだ。おかげで仲間たちとの連絡もできなくなってしまい、一夏は完全に孤立してしまった。

「しょうがない。適当に捜し回るか。行こう！ アイリ」
「あ、うん！」

一夏に呼ばれ、アイリが彼の方へと駆け寄って行った。先ほどとは打って変わった態度となり、すっかり一夏の事を信頼し切っていた。無表情は相変わらずだが。

手を繋いだ二人が、一緒に歩き始めた刹那――！

突如、試合上全体を襲う揺れが起きたのだった！！

紫の瞳の少女（後書き）

以上です。今回は二つのクラスの試合を執筆しました。

次回は、

突如起きた揺れとは一体何なのか？ 次はCクラス対Bクラスの試合の決着編です。

試合中止

CクラスとBクラスの試合場を上都学院——本棟の屋上で見下ろすアルタイル。

「見つからんく。やっぱ、あれも持って来るべきだったかな？」

頭を掻きながら、眠たげに声を出すアルタイル。誰がどう見ても、彼からやる気が全く感じられない。

しかし、彼こそがアサシンのリーダーなのだ。アサシンの領地を仲間たちに任せっきりにし、自身はこんな遠くの国にまで訪れている。何を考えているか分からない男だ。

ロベールのようなアサシンたちや彼らに従う影組織たちは彼の事をこう呼んだ。

凡庸と……。

彼の携帯が鳴る。相手はバルバリゴだ。

「なんだ？」

『反乱者たちの居所が判明した。全員かどうか分からないが、九割は見つけたと言ってもいいだろうな』

「そうか……」

『それに、裏組織の姿も発見した。どうやら、来たのはアンヴァースのようだ』

日本を守護する裏組織——アンヴァース。かつて起きた裏組織間の戦争で、アサシンたちと戦い合った若き組織だ。

アンヴァースの名を聞いた途端、アルタイルの口元がほんの僅か

だが、笑ったように見える。

『奴らはこちらに気付いた気配はない。今なら気付かれずに殺れるぞ』

バルバリーゴは彼らの暗殺を望んだ。同等の存在である組織。自分たちを脅かすかもしれない彼らを討つ絶好の機会。彼はアサシンと言う組織の存在を強く大きな物にしたいのだ。

「止めとけ。たとえ気付いていないとしても、奴らも裏組織の人間。即座に対応できるだけの實力は持っているさ」

だが、アルタイルはそれを拒否。彼らの力を知っている彼だからこそ、出された判断だ。

『じゃあ、どうするんだ？ 討てる敵は討つべきなんじゃないのか』
「落착け。どうせ、しびれを切らして動く奴らがいるさ」

アルタイルの声の後、上都学院全体が大きな爆音によって揺れ動いた。彼が視線を向けた先は、CクラスとBクラスが試合をしている会場だった。火が昇り、会場の屋根が半分近く、無くなっており、外から露出していた。

「ほらな」

『……すぐに動く』

バルバリーゴはそれだけ伝え、通話を切った。

アルタイルは携帯を胸ポケットに仕舞い、空を仰いだ。快晴の空に立ち上る灰色の雲。ざわめく会場外の人間たち。遠くから鳴るサイレン音。それらによって、事態の大きさが示される。

何事も無いように、近くに設置されたベンチに寝転んだ。

「さあ。お前はどう動く？」

彼の独り言は、外の事態によってかき消される。



激しく揺れる試合場。地響きによってフィールドの仮想がぶれ、原形がとどめられずに少しずつ崩壊していくビル。

一夏とアリアはビルの崩壊に巻き込まれないために、ひたすら走り続けた。

「クソ！ 何だってんだよ。これ!？」

アリアと離れないように、彼女の手を強く握る。彼女を安全な場所にまで送るために、彼は周辺を探し続けた。

揺れは続き、遂には地割れが起り始めた。

「危ない!？」

二人を呑みこまんと襲い掛かる地割れ。ものすごい勢いで迫る地割れに、アリアが吞まれかかる。

一夏は強く彼女の手を引っ張り、そこから何とかして、救い出す。

「ハアハア……。大丈夫か？」

一夏の言葉に、コクンと頷くアリア。

揺れは鎮まるどころか、次第に力を増していった。

彼女を助ける事に力を使い、身体への負荷が大きい一夏。揺れの

原因もあり、足がすくんで動く事が出来ない。

そこへ、二人にまたも危機が訪れる。

オフィスビルの一棟が、二人に向け倒れて来たのだ。巨大な瓦礫と破片が彼らに向けて降りかかる。

「クッソ!!?」

一夏は身体に鞭打ち、無理矢理起き上がる。アリアを背負い、全速力で走りだす。危ない道が行く手を阻むが、少しでもビル落下から逃れようと考えている今の彼は、その道を一気に駆けていく。地面に散らばるガラスの破片や鋭利になったコンクリートなどが彼の脚を切り刻む。上から落下してくるコンクリートの塊が、彼の身体の傷をさらに増やしていった。

（ダメだ!?! 間に合わないねえ!）

一夏の全速力で走るが、ビルの落下速度の方があまりにも早かった。

（せめて、アリアだけでも……!?!）

彼は、手を引いているアリアを一気に前へと投げ入れる。

ギョッとした表情になりながら、彼女は宙を舞った。偶然にも瓦礫や破片も無い安全の場所に落ちた事により、彼女に怪我はなかった。

何かを声を出して、一夏に言っているが、今の彼は彼女が安全だと視認し、ホッとして緊張の糸が解けてしまったのだ。

糸が解けたことで、どかっと疲労が全身に伝わる。

彼はその場に崩れてしまった。

「あ…………やべえ…………」

一夏は、自分の身体がその場に崩れた事を、倒れてから認識した。身体を上げる力が、今の彼には無く。意識さえも薄れかけている。危機的状态にあると言うのに、今の彼の心は、心底安定していた。落ちてくるビルの破片や瓦礫。しかし、それらの激突音、アリアが彼の方へ向きながら、何かを発している声も今の彼には聞こえない。聞こえるのは自身の心臓の音のみ。静かに、ゆっくりと動く心臓の音が、今の彼の心を優しく包み込んでいるようだ。

（これもまた…………何かの…………イベントなのかな…………？）

嘘だ。

一夏は、心中で自分に嘘をついた。

こんな大それたイベント。選手たちを危険な目に合わせるような事は何度かあったが、本当に危険を感じた時は、その時点で彼らを転送するようにしている筈だ。

今回はそれが無い。つまり、これはイベントではなく、現実起きている事なのだ。

彼もそれは分かっている。わかってはいるが、そう思わざる負えない。なぜなら――

自分が死ぬなんて、誰も思わないからだ。

ビルが彼を押し潰そうとした。

刹那、そのビルが大きく二つに切り裂かれる。

ちょうど一夏を中心に、ビルが二つに割れ、彼は救われた。

「大丈夫かい？ 霧島君」

誰かが、彼に声をかけた。知っている声だった。一夏が、声のする方へ視線を向ける。

こんな状況でも、いつもと変わらない涼しげな表情。どこか余裕のある声。含みのある笑みで一夏に視線を向ける者は、

「桔ヶ也……？」

新だ。

一夏は、新の方を何とか見るも、意識の限界が来て、彼の視界は暗転した。



「おいおい！？　なんだこれ！　地震なんて、イベントの中には入っていない筈だぞ」

揺れる本陣。

壇がデスクにしがみ付くも、大きすぎる揺れにその場に膝をついてしまう。

他の者たちも彼と同様な行動をとっていた。自分の身体を護るように抱いている者。互いに抱き合っただえっている者。何かを下に潜り身を潜める者などだ。

「確かに、これは流石におかしいな」

返事をしたのは一刀。彼も壇がしがみついているデスクを掴んでいた。

「壇！　これはもう、試合どころじゃない。みんなを連れて、試合

場から脱出するんだ」

「脱出たって、外への無線が切れてて、繋がらないんだぞ。どうやって、出るんだよ!？」

壇の言う通り。

原則、選手たちは試合が終わるまで試合場から出る事は出来ない。各拠点に置かれている無線は、エリアの不具合や選手たちの怪我などの報告する時に使用する物として支給されている。

このような大事でも使えるのだろうが、何故か、無線からの返事が返って来ない。

おそらく、外からの無線が、何かによって遮断されているのだ。

一刀は、壇の不安を取り払う言葉を言った。

「大丈夫だ。こういう緊急時には、必ず、生徒たちの安全のために脱出路が開いてるもんだ。そのための安全な道も作られている」
「そ、そうか!？」 確かそれぞれの拠点近くに、緊急時のみ開く扉があるんだったな」

火災、地震などの災害を察知したときのみ開かれる扉が、それぞれの拠点近くに設置されている。それが脱出経路となっている。選手たちのみ、使う事を許された経路であり、他、観客者たちはまた別の脱出法が備えられている。

「壇。お前たちは、脱出経路に今すぐ行け!」

「行けって。お前はどするんだよ?」

「パニックって、経路に気付いていない奴らがいるかもしれない。俺はそいつらに、この事を伝えに行く」

「何!？ そんなの一人じゃ無理だろ」

一刀のセリフに、壇は抗議した。

本陣から他の拠点まで距離がある。ましてや、Bクラスの拠点など向かうには時間がかかり過ぎる。一人でやるには無理がある。

「俺もやる。お前一人でかっこつけるな」

壇が答える。

それに続いて、他の本陣のいる仲間たちが、次々に手伝う事を宣言した。

「手伝うさ。お前には、いつも助けられてるんだ」

「みんな大切な仲間だもん。一人でもかけたら嫌だよ」

「それに、Bクラスの間みなも同じ学院の仲間。助けなきゃ」

「そうだ！ みんなで脱出するんだ！」

最後の男子生徒の言葉で、彼らの心は一つとなっていた。高まりすぎた士気によって、パニックが相当なものと考えていた一刀にとって、驚きの状態だった。

彼は「フッ」口から息が漏れた。彼らの強い絆を感じたからだ。

「よし！ 二手に分かれて、みんなを助けに行くぞ」

一刀の声に、彼らはすぐさま行動に移りだした。

まずはCクラスの拠点にいる仲間たち。彼らに呼び掛け、次にBクラスの者たちに呼び掛ける。そして、最後は皆で脱出する。そう言った作戦だ。

「!？」

揺れが小さくなり、走ることも可能になった時、彼らは動き始めた。

一刀もまた、彼らに続いて本陣を出ようとしたが、不意にその動きを止めた。

「どうした一刀？」

「いや、何でもなし。先に行ってくれ」

動きを止めた一刀に、壇が問いかける。

一刀は何でもないと言って、壇に先に行くように催促する。

壇は何か異変を感じつつも、本陣を後にする。

「俺たちは武器庫の方に向かう。お前たちは兵糧庫の方を頼む」

壇は先に出ていた彼らに指示を出し、急いで走り出した。

仲間たちを護るために……。



鎮まりつつある揺れによって、ようやく脚で動ける状態となる千那たち。

突然の爆音と地震。彼女たちは、これがイベントではない事に気付く。

「みんな無事か!？」

千那は、仲間たちの安全を聞く。

拠点であるこの一軒家も、地震によって多く損害していた。窓は割れ、床は崩れ落ち、物は倒れてくる。彼女たちはなるべく動かないようにして、身を包んでいた。

「何人か怪我してるけど、それほど大きな外傷を負った者はいない

みたいね」

と、答えたのは、共に武器庫拠点の守備を任された白雪^{しらゆきあみ}亜美だ。彼女自身も左腕に切り傷があり、ガラスの破片が飛来して来て、やってしまったようだ。

そのほかの者たちも、多くが切り傷、打撲であり、それ以上に大きな怪我を負った者はいない。

「一樣、医療道具は常備されているから何とかなるかもしれないけど」

「……おかしいな。何故、エリア保護が発動しないんだ？」

千那は手に顎を乗せ、不可解そうに眉を寄せる。

アーマー保護は他選手からの攻撃から、自身の身体への負担を抑え、怪我などの損傷を作らないようになっている。

そしてもう一つ、エリア保護とはフィールド内にある建造物や障害物。それらの中には、身体に怪我を負わせる物がある。それらから、彼らを護るのがエリア保護だ。

しかし、今回はその保護が効いていない。

亜美は持っているソーマを展開する。

「怪我を治す事は出来な。けど、ソーマは展開できる。……どうやら、一部のみが壊れただけで、エリア保護自体が完全に壊れた訳ではなさそうね」

「それでも、もう試合どころではないな。ともかく、ここから出る事を考えなくてはな」

「確か、緊急時の時のために用意された脱出路があった筈。そこへ、今すぐ向かいましょう」

亜美は皆にその事を伝える。

怪我をしている者に肩を貸して、彼らを優先的に連れ、拠点近くに設置されている脱出路へと歩き始める一同。

外へ出た時、周辺は地震によって荒れていた。向かい合って並んでいた家々は、互いをつぶし合う形となって倒れており、家から飛び出た家具や電化製品が家から飛び出し、道端に乱雑している。

水が漏れ、電化製品たちのコードから漏れた水で濡れ、電気を放出させ、彼女らの行く手を阻む。

「これじゃ危険で先に進めないよ」

「別の道を探そう」

彼女たちは危険地帯とは逆の道を進んで行く。脱出路への道は先ほどの方が近かったのだが、今彼女たちの進んでいる方は比較的危険は少なく、何事も無く着く事ができそうだった。

その時、彼女たちは見知った顔を見た。

「あ、お前たち」

「よかった。あなたたちも無事だったのね」

Bクラスの如月真里名^{きづらさまりな}だ。

彼女の後ろには数人のBクラスの生徒が付いて来ていた。

「どうして、あなたたちがここに？」

「どうしたもこうしたも、突然起きた災害によって、もう試合どころじゃないでしょ。だから、ここから抜け出るために脱出路へと向かってるのよ」

いつもの無表情で髪をかき上げる真里名。

彼女たちもまた、この災害を受け、負傷していた。Bクラスの生徒の中には脚を負傷し、立ち上がる事が出来ない者がいる。肩から

血を流し、手で抑えている者もいる。

彼女たちは、持っている医療道具を使い、負傷した彼らに応急救置をしていく。

「それはわかった。でも、何時、どうやってCクラスの領地に入っただんだ？」

千那が気にしているのはそこだった。

確かに、今の今まで、Bクラスたちが住宅街へ潜入したと言う報告は聞いていない。通るには橋の上を渡って来る必要がある。しかし、橋には一夏とヒューイが戦場として使っていた。彼らの激しい戦闘によって橋は破壊されている。真里名たちがここまで来るには、別の手段でなくてはならない。

「橋を壊れて、あなたたちが代わりの道を用意してくれたじゃない？」

「代わりの道？」

「もしかして、家を一つ一つ爆風に巻き込んで飛ばす、苑宮の案のあれの事？」

亜美の言葉で、気付いた千那は嫌そうな表情を作る。

彼女はあの件でいい思いをしていないからだ。突然襲って来た突風。そのせいで動く事が出来ず、爆風に巻き込まれるのなど。しかも、一刀はやる事を支持しただけで、それがどんな結果になるかを最後まで説明しなかった。それが、彼女が最も癪に障る所なのだ。

Bクラスの彼女たちは、千那たちが作った努力の結晶でもあるその道を悠々と進んできたそうだ。

「その道を通る途中であの揺れよ。……まったく、あなたたちの奇天烈な発想のおかげで、とんでもない目にあったわ」

「自分たちが勝手に使ったくせに、そのもの言いは何？」
「私たちがどれだけ苦労して、やったと思ってるのだ!？」

亜美と千那は真里名の詰めたい態度に、激昂した。

応急処置が済んだのを視認すると、彼女は二人を気にすることなく歩き始める。

「とりあえず、今はここから出る事だけを考えましょう」

「お前は、結構マイペースなのだな」

真里名の気ままな行動に、溜め息付く千那。彼女たちも真里名の後続き、歩き始める。

脱出路まで、あと数メートル。ここまで、何事も無い彼女たち。この後に何があるとも知らずに……。



「毒島たちを日本に追い込んだのはお前たちだろ？」

「ああ。うちの領地であれやこれやと動かれるのは目障りだったかな。本当は南アジアで仕留めるつもりだったのだがな、こちらにも都合があつてな。殺し損ねてしまった」

「スリランカで謀反を起こしたのは、毒島に魅了された残党たちと言うのは本当らしいな」

「そこまで、知ってたか。さすがは二極の駒。世界の情報はお手の者か」

「……それで？ お前たちは何のために、日本に来たんだ？」

「なーに、うちで反乱を起こした者たちが、この日本に来てるって言う情報が来たんでな。それを殲滅するために来たんだよ」

「嘘だな。それだけなら、アンヴァースとレネゲードにやらせればいい筈だ。お前たち自身がわざわざ実行しなくても、お人好しの奴らなら必ずやってるさ」

「……」

「何しに来た？　こんな極東の島まで……」

「……それは言えないな。それを言えば、お前も必ず行動に移る。そうなれば、こちらとしても色々面倒になるのな」

「どう言う事だ？」

「言葉の意味通りだ。一番の危険体であるお前も、これを知れば必ず欲しくなる——そういう代物の事だよ」

「……お前がそこまで言う物なら、大したもんなんだろうな。言わないなら力づくでも……！」

「おっと。こんな所で俺とおっぱじめるつもりか？　俺たちが戦えば、この試合場は確実に……いや、この東京自体が火の街に変わっちまうぞ？」

「別に構わないさ。……俺は理想のためならば、どんなものさえも犠牲に出来る」

「アッハハハハハ！！ さすがは、俺の見込んだ男だ。あの時よりも、実力もかなりの物になったな。大した覇気を放ちやがる」

「その口も、相変わらず閉じる事を知らないみたいだな！ ここで、切り刻んでやるよ！！」

「まあ待て。ここでやり合っちゃったら、大事な物に傷をつけちゃうかもしれないねえ。それだけは困るんでな。今回は退かせてもらうよ」

「……日本の何処かにあるんだな？ それは」

「ああ。見つけられるもんなら見つけてみろよ。ほぼ見つけるのは無理だろうだな」

「……チッ！？」

「……インドネシアだ」

「？」

「七月の最後。インドネシアに來い。そこで、溜まっていたものの全部聞いてやるよ」

「……いいんだな？ 後悔する事になるぞ？」

「フン。言ってる。精々で頼れる仲間でも作るんだな。――――
またな、好敵手」

試合中止（後書き）

今回はここまでです。色々と突っ込む所はあると思いますが、試合場にいるそれぞれの生徒たちの状況を執筆しました。

次回は、試合場で表舞台と裏舞台の両方で激戦が繰り広げようと思います。

動き出す組織間

「気が付いたかい？」

目覚めた一夏に声をかけたのは、新だった。

「ここは……？」

「Bクラス武器庫からの脱出路の中だよ。運が良い事に、僕たちはこの脱出路の近くで会う事が出来たんだよ。君を担いで行くのは苦労したよ」

場所は脱出路の中のようなだ。

一夏はあの時、ビルの崩落に巻き込まれそうになっていた。それを助けたのが、紛れもなく彼だ。彼は崩落に巻き込まれそうになっていた一夏を間一髪で救う事に成功したのだそう。

「……アリアは？ アリアはどこにいるんだ？」

「アリア？」

辺りを見回すも、紫の瞳の少女はいない。

新はその名前に聞き覚えがないようで、片眉を上げる。

「見てないのか！？ 十歳くらいの紫の瞳をした女の子だよ。ビルの崩落の近くにいた筈なんだよ。一緒じゃなかったのかよ！？」

一夏は鬼気迫る形相で、彼の肩を揺さぶる。

彼の表情で、冗談ではない事に気付く新。あの時の様子をもう一度思い出してみるも、あの時に自分たち以外の者の姿は確認していない。

「とりあえず、落ち着いてくれ。試合に関係のない人が迷い込んでしまったのなら、その者を保護するために教師たちが今すぐにでも動いているよ。それに、紫の瞳の子なんて滅多にいるもんじゃない。すぐに見つけられるさ」

「でも、こんな事態だぞ。教師たちは観客たちの誘導で、こっちまで手が回らないんじゃないか!？」

「こんな事態だからこそ、彼らは試合場に集まっている全ての者たちの命の安全を確保するべきなんじゃないか」

一夏は動揺を隠せず、新の肩を掴んでいる手が震えていた。彼女を安全な所まで送ると約束し、彼女も彼を信用し切っていた。それができず、彼女にもしもの事があつたらと、彼は気が気ではないそうだ。

そこへ、新は続けて言葉を放つ。

「それに、これはイベントじゃない。それに気付いている教師たちが、動きを見せないわけがない。ここは信じて任せるしかないよ」

「それでも……それでも……!？」

宥めようとする新を振り切り、一夏は脱出路の入口へと戻ろうとした。

「グアッ!？」

立ち上がろうとした瞬間、彼は足に鈍痛を感じる。

倒れそうになった彼を新が受け止める。

「無理だ。今の君は足首にいくつも傷を負っている。ここに来るまでに応急処置は済ませてあるけど、少しでも歩けば、傷口が開いて

しまうかもしれない。安静にしくちゃ」

一夏の足はビル崩壊時に地面のたくさん瓦礫や破片で怪我を負ってしまっている。そのせいで、彼の足は、全体血だらけに染まっていた。今、彼が動いたことで少し、傷が開いてしまったようで、応急処置していた包帯から血が滲みでてきた。

「アリアを……。アリアを助けに行かなくちゃ」

「霧島君……」

それでも動こうとする一夏。

自身の身体を省みず、少女のために行動しようとする彼の姿を見て、新はある決断を下す。

「……特徴は？」

「……え？」

声を発する新。

その言葉が分からず、拍子抜けするような声を出す。

「もっと特徴を教えてくれ。僕が探しに行くよ」

新は自ら、彼の代わりにアリアを探しに行く事を志願した。

「でも、お前に迷惑が……!」

「いいから。足が上手く動かない今の君じゃ、今日中に見つけ出すことは不可能だよ。それに――」

新は唐突に口を閉ざした。

一夏が視線を向けると、彼は脱出口入口の方へ顔を向けていた。

眼光炯々の目つきでそちらを見る彼からは、周りの壁などからミシミシと音を成していた。それほどまでに、とてつもない怒りを発していた。

「き、桔ヶ也？」

「!？ いや、何でもないよ。それよりも、早くその子の特徴を教えてください」

一夏の声にハッと我に返る新。そして、先ほどの自分を隠すように、何事も無いような涼しげな表情へと変える。

新のその表情を、一夏は前にも一度見ている。あれは模擬戦時、ヒューイの行動を封じる時に、彼が見せた形相だった。全てを凍らせるあの時の顔。ヒューイだけでなく、一夏さえもその場から動く事が出来ないくらいにまで、追い詰められたような感覚だった。

それを知っている一夏は、素直にアリアの特徴を説明した。彼女の顔、体型、服装、口調など彼が短時間で感じたことすべてを。

「わかった。それじゃ、行ってくるよ。君はここから動かないで。僕が誰か教師を捉まえて、ここの事を話してくるから」

と言うと、新は脱出路を中を進み、出口へと向かう。

入口はすでに閉じられているのだから、一度出口へと向かわなくてはいけないのだ。そのため、彼の走る速度は通常よりも速く、矢の如くだった。

一夏は、彼の姿が見えなくなるまで見続けていた。ジンジンと足首から痛みが伝わってくる。その痛みのせいで、再び意識が遠退いていた。



同時刻。武器庫拠点近くの脱出路前。

千那たちは予定よりも遅く、この場所にたどり着いた。通る筈だった道が、地震の影響で被害が大きく進む事が出来なくなってしまう。仲間たちの事を考え、負傷している彼らのために少し速度を遅くして、進んでいた。結果、予定よりも十分ほど遅れていた。

「何はともあれ、ここまで無事、来れたのだから良しとしましょう」
「そうだな……」

隣に立っていた真里名の言葉に頷く千那。

負傷している者たちの肩を担ぎ、彼らを先に歩かせた。

「ところで、他のBクラスたちは大丈夫なのか？」

「おそろくね……。Bクラス領地に残っているのは、新だけの筈だから……。今頃、兵糧庫側の人たちと共に脱出していると思うわ」

「何？　もしかして、Bクラスは総動員して、Cクラスを責めるつもりだったのか！？」

真里名の衝撃のカミングアウト。それを聞いて、千那の顔が驚愕に歪んだ。

Bクラスたちが総動員で攻め寄せられていたら、既に雌雄は決まっていただろう。Cクラスたちは分裂して彼らを攻撃しようとしたため、領地内は少ないメンバーで護られていた。現に、今のCクラスは六人。Bクラスは十五人とメンバーの差は明らかだ。

「そうね。橋は破壊されて進む事が出来ない分、今回は質よりも量で攻めいるべきと判断したのよ」

「随分と大胆な」

普通のBクラスとは思えない大胆さ。さすがの一刀も、このような攻勢に出られるとは考えられなかったのだらう。

「確かにね……。新はなぜ、こんなやり方を突然決めたのかしら？」

「？ その作戦は、お前たちで決めた訳じゃないのか？」

「ええ。最初は、ヒューイが橋を占拠して、そこから五人一隊を三隊動員するつもりだったの。でも、新がいきなり、彼らはこちらを誘う策を使ってくる筈だと言って、自分以外の私たちを全員向かうように指示を出したのよ」

「全員と言う事は、拠点の守りもほったらかしか」

頷く真里名。彼女も納得がいていないのか、いつもの無表情の顔が少しの陰しさがあった。

自身たちの拠点さえも放棄して、Cクラスを攻めさせる。これはあまりにも奇天烈な発想だ。誰も予想しない試合。理解しがたい策だからだ。たとえ今回の試合の勝敗が、リーダーの敗北であったとしても、拠点は仲間たちを癒し、装備充填の大切な場所。そこを疎かにするなど、誰が発案するだろうか？

まるで、最初から棄てていたような……。

「こんな事、今話しあってもしょうがないわ。ともかく、この場から速く抜ける事を先決にしましょう」

真里名は長くすらりと綺麗に整えられた髪を撫でる。彼女もまた、先に進んでいった仲間たちの後を追って歩き始めた。

「千那」

亜美が千那の肩に手を置く。

その表情はどこか不安げで、何かを気にしているようだった。

「どうした？」

「……うん。兵糧側の方は無事なのか心配になってね」

「ああ……。確かに、あちら側から爆音がしたしな。あいつら……大丈夫なのか？」

武器庫側もそれなりの被害を受けたが、爆発の影響があったわけではなく、地震による被害で生徒に怪我を負った程度。

直接見たわけではないが、Cクラス兵糧庫側から爆音がしてきたようだった。爆風による風も、そちら側から襲って来たように見えた。もしそうだとすれば、彼らの受けた被害は甚大の筈だ。

「私、心配だから見に行ってくるよ」

そう考えた亜美の顔から血の気が引け、いてもたってもいられずに彼らの所へ向かおうとした。

「いや、待ってくれ亜美。ここは、私が行こう」

千那は彼女の手を握り、そう言った。

「え、でも……」

「亜美。お前は左腕に傷を負っているのだぞ。怪我人に無理をさせる事は出来ない」

「だったら、一緒に――」

「ダメだ。それで傷が開いてしまつては元も子もない。軽傷だとしても油断してはいけないのだ」

千那は、彼女の案を否定。

左腕を怪我してしまっている今の亜美は、時たま痛みで顔を歪め

る時があった。切り傷程度だと思い、油断していたのだろう。手当てした包帯から、血が滲みでているのがわかる。

「……」

それでも気になる亜美は、そこから動こうとはしなかった。

どうした物かと悩む千那。彼女を納得させるために、ある物を手渡した。それは、試合中に彼女たちが使用している薄くカードの形をした無線機だ。

「無線機？」

「ああ。わかってると思うが、この無線機はソーマやエリア中以外にも使用する事が出来る一般の代物だからな」

無線機は、I A企業との親睦が深いある企業の協力のもとに作られている。そのため、ソーマではもちろんないし、エリア外でも使用する事が可能だ。

「エリアの状況を把握するためのマップは、ここにはもうない。しかし、学院に戻れば、試合場の様子を見るために設置された場所に行けば、試合場のマップが見れる筈だ。そこから、私の行く先を支持して欲しいんだ」

千那が提案しているのこうだ。拠点一つに一つに配置されていたマップは地震の影響を受け、使い物にならなくなっている。試合場、監視室の方もおそらく使い物にはならないだろう。

しかし、学院本棟に戻れば、全ての試合場を監視するための施設が用意されている。そこへ行けば、兵糧庫へ行く彼女を上手く誘導する事が出来る。彼女はその役を、亜美にして欲しいと頼んだのだ。聞かされた当人である亜美は、最初は黙って聞いていたが、少し

ずつ納得していき、最終的に納得して頷いた。

「……わかった。私がそこに着くまで、下手に動かないでね」

亜美の言葉に千那は黙って頷いた。

そして、彼女は脱出路の中へ全速力で走って行った。彼女は場所がわかる所として、先ほどこまでいた武器庫へと戻るように指示して言った。

千那は言われた通り、武器庫へと向かうために走り出した。



その頃。新は試合場——Bクラス領地、オフィス街へと戻っていた。

生き残って建っているビルは数棟ほどであり、後は跡形も無く地面へと粉砕していた。

「酷いな……。ここまでやる必要があったのか？」

新は悲痛な表情で、その全紡を見る。

「Bクラスの人々を、ここから退かせて正解だったな。あのまま、ここに残していたら、みんな死んだ」

新はこの揺れを事前に知っていた。

いや、聞かされていたのだ。彼の仲間たちによって。

Bクラスたちを残してしまっていたら、パニックが起き、逃げる事が出来ずにビルの崩落に巻き込まれていただろう。真里名は最初、理解できずに説明を要求してきたが、何とか丸め込んで、渋々行動に移してくれた。

一人残った彼は、突如姿を消したヒューイを捜すも見つからず、その時偶然見つけた一夏を救ったのだ。さすがに、彼を見つけた時は驚いたが、事態は一刻を争う状態であったため、彼は禁断である物を使用したのだ。

と、彼の持っている携帯が鳴る。彼は手に取り、耳元へと当てた。

『聞こえるか？ 新』

「うん。よく聞こえるよ。仁さん」

通話の相手は、試合前に彼に電話を入れた男——仁である。

こんな状態だと言うのに、通話越しに聞こえる彼の声はどこか穏やかであった。

『せっかくの試合日だって言うのに、こんな事になるなんてな』

「まったくだよ。それで？ こんな大事をしでかすのは、やっぱり

——」

『想像通りだ。最近、スリランカで反乱を起こした組織だ』

新は崩壊したオフィス街の中を歩きだす。

次の仁の言葉を聞いた瞬間、彼の目つきが変わった。

『どうやら、狙いはお前らしいぞ』

「俺？」

鋭い目つきへと変わった彼は、普段とは違う一人称が変わる。

俺——それが本来、新が使う自分を指す言だ。彼がその一人称を使う時、学院では見せない彼の姿へと変貌する。

『ああ。彼らはお前に何か激しい憎悪を抱いているようだ。お前への憎しみを、お前の周りにいるすべての者たちを犠牲にさせる事で

片づけようとしているんだろぅな』

「……何だよそれ。ふざけやがって……！」

波立つ気持ちを何とか抑え、彼は平静さを取り戻そうとする。

新は、正々堂々とした戦いを望む者だ。小細工や卑怯な手を使う輩を、彼は許す事が出来ない。

「俺が狙いなら、始めから俺を狙えばいいのに……！」

『……新。ともかく、俺たちもこの事態を收拾するために動く。お前は、お前の仲間たちの救出に向かえ。いいな？』

仁は、新の気持ちを思い、自分たちとは別行動をさせ、仲間たちの救出を命じた。

彼は「うん」と頷き、通話を終えた。

「畜生！ みんなを助けに行かなくちゃ……！」

携帯をポケットに仕舞い、彼は鬼神の如き速さで地面を駆けた。皆を向かわせた住宅街へ向かう――のではなく、先に一夏との約束であったアリアと言う少女を捜し出す。紫の瞳をした、貴族を思わせるゴスロリ服を着た令嬢のような少女。それが一夏が彼に伝えた特徴だった。

崩壊したビル。縦に真つ二つに割れたビルから、中にあったであろうデスクやパソコン、その他もろもろ物品が飛び出していた。ドロリとした液体が中から現れ、鼻を刺激する臭いが彼へと襲う。

「アンモニア？ 何で、ここまで再現する事はしていない筈なのに……」

出来る限りの現実に近い再現をエリア空間は施すが、飲食物や手

洗い所などは、作られているだけで、使用する事は出来ない。これは、選手たちの集中を妨げる物として見なされているためである。だが、周辺から臭う刺激臭は確かにアンモニアだ。彼は、近くにガスがいるかもしれない恐れがあるため距離を少し置きながら進んだ。

（誰かが持ってきたか？ それとも、自然に発生した物なのか？）

新はアンモニアの出現に疑問を抱き、思案するもそれらしい答えは出ない。

「まあいいさ。今は先に、みんなの所へ向かわないと」

疑問を頭を隅へひとまず置き、彼は先を進んだ。

その足が次第に速さを落としていく。何かに気付き、辺りの警戒へと移すためだ。

そして、先ほどのアンモニア近くに視線を戻す。

「気付いたか？ さすがは同族。熟練された警戒心だな」

瓦礫の山。その上に座している男が一人いた。彼は、新が自分に気付いた事に対し感心した表情をする。

「お前は……！」

新は警戒を広める。彼以外の者が自分を取り巻いていないか意識を強めるためだ。

彼の行動に気付いた男は、その事について指摘する。

「安心しろ。俺とお前以外の者は、ここにはいねえ。だから、それ

以上周りを警戒してると――」

男は、瓦礫の山から腰を上げ、地面へと飛んだ。その巨体によって、着地したと同時に少しばかり地面が揺れた。

次に顔を新へと顔を向けた時、今まで彼から感じる事がなかった、強力な殺気が姿を見せた。

「死ぬぞ」

その一言が引き金となった。

新は彼の危険性を確信し、腕に付けていたソーマを瞬時に展開。続いて衝撃が彼を襲う。身体だけでなく、脳をも激しく動かすほどの衝撃。

男から突然、具現化された鉄球。男の身体と同等の大きさを誇る鉄の弾が、新の身体に激突して来たのだ。反動に耐えきれず、新の身体は、彼の後方――数十メートル先まで吹き飛ばされる。

壁へと背中から飛び込んだ新は、鈍い衝撃が身体へと加えられた。

「クッ!？」

とっさの判断で展開した筈のソーマは、鉄球によって見事なまでに粉碎され、姿かたちも無い。これではもう使い物にはならないだろう。

新は僅かに残ったソーマである剣の柄を捨て、こちらへと歩く男へと視線を向ける。

「何だ？ アドハーから聞いた感じとは、少し違う気がするな――」

まだ距離があると言うのに、男の声は、新にはハッキリと届いていた。

傷む身体。特に悲鳴を上げているのは腰だった。ソーマを展開する事までは出来たが、自分の身体に力を入れるまでの猶予を与えてはくれなかったために、鉄球はまともに腰部分を強打したのだ。

「おい！ お前、本当に桔ヶ也か……？」

何とか立ち上がる事は出来るも、思いの外、力を使ったために耐えきれず、血が口から洩れる。

口の中が鉄の味で一杯になった新は、その血を地面へと吐きとばす。吐きだされた血は、地面を濡らし、ドス黒くする。

男の言葉にハッと思いだしたかのように、口元に笑みを作る新。

「そうか……。あんたはあの女の仲間なんだな？　と言う事は、アサシンがこの試合場に潜入してるってことか」

納得したように言う彼の声には、この状況にあるのに、余裕が伺える。

男の正体がアサシンだと言う事で、ハッキリと事態が見えたのだろう。

男は鉄球を軽々と肩に担ぎ、新の次の言葉を待つ。

「だったら、手加減する必要はないな」

小さい声で囁く新。もちろん男には聞こえていない。

それは、自分へと言い聞かせているのだから……

「アサシン」

そして、新はある物を取り出す。

腕輪だ

「お前たちは、おそらく……反乱者たちの殲滅のために来たんだろ
うな」

彼は腕輪を右腕、左腕に装着する。

「それと同時に、目障りである俺たちをも倒そうと言う魂胆なんだ
ろうな」

装着した腕輪が、彼の意味に伴って強く光りはじめる。

「でも、残念だったな」

光りはじめた腕輪から、二つの武器が具現化される。

新に熱い思いによって、具現化されたそれらは、強く研ぎ澄まされ
ていた。

「俺たちは、簡単には倒されないぞ!!」

雄々しい二本の刀。

その刀を男へと突き刺すように突き付ける新。

今の彼から感じられるものは今までのものとは違う。学院で見せる
彼からは想像できない。正義感あふれるその姿。

世界の均衡を護るために存在する組織——アンヴァース。

新は————桔ヶ也新はその中の一人だ。

「覚悟しろ。アサシン」

■ ■ ■ ■ ■
その時、一夏は……

「クソ！ 待ってられるかよ！？」

新に言われ、一夏は少しの間、安静にしていたが、ひっきりなしに揺れる試合場、遠くから飛び交う人の悲鳴から、我慢する事が出来ず、動き始める事にしたのだ。

「アリア。みんな」

彼は、取り残されたアリアと、行方がわからない仲間たちの事が気がかりでならなかった。

足首の痛みに耐え、彼は一步一步前進する。

十分も賭けて、何とか脱出路の外へと出る事に成功する。出た先は会場の外。学院内に設置された庭園だった。学院長の趣味で作られた場所だと聞かされていたが、綺麗に育てられた通り道にある花たちは、歩く者たちの気持ちを和やかにするようだ。

しかし、今の一夏には、庭の景色を堪能するほど時間はなかった。引きずるようにして歩く彼の姿は、傍から見ても痛々しい。

「――よお。どこ行くんだよ？」

そんな彼に声をかける者が現れた。

声のする方へ、彼が視線を送ると、そこにいたのは、

「……ヒューイ」

「何だよ。案外驚かないんだな」

庭の右側にある作られたブロックの壁。そのブロックの壁に背中

を預けながら、彼は一夏を見ていた。

「まさか、家が飛んでくるなんて思わなかったがな。あの後、運よく海の中だ。エリア保護のおかげで身体に外傷が出なくて助かったぜ。まともに受けてたら、死んでたからな」

彼は、一刀の考えた策の影響を受け、爆風で飛んできた家に吹き飛ばされたのだ。家は、フィールドの一部。それによって、彼はエリア保護の力で怪我を負う事はなかった。

ヒューイは冗談を言って笑ってはいるが、熟練した選手であったとしても、あのような事があっては、トラウマで身体が言う事を聞かなくなってもおかしくはない筈だ。

「悪いけど……俺、急ぐから」

一夏は彼の相手をする気はなく、すぐにその場を後にしようとした。

「今から行って、間に合うのか？」

「！？　どう言う事だ」

背中から声をかけるヒューイ。

彼の問いに、彼は勢いよく視線を彼へと向ける。

食いかかって来た一夏を見て、痛快そうに笑みを広げるヒューイ。

「これは、自然に起きた災害じゃない。始めから計画されて起きたことなんだよ。爆発の時間。地震のタイミング。そして――」

彼はそこで、ある物を取り出す。

「殺す時間もな」

「!？」

彼が持っているのは、手の平サイズほどの小さなカプセルだ。

一夏はそれが何かはわからないが、彼の放ったセリフから、とてもなく危険な物である事は理解していた。

「お前……！ 何考えてやがる!？」

「言った筈だ。俺はあの人のために戦うとな」

「ふざけるな!! お前の狙いは俺じゃないのかよ!？」 他の人たちには関係ないじゃないか!!」

彼の行動、言動に憤激する一夏。

怒りで足の痛みを忘れ、彼へと前進する。彼の持っているカプセルを奪い取るためだ。

対する彼は、一夏の言葉を聞き、少し息を吐く。

「あの事については悪かったな。俺の探していたのはお前じゃなかった」

「何？」

「……俺たちが探していたのは霧島ではなく、桔ヶ也だったんだよ」

桔ヶ也と言う名前を出した時の彼の声には、怒気が含まれていた。

「桔ヶ也……つまり、うちのクラスにいる桔ヶ也新の事だ。俺たちは、あいつを許すわけにはいかないんだよ」

憎しみ、恨み、殺意。彼の声、雰囲気から、それらの思いが強く滲み出ていた。

それでも、衝動を何とか抑えようとする。そのせいか彼は首を垂

れ、顔を隠す。

「あの人の死を知らされたのは、模擬戦が終わった後だった。何もやる気が起きず、言われた事をただ続けていた」

目の前の一夏ではなく、独り言を語り始めるヒューイ。
彼の肩が、言葉を紡ぐと同時に震えている。

「あの人にはよくしてもらった。暗闇にいた俺に手を伸ばしてくれた。あの人がいたから、俺は生きて来られたんだ！」

次に彼は顔を上げた。目からは涙を流し、悲しみ打ちひしがれていた。

「なのに、それを、あいつは――！！」

叫ぶ彼を、呆然と見続ける一夏。

彼は、大切な人を殺されたことへの悲しみ、怒りからこのような行動に出ている。もし、その人が生きていれば、彼が殺しをすることなんてなかったのかもしれない。

「俺はあいつを……！ 桔ヶ也新を許すわけにはいかないんだよ！？」

激昂して叫ぶ彼の覇気によって、庭に大きな風が吹きおこる。
そして、ヒューイは歩きだし、一夏の横を通り過ぎようとする。
しかし、一夏は彼の前に立ちはだかり、行かせようとはしなかった。

「どけよ。邪魔してもいい事はないぞ」

ヒューイの声には、声を張り上げる事はなく、小さく言葉を放つ。だが、そこから感じられる思いは、先ほどよりも強い怒りに満ちていた。

一夏は臆することなく首を振り、彼の前に行く手を遮続ける。

「たとえば、お前にどんな理由があっても、命を狙われているのは俺の大切な友達たちだ。見過ごす事は出来ない」

「だったら、どうするって言うんだよ」

ヒューイの身体は新の事は違うものによって殺気だった。

一夏は、彼の怒りを買ってしまったのだ。

彼は両腕を前に出して、戦闘の構えをとる。

怯えや恐怖も無く、彼は言葉を放つ。

「俺が、お前を止める」

動き出す組織間（後書き）

以上です。裏組織間どうしの戦いが始まりました。

次回は、それぞれの戦いを書いていきたいと思ひます

赤き瞳

『始まったか……』

試合場——ある一室の電話でのやり取り。

部屋にいるのは一人の少年。彼は椅子の上に座り、そこから試合場の様子を観察していた。

「ええ。試合場のオフィス街で裏組織同士が。試合場外でも一組の戦闘が確認されています」

『試合場外で始めている奴らは危険だ。誰かに見られでもしたら、始末が面倒だ。早々に止めさせろ』

少年とやり取りをしている相手。どうやら男のようだ。

男は、少年と兄弟のような親密な関係といえる。しかし、今は男の上からの命。彼らはその命の時には上司と部下の関係として徹している。

少年もそれも理解しており、普段とは違って丁寧口調へと変わり、相手を敬う態度へと変えている。

「しかし、裏組織たちの戦闘の場所があそこ言うのも問題ではありませんか？ あそこでは、他の者たちに見られていてもおかしくはありません。優劣を考えるのであれば、やはり彼らの方では？」

確かに彼の言う通り、オフィス街で戦っているのが裏組織の人間であるという事が厄介である。表や影よりも実力のある彼らがぶつかり合えば、それはほぼ戦争と同じ。彼らが熱くなりすぎれば、この学院、いや東京その物が火の海に吞まれてもおかしくはないのだ。

『心配はするな。仮にも裏の人間だ。自分たちの立場を考えれば、そこまでの暴走はする筈がない。例えたととしても、その時は――世界中の裏組織たちに、抹殺されるだけだよ』

だが、男はそれを否定。

彼が裏の人間として生きて、十年近くになる。そこまていれば、すでに熟練の位置にいるのと同じ。裏と言うものが何なのかを知っている彼からすれば、その行いがどれほどの罪かは理解しているのだ。

少年はその言葉に怯えもせず、納得したように頷いていた。

『それに、裏組織の方はアサシンなのだろう？ 奴らのリーダーとは顔見知りだね。そんなことさせる前に、あの男なら止めに入る』
「……アルタイル……ですか」

アルタイルという名前。それを聞いた瞬間、少年の目つきが変わった。

凡庸と言われた男の名。何をしても、それほどの成果を作らず、いつも組織の面汚しとして疎まれていた男。少年も、どうしようもない者なのだろうと考えていた。

しかし、電話の男は違った。彼の事を誰よりも危険視し、誰よりも恐怖を感じていた。

そう。他の者たちは知らないのだ。

あの男の持つ、真の実力を――。

『……あいつと会ったとしても、戦う事はするな。お前は確かに強いが、あの男は別格だ。はち合わせても逃げることを優先しろ』
「了解」

電話越しからでもわかる、男の余裕のない声。それほどまでに、アルタイルの事を危険人物として認識しているからだ。

少年もそれが伝わり、彼は決意よく言葉を発した。

『今回の俺が出された命は、スリランカで反乱を起こした者たちの殲滅だ。彼らが日本で何を使用しているのか知らんが、これ以上公けに動かれるのは面倒だ』

話題は変わり、再び彼の命の話。

スリランカで裏組織たちに謀反を起こし、国を占拠した反乱者たち。その彼らが、何故か今は日本にきている。彼らが騒ぎを起こすと決めた場所が、この上都学院と言うことなのだ。

そんな彼らの動きに、上の者たちが許すわけがない。男に命を出して、彼らの殲滅を指示したのだ。

『王輝^{おうき}。お前は、彼らの殲滅に当たってくれ。いいか？ 殲滅だ。全員皆殺しにしろ』

「わかりました」

少年——王輝は、男から言われた指示に素直に返事を出す。皆殺しという言葉に、何とも思っていないようだ。それが当たり前のように……。

『そう言えば、謀反者と対立している者の名はわかるか？』

と、男が先ほどまで声から感じさせていた覇気が薄れる。

彼の急な質問がそうさせているのだろう。

これに関しては、王輝も以外であったようで、驚いたような表情をしていた。

「ああ。確か……霧島、だったような……」
『……そうか』

名前を聞いた時、溜め息のように言葉を吐く男。
そして――

『王輝。変更だ。謀反者側は、俺が行く。お前は、そこから裏組織の奴らの監視を続けろ』

「え？ あ、はい」

突然の任務変更。

王輝は男の意外な言葉に、気拔けしたような声を出してしまった。
男はそれ以上何も言わず、彼との通話を切ってしまう。
茫然と、携帯を見つめる王輝。

「義兄さん。どうして、急に変更なんて……」

王輝は、兄と慕う彼の様子の変化に疑問を感じながらも、言われた指示に従い、裏の人間たちの戦いを監視する。



投げ入れられる鉄球を右に躲す事で避け切る。隙が出来た男に向かって、新は地面と蹴る。右手に持った刀が弧を描こうとした。

「甘いわ!!」

怒声を上げる男は、引き締まった大きな右腕で、刀を振るおうとした新よりも早く、彼の腹部を強打する。

しかし、新はそれをもう一つの刀の腹で受けとめていた。

「!？」

新は、彼の腕を押し退け、返すように膝蹴りを男の溝へと打ち込んだ。

鋼の肉体までと鍛え上げて来た身体。表や影程度ならば雑作も無い痛み。だが、相手が裏とすれば話は変わる。鍛え方が常人とは大きく異なるからだ。

新の蹴りに耐えきれず、男は後方へと飛んでいった。

男は蹴られた腹部を抑え、痛みで苦痛に歪む。

「クッ!? 俺の攻撃を防ぎきるとはな……」

鍛え抜いた自慢の腕力。それを、まさかたった一本の刀によって封じられるとは、彼にとっては屈辱以外の何物でもなかった。

だが、新自身も決して無傷ではなかった。男の強力な一撃を防ぐ事は出来たものの、そこから伝えられてくる衝撃で、彼の腕の筋肉にダメージを与えた。

そのせいで、新の腕の筋力は著しく衰えていた。腕は小刻みに震え、刀を落とさぬようにするのでやっとの事だ。

力が出ない事を悟られないようにするために、何食わぬ顔で男を見据える新。

「そうか……。鉄球を扱う屈強の肉体。敵を息する暇も無く破裂させるアサシン——怪腕のバルバリーゴとは、お前の事か？」

「何だ? そんな風に、俺は言われてんのか」

男——バルバリーゴは、そう言いながら豪快に笑い始めた。会場全体に轟く彼の声。周りに彼しかいないからいいものの、本来ならばこれほどまで大きな笑い声を出すのは、アサシンらしからぬ行動

だ。

彼のような物が何故、アサシンに選ばれたのだろうか？
投げ入れていた鉄球を引き上げ、それを片手で持ち上げる。

「お前たちは何をしに来たんだ？ 反乱者たちを討伐しに来たのではないのか。俺と戦う事に、この状況でそれほどの意味があるとは思えない」

新は心中に思っていた事を口にする。

アサシンたちが日本に来た理由は、スリランカ反乱者たちの討伐の筈。その彼らが、これほどまでに大っぴら動いていることの意図が分からないのだ。しかも、協力をしようかと思っていた新にとっては、彼の行動に意味があるとは思えない。

「難しい事を考えるのは、性に合わない身でな。俺はただ、自分に実力がどれほどのものを試したいだけなんだよ」

「ッ！？ そんな理由で俺と戦ってるって言うのかよ！？ こうしてる間にも、多くの人が重傷を負って苦しんでるんだぞ！ もしかしたら、死んでる者だって出てくるかもしれないのに――！！！」

バルバリーゴの行動原理。それは、己が力を試すために強者と戦い合う事。それ以外の事には興味がないのだ。たとえば、自分の周りで多くの者たちが屍になろうとも、犠牲者を出そうとも、それは自分がさらに高みへと目指すための糧。

言うなれば、それが勝者としての証と言う事になるのだろう。

「当然だ。助けなければ人は死ぬ。だが、遅かれ早かれ、人は死ぬのだ。それが、今だった。それだけの事だ」

「ふざけるな！！！！？」

彼の非情な言葉。新は先ほどの彼の笑い声以上の怒声を荒げる。

「救える力がありながら、護る力がありながら、それを私利私欲のために使うのか。そんな――そんなの間違ってる！！」

新はキツとバルバリーゴを睨む。力の入らなかった手の握力を無視し、無理矢理握りこぶしを作りあげる。

「俺たち裏組織は、世界の平和の均衡を保つ役目を担う者たちだ。その者から、平和を害す言葉が出てはならない」

「それは詭弁だ。俺たち裏組織が設立されてから、日々睨みあう毎日だった筈。レムナントを持って行動しているのは、いつ何時狙われても、己を護るために持たされた武器だろ」

「違う。レムナントは、裏組織としての象徴。そして、世界を守り抜くための力だ」

拮抗する二人の意見。睨みあいにはさらに続き、二人から放たれる気が、周りの瓦礫となったビルたちを伝わり始める。

「世界を省みず、ただ力だけを欲する者は間違っている。俺たちの本来の目的。そのために、俺は戦い続ける」

新の刀を持つ手に力が籠る。

「そうだ。俺はそのために、裏の人間になったのだから」

バルバリーゴには聞こえない小さな声。まるで自分に言い聞かせるように小さく言葉を紡ぐ新。そう言う彼の顔は、どこか寂しげな表情であった。

「ハッ！ 偽善者が！ そんなこと考えて戦ってる馬鹿は、お前ぐらいだ！！」

あざ笑うかのように彼の言葉を捨て去るバルバリーゴ。

手に持った鉄球を彼目掛けて、投げ飛ばす。そのスピードは前よりも倍の速さであり、尋常ではなかった。まともに当たれば、骨だけではなく、内臓さえも破裂させるほどの威力を放つだろう。

あろうことか、新は避けもせず、その場に留まり続けた。襲い掛かる鉄球の大きさは、彼の一回りほどだ。食らえば命の保証はない。

（そう誓った……。彼女に……）

（ユカに……）

鉄球はもろに彼と激突する。

「!？」

だが、バルバリーゴの顔に狂喜の笑みはなかった。そうではなく、驚愕な表情で、鉄球の方へ顔を向けていた。

「バカな……!？」

啞然と、眩きを洩らすバルバリーゴ。

それもそのはず。激しき一撃として飛び入った鉄球が、その勢いが消え、止まってしまっているからだ。

鉄球の重さは、ビル一棟と同じ重さだ。そこへバルバリーゴの持つ腕力が加わるのだから、威力はさらにその倍。ビル二棟が、新目

掛けて飛んで行ったのと変わらないのだ。

しかし、ビル二棟分の重量であった筈の鉄球は、彼の眼前で跡形も無く粉碎された。

「貴様の腐った性根——」

鉄球の粉碎したのは一本の刀。

刀を鉄球に突き刺し、破壊されるなど、常識ではありえない。新はそれをやって見せた。

「俺が、叩き直してやる」

静かに告げる新。

バルバリーゴは、彼の顔を見て、言葉を失くしてしまう。

赤・き・瞳。

日本人である新の黒き瞳が、左目だけ——赤い瞳へと変貌していたのだ。

絶句していたバルバリーゴの視界から、突如、新の風と共に姿が消した。

刹那、バルバリーゴの身体が右方へと吹き飛ぶ。彼の身体は瓦礫の山に激突し、積み上げられていた瓦礫が粉々になり、彼の上へと覆いかぶさって行く。

彼の身体を吹き飛ばしたのは新。新は瞬時に彼の視界から消え、彼の左側へと移動。そして、勢いの付けた蹴りを、彼のこめかみへと命中させたのだ。

「いてえー！ お前……！ その目は！？」

大きな一撃をくらったにもかかわらず、受けたこめかみ部分を抑えながら立ち上がるバルバリーゴ。手で抑えてはいても、そこから血が垂れ落ちているのがわかる。

やはり、今の一撃は彼にとっても鍛え上げる事が出来ない部分である事は変わらないようだ。

そんな彼を横目に睨む新。

「クソ！！？」 話しには聞いていたが、本当だとは思わなかったぜ

……！ あれが——修羅の力」

彼は舌打ちをしながら、聞かされていた話の真実を目の当たりにして、一筋の汗を垂らす。

「人中を超えた圧倒的な力。その力は神をも恐怖させる……だったか」

先ほど見せた目に見えぬスピード。あれは常識ではありえない。裏組織の人間たちは、確かに卓越された力をしている。しかし、それでも人間たちの持つ本来の力の範囲以内ではあるのだ。ただ、普通の人間たちでは絶対にしない訓練をしていただけの事。それによって見に付けた力なのだ。

それさえも凌駕する速さ。裏の人間が、人間界の最強の実力者たちである事は間違いない。その裏の人間でさえ、見る事が困難であるとなると、それは神の領域と言ってもおかしくはないのだ。

「へへへへ！ おもしれー」

なのに、バルバリーゴは笑みを浮かべていた。

恐怖で全てどうでもよくなったわけでもない。

戦闘狂の持つ強者への望み。自分よりも強い者を倒すことへの闘

争本能。それだけが、今の彼を動かしていた。

「お前を倒せば、俺は神さえも超えたって事になるわけだ！」

「無駄だ。貴様ではな」

「行くぞ!？」

地を蹴り、新へと一気に駆け寄った。彼に向かって、自慢の腕を彼に向かって突き出す。

その腕を直撃すれすれで避け、それと同時に自信の腕を彼の顔面へとカウンターとしてぶつける。鼻柱に直撃し、後ろへとよろめくバルバリーゴ。

そこへ連撃を加えていく新。突き出した腕で、彼の襟元を掴み、背負い投げ。地面へと振り落とされた時に来る衝撃で、彼の身体が若干浮き上がる。尽かさず肩を蹴り上げ、彼の身体が完全に浮き上がる。最後に脚を掴んで、壁へと強く投げ捨てる。

壁は彼の身体によって崩れ落ち、跡形もなくなる。

この一瞬で、四連撃を与えた。その全てが、目に止まらぬ速さであり、バルバリーゴは全てをまともに受けてしまった。

「……」

起き上がる様子を見せない。新は彼をそのままにし、試合場の住宅街へと駆け始めた。

彼が瞬きをした後、赤き瞳は黒き瞳へと変わっていた。



「お前が、俺を止める？」

上都学院——庭園。

一夏はヒューイと対峙していた。彼の危険性に気付いた一夏は、本気で彼を止める事を決意した。このまま彼を先に行かせれば、大切な何かを失うかもしれない。

「冗談だろ？ 今のお前に、俺を止めるだけの力が残ってるのか？ 脚引き摺った奴が、大きく出たものだな」

呆れた声で一夏に視線を向けるヒューイ。

包帯を巻かれている一夏の足首からは、血が滲み出ており、包帯をグッシヨリと濡らしていた。

目の前に立つ一夏を馬鹿にするように、ヒューイは貶する。

「模擬戦時はたまたま俺に一発入れられただけだ。偶発のおかげで、救われただけだというのに、随分と付け上がったのな。おい」

「あの時の事を、偶発と言う時点で、お前の器の小ささが目に見えるな」

彼に対抗して言葉を紡ぐ一夏。

挑発だ。一夏の挑発に、ピクツと肩を震わせるヒューイ。器が小さいという事に対して、思う事があったのだろうか。

それに気付かず、一夏は言葉を続けて放っていく。

「お前こそ、自分の実力に付け上がって、調子に乗ってるんじゃないのか？ 過信をする者は、最終的に自滅するんだぜ」

「ふざけやがって。愚盲な者がべらべらと、この俺に説教か？ 浮つくのもいい加減するんだな！！」

言葉を言い終わると同時に、カプセルを持っていないもう一つの方の手で、一夏の首を掴みにかかる。

しかし、彼は押し寄せて来た腕を瞬時に掴み返す。

確実に掴んだと思っていたヒューイは、逆に掴まれている現状を理解できず、驚愕に顔を歪める。

「残念だったな。言っただろう？ 強くなったのは、お前だけじゃないんだよ！！！」

掴んだ手を引き寄せ、ヒューイの身体が一夏の方へと動く。体勢が崩れた彼に向かって、下方からの一撃を繰り出す。

下顎へとクリーンヒットした掌底。彼の身体は後方へと飛び、そのまま仰向けに地面へと落ちる。

「クアッ!？」

掌底を繰り出す時に、脚を地面に強く押し付けたため、足首にかかる負担はそうとうのものであった。今の一撃のみで、傷口がさらに大きく開いてしまったようだ。包帯はすでに、血で赤く染まってしまっている。

一夏は痛みに耐えきれず、その場で片膝をついてしまう。

「クククク!」

痛みを堪える彼を嘲笑うかのように、地面に倒れるヒューイから、不気味な嘲笑が漏れる。上体を起こしたヒューイは、侮蔑な視線を一夏へと向ける。

「愚かだな。己の身体を省みる事をせず、掌底なんて、身体に大きな負担をかける技など繰り出すからこうなるのだ」

「クッ!？」

「これでお前の足は死んだも同然だ———気をつけろ？ 下手に動けば、本当に二度と動けない身体になっちまうぞ」

彼は一夏に向かってゆつくりと近寄る。

手にはカプセルのほかにもう一つ。それは、かつて模擬戦でも使っていた石だ。

「覚えてるだろ？　これを」

忘れもしないだろう。あの石の脅威を。

模擬戦でソーマをしまい、あれを出した時には、何とも思わなかった。だが、あの石が巨大鎌へと変貌した瞬間、全てが恐怖へと変わった。ソーマが全く歯が立たず、粉々に粉碎されてしまい、周りの大木さえも、紙きれのようにバツサリと切り裂いた。

「あの時の恐怖を忘れていなければ、こいつの持つ力がどれ程のものかも、忘れてはいまい。今更ながら、逃れようなどとは考えてはいないのだろうか？」

「こんな足で、どうやって逃げればいいって言うんだよ」

絶体絶命な状況だというのに、尚も強がりと言いたてる。

勝ちを確信している彼にとっては、挑発とも聞こえるその言葉に聞く耳を持つてはいなかった。

「シザース!!」

ヒューイの声と共に、その石は大きく激変する。

光の輝きと共に現れたのは、片刃剣で湾曲しており、頭部には金製や銀製の宝石が埋め込まれている。非常に豪華な作りをした刀。

スリランカの刀——カスターネだ。

カスターネを一夏の方へ、突き刺すように向ける。そして、不敵な笑みで彼を見る。

「悪いが、これ以上、お前の相手をしている暇はないんだよ」

一夏を見下ろすヒューイ。

こんな状況でも、激痛に耐える事しかできず、まともにヒューイの顔を見る事は出来てはいない。それよりか、痛みで段々と意識が薄れかけ始めているようだ。

「死ね」

一夏の頭上から、ヒューイの声がした。

刀を逆様に持ち、彼の首を突き刺そうと襲いかける。

身体の言う事が効かず、どうしようもなく全てを受け入れるしかなかった。強くなると決め、IAの選手となる夢さえも潰え掛けている。家族、友達、様々な人たちの姿が走馬灯のように駆け巡る。絶望の中にいるというのに、心はなぜか穏やかであった。

「!？」

だが、彼の首に突き刺さる寸前、突如飛来してきた物体が、ヒューイの手元に命中する。

命中した事によって、カスターネが手から離れる。

ヒューイが飛んできた物体に目を向けると、それは試合で使われている無線機――カードだった。カードの先端によって、彼の手首から血が流れ落ちる。

「カード!? 一体、誰がこんなこと……!!」

辺りを見回すも、人間らしき者は二人以外の誰にもいない。一夏は痛みに苦しんでおり、攻撃を防ぐ手はない。他に気配を感じるこ

ともできず、警戒を作ること困難だ。

彼は、傍らに落ちたカスターネを手に取りろうとした。

カスターネの柄に触った瞬間、庭園至る所が一斉に爆発したのだ。

「な、何だってんだ!? 一体! こんな聞いてねえぞ!？」

ヒューイ自身も何が起こったのかが理解できなかった。

それでも、鍛え上げた反射神経で、爆発から避けることに専念し、何とか難を逃れて行く。

自分の組織の者たちではない。自分がここにいることを理解しているし、こんな何でもない所を爆発させたとしても、自分たちに利が無いからだ。

「なん——うわ——!？」

一夏も爆発に気付き、顔を上げるも、爆発によって庭園が半壊。

その被害が彼の立っている場所を襲い、一気に瓦解する。

彼の姿は庭園から消える。そのタイミングを見計らってか、急に爆発が収まる。

先ほどの庭園の美しさは無くなり、荒れ果てた姿へと一変。

花壇の花たちは燃え、破壊されたブロックが散乱し、地面が陥没さえもしていた。

「なんだってんだよ……畜生……」

自分の予期していない事が次々と続き、混乱していることへの苛立ちが募っていく。

(何で、このタイミングで爆発? 俺を狙って……? いや、俺を狙うのであれば、最初から俺だけへの攻撃すればよかった筈。何故、

霧島も狙った？)

一連の出来事を思い出す。ヒューイを狙っての事ならば、彼が最初にここへ訪れた時点で爆発を起こせばよかった筈。わざわざ、ここまで時間かけた後に事態を起こす方が、かえって気付かれやすい筈なのだ。

それに、一夏さえも狙う必要があったのだろうか？ それよりか、一夏を中心として、爆発が巻き起こったようにも見えた。

(まさか、始めから狙いは……霧島……だったのか？)

まるで、最初から目的は一夏を逃がすための策略であったかのようだ。

「まあいい。俺の目的は最初から奴じゃない。早く、桔ヶ也に報復を」

ヒューイは無駄な考えを、頭からぬかし、本来の目的であった新への復讐。そのためにここへ来たのだから。

彼は庭園を後にし、目的地へと駆けて行った。



誰も居なくなった荒廃した庭園。

そこへ、一人の少年が姿を現す。

少年はおもむろに携帯を取り出し、誰かに電話をかける。

「王輝。ターゲットたちはどうしている？」

『裏組織たちの戦いは、アンヴァース側の勝利で一旦、落ち着きました。アサシンの影組織たちの行動がここに来て、頻繁になったよ

うにも見えます』

通話の相手は王輝。

そう。少年は、先ほど彼と電話をしていた上司であり、また義兄でもある男だったのだ。

「よし。ならば、プランBに移行。俺はプランCで事に当たる」

『了解……ですが、そうなりますと、試合場にいる一般市民たちの擁護は出来なくなりますが……』

「構わん。あいつらなら、自分たちで何とかするさ」

少年は、王輝の惑いをバツサリと切り捨てる。

本気でどうでもいいように聞こえる彼の声。それが、聞く者の背中に悪寒を走らせる。

しかし、決して非情な言動であったわけではない。本当に彼らなら何とか出来る思っているからこそ、出た言葉なのだろう。

王輝は静かに「はい」と呟くと、通話を切った。

少年は携帯をしまい、荒れ果てた庭園を一瞥する。そして、一夏が落ちて行った半壊した床を見下ろし、中を確認する。中は暗くなっており、下は見る事が出来ない。

「……あいつなら、平気か」

少年はボソッとそう言うや、見下ろすのを止め、庭園を後にする。プランCと言う作戦をするために、彼は上都学院——本棟へと向かったのだ。

赤き瞳（後書き）

今回はここまでです！

最近になって自分の語学力の無さを痛感しました。このままではいけないと思い、最近小説を読む事を決意しました。

さて、次回は試合場反乱事件の佳境を書いていきたいと思っています。

実力の差

「ウッ!？」

新は目の前の壁に気付かず、おもいきり衝突してしまった。

右に曲がった直後とはいえ、曲がる以前からそこに壁があった事は目で確認できた筈だ。決して捉える事が出来ないものでは無かった。

「クソ!! またか……」

額に触れると微量だが、手に血が付着していた。

彼は小さく舌打ちすると、ポケットに入れていたガーゼで額の血を拭きとる。

これでガードを使ったのは三度目だ。血に濡れたガーゼを地面に捨て、彼は再び走り始める。

ガーゼを使った回数分だけ、彼は何かにぶつかっているのだ。そのどれもが、事前に衝突するのを防ぐ事が出来たものばかり。

「たった数分だけだったのに……ここまで衰えるなんて……」

彼の前に立ち塞がる壁や瓦礫。それらを危なげに避け、時には掠りながらも何とか試合場内を駆け巡る。

彼の様子がおかしくなったのは、あの赤き瞳に変化した後からだ。バルバリーゴを倒し、瞳を黒へと戻し、数分たったところに異変は起きた。

彼の視界が、グニヤリと歪んだのだ。辺り周辺のものが混ぜ合い、どこに何があるのかを理解することが困難になったのだ。

そんな時、彼が四度目の衝突が起きる。

今度は地面突き刺さっていた鉄骨だ。それに脛を強く強打し、身体を転倒させてしまう。

脛を強打した時、何か乾いた音が鳴り響いた。

それは、彼の脛が折れる音だった。

「クッ……ソ……！」

灼熱の痛みが、彼の全身を襲う。

しかし数秒後。彼は何事も無く立ち上がる。折れた筈の脚を引きずらず、自然と動かしている。骨が肉を突き出そうとするのが腫れあがるのが普通である。それよりも、先ほどの戦闘で受けた傷さえも無くなり、まるで試合が始まる万全の状態と変わりなかった。

「ハアハア……。レムナントが無かったら、危なかったな……」

二本の刀はすでに腕輪状に戻っており、彼の腕に装着されている。実は、レムナントにはある特殊な力が備わっている。

その一つが、即効性の治癒能力。レムナント所有者たちにはレムナントの加護が降り、所有者たちの怪我、その大小には問わず治癒が発動させることが可能。治癒を発動させるのも本人の意思で発動させる事が可能だ。

新は、再び走り始める。オフィス街を抜ける終着——橋にたどり着く。崩壊した橋。その下には川が流れている筈だったのだが、崩れ落ちて来たビルや家によって、水の流れは急激に落ち、今は少量の水しか流れていない。

歩く事が出来なくなった道を、新は迷うことなく走り出す。彼は道をつっ走るのではなく、脚をつける場所を目利きで判断し、その場所まで跳躍した。跳躍地点から着地点までも距離は何メートルもあるのだが、彼はそれを難なく飛んでいく。

恐るべき脚のばね、脚力である。

橋の渡るのに十分は掛るであろう道を、彼は僅か二分で渡り終える。

「みんなは、無事なんだろうか……？」

住宅街の方もかなり悲惨な事になっていた。

家は半壊、全壊した物ばかり。無事な箇所は無く、辺りは家の中にあつたであろう備え付けの家具や電化製品が乱雑していた。火災が発生している場所、水溜まりが出来ている場所には電気製品のコードが落ちている場所もあり、どこもかしこも危険地帯と化している。

クラスの仲間たちの姿が無いか搜索を始める新。彼の指示によって住宅街へと攻めに入つたBクラス。その本当の理由は彼らの被害を防ぐために彼が取つた最善の策だった。

辺りを見回すも、どこにも人間の姿は無く、死体らしきものも無い。

（どうやら、誰も死んでいないようだな）

彼のとりあえず、一つの不安が消え、ホッと息を出した。

すると、奥から誰かの人影が現れる。

驚きながらも、確かな生存を確認出来たことで、安堵しながら人影の方へ進みでる。

だが、その人影が誰かが理解したとき、彼の足が止まる。

「ヒューイ……」

金髪、青緑の瞳。

ヒューイも新の姿を確認するや、その場に留まり、一定の距離を取った。

「よお、新。お前も無事だったみたいだな」
「……お前、今までどこに行ってたんだ？」

橋の上から姿を消え、音信不通となってしまった彼を、新はBクラスの仲間たちを向かわせた後、彼を探し続けていた。

「悪かったな。突然、家に吹っ飛ばされて、目が覚めた時には試合場はこんな状態。ここまで帰って来るまでに随分掛っちゃったぜ」
「……嘘をつくな。家が吹っ飛ぶなんて考えられるか」
「いや、本当なんだって」

彼はいつもの口調を崩さず、何か面白い事があった子供ような表情で、新を見る。

対する新は、彼の様子が放つ雰囲気が違う事を見抜いていた。

「例え、そうだったとしてもエリア保護が掛る事によって、気絶なんてする筈が無いだろう」
「いやゝ。それがしちまったんだよねゝ。そしたら身体の節々が痛くなってね。動くのもつらかったぐらいだ」

彼の言葉を否定し続ける新。

それでも自分を崩さないヒューイ。

互いに拮抗する二人。先にしびれを切らしたのは、新だった。

「あくまで、しらを切るのか……」

新は彼に向かって歩みを始める。腕に付けている腕輪が、新の意思によっていつでも具現化できるように静かに輝き始める。

バルバリーゴは新の方に身体を向けると何の言葉も交わさず、鎖を彼へと投げつける。

「なっ!？」

いきなりの攻撃に驚くも、新は身体に横へと流し、鎖の攻撃を躲す。鎖はそのまま後方の半壊した家や店を破壊していき、動きは留まる事無く、むしろ速さを増して伸び続ける。

それを隙と見た新は彼に向かって直進。具現した刀で彼の首元に一閃。

しかし、その一閃は彼の残ったもう一本の腕で防がれる。新は掴まれた刀を重心にして飛び上がり、大きく引いた脚を彼の顔面へと突き出す。

今度は防げず、大きくよろめく巨体の身体。未だ空中を飛ぶ新は、回転を加えた踵落としを巨体の頭上へと振り下ろす。

もろに踵押しを受けたバルバリーゴ。今の攻撃で脳に響き渡る衝撃は甚大だ。巨体は後ろに身体をくず折れそうになる。

「今度こそ――」

終わりと思った新は、全身の筋肉を緩めてしまった。

意識が遠のきそうになったバルバリーゴの目が、カッと見開かれたのだ。

ギョツと戦くも手遅れ。バルバリーゴの手が彼の脚を掴みとり、近くにある壁へと打ち付ける。壁はめり込み、脆くも崩れ去る。

「なめるな! 小僧が――!!!!!!?????」

怒声を放ちながら新を振り回すバルバリーゴ。彼の周りにある建物たちは、新の身体によって粉碎されていき、跡形も無く崩れてい

く。

「この……野郎……!!」

新は彼の束縛から逃れようと身を捻る。しかし彼の強い握力は新を逃さず、何度も瓦礫の中へと打ち込む。

バルバリーゴが何度目かの投げ込みを始めた瞬間、新は残ったもう片方の脚で、彼の左顔面を蹴り飛ばす。三度目の衝撃を食らい、彼の脳はまたもや激しく揺れる。それによって、掴んでいた握力が緩み、新は解放される。

よろよろと動く彼に対し、新は四度目の蹴りを鼻柱に打ち込む。

強烈な攻撃を受け、鼻骨の折れる音が鳴った。

大打撃を受け、バルバリーゴの巨体は遂に地面へと崩れる。

何秒かピクピクと身体を痙攣させていたが、意識が遠退き、彼を失ってしまう。

「ハアハアハア……」

強大な敵を倒したことで、新はその場に力無く膝を落とす。相当な疲労が蓄積してしまい、歩くこともままらなくなってしまった状態だ。

それでも、何とか立ち上がり、この場にいるもう一人の男へと目を向ける。

ヒューイは彼らの戦いの一部始終を見ており、常識を逸脱した戦いに衝撃を受け、顔を青ざめながら啞然としていた。

「なんなんだよ……。これが……裏の人間たちの、殺し合い……」
「……ヒューイ……わかっただろ。お前たちが、何かしようとしているのは知っている。だが、それでもまだ、俺たちに反乱しようとするのなら……相応の報復が下るぞ」

新はたたみ掛けるように、彼の心に追撃を掛ける。恐怖や怯えに捕らわれた時に降る脅しは、人の心に決して癒えぬ傷を与えることになる。

本当ならば、新はそのような事をする方ではない。未然に事を済ませられるのならば、それ以上の事は望まない。

しかし、今は現状が現状。ここで彼を退かせなければ、更なる惨禍を作りかねない。新は、自らの人論の歪みに心を痛めながらも、人々の命を守るために、その手段をとった。

「……ふざけるなよ」

首を垂れながら、ヒューイは沸々と沸き上がる思いが、恐怖の色を塗りつぶしていく。

「報復だ？ 上等だ。やれるものならやってみろよ！ そんな物で、俺は止まらない。あの人が受けた苦しみに比べれば、どうとでも無いわ！？」

「あの人……？」

あの人と言う人物が誰か、新は意味がわからず首をひねる。

その言動が、ヒューイの心に激しい怒りを作り出す。

「覚えていないのか……！？ 貴様が追い込み、殺した男——毒島ぶすじま劉貴りゆうきの事を——！！」

怒声を張り上げ、彼への憎悪を露骨に己の気に発するヒューイ。悲痛の叫びともとれる彼の表情には、怒りよりも、寂寥であるかのように見える。

新は毒島と何度も自分に言い聞かせ、手に顎を載せながら思索し

続けた。

「あの人は、この悲しみと憎しみによって歪んだこの世界に、慈悲と慈愛の心を持って改革しようとしたんだ。そのせいで、どれほど虐げられても、どれほど蔑まされようとも、あの人は戦って来た。戦い続けたんだ!! それを貴様は——!!!?」

寂寥から、再び憎悪へと戻りし声。ヒューイはシザースを新へと突き付け、彼への強き思いをぶつける。周辺の瓦礫たちも彼に呼応するかのように崩れ落ち、二人の間に通る空気さえも、憎しみの赤一色に染まっているかのようだ。

「俺はあの人の思いを継ぎ、世界を変える。そのためには新——いや、桔ヶ也!! ここで、貴様を殺す」

彼がその言葉を放つと、憎しみで染まっていた空気が一瞬にしてどす黒い雰囲気へと変貌する。悪意、敵意、そして殺意を含んだ彼の怨念。その怨念が収束し、彼の持つシザースに集まる。

新目掛けて一気に跳躍。落下の勢いに乗せ、シザースを振り下ろす。振り下ろされたそれを、ほんの数ミリほどで躲し、躲すと同時に自信の拳で彼の顔を強打。拳とは逆に作用する彼の加速を止め、逆に押し返して見せた。

殴られ、吹き飛ばされた彼の身体は瓦礫の中にのみ込まれる。

だが、すぐに起き出し、再び新へと飛びかかる。

「無駄だって言うのに……」

シザースによる下段斬り。上段斬り。突き。横一文字。その他何度も、彼に斬りかかるも、全てが躲される。

もはや、実力の差は歴然だった。誰が見てもわかる二人の差。生

きて来た道は違い、その先に差し伸べられて者の手の恩恵さえも、あまりにも異質すぎた。

ヒューイ自身も、彼に勝てない事に既に気付いていた。

それでも、ここで止まる訳には行かない。

その彼の持つ怨念、毒島意思を継いだと言う執念が、今の彼を動かしていた。

何度目になるか分からない一閃を、新は指で挟み、抑えつけた。

「……もう止めろ。ヒューイ」

「……ッ!？」

そこに突き付けるかのように発する新の声。

憎悪に囚われたヒューイの目を見るは、全てを見透かした、許すような視線で彼を見る新の目。

「こんなことをした所で、彼が戻って来る訳じゃない」

「あの人を殺した奴が、よくも抜け抜けとそんなことが言えるな!

? あの人だけじゃない。お前たちは、俺たちの同胞たちを何人も――」

「よく聞け――!？」

ヒューイの言葉を遮り、ここまで平然とした声から一変、新は叫ぶように伝える。

「毒島を殺したのは、俺たちじゃない」

実力の差（後書き）

以上です。

次回は新が最後に発した言葉とは何のかと言う所に迫りたいと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0953x/>

レムナント

2011年11月29日13時48分発行